

鷺山弟三郎著

明治學院五十年史

明治學院藏版

“Behold, I stand at the door, and
knock: if any man hear my voice,
and open the door, I will come in
to him, and will sup with him,
and he with me.”



地 隨

並 光

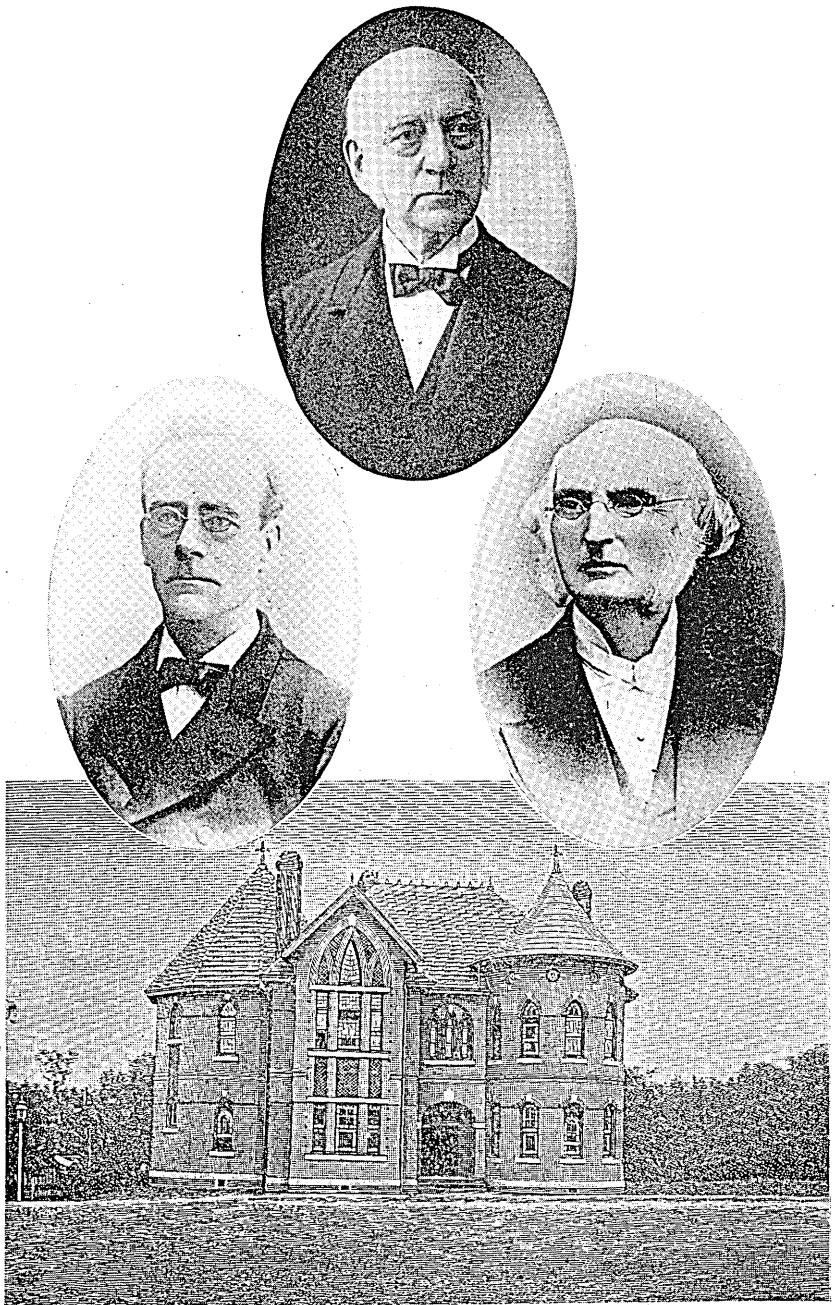
昭 宗 二 年 秋

潘 泉 題

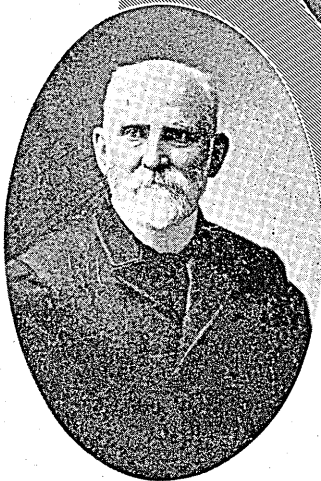




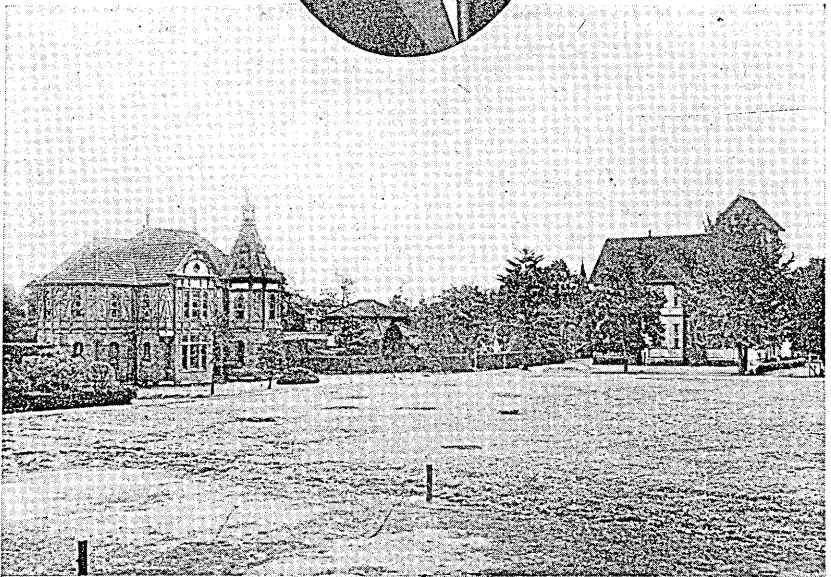
總前(央中)氏助之屍深井士博學神理總譽名(左上)氏郎吉大川田理總(右上)
○堂拜禮の在現(圖下)氏ヌンマトルオ士博學神拔取務事理



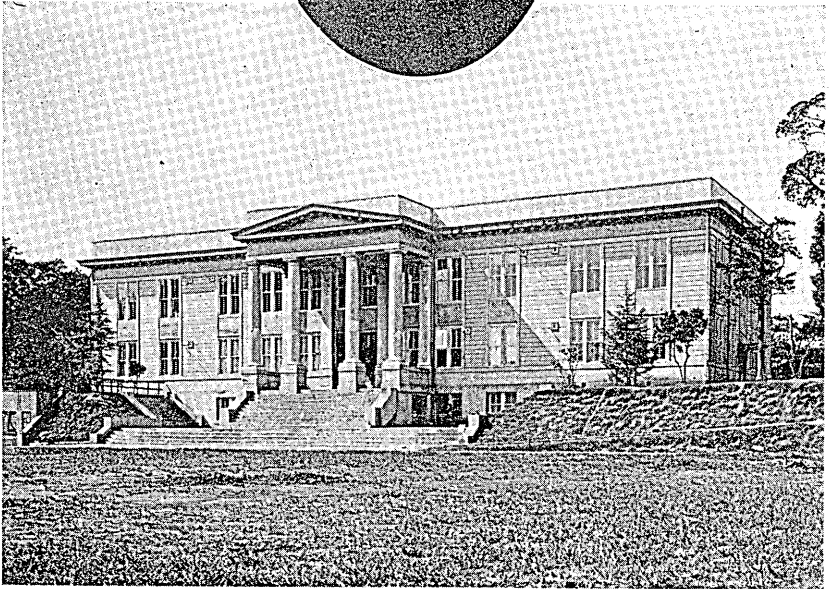
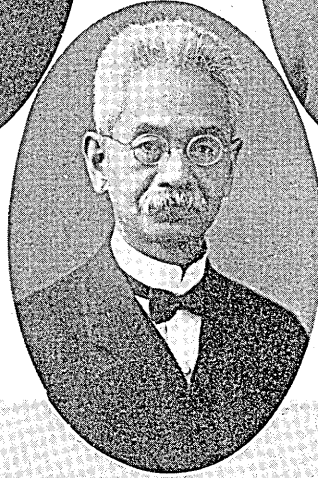
學神長員委譯讎書聖約新(右)氏ンボヘ士博學醫士博學法理總明一第院學本(上)
 上以、氏クツベアヴ士博學神授教部學神長事理院學本期刊(左)氏ンウラプ士博
 創の院學本にて々人るせ來渡に本日年六政安てしと師教宣の初最教新は名三の
 館書圖兼舍校部學神の時當築新年三十二治明(圖下)。りな々人るせ粹盡に設



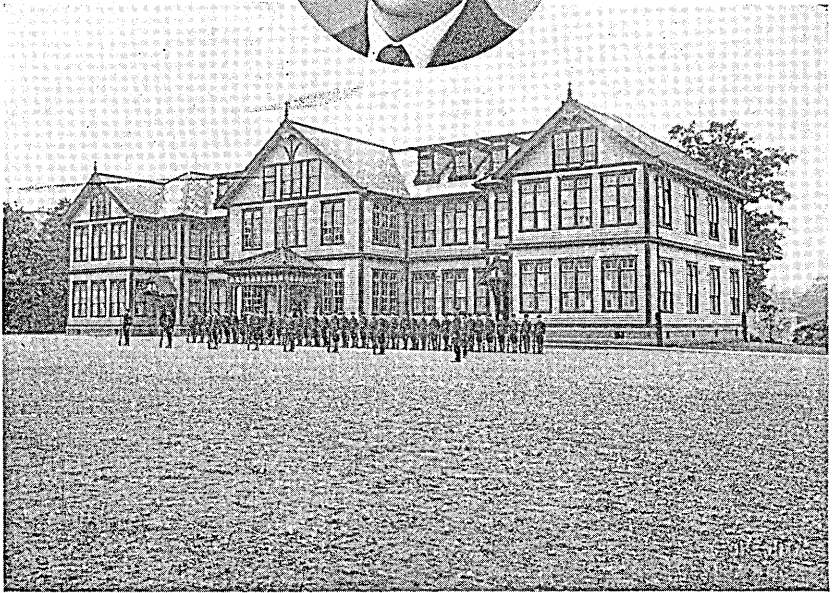
メア士博學神授教部學神前(左ヒ 氏ーリブムイ士博學神授教譽名(右上)
ラ授教院學本前(右下 氏フコイワ士博學理授教院學本前(央中)氏ンマル
氏ラバ・ーシ・ンヨジ授教院學本前(左下)氏スゲン



院學本(右)氏七雄野熊事幹院學本前(下同)氏久正村植授教部學神前(央中)
 年十四三治明(圖下)氏郎十三本石授教院學本前(左)氏維綾部服事幹次一第
 。む望を塔の堂拜禮舊に間樹、部一の庭校院學本の代



氏次仙留都長部學等高前(左上)氏ルワヤシイラ士博學神長部學等高前(右上)
舎校部學等高現(圖下)氏郎太衆尾笹士博學哲長部學等高現(央中)



前(右)氏郎太幹藤衛長部學中現(下同)氏耶次幾蘆水長部學中前(上中央)
 舍校部學中現(圖下)氏助之銀西河任主務教前(左)氏吉謙地宮任主務庶

序

此の度、明治學院創立五十年の紀念式を行ふ。それは昭和二年十一月の三日から五日まで、明治十年を顧みて、その時からの滿五十年である。乏しきを現位地に承けて居る私は、そゞろに往を思ひ來を想ふて、感慨の深さに堪へない。

最初の總理はヘボン博士、次の總理は井深博士、共に學徳の秀でた一世の泰斗であられた。特に基督教主義を以て、本學院經營の基本とし、即ち専ら精神的に青年を指導し、その思想心胸を開拓せんと期せられた。知識を供給するが世上の教育の目的である。本學院は其の上に信仰を植ゑ、道念を鍊り、品性を磨かん事をば期せられたのである。それだけ本學院の目的は正大にして深遠であつた。

爾來五十年の経過を見るに、日本は物質的に進んだが、精神的に進まなかつた。けれども日本は大に興つて、史上無比の盛榮とまで誇るに至つた。そこで、日本に必要とする所のは物質文明である、精神文明でない、基督教何するものぞと譏評する者すら起るに至つた。然しながら私は思ふ、若し基督教が、顯に、隱に、明治以後の日本の精神的方面に貢獻する所がなかつたなら、日本の近世的

進歩は、果して今日あることを得たであらうかと。

現に日本の佛教は、明治以後、近年に至り、やゝ活動の芽を吹き返して來た。佛教に此の活を入れたいものは誰であつたか、基督教ではなかつたか。日本の神道は、明治以後に於て、著るしく其の面目を改めて來た。神道に此の理解の新紀元を開かせたのは誰であつたか。基督教ではなかつたか。私は兩宗教の近年に於る覺醒と進歩とは、共に基督教の刺激に負ふ所が甚だ多かつたと思ふものである。かくして三教の活動と努力とに依り、明治以後の日本は、その物質文明全盛の間にも、かつく、精神方面の需要と品位を維持して來たのである。基督教の傳道と教育は日本の改造に決して功勞の無かつたわけでない、その貢獻は少小でなかつたと信ずる。

けれども、それは未だ足りない、外、日本の物質界、精神界の趨勢、現象を見て、その未だ大いに足りないものゝあることを明かに氣づく。内、明治學院自身の有様を見ても、その未だ足りないものゝあることを痛切に感ずる。こゝに私どもは創業者の初精神を顧みて、これを勵み努めねばならない。私どもの事業は今後に在る、それが此の度の五十年記念である。乃ち我が五十年の記念は、學院の先進、後進相合して、一大集團を作り、相誓つて今後に勇往せんとする首途の歡會である。その行進の序曲である。それに對する祝福の祈願である。

此の篇は、校友、教授、鷺山第三郎氏の編述に成り、學院としての公式の記録でない、それだけ鷺山氏は、材料の選擇に、記述の體裁に、行文の様式に、何等顧慮する所なく、自由に欲する所を成し得られた筈である、それだけ此の篇の内容は、豊富にして趣致に富み、文章は自在にして彩藻に缺くる所なく、讀むに面白く、解するに易しく、先進、後進、相和らいて過ぎたる昔を思ひ、將來を慕ひ、且喜び、且勵まざるゝに相應しい資料であらうことを信ずる、少年諸氏の別けて注意して通讀せられんことを希望し、昨年以來、百忙の間、この事業のため精力を注がれた鷺山氏の勞を深く拜謝する。

神の恵み、我が學院の上に、我が日本の上に、裕かならんことを祈り、我が内外同情者諸氏の此の切なる祈りに力を添へられんことを希求する。

昭和二年十月下浣

明治學院に於て

總理 田川大吉郎

序

今回明治學院創立第五十年記念祝典が舉行せらるゝに付きその歴史が鷺山第三郎氏の努力に依つて編纂され且つ刊行せらるゝに至つたが蓋し是れは多數の學院出身者が豫てから懷いて居た希望が漸く實現せられた者であらう、夫れ故に之れは創立五十年記念事業の中最も重要にして且つ意義深い者の一つであると申して支障なからう、今此五十年史のペーシを開いて見て自ら念頭に浮ぶ感想は種々あるがその中重なる者二三を左に列舉して見よう。

一 明治學院の起源は決して盛大ではなく寧ろ微弱な者であつた。我が學院は明治十年即ち現在の神學部の前身たる東京一致神學校設立の時を以て創立の年と定められてあるが、其實明治學院はそれより五六年前、横濱山手二百十一番館のブラオン翁の英學塾及び同居留地三十九番館のドクトル、ヘボン夫人の家塾に其源を發したと云ふべきであらう、然るに此の兩英學塾は特に學校として設けられた校舎教室の在る譯でもなく、その設備に於ては極めて貧弱であり且つ塾生の數も亦僅々二十名内外であつた、夫れ故に物質的に之を觀れば極めて貧弱な私塾に過ぎなかつたのである、併しそれにも拘ら

ず不思議な事には此の如き不完全な家塾中から幾多の有爲知名の人物が輩出した。

明治十年に東京一致神學校が設けられ而して同十三年に所謂築地大學が建つた時には漸く學校の形體を成すに至つたが、それとても未だ完備した學校では決して無かつたのである。夫れ故に明治學院の始めは實に芥種の如く極めて微弱な者であつたと申さねばならぬ。

二 明治學院創立以來五十年間には自ら盛衰の時期があつたが、順潮の時は甚だ短かくて、逆境に立つた年月が長かつた、明治十九年に築地から今の白金今里町に移轉してから僅か四五年間は先づ以て順潮時代と云へよう。その頃は社會一般に歐米の文化學術を學ばんとする精神が頗る旺盛であつた耳ならず、同程度の他の學校に比して我が學院は敢えて遜色なかつた爲め優秀の青年學生が多く來り學んだのである。然るに纏て極端なる歐化主義の反動として極端なる國粹保存主義が勃興し、それが一變して猛烈なる排外主義の流行となり、之に續いて彼の有名なる文部省第十二號宗教教育に關する訓令となり、之れが爲めに我が學院は、高等の教育を受けんとする學生の爲めには死活問題たる所の高等學校と聯絡の特典を保存する爲めには學院の本領たる基督教主義の教訓及び禮拜を放棄するか、或は之を犠牲としても中學校の認可特典を保留すべきか、二者その一を選択せねばならぬ羽目に立たせられた。此處に於て明治學院は他の同主義の學校代表者と提携して、文部當局に向ひ陳情請願百方

手を盡したにも拘らず、何としても許されぬので、不得已斷乎として高等學校と聯絡の特典を犠牲にして、學院設立の本旨たる基督教主義教育即ち私立學校に於ける信教及び禮拜の自由を保留すべく決定した、併しその結果は靦面であつて、學生の數は俄然減少して二百名乃至三百名近くもあつた在學生が僅々三四十名になつた、恐くは學院五十年の歴史に於て此の時位悲惨な時期は無からう、實に是れは危急存亡の秋であつたが、神の攝理の下に彼の不義なる裁判官に對する辛抱強い寡婦にも似たる當局者の忍耐と努力とは遂に報ひられて、現在の如く名目は縱令中學部であつても、其實に於ては高等學校との聯絡を始めとして徵兵猶豫も一年志願兵も判任官任用も正規の公私立中學校と何等差別なきに至つた、而して學校に於ける信教及び禮拜の自由は依然として保存せられつゝあるのである、是れは我が學院の歴史に於て當然特筆せらるべき一事である。

三 明治學院は同程度の他の基督教主義の學校と協力合同して一個の完備したる基督教主義の大學を起すべく全力を盡した、而して遂にその大目的の達成せられ難きを看取した時に單獨にて高等學部及び神學部を基礎として一の有力なる基督教主義の大學を起すべく計畫努力した。此の事は乍遺憾千萬種々の故障の爲めに今日に至る迄實現されぬ、併し此大目的は決して輕々しく放棄すべきではあるまい、是れは現在及び將來の當局者の大なる責任であらねばならぬ。且つそれが爲めには是非共有力

なる學院出身者の同情後援の必要なるは申す迄もない事である。

其他にも尙申度は多々あるが紙數の關係上今は之を差控へるが、只終に今一言附加へ度いことがある、夫れは他でも無いが、此の五十年史編纂の體裁である、讀者は必らず之を看てその中に學院に係ある人物の經歷その他挿話的の記述の比較的多いのに注目せらるゝであらう、而して或は元來此は學院の歴史であるのに、何故に個人の事をそのやうに詳しく記したかと問はるゝ向もあるかも知れぬが、そこは即ち著者鷺山氏が特別に意を用ひた所では無いかと推察さるゝ、若しも明治學院が官公立の學校であつたならば無論此の如き事は有得べからざる事であらう。若しもそうであつたならば恐くそれは單に職員の任免更迭制度規程の改廢、卒業生の統計等即ち學校それ自身の沿革を以て畢るであらう、併し明治學院の場合はそれとは事情が違ふ、而して亦そこに反つて面白味があるのでは無からうか。それは兎も角も著者は非常な努力を費して史實を正確に記録して永久に傳ふると同時に讀者をして一たび卷を開けば興味津々として、之を掩ふこと能はざらしめんと苦心した事は疑なき事實である、聊か感想の一端を述べて序言とする。

昭和二年十月十日

名譽總理 井 深 梶 之 助

自序

明治學院創立五十年記念式準備中央委員會から、本書の著述を受託したのは大正十五年四月であつた。其後約一年と三ヶ月の間自分は専ら史料の蒐集に努め、昭和二年七月二十一日丁度夏期休暇に入つた日から執筆し初めた。結論を書いたのは十月九日で、その間丁度八十日を以て此の一卷は成つた。出来て見ると、精粗相矛盾交錯して、杜撰の個所が隨所にあつて甚だ不満である。また時日や數字に就いても間違なきを期し難い。然し私としては此期間に全力だけは賭したつもりである。山本秀煌先生からはヘボン博士やヴァーベック博士について得難い史料を多分に頂戴した。宮地謙吉氏、星野光多氏、植村未亡人、和田健三氏、青山彦太郎氏等からも與へられた處が多い。又余の忘れ兼ねるのは鎌倉の稻澤謙一氏と井深老先生とが此事業に對して惜みなき同情と援助とを終始一貫與へて下さつたことである。兩家の御家庭にも幾度か御面倒を煩はした。此の外總務部の小林盛政氏が始終深い好意を以て様々の便宜を計られたこと、室野玄一氏が酷暑の頃を連日余と共に奮闘して下さつたこと、馬場銚作氏、賀川豊彦氏、三谷隆正氏、都留仙次氏その他の先輩友人が忙がしい暇を割いて寄稿して下

さつたことを考へれば感謝の事實のみである。ことに七月の末から八月の中旬にかけての酷暑の中で調査執筆を續けてゐるうち、生來眼の弱い私は輕からぬ眼病に犯されたが其時高輪教會々員たる眼科醫江塚務氏が骨肉のやうな親愛と熱心とを以て、全く奉仕的に毎日治療に中つて下さつたことは生涯忘れかねる。又卒業生の一人、松下胤信君が神奈川の成佛寺、本覺寺、一本松、横濱のへボン塾跡、其の他の實地踏査の場合、興味と感激とを持つて親切に案内して下さつた事なども尊い思ひ出である。是等の方々の協力事業として本書は編まれたものである。

最後に拙著の出版のために莫大な資金を醸金して下さつた同窓有志の諸兄と、無能淺才な余を信頼して、此の大事業を根本的に委せて下さつた田川總理に感謝致します。また印刷製本のために犠牲的な努力を拂はれた村岡徹三君にも深く御禮を申し上げます。幸にこの不備な明治學院五十年史が幾分でも同窓の人々のありし日を追憶する料となり、今更に學院を懐かしんで下さる媒となりうるとすれば、私は何より幸福である。

昭和二年十月十二日

目次

緒言 濫觴篇

- 一 築地……………一
- 二 東京一致神學校……………五
- 三 ブラウン博士とブラウン塾……………一三
船出——生ひ立ち——渡來前のブラウン氏——日本行——成佛寺時代——苦難來——出火と歸米——
新潟行——横濱——ブラウン塾——聖書翻譯事業——ブラウン博士の歸國——平和なる臨終
- 四 ブラウン塾に入る迄の井深梶之助氏……………三九
鳥羽伏見の役——征討の號令發布——慶喜公の恭順——松平容保公降らず——井深宅右衛門重義——
梶之助氏——籠城——開城——捕虜となる——洋學修業の決心——上京——徳水院の洋學所——修文
館學僕となる——ブラウン氏との知遇
- 五 築地大學校……………五三

開校——陣容及び校則

六 築地大學校の追憶(馬場氏)……………三三

七 五十年前の回想(青山氏)……………三七

八 ヘボン博士……………三九

生ひ立ちと修業——支那の傳道——歸米と日本渡來の準備——日本渡來——成佛寺——ヘボン辭書——
ローマ字綴創始——東京横濱兩聖書翻譯委員會

九 ヘボン塾……………三九

全盛期——移轉擴張——築地大學校

一〇 ヴァベツク博士……………四六

生ひ立ち——アメリカ移住——村田若狹——オウバン神學校——在米オランダ人の義舉——日本へ——
長崎——長崎外語學校——若狹他二名の受洗——上京——辭任と叙勳——東京一致神學校と氏——
東京聖書翻譯委員會

一一 ワイコフ氏と先志學校……………四六

先志學校の創立——ワイコフ氏の爲人——ワイコフ氏の略傳

一二 東京一致英和學校……………四五

綜 合 篇

- 一 明治學院の創立……………一六五
- 三校の合併問題——明治學院理事會の設立——明治學院創立案——名稱——白金玉繩臺——私立學院設置願——行政(合議制)
- 二 建築と移轉……………二〇一
- サンダム館——ヘボン館——移轉——普通學部——邦語神學部——專門學部——學生及生徒——豫科學生——神學部學生——理事員局——教授會
- 三 學 制……………二〇八
- 宗教々育——獎學の方法——獎勵金及褒賞金——文學會
- 一三 神田英和豫備校……………一四九
- 創立——英和豫備校規則——英和豫備校の追憶——明治十九年のクラスボーイズ
- 一四 一致神學校の緊縮策とその後……………一五九
- 豫科の設置——學生の學級別——入學試驗科目の選定——英語神學部の制定——邦語神學部科目選定

四 明治學院の順調期……………三六

ハリス館——神學部校舍兼圖書館——ミロル氏の邸宅寄贈——明治英學校の設立——理事長の變遷——
—服部幹事辭任、杉森氏就任——ヘボン氏總理に擧げらる——井深副總理の留學——ヘボン博士の總
理辭任——井深棍之助氏總理就任

五 明治學院憲法と職制……………三六

總理——幹事——主簿——圖書掛——教授會書記

六 藤村氏の學びし頃……………三五

藤村の生ひ立と學院入學——百日紅——寄宿舎——郊外——圖書館と夏期學校——硬骨黨の存在——
押川方義氏の影響——笹尾兼太郎氏——學生——順調期間に於ける學制の變遷

七 植村正久氏……………二四九

出生と生立ち——母——道太郎氏の洋學修業——日本評論の發行——福音週報(後の福音新報)——氏
の説教

八 明治學院神學部の確立……………二六一

學部の編成——校舎の新築——教授と擔任科目——卒業生——東京傳道學校の顛末——明治二十六年
の再改革——柏井園氏の就任

九 石本三十郎氏とその永眠……………二六九

憂難篇

一 衰潮の豫感……………二七三

十萬弗の基金募集——持久戰——尋常中學校の資格を得

二 衰潮來……………二七六

三 國粹論の再起……………二八一

歐米思想と保守思想との暗闘——憲法發布と教育勅語の煥發——國體論の勃興——基督教と國家主義との衝突——日清戰役と國民的自覺

四 學院の新劃策……………二八五

五 文部省訓令第十二號……………二八九

對抗策——資格の回收——隱忍學生の特徴

興隆篇

一 再興の機運……………二九八

學生の増加——禮拜堂の建築——ランチス教授の奇蹟

二	神學部の變動(専門學校認可と其の前後).....	三〇〇
	南プレスビテリアンミツション合同——専門學校認可——教授——講師——植村柏井兩氏の辭任—— オルトマン博士の來任——秦庄吉氏——イムブリー氏の外交上の功績——講堂の大破損	
三	擴張の計劃.....	三〇八
	エリンワード氏への手紙——井深總理の渡歐——米國に於ける井深總理	
四	學院財團法人認可.....	三二五
五	同二十五年の回顧(都留氏).....	三三五
	罪跡湮滅——(ボン館の怪——新制度及新建築——横歸り其他の思ひ出	
六	腹這ひして見た蜃氣樓(賀川氏).....	三三三
七	幼年黨のおもひで(三谷氏).....	三三九
八	私の學院時代(郷司氏).....	三五〇
	襪カラ黨——文學會——棒振り——鐘かラツバカ——リウアイアルと渡邊善太氏 信乃公の悲哀——吉田信乃三郎氏逝く	
九	學院四教授勤續二十五年祝賀會.....	三五六
一〇	ワイヨフ教授の永眠.....	三六一

變易篇

- 一 一 思ひ出でて(宮地謙吉氏)……………三六五
- 一 普通學部校舍建築……………三六九
 - 井深氏の渡歐——設計及建築——落成及落成式
- 二 ヘボン館ハリス館の焼失……………三七四
- 三 ヘボン博士の永眠……………三七七
 - 博士の晩年——ヘボン博士の功績——新ヘボン館の建設
- 四 窪地のセベレンス館……………三八七
 - 建築——在舍せる人々——瀬川四郎氏——グレゴリーバンドーセベレンス館の移轉
- 五 高等學部の擴張(バプテスタミツシヨン合同)……………三九五
 - 部長制の制定——専任部長定まる——イムブリー博士の盡力——合併せる高等學部——衰潮の再來
- 六 服部綾雄氏の永眠……………四〇五
 - シャトル市に於ける決死の廢娼運動——救命
- 七 サングラム館の焼失……………四二二

出火——神學部類焼——總理邸災害——善後策

八 禮拜堂並びに高等學部校舍の建築……………四一六

工事——定礎式——落成

九 築地基本金の由來……………四三三

膨 脹 篇

一 明治學院教會の設立と解散顛末……………四二五

二 學院創立四十年記念式……………四二九

ジエームスバラ氏——ジョン シイ、バラ教授

三 熊野雄七氏の晩年と永眠……………四三三

勤續二十五年祝賀——辭任——同窓生募金運動に起つ——建築——訣別——永眠

四 熊野與氏と熊野雄七氏……………四三八

與包清氏——雄七包文氏——廢藩置縣と福田家の改姓——雄七氏の修學とその後

五 蒲公英と廢墟その他……………四三五

蒲公英と廢墟——金さんの下宿——雀とインキ瓶——屋根裏のお洒落さん達

六 膨脹しゆく中學部……………四四九

屋内體操場の建築——過渡期——村田新部長——反動——水蘆氏就任——河西教務主任の就任——緊縮に着手——禮拜堂の靜肅——反動——水蘆河西兩氏の辭任——衛藤幹太郎氏の來任——軍事教官派遣さる

宮地謙吉氏と白金學報——ランヂス教授の薈儻

七 震災と其の後……………四六四

出火——救護班組織——學生の罹災狀態

八 擴張實現の高等學部……………四六七

擴張の計劃——第一回豫科生募集——學制の變更と部長の更迭——都留石橋中山の諸氏の經綸——新校舍の設立——諸資格の認可と指定——商業科第一回支那見學旅行

九 大正十年以後現在に至るまでの神學部……………四七四

ライシャワ氏の就任式——松尾講師就任——井深部長山本教授辭任——角筈への移轉——桑田氏就任式——村田氏就任式——社會講座開設——オルトマンズ博士辭任——ステグマン氏就任式——都留氏部長事務取扱辭任——村田氏常務委員長となる

一〇 井深總理の辭任……………四八三

辭表——オルトマンズ氏總理事務取扱となる——新邸宅の建設——舊總理邸の取壊——井深博士神學

部長並びに教授辭任——井深博士に送る感謝決議文

一 土地讓渡の件……………四九一

大正十年の讓渡——大正十三年の讓渡

一二 功勞多き二博士の隱退……………四九三

イムブリー博士——オルトマンズ博士

一三 田川新總理の就任……………四九六

一四 創立五十年記念諸計劃……………四九八

中央委員會——擴張委員會——スピーア博士との會見——傳道委員の活動——記念式實行委員の選定

結 論

目 次 終

明治學院五十年史

緒言

“The creation of a thousand forests is in one acorn; and Egypt,

Greece, Rome, Gaul, Britain, America, lie folded already in the first man.”

コンコードの哲人がかう云つた。「一雫の露をよく見よ、それに宇宙が宿つてゐる」と。この言葉の解釋は讀む人の心々によつて異なるであらうが、大體物の存在の由來といふものは、限りなく深く深いものだといふのではあるまいか。一雫の露に空と周圍の自然とが映じてゐるやうに、たゞ一人の人間の姿でも充分にそれを觀察すると、その家庭、祖先、社會その社會を構成した歴史が投影されてゐる。それ故畢竟は一個人の研究も、文明史的な問題とならざるをえない。

明治學院といふ半世紀以上存續して居る一學府を前に置いて、之を本當に知るにはどうすればよいかと考へて見ると、考へれば考へるほど學院の嵩が後へ後へと擴かつて行つて、矢張り世界の文明史

に密接な關係があることが知られる。白金の一角に樹つてゐるこの明治學院は、世界の文明、殊に基督教の文明の波濤が幾度か阻まれ塞がれながら、とう／＼鎖國攘夷の議論囂しい中に、日本の國土に押し上つて來た一つの記念塔であると共に、新日本に關するその文化の傳達機關であつたことがわかる。

千九百餘年の昔に地中海の東海岸パレスチナに起つた基督教は、立所に小アジア、ギリシヤに傳はり、紀元六七十年頃には、ネロ皇帝の大迫害があつたにも拘はらず羅馬にまで擴がつて行つた。その後紀元二八六年に羅馬大帝國が東西に分裂して、その異教的な權勢に幾分の破綻が生じた時には、一瀉千里にこの新宗教は地中海沿岸の各地に進展して同三二三年には東羅馬帝國では之を公許せざるをえなかつたのみではない、コンスタンチン帝自らがその信徒たる事を宣言しなければ國民の統一がむづかしいまでに至つた。其の後四七六年にゴール人の南下によつて異教の都羅馬が滅亡するに至つてからは、文字通り地中海の沿岸は悉く基督の感化の下に置かれ、紀元一千年のオットー大帝の出現によつて神聖羅馬帝國の建設さるゝ基礎が置かれてゐた。

神聖羅馬帝國の現出と共に基督教は南歐人の豊かな想像力と結びついて幽嚴莊麗な藝術を産み出した。それからルネイッサンスまでの約五百年のヨーロッパは全人類の歴史で、最も落着きのある而も

輝かしい、充實味を見せた時代といつてよい。チャブエ、フラ・アンジェリコ、ラファエロ、ミケランジェロ等が輩出して、人の魂の奥底に潜む聖と美に對する憧憬を尊い幾多の作品に具象化してくれた。聖フランシスが出たのも、ダンテが出たのもこの期間であつた。しかし教會が政治と提携するに至つて餘りに長く又餘りに組織化せられたため少數の天才は別として一般の民衆に於ては個人の魂が忘れられるの危険に陥つて來た。

一五一七年マルチン・ルーテルはこゝに着眼して宗教改革のために起るに至つた。全ヨーロッパにわたるその烽火に對する反響は甚大であつた。然し五百年の歴史あるローマ法王の教權はなか／＼に動かない、やがては政權と結託して新教徒を壓迫しようとしたのは當然の歸向である。この新しい迫害のもとに生を睹すとも信仰と主義とを捧じようとするのが清教徒たちであつた。然し彼等は中世の形骸を一日も早く脱して新らしい自由の世界を衷心から求めてゐたのは勿論である。折しも彼らに聞えた一つの福音があつた。それは新大陸の發見といふことである。思想と信仰の自由をヨーロッパの天地に失つた新教徒達が、これこそ神の備へ給ふ新世界であると信じて萬難を排して渡航を企てた。噸數五百に足りぬメイ・フラワーが第一回の清教徒の渡航團を乗せて英國のブレマスを船出したのは千六百二十年十一月二十日であつた。その後英國を始めとして、和蘭、佛蘭西、獨逸、蘇國の新教徒達

は先を争つて北アメリカに移住した。そして彼らはヴァージニア、ニューヨーク、ニューイングランド、ニュージャージーに居を定めて土地を開墾しては村を樹て、教會を建て、更に進んで大學をも建設した。そして一七七六年にはヨーロッパの一切の政權と教權から不羈獨立の共和國を樹立するに至つた。現今の世界の大國たる北米合衆國は唯物的であるとか資本主義であるとの非難が多いがその建國の當初に於てはこの光輝ある歴史を擔つてゐる。大體基督教文明は以上のやうな經路をとつて、大平洋の彼岸まで押し寄せてきた。海は古代に於ては文化の絶縁帶であつたが蒸汽機關の發明されて以後は、海こそ文化の移動する渡梁となつた。大平洋を隔てた我日本に早晚この文化の波が押し寄せないとすれば、それこそ不自然ではないか。

翻つてこの當時の日本を見ると、徳川期の中葉から勃興した國學の研究のために、皇室の尊嚴が今更に認められて、幕府の威信が曇りそめ、蘭學の研鑽によつて識者の念頭に海外の事情が髣髴されるにつれて幕府の經綸の本領たる鎖國主義が果して肯綮に中つたものであるか、疑はれそめてゐた。それが段々と徳川の末期に向ふにつれて、天下の輿論が尊王、佐幕、開國、攘夷と千々に亂れて、果して何れに收まるとも決しかねてゐた。この間に佐久間象山、吉田松蔭、高野長英、渡邊華山、橋本左内、頼三樹三郎、井伊直弼等幾多の憂國先見の士が或は處刑され、幽閉され、浪士の刃に倒れたりした。

天保から安政年間にかけての日本は實にかうした、光明とも暗ともつかぬ混沌状態に陥つてゐたのであるが、西漸に西漸を加へた世界文化は實は我國の門戸まで寄せてゐて、その樞をほと／＼と叩いてゐたのである。只開きさへすれば今までは曉暗のために、その文の不明であつた事物が、分明にならうとしてゐる。その樞とは伊豆の下田であり、相模の浦賀であり、肥前の長崎であつた。時は安政五年五月幕府はこれ迄堅く閉してゐた扉を長崎、神奈川、函館の三ヶ所に細目に開いた。然し光明は細目の隙をこそ選んで強くさし入るものである。歐米の文化は盛んに流れこみそめた。その盛んな科學文明の潮流のうちに安政六年十月十八日神奈川のその隙間から人知れず一縷の精神文明の光が潜み入つてゐた。越えて十一月三日にも又忍びやかに光が差し入つた。兩者は後來全日本の精神界に甚大な福祉を齎らすものであつたが、當時の誰がそれと知りえたらう。前者は「和英語林集成」の著者ジエームス カーチス ヘボン氏であり、後者は新約聖書の翻譯者サムエル ロビンズ ブラウン氏であつた。これと前後した十一月七日に、長崎の同じ隙間から明治文化の偉大な功勞者で東京帝國大學の立案者たるギドゥ エフ ヴァーベック氏が忍び入つた。この三人のわが國精神文化の開拓者達が揃ひも揃つて明治學院の創設者であるといふことは思へば驚異であると共にわれ等同窓生の永遠の誇りではあるまいか。今學院は創設五十年の紀念の年に當つてゐるが創業の當初を偲ぶことはやがて

創業者への回顧とならざるをえなす。

然しこの光輝ある創業者達を懐ふにつれて只一事我々の心に覺えなければならぬものがある。それは彼らの誰一人もわれ／＼が今日彼らを値るやうな偉大さを豫期しても居らず、望んでも居なかつたといふことである。ヘボン博士は「私がアメリカに居れば唯多くの醫者達と競ふて他人の害となると思ひました。私は醫者のない國、眞の神を知らぬ國へ行くことはよいと思ひ親の家を去つてまゐりました」といふ純眞な心から、何の野心も、成功の希望も有たずに渡來した。ブラウン氏は「私の外國宣教師たることは自分で決心したではありません。母の乳房から吸ひこんだものです。」といつて只心の安定のために渡來した。ヴァーベック氏は、自ら求めたのではなくて、オウバン神學校々長に推薦されるがまゝにブラウン氏と共に派遣された。命ぜられるがまゝに遠い異國に來つたといふ事、之が彼等の渡來の動機であり活動の態度であつた。彼らの一人々々はさうした虛心な奉仕のうちに「求めず知らず」世界文化の統一といふ神の大きな經綸の一部分として働いてゐたものである。是等の人々の殘した明治學院といふ一學府は、その形骸は左程大きいとは云へない、然し之を凝視すれば一平の露が宇宙を宿してゐるやうに世界文化の大潮流を宿してゐることが分る。

濫觴編

一 築地

築地二丁目の電軍停留所から真直ぐに南の方、即ち明石町の方へ向つて行くと一條の堀割に往き中る。大震災後の區劃整理に基いて、今では曙橋といふ堂々たる鐵骨コンクリートの橋が懸つてゐるが、以前には之はなかつた。數丁左手に見える輕子橋と、同じく右手に見える備前橋とが明石町と小田原町とに出る渡梁であつた。

曙橋を彼岸に渡ると、そこは明石町五十八番地で、元の立教大學と立教中學校とのあつた所で、今では廣茫たる荒地となつて淺茅さへ繁つてゐる。そこかしこに、ありし日の大建築の基礎工事かとも思はれる煉瓦の廢墟があるが、黒ずんだその色は何となくあの大禍殃の日の物凄さを語つてゐる。こ

の燒跡を右手にして、堀割に沿つて一丁半程往くと右に折れる廣い街路に出る。この街路のまゝに折れて南へ行くと左側には、流石に復興の帝都の表徴らしい明石尋常小學校が、淺黄色のコンクリートの高莊な姿を見せてゐる。やがて十字路に出る。正面の右側は全體が聖路加國際病院 建物で、左側は天主教の小やかな會堂である。震災前とは餘りの變り方の烈しいのに誰しも驚くに相違ない。以前は、角の聖路加病院に隣つて古色蒼然とした三一聖堂があり、そのまた隣りには聖公會の監督邸があり、それらが眞向ふの三一神學校の蔦に蔽はれた古い建物と相對比して、何とも云へぬ床しい感じのする場所であつた。左の天主教會堂も、以前は白塗りの可成り大きい美しいものであつたが、今は燒け殘された煉瓦の壁を利用して建てた極めて粗末なものである。それらはみな明治の初年に建てられたものであつたから、もしも、もとのまゝに残されてゐたならば明治十年の明治學院の築地時代を今後の人々が想像するには恰好のよすがとなるべきであつたが、時の利鎌はさうした人間の慾求を少しも酌量はしない。病院と會堂との間を尙も南へ行く。第二の十字路に出る。以前は横の路に沿つて小さな堀割があつて木橋が架けられてゐたが、近頃はそれが埋められ淺い空溝となつてゐる。その溝を渡つた街路の左側、そこが吾々の忘れてはならぬ築地明石町十七番地で、今から丁度五十年の昔、輒ち明治十年の十一月に東京一致神學校はこゝに建てられた。無論今では何の跡形もない。煉瓦や燒石の

散ばつた間に雑草のみが些少の趣を添へてゐるばかり。

そこをまた通りすぎて、一丁計りゆくと、街路は川に衝き當る。云はずもがな隅田の川口である。端舟や、小蒸汽船や帆船が、騒々しい音を立てながら輻輳してゐる。三四丁もあるかと思はれる河幅の彼岸は月島で、バラツクの家屋がみつしりと立ち並んでゐる。それに沿ふた稍川上の方には、幾つかの起重機が煤煙の中に見えるが、それは石川島造船所のあるあたりである。明治十年の頃、この河向ふの月島はまだなかつた。石川、佃の兩島の裳裾のやうにこの邊一體は廣い淺瀬であつて、河岸に立つとその淺瀬越しに品川の臺場が右手の沖合ひに見えてゐたといふ。川に沿つた往還を左に折れる、丁度その角のところ、そこは明石町六番地で、明治十三年の六月、ジョン・シー・バラ氏が築地大學校の校長として横濱から居を移して來た處である。美しい芝生の中の清酒な建物であつたといふが今では何の名残もない。その隣の七番地、そこには今殺風景な東京冷蔵株式會社の倉庫と事務所とがあるが、そこも亦、吾々には淺からぬ縁のある一劃の地域である。といふのは明治學院の前身の一つ築地大學校のあつたところであつて、今は古稀に近い吾々の先輩の多くの哺まれた處であるから。かやうに築地明石町と明治學院との關係は深い。然し現在の學院所在地の白金と築地とは地域の餘りに遠隔なためか、それとも、何の相通ふべき所以のない爲か、歳と共に相互の關係は淡く淡くなつ

てゐる。おそろく今から半世紀もすれば、斯様な關係のあつたといふ事さへ忘れられて了ふであらう。その關係の忘れられることは止むを得ないとしても、吾々は只以下の一事實を永遠に記録して置きたい。それはこの東京一致神學校及び築地大學校といふ、歐米の諸大學やカレヂに比ぶれば、その一控所にも足りない様な誠に小やかな粗末な校舎を後生大事と取り圍んで、その信仰から云つても學問から云つても、決して人後には墜ちない少壯有爲の立派な學徒が、否信仰の闘士が基督教傳道及び教育といふ使命を帯びて住んでゐたといふことである。

後日のために明治十三年當時のそれら諸教授の居住地と年齢とを誌して置かう。

ジエイムス・エル・アメルマン氏(三十六歳) 十九番地

ウイリアム・イムブリー氏(三十四歳) 十六番地

ジョン・シ・バラ氏(三十八歳) 六番地

ジエイムス・エム・マコウレイ氏(三十一歳) 六番地

エム・エヌ・ワイコフ氏(二十九歳) 十八番地(明治十六年九月以後)

ハワード・ハリス氏(三十歳) 十八番地

ジョージ・ウイリアム・ナックス(二十六歳) 二十七番地

ジイ・エフ・ヴァーベック氏(四十九歳) 京橋區入舟町七丁目一番地

ヒュー・ワデル氏(三十九歳) 麻布區市兵衛町二丁目二十五番地

この頃前總理井深梶之助氏は二十七歳の青年牧師として麴町教會の牧師たる傍ら、東京一致神學校の教授の輔佐をして居られた。服部綾雄氏は十六歳、石本三十郎氏は十七歳の青衿として築地大學校の最上級に學んでゐた。之等の人々のうち井深博士とイムブリ博士とを除いて他は殆んど皆、忠實な此世の勤勞を終へて、或ひは東京に、或ひは北米に、或ひは朝鮮京城に久遠の安き眠りに就いてゐる。

二 東京一致神學校

前述の築地明石町十七番地に建てられてゐた神學校である。赤煉瓦の平家造りで、屋根はフランス瓦で葺き、四五段の石階を登つて玄關に入るといふ見るからに小ぢんまりとした建物であつた。内部は三個の教室と教授室と圖書室と都合五室に分たれ、芝生の中庭を隔て、木造の學生控所も壹棟しつらへられてゐた。

この校舎は明治十年の暮に、米國のダツチリフオームド・ミツシヨンと米國プレスビテリアン・ミツシヨンとスコットランドの一致プレスビテリアン・ミツシヨンとの三布教團體の協力に依つて建てられたものである。一致神學校はこの年の九月に開校されたのであるが校舎の落成するまでの三ヶ月間は築地六番の小會堂と同小田原町にあつた築地病院の一室とを教室としてゐたものである。かうして三つの團體が一致協同の事業に當るに就いては、當然その背後に相當の歴史がなければならぬ。その歴史とは從來の日本基督公會と日本基督長老教會とが合體して、日本基督一致教會なるものが明治十年十月三日に設定されたこと、相即不離の關係があることは勿論である。この基督公會と長老教會との從來に於ける對立並びに之が併合するに至つた經過は、日本基督教會史上に甚だ興味深く、且つ、重要な問題であるが、之は教會史の範圍に屬することであるから茲には論及することは止める。たゞ基督公會とは明治五年に横濱海岸教會の初週祈禱會から起つた一つの信仰勃興を發端として、ジェームス・バラ氏のもとに集つた信徒の團體から漸次に發達したものであるといふこと、また、この團體は宣教師の所屬ミツシヨンの教派には何の關係もなく、その拘束をも享けず、傳統をも繼がず、全く新しい自由な立場から一つの日本獨立の基督教會を設立しようと志望したところから出たものであつたことを明言して置かう。この意圖に對しては、ブラウン氏、ジェームス・バラ氏東京ではタムン

ン氏が大いに賛同して他の諸の宣教師達も之に加はつて、横濱では海岸教會、東京では新榮教會が中心となり、のち長崎、弘前、上田等にも生じて追々と侮るべからざる勢力となつた。

ところが、この無教派主義の教會設立の意圖を快しとせず、飽くまで米國長老教會の傳統と習慣とを酌むばかりか米國のゼネラルアッセムブリーに直屬する教會を日本に設立したいと願ふ處の宣教師も居た。その主腦は京橋區入船町に築地大學校（明治學院の前身なる明石町の築地大學校とは別のもの）なる一英學校を設けて青年を指導して居たカラブルス氏及びその一派の宣教師達であつた。この後者の一團は、明治六年十二月三十日公然と日本長老會なるものを宣揚して、日本基督公會とは別行動をとつて宣教に従事した。その結果、明治七年十月十八日に第一長老教會なるものが築地居留地に生じ、次いで横濱住吉町、品川、千葉等にも漸次に擡頭して來た。

ところが、この對立は、日本に於ける宣教師達自身の活動の主義より生じたものであつて、無論本國ミッシヨン内に於ては何の決裂も確執もないところであるから、ミッシヨン自身は頻りに日本の公會長老會兩者の併合を願つてゐたことは當然である。その願ひが日本在留の諸宣教師に反映して、タムソン氏、ヘボン氏、ヴァーベック氏イムブリー氏等の斡旋となり、明治十年十月三日遂に機は熟して兩會は日本基督一致教會といふ名目のもとに協同一致する事となつた。山本秀焯氏がその著「日本

基督教會略史」一〇四頁に「此の合同の一結果として協力ミッションは東京に一致神學校なるものを設立して教職者の養成をなすに至れり」と斷言して居られるが蓋し當然であらう。

従つてこの神學校は明治十年九月に創立されたとは云ふものゝ、今一段詳しく云へば、從來は個々別々に宣教師等が傳道者養成の目的を以て薰陶してゐた神學生の諸團體を、一の組織のある學校に糾合せしめたといふ方が妥當かも知れない。その諸團體とは横濱バンドと稱するブラウン塾に屬するもの、築地バンドと稱するカラブルス氏の英學校に屬するもの、タムソン氏の家塾よりのもの、スコットランド・ミッションよりのもの、長崎よりのもの、都合五つの團體であつた。

第一横濱バンドに屬するものは、井深梶之助氏、植村正久氏、雨森信成氏、山本秀煌氏、藤生金六氏、伊藤藤吉氏、鈴木銃太郎氏、古澤久治氏。築地バンドに屬するものは、田村直臣氏、原猪作氏、石原保太郎氏、篠原銀藏氏、谷崎善次氏、島互氏、太田留助氏、角谷省吾氏、青木仲英氏、安川亨氏、青山昇三郎氏。スコットランド・ミッションの傳道、主としてデビッドソン氏を援助して居た青年達即ち、三浦徹氏、重富柳太郎氏、横井元峯氏。長崎よりの者とはリフオームド・ミッションに屬してゐた、瀬川淺氏、留川一路氏で總數二十四名、そのうち奥野昌綱氏、青山昇三郎氏、服部章藏氏の三名は聽講生として日々講義に列席してゐたものである。

次に教授講師の事であるが、後援の三つのミツシオンを代表して各一名宛の正教授が選定された。プレスビテリアン・ミツシオンからは、キリアム・イムブリー氏、リフォード・ミツシオンからはジエイ・エル・アメルマン氏、スコットランド・プレスビテリアン・ミツシオンからはエヌ・ジイ・マクラレン氏がそれぞれである。この他に二名の講師をあげることになり、リフォード・ミツシオンからヴァーベック氏、プレスビテリアン・ミツシオンからはタムソン氏が出講することになった。之等の人々の擔任科目は左の通りである。

アメルマン氏 系統神學、新約神學、教會史

イムブリー氏 新約釋義、基督傳

マクラレン氏 舊約歴史、聖地々理

タムソン氏 舊約釋義

ヴァーベック氏 說教學

斯様に講座の陣容は整つたものゝ、實際の講義上一つの困難が生じた。といふのは、二十四名の學生の年齢がまづ甚だしく不同で、十七八歳の青年も居れば、四十七八歳の壯年も居るといふこと、今一つは、英語に堪能なるものも居れば全然之を解しないものも居るといふことであつた。そこで英語

の講義は一切之を通譯することとなり、アメルマン氏の系統神學、新約神學、教會史は井深氏が通譯を擔任し、イムブリー氏の諸科目は原猪作氏、マクラレン氏の舊約歴史は植村正久氏が翻譯の勞をとることとなつた。この他に此の一致神學校では學生に漢學の素養を増進させる目的で山内貢といふ人に東洋の古典の講義をも依囑してゐた。

是等の教授講師の諸氏が日々の講義に努力したことは實に眞劍なものであつた。隔靴搔痒の思ひのある通譯講義、不自由な日本語講義の困難にも全く百折不撓善くも準備したものである。學院に残されてゐる尨大數冊に互るアメルマン氏の手記になる講義の原本を見れば、全く思ひ半に過ぎる。英和對譯になつてゐる新約聖書神學の一部を採録して氏の努力を偲ぶ榮とする。

The Biblical Theology of the New Testament,

Introduction,

Section I

Definition.

The B. T. of N. Test. presents in a summary form and systematic order the teachings which are contained in the N. Test. concerning God and divine things.

In its character, extent, and aim it is distinguished from Christian dogmatics (the fixed teaching of the Christian church) and is one part of historical theology. It is not difficult to perceive the difference between the doctrine of the N. Test and that of the church. The doctrine of the N. Test. is that which God designs to teach in the N. Test. whether men understand it rightly or not. The doctrine of the church is that which the church understands to be taught in the N. Test. whether that understanding is right or not.

以上のローマ字邦譯

Shinyaku Seisho Shingaku.

Chogen.

Dai Issho.

Meishaku.

Shinyaku Seisho Shingaku wa Kami to Kami no koto ni tsuite Shinyakusho chu ni ganyū suru tokoro no oshie no taiyo wo shijō wo tateite tokinkashitaru mono nari. Kirisuto Kiyōkuwai no teikiyo to wa sono seishitsu to kuiki to mokuteki wo koto ni suru mono ni shite sumawachi rekishi shingaku no ichi bubun ni zoku suru nari. Kedashi Shinyaku no oshie to kiyokuwai no teikiyo to no sabetsu wa kataki ni arazu. Shinyaku no oshie to wa hito no tadashiku kaisuru to kaisezaru to wo ronzezu, tala ni kami mizukara Shinyaku

ni oie oshiyen to hoshitamō tokoro nari. Kyokuwai no Tekiyō to wa sono kenkai no sei fusai ni kakawa-
 razu tan ni kyokuwai ga Shinyaku no oshiyē to miomuru tokoro wo it.

終りにこの一致神學校で以上の諸教授がなされた講義を後に書物として校訂出版したものを列記して置く。

アメルマン氏著 井深梶之助氏譯	新約聖書神學	明治十四年三月
同同	有神論	明治十四年
同同	天地創造論	明治十四年
同同	神性論	明治十四年
同同	人性論	明治十四年
マクラレン氏著 植村 正久氏譯	舊約歷史	明治十四年
イムブリー氏著 井深梶之助氏譯	福音史(基督傳)	明治十七年
アメルマン氏著 井深梶之助氏譯	救拯學	明治二十一年六月
イムブリー氏著 井深梶之助氏譯	加拉太書註解	明治二十五年
イムブリー氏著 高橋 五郎氏譯	哥羅西書註解	明治二十五年

この外イムブリー博士は一時非常に珍重がられた Japanese Etymology を明治十五年に、The Church of Christ in Japan を明治三十九年に、また井深博士の譯になるピリピ書註解を大正十年に出版された。左に此一致神學校の前身の一つブラウン塾について説き及ばう。

三 ブラウン博士とブラウン塾

船出 一八五九年（安政六年）五月七日のことである。ニューヨークの埠頭の一端に一群の男女が惜別の涙に暮れて徐々に遠のいて往く一隻の船を凝視してゐた。「サアブライズ號」といふ小さな船、それには十八人の東洋に行く船客が乗つて居た。その中の一人は既に年齢四十九のサムエル・ロビンズ・ブラウン氏、今一人は二十九歳のギドゥ・エフ・ヴァーベック氏、今一人は醫師のシモンズ氏であつた。この三人は、残る全生涯を新開の國日本の傳道の爲めに捧げようとして鵬程萬里の途に就いてゐるのである。船は大西洋を日一日と南下して喜望峯を迂回し、印度洋に出でた。長い海路である。百七十日、即ち殆んど半歳の月日を海に漂つて居たが、一行は毎日甲板で日本に關する研究を怠らなかつた。出來る限りの方法を講じて日本語の練習さへもやつて、上陸までには二百四十幾つかの單語を

記憶したとも云はれて居る。又ブラウン氏は一行の長老として、聖日の廻り来る毎に全船客の爲めに禮拜を司り、説教を聞かせたさうである。ヴァーベック氏はオランダに生れた關係からオランダ語に巧みであつた。百七十日目に船は漸く香港に着いた。風聞によると日本の國內は開國攘夷の論争はますます烈しく、橋本左内、吉田松陰氏等の志士は遂に處刑せられたといふ様な混沌状態を呈して居るとの事であつた。それには流石の此の三人の信仰の勇者達も考へざるをえなかつたが、今は一切を神に委せて居る身であるから事の成行は如何ともあれ兎も角日本に向ふことにした。然しヴァーベック氏だけは和蘭語の便宜を利用するが爲めに一先づ上海に行つて妻女をそこに残し、單獨稍後れて長崎に上陸することにし、ブラウン氏とシモンズ氏とは神奈川に向つた。一八五九年（安政六年）十一月三日である、この大いなる我國文化の開拓者を乗せた船は神奈川の沖合に錨を投じた。懸て端舟を以て本船の客は海岸に移されたが其處には一場の感激の情景が呈された。といふのは、それより約半ヶ月前の十月十八日同じく長い海路を経て漸く神奈川に上陸し、成佛寺といふ小やかな寺に假寓して居たヘボン氏夫妻が濱邊に迎へに出て居たからである。ヘボン氏とブラウン氏とは既に十六年の昔シンガポールで軛を共にした斷金の友であつた。相互はどれ程かうした巡り合せに力を得たことだらう。米國領事の斡旋で、ブラウン氏夫妻はやはり成佛寺に暫くの宿りをする事になつた。

生ひ立ち　こゝからブラウン氏の日本に於ける遠大精緻の壯圖が初められるのであるが、我々は思念を一轉して先づ同氏の生立ちを考へて見よう。ブラウン氏はニュージーランドの田舎、イーストウインザーに貧しい機械工、テモシイ・ブラウンの長男として一八一〇年六月十六日に生れた。母はフィゼ・ヒンステールと云つて、ニュージーランド特有の立派な清教徒の婦人であつた。

わづらはしき世を　しばしのがれ

たそがれしづかに　一人いのらん

この敬虔にして、しかも懐かしみのある讚美歌が彼女の作であることに氣が附くならば、誰でも彼女の人のなりの一端を想像出来るに相違ない。赤貧洗ふが如しとは、文字通りこのブラウン氏夫妻の生活に眞實ではあつたが、彼女の心には聖い餘裕が残されてゐて、羽毛を削つてはペンを造り、樹皮を絞つてはインクを造り、それで子供の誕生日毎には聖い詩をもものして與へたといふことである。又一人の男兒の生れることを祈念してゐたさうであるが、それも決して自分達の家計を將來助けさせようといふのではなく、たゞ一途に外國傳道の爲めに神に捧げたいといふ願望からであつた。やがて男子が與へられた、彼女はかのエルカナの妻ハンナの様に、誕生の床の上から神に捧げられたものとして其子の名前をサムエルとした。ブラウン博士が後年幼時を追想して、「自分は極めて幼少から、

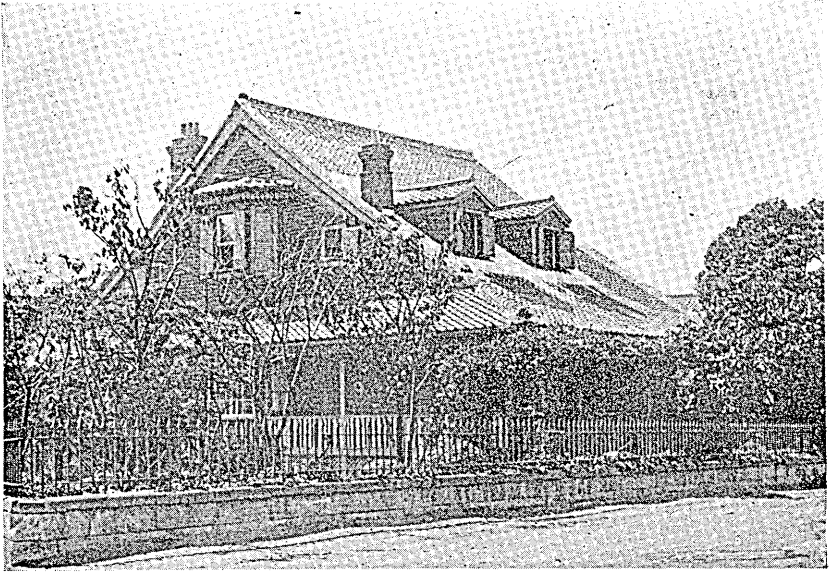
外國宣教師にならうといふ固い決心をしてゐたが、それは母の乳房から吸込んだものだらう」と云つてゐるが何といふ尊い告白ではなからうか。

渡來前のブラウン氏 ブラウン氏は貧乏な家の子ながら、頭腦は極めて緻密な、どこことなく天來の氣品の備つた風格をもつて居た。又澄んだ聲と敏活な指をもつて居て、音樂家としても相當に傑出すべき素質もあつた。ハイスクールを出てから父と一緒にモンソンといふ町に越して、父を助ける爲めに小學校の教員をしてゐたが、一八二八年にアマスト大學に入學した。しかし間もなく學資が缺乏したので退學して勤勞に従事し、一八三二年になつてエール大學に轉じて二年にして卒業、ニューヨークに出で、聾兒學校の教師となつた。その後、南方カロリナの或る神學校の學生となり、傍ら音樂を教へて居たが、一八三六年にその神學を大成すべくニューヨークに出で、ユニオンセミナリーに入學した。日と共に彼が胸中に懷かれてゐた聖火は益々燃えてゐたものである。一八三八年六月氏は目出度くユニオン神學校を卒業したが、恰かもそれを待望んで居たかの様に、支那に於けるモリソン教育協會は彼を専任の教師として迎へた。そこで妻を娶るや否や、一八三八年十月十七日出帆のモリソン號に乗じてマカオに向つた。百二十五日の海路を無事に翌年の二月二十日にマカオに着いた。彼は支那の兒童の教育を始めたのであるが、英語と音樂を組織的に教へること、それが彼らの將來のために

大いに役立つべきことを觀破して、先づ適當な教科書を編む必要を感じた。その草稿を携へて印刷をするために、一八四三年シンガポールに往つたのであるが計らずもその地で敬虔温良なる宣教師夫妻に邂逅した、それは前述の神奈川で十六年振りに再會したヘボン氏夫妻であつたのである。その後再びマカオに歸つて専心支那人の教化に努力したのであつたが、凄じい迫害と夫人の健康の著しく減退せるが爲めに一八四七年三人の優秀な支那の少年を連れて歸米することになつた。歸米後その少年達を大學に入れて自分は或るハイスクールの校長をしてゐたが、一八五一年にオワスコアウトレットの牧師として招かれることゝなつた。オワスコに於ける彼の徳望は甚大なもので、三年の後には可成な會堂も出來、廣い農園も與へられ、又彼獨特の方法で兒童を教育する學校さへも建てられた。殊に特筆すべきことは教會に三人の篤信有爲な婦人が現れて、將來ブラウン氏と共に外國傳道に生涯を捧げるといふ志望を現したことである。その中の一人はミス・キダーと云つて、後年横濱のフェリス女學校の創設者となり、又ミラー夫人として令名をあげるに至つた婦人、今一人のマリア・マンヨンは矢張り日本に渡來して、ヴァーベック博士の夫人として生涯を日本のために盡した。他の一人は不幸にも日本に渡來する以前支那で客死して了つたが、兎も角、かやうに立派な三人の婦人宣教師を出すに至つたブラウン氏の人格的威力は偉大なものであつたに相違ない。

日本行 かういふ牧會上の實質的な成功をあげ乍らも、氏の靈魂はたえず外國傳道といふ働に憧れてゐた。憶ふに彼は苦難の道を通つて本當の基督よりの榮冠を受けなければならぬやうに母の胎内から運命づけられてゐたやうである。それで愈々日本がペリー氏やハリス氏の盡力によつて開港條約を締結するに至つて、外人が日本の本土に上陸を許されると聞いた時には、ブラウン氏の胸は躍らざるをえなかつた。折しも、ダッチ リフォームドミッシヨンはその新世界の日本への宣教師を募集することになつた。神の召はこゝにあると感じてブラウン氏夫妻は最先にそれに應募したが、ミッシヨンは從來の經驗とその徳望とに照して、彼を最も適任者として派遣することになつた。同時に未だ若くはあるが、堅忍不拔の意志と信仰と博覽強記の頭腦とを併有したヴァーベック氏と技倆の鮮かな醫者のシモンズ氏とを彼に同伴せしめる事となつた。

成佛寺時代 サアブライズ號がブラウン博士一行を乗せて日本に渡來するまでには以上のやうな準備があつたのである。一文字の鬚を頭に、大小兩刀を腰にした武士や浪人達が怪訝な眼ざしを以て氏を凝視するやうなことがあつても決して怯むやうなことはなかつた。寧ろ彼等のさうした未開の姿のうち、早晚現はるべき基督者としての姿を眺めて愛せざるをえなかつた。成佛寺に同居してから後、米國公使ハリス氏はヘボン氏を公使館付醫者とし、ブラウン氏は公使館付牧師として懇ろに保護を加



(十正大れき築建に年二久文) 塾家ンボへ舊の番九十三岸海濱横
す失焼てに災震大の年二)



(萬が士博兩ンウラブ、ンボへ) 寺佛成の川奈神東
處しせ寓假間年ケ三の久文延)

へたさうである。

ブラウン氏が渡航の船中から引續いて努力して居た日本語の研究は、來朝後はめき／＼進歩した。氏は大工や左官や土工などの話聲に精細な注意をして、言葉のテンスや語尾の變化などを究めて、日本語は文語體と口語體の二つに瞭然と分れて居ることをも知つた。二年の後に口語體日本語といふ一つの書物を著して、大いに外人達の日本語研究に裨益したが、短日月の間に斯様な大收穫を得た事は何れ程氏が語學上の天才を持つて居つたか、察せられる。又氏は、審さに日本の武士の氣品とその教養とを一種の尊敬と興味とを以て眺めたやうである。その威嚴と禮讓との整つた振舞は、長い歴史的教養に基いて居り、儒教の精神が日本人固有の男性的素質と美しく混淆して、世界の何處に出しても貴まるべき或る特質を形成して居る様に思はれた。その武士道的精神が日本人に尊敬さるゝ程度が深ければ深い程、こゝに全然新しい基督教を移入することは困難であることを悟つた。しかし、その土壌は硬くばあるが之を適當に耕作すれば、世界で之の上もなく相應しい神の畑となるべき事を知つた。何となれば武士の忠義の精神は、基督者の基督に對する忠順の精神に一脈の共通性のあることを認めざるを得なかつたからである。然し乍ら、日本の傳道の畑は斯様に地味豊穰であると同時に地殻の堅牢なるを知れば知る程ブラウン氏の念頭に浮んだことは、世界最善の宣教師こそ此の日本に集ま

るべきであるといふ事であつた。當時ブラウン氏が米國ミッシヨンに對して宣教師派遣の意見書を送つて居るが、如何にもよく肯綮に當つた觀察と思はれる。

「苟も宣教師として日本に派遣さるべきものは、米本國の教會が招きうる最善の人物、即ちその信仰に於ても、學識に於ても第二流の人物たるを要する。私は忌憚なく云ふ、不完全なる教育を受けたるもの、或は凡ての階級の人に向つて身を處する丈の常識のないもの、又は信仰と見識が本國の最善の教會の説教者として相應しくないもの、之等は決して日本に派遣せられてはならない。殊に日本派遣の宣教師に必要なのは、度量の廣大なるもので、快活、溫和であり、平等觀念の強い事である。何となれば、日本人は禮節を重じ、喜怒哀樂を面に表はさず、仇敵に對しても微笑を以て語るといふ國民であつて、一方他人の威嚇や壓迫には決して甘んぢて居ない。之らの點に於て日本人は支那人と全然性質を異にして居る。故に日本人に對しては傲然たる態度で威喝するよりは、愛と忍耐と柔和とを以て交はるべきである。」初代の宣教師達が日本の到る處で尊敬の的となつた事は、彼らが何處へ出しても人後に落ちない第一流の人物であつた故であるが、何故にかゝる立派な人々が日本に渡來したかといふ理由の一面には、此のブラウン博士の意見にミッシヨンの人々が聽從したからではあるまいか。

氏は又可成の危険を冒して長崎に行き、神戸に到り、大阪を踏査して將來に於ける日本全土の傳道

の劃策をして居つたが、同時に、日本在住の外人間に傳道をする事を忘れなかつた。渡來の直ぐ次の日曜から成佛寺の一室で禮拜を司り説教をしたが、附近の外人達は一回と重なるに従つて集ひよる數が多くなり、遂には横濱に一室を借りなければならぬ迄に至つた。ジェームス・バラ氏の手記によると、「當時の成佛寺は誠に粗末な建物ながら、ヘボン氏とブラウン氏の人格の輝きによつて歐米各國の人々が引著けられて横濱神奈川に於ける最も美しい社交場裡であつた」と傳へられて居る。成佛寺は今では殆んど人の念頭から去つて了つた一庵室に過ぎないが、ヘボン、ブラウンの二大人物の日本に於ける意義と價值ある事業の濫觴期を圍まつて居た場所として吾々の何時迄も忘れてはならぬ處であらう。

苦難來 所が氏の成佛寺滯留の三年間、天下の風雲は益々險惡になつて來た。渡來の翌年即ち一八六〇年（萬延元年）の春三月には、櫻田門外に於て井伊大老が刺されるといふ事になつた。その翌年文久元年には米國本國に於て南北戦争が勃發して、ミッションは經濟的安定を失ふと同時に、我國に於ては異人排斥の熱が益々高まつて、浪士が各地の領事館を襲ふといふ事になつた。又その翌年文久二年には神奈川在の生麥に於て白人男三名女一名が刺される事になり、品川の御殿山の英國公使館が燒打をされるといふ様な状態になつた。成佛寺の近邊にも始終刺客らしい者が徘徊して、ヘボン、ブ

ラウン兩氏の身邊も幾度か危くなつた。従つて二人の有望ある前途にも何となく暗雲の漂ふ様な思ひがあつたものである。所が、はからずも二つのよき音信が、將に叢雲に閉されやうとするブラウン氏の前途に輝かしい光明を見せてくれた。それはあく迄も熱誠、篤信の未だうら若い宣教師ジエームス・バラ氏夫妻が、萬難を排して一八六一年(文久元年)秋、神奈川に渡來した事である。この篤信熱誠なバラ氏は、ブラウン氏がこの人こそは兼て思つてゐた本國にも稀に見る傑出した青年傳道者であつた。バラ氏の方から云へば、ブラウン博士の人物とその熱誠とに動かされて、眞實に日本教化のために身命を捧ぐべく若い夫妻が相携へてブラウン博士の後を慕うて渡來せるものである。今一つは、ブラウン氏の經濟的困難を想見した爲めか、布哇に於ける土著の基督教信徒達が、二百磅(二千數十圓)の金を醸金してブラウン氏に送達して來た事であつた。それと共に今一つブラウン氏にとつて感激すべき事が生じた、といふのは、横濱在住の英・米・蘭の公使館附文武官、及び實業家達二十四名が、一千五百弗の金を集めてブラウン氏に土地と建物とを寄贈したいと申込んで來た事である。之らの事實は、何れ程ブラウン氏の人格が彼らの敬愛の的となつて居つたかを證明するに足るであらう。ブラウン氏も亦彼らのさういふ敬愛に對しては適はしく應酬すべき責任と感激とを覺えたものである。一八六二年(文久二年)に氏は神奈川を去つて横濱に移つたが、成佛寺附近の無智文盲の漁夫や百姓達

は涙を流してブラウン博士と別れる事を惜んだといふ事である。彼らはその氣高い異人がどれ程温い心で自分等に接してくれたか、又病ある時にはどんなに手厚くいたはつてくれたかを思出さずには居られなかつたのである。その後米本國の南北戦争は益々酣となつて、ミッシヨンよりの送金は一時杜絶しようとする情態に陥つたが、ブラウン氏は自ら新聞の通信や寫眞の送達をやつて自給自足してその經濟的困難を切抜けて行つた。

出火と歸米 元治元年六月ブラウン氏の日本に於ける定住の居宅は横濱の山の手に構へられた。時は佐久間象山が切られ、長州の征伐が行はれ、英米佛蘭の諸艦隊が下關の砲臺を砲撃したといふ喧しい年であつた。此時倫敦から二人の日本青年が倉皇と一宣教師のブラウン博士に對する紹介狀を以て歸朝したが、何かの落度で遂にブラウン博士に逢ふ機會を失つたが、その青年といふのは伊藤俊輔氏（後の伊藤公）と井上聞多氏（後の井上侯）であつた。其當時長崎に上陸したヴァーベック氏は漸次にその學殖と人物が朝野の間に認められて來て、地方の大名や幕府の高官達の外交及び教育の顧問として重んぜらるゝやうになつて居た。ヘボン氏は既にあの名著「和英語林集成」を大成して既に印刷の運びにまで至つて將に天下の輿論を喚起しようとして居るし、ブラウン博士は集ひよる秀才達に英學を教授しながら聖書の和譯を孜孜として急いで居つた、斯うして慶應年間は過され、日本が長い封建

の夢を醒して世界の文明思潮に棹さすべき明治維新は迎へられたのであつた。所が明治元年の春、ふとした粗相から新築後間もないブラウン氏の家は焼失して了つた。渡來後約十年の丹精からなつた日本語新約聖書の原稿を始め、はるばる本國から持参したり蒐集した書物、家族の一切の衣類家具を煙にして了つた。之は最早相當の年配であつたブラウン氏にとつて可成に大きい打撃であり、又勞し乍らさほど目に見えた收穫のない傳道の士氣に對しても淺からぬ痛手であつた。そこで子供達の教育の事も考へて暫く故國に靜養する事になり、その年の秋太平洋通ひ初めた汽船に乗つてパナマ地峽の連絡でニューヨークへと歸つて行つた。十年の昔に親切なその手で牧せられたオアスコアウトレットの羊供は懐かしきこの牧者の歸りを喜んで是非共もこの教會に牧師となつて赴任してくれと頼んで來たが、日本の宣教を天與の使命と感得して居る博士は、涙乍らにそれを拒んで、北米の各地を旅行しては東洋の宣教の重要なる事を語り聞かせて約二年の後一八六九年（明治二年）年齢正に六十に垂んとする彼は残る生涯の全力を培つて専心に聖書翻譯の大業を大成せしめるために日本に再渡航しようとする決心を懷いた。さり乍ら當時のリフオームド・ミツシヨンは經濟的に頗る不自由であつた爲め、果してブラウン博士の志望をかなへる事が出来るや否や甚だ疑はしいものがあつた。ところが天來の招きと云はふか、日本政府は新潟に新設する一英學校の校長として年俸三千圓の待遇を以てブラウン博

士を招かうとする手紙が領事館の手を経て送られて来た。老夫妻は限りなき感謝と喜びとを以てその召に應じて嘗てオワスコ・アウトレットに居つた頃は非共外國傳道に身を捧げたいと願つて居つたミス・キダーを連れて、當時漸く開通した大陸横斷鐵道で桑港に出で八月四日出帆、同二十四日に横濱の埠頭に到着した。

新潟行 天下の情勢は一變して居つた。文明の曙光は到る處に見えた。王道は日本全地に行はれた人民は又泰平を樂しんで居た。多勢の内外人が氏の身邊に群つて來て、是非共京濱の間に在住するやうに薦められたが、約束はもだし難いと云つて、夫妻相携へて徒歩で新潟まで行く事になつた。十年の昔とは打つて變つて、平和な旅が續けられ淺間の噴煙も長閑に眺められた。善光寺も見物したのであつたが、宿の主人のすゝめらるゝまゝに

From Edo to Furuma

Japan is all beautiful.

Its people are hospitable and very polite.

S. R. B.

と詩を物したりして旅を續けて十四五日の後に新潟に着いた。

新潟に到着後のブラウン博士は米國領事代理として又英學校々長として、健康もすぐれて良く日々楽しく育英の務めを果して居たが、胸中にたゞ一つの滿されない願望が潜んで居た、それは申す迄もなく聖書翻譯のために、早残り少ない生涯の勢力を傾注したいといふ事であつた。寢ても醒めてもこの宿望の達せられない限り、彼には本當の平安がえられなかつた。そのためでもあるか新潟在住はたゞ一年間で、明治三年の秋には又もや横濱に歸つて來た。

横濱 横濱には當時神奈川縣の縣立による修文館といふ學校があつたが、ブラウン博士が來濱したのを機會として、其處で英學を擔當して貰ふ事になり、その餘暇を聖書翻譯のために捧げる事となつた。所がブラウン氏の徳望を慕つてはるばる新潟から追隨して來て横濱の修文館に入學するものが三十名もあつたといふ事である。その中六名はブラウン博士自身について横濱まで來たものであつた。氏の修文館に於ける感化は絶大なもので、その薰陶をうけたものゝ中には後の北大總長佐藤昌介氏、前樞密顧問官都築馨六男、小野梓氏、工學博士淺野廣輔氏、工學博士白石直治氏等がある。その修文館の教授時代は明治六年迄續いた。明治五年に、陸奥宗光氏が神奈川縣知事となり、星亨氏が修文館教頭となつたのであるが、當時十九歳の青年で修文館の苦學生であつた井深梶之助氏は、拔擢されて同校の會計係となつて居たが、ブラウン博士が井深氏の英才を認める事となり、井深氏がブラウン氏

の基督教的人物に傾倒するやうになつたのは此頃の事である。明治六年ブラウン博士の約束の期は満ちて修文館を去る事になつたが、多くの學生は氏の無き後の修文館に失望したものか、多く其處を去つて了つた。この去つて行つた學生の中に前の桑名藩主松平定教といふ一人の青年が居つたが、ブラウン氏の高德を慕ふ事頻りでは非共一私塾を開設して貰ひ度いとの提案を出すに至つた。その提案を懷いて當時箱根に避暑して居つたブラウン氏の下に態々出掛けて行き、松平氏と博士との間を斡旋したのが抑々井深棍之助氏であつた。ブラウン氏は爲すべきの大事業のある事を知つて容易に私塾開設の議を肯じなかつたが、要求の切なる餘り、月謝は一名十圓たる事、生徒は十名以上たる事と云ふ條件で、許諾する事になつた。いくら藩主とは云へ、毎月の月謝百圓を提供する事は困難であつたが爲め、その條件には應じ兼ねるかと思つた矢早に、横濱太田町に平松屋寅吉といふ松平藩出入の米屋が義侠心からその月謝を引受けやうといふ事になり、こゝに目出度く明治六年の秋からブラウン家塾は横濱山の手二百十一番ブラウン博士居宅に開設される事になつたのである。

ブラウン塾 横濱櫻木町驛から本牧或ひは間門マカド行きの電車に乗つて約十分、元町停留所で下車、右の方二丁程山を左に見ながら行くと龜の橋の袂に出る。そこを左に折れると可成りに急勾配の地藏坂がある。之を登りつめて、右に折れ、更に二丁程行くと山手二百十二番の共立女學校の塀につき當る。

その學校の右隣二百十一番の所が、明治六年から九年の頃まで、ブラウン塾のあつた場所である。其の頃は小廣い芝生の庭があり、その中央に二階建の本館と、書齋とも教室ともつかぬ離れの様な一棟があつた。その一棟が抑々ブラウン塾の教室で、ある意味から云へば、東京一致神學校の前身であり、明治學院の師父とも云ふべき井深氏、日本基督教會の桂石であつた植村正久氏、又熊野雄七氏、山本秀煌氏、押川方義氏等の幾多の英才を哺むた所である。

ブラウン塾は元々、前述のやうな次第で星亨氏が監理して居た横濱修文館に學んでゐた有志の者共がブラウン博士のもとで英學の研究を繼續して行かうとの意圖から創設された一私塾であつたが、明治五年一月、横濱海岸教會でジェームス・バラ氏の熱誠な傳道のもとに奮ひ起つた信仰の勃興以後、そのバラ氏の下で英學を修めてゐた青年達、即ち押川方義、吉田信好、植村正久、熊野雄七の諸氏等がブラウン氏の門に移されるやうになつてからは、その塾は單に、英學を教授するといふばかりではなく、一步進んで、將來の基督傳道者を養成するがための神學塾の容子を備へるに至つた。蓋し日本最初の神學校であらう。當時、ブラウン博士は聖書の翻譯のために殆んどその全勢力を傾倒してゐたものであるから、實際のその神學教授は、リフオームド・ミッシヨンのアメルマン博士に普通學の方は自分の娘のミス・ハティ・ブラウン、及びミス・ウキンに大體は委せて、自分は聖書と幾分の英學とを教へ

てゐるに過ぎなかつた。然しながら、このブラウン塾は、ブラウン博士の教育の主義として、教授は極めて嚴格で、數學の一問題でも、英文の一つのバラフレイズでも決して忽せにする事はなしに、頗る緊張したものであつた。アメルマン氏は英語で系統神學の講義をする傍ら、幾何、三角術をも教へた。ミス・ウキンは仲々の數學の巧者で、代數、算術の外地質學、物理學を教へ、娘のハティ・ブラウンは英國史や米國史、英文學史などを擔當して父博士の教授法を踏襲し、仲々巧みに英語の發音や作文、修辭等を教へた。土曜日曜兩日を除くほか毎日朝の八時から正午までの教授時間は、塾生は緊張し切つたもので、午後の時間と雖も翌日の宿題や豫習の爲めに殆んど餘裕はなかつた相である。その代り、塾生の學力はメキ／＼と進歩して、グリフィスの言葉を代りて云へば、「ブラウン氏は日本に於ける最初の最も卓越した教育家で、殊に英語の教授法に於ては無双であり、その門下には日本に於ての英語の最堪能者を出した」と激賞したが決してそれは過言ではない。その塾中で一番英語に熟達して居つたのは井深梶之助氏であつたが、今日既に古稀を越えて居る井深博士の英語が、日本に於て依然として異彩を放つて居るのは、矢張りブラウン博士の薫陶の然らしむる所であつたと云つて差問ない。ブラウン氏は「言葉は人間である」といふ標語の下に塾生に英語を教へた。完全なる言葉を用ふる人が完全なる人間であるといふのが先生の教育の標的であつたのであらう。それで、英語に就いては、發音

の教授が極めて嚴格で、或場合は塾生の口の中に自分の指を入れてまで舌の操り方を教へた。現在の英語教育界にパーマー一派の人々が切りに口より耳への英語を唱道して居るが、ブラウン博士は六十年の昔既にその事を實際に行つてゐたと云つてよい。蓋しブラウン塾は當時の日本にとつて唯一の正則なる英語教授所であつたに相違ない。さりながら、熱心な基督教徒の青年達がブラウン塾に集つてからは、前述の通り、神學をも併せ教えて居たが、博士は自分の手の廻り兼ねるのを知つて、午後は塾生達をフェリス女學校に送つて、ミラー氏の舊約歴史の講義を聽かせてゐた。

ブラウン塾には當時の秀才が集つて居たと云つてよい。彼らの英語の聽力、讀書力は人後に落ちないものがあつた。又普通學を修めた結果、その素養も中々に深いものがあつた。それで明治九年の頃から日本基督公會と日本長老教會との合同が頻りに叫ばれて、翌十年の十月三日に愈々日本基督一致教會が設立され、築地十七番に前掲の東京一致神學校が出来るに及んで、ブラウン塾の生徒達はそこに移されるやうになつたが、塾生一同にとつて、それは決して幸福でなかつた。緊張し切つた授業を受馴れた彼等には一致神學校の授業は極めて迂遠で、惰氣滿々たる感に堪えなかつた。植村氏の如きは當分は生徒として顔を見せなかつたさうである。何分にも英語の堪能者と皆目英語を解しない人とを一堂に集めて、日本語を解しない西洋人がローマ字口調や通譯付で教へたのであつたから。

かうした無理な教授法をとる一致神學校で教師と學生との心が漸次に遠のいて行つた事は止をえない歸結であつた。或る意味で東京一致神學校は正しく横濱のブラウン塾の後身ではあるが、ブラウン塾が更に一段の發達を遂げたといふのではなくて、機運が然らしめたには相違ないが、古へのブラウン塾はこの氣鋭の大半を失つて、たゞ形骸のみを一致神學校に移したと思はれる。くれぐれも明治九年を一期として跡を斷つたブラウン塾はあつた。しかし、短くはあつたがその存在の影響は大きなものであつた、恐らく植村正久氏、井深梶之助氏、本多庸一氏、押川方義氏等の此世に於ける生涯の影響は永遠であるに相違ない。それらの人々のうちにやはりブラウン博士は生きてゐる。人間が熱誠を以つて爲した行動は縱令瞬間であつてもその影響は永遠である」といふことはブラウン氏の事蹟によつても證明される。

聖書翻譯事業 ブラウン博士の聖書翻譯事業は直接明治學院の五十年の歴史に關係のあるといふ譯ではないが、學院の教育の根本主義が立脚してゐる邦譯聖書がブラウン博士とヘボン博士との多大の努力とに依つて出來た限り、その出來の經路の一端を此處に誌す事は強ち不當ではあるまい。(以下井深博士講述)

「明治五年九月、横濱に於いて始めて、在留宣教師協議會が開催せられ、その決議によつて三名の聖

書翻譯委員が選ばれて専らその任に當ることとなつた。即ちエヌ・アー・ブラウン博士、ゼー・シー・ヘボン博士、デー・シー・グリーン博士の三人である。序に加へるがその後明治七年にはバプテスタ派のナイタン・ブラウン氏メソヂスト派のマックレー氏が此の聖書翻譯委員となられたが、如何なる事情があつたか此の二人の委員は一寸の間その業に加はられたのみで後該委員を辭しナイタン・ブラウン氏は獨力で翻譯せらるゝ事となり、マックレー氏は専ら教務に従事せらるゝ事となつた。

該委員會の委員長は我がブラウン博士があつた。而してそれらの各委員を輔佐したのは日本人で、一人は松山高吉氏、同氏はグリーン氏の輔佐役として最初から終まで關係があつた。他の一人は奥野昌綱氏で、最初はブラウン氏の輔佐役であつたが後にはヘボン氏の輔佐となられた。今一人は高橋五郎氏でブラウン氏の輔佐であつた。松本某、三輪某といふ人もあつたが、それは暫時のことであつた。尙、井深自らも幾分かブラウン氏の翻譯の手傳をした事がある。

その時の光景を述べて見ると、私はその頃ブラウン先生の許に書生をしてゐたので殆んど毎日の如くにその仕事を見たのであるが、委員の集會した部屋は横濱の山の手二百十一番のブラウン先生邸の南隅の一室で十二疊か十六疊位の大きさの部屋であつた。さうしてその中央に圓卓があり、それを圍んでブラウン先生とヘボン博士とグリーン博士と三人が鼎の如く座し、その間に三人の日本人が介在

してゐた。そしてその圓卓の上には原文（ギリシヤ語）の聖書が幾通りか積み上げられ、また幾程かのコンメンタリーもあり、又日本人の輔佐役の前には官話譯、文理譯、地方語譯等の漢譯の聖書が置かれてあつた。土曜日曜日の外は毎日九時から正午迄此處に集つて豫ねて委員の一人が譯したものを提出して皆でこれを批評し、衆議一決の後に之を採用することゝなつてゐた。時には異論百出で一日にして漸く一節か二節を終つたことも珍らしくない。是の如くして新約全書は翻譯せられたのであるが、さて此の聖書翻譯のことに就いて先づ定めなければならぬ二三の主要なる先決問題があつた。その第一は何を正本として翻譯するかといふ問題であつた。然しこれは所謂欽定英譯の原本即ちテキサス・レセプタスを用ふる事となつた。但しこゝに改めて斷る迄もなく日本譯は決して英語聖書の重譯ではなくて、全くギリシヤ語の原文を日本語にしたものである。唯これに關して残念なるは、當時日本人にして原文に通じたるものがなくして此の大業が爲されたことである。事情止むをえない事ではあつたが、輔佐役の人は専ら漢譯の新約聖書と外國の翻譯委員諸氏が不完全なる日本語を以て譯する處を基として日本語にするより他に手段がなかつたのである。且つまた甚だ遺憾なことは輔佐役中に英語を自由に解する人が無いことであつた。然しこれにしてはこの翻譯が誠によく出來てゐることを何人も許さねばなるまい。或は是の如き事情にあつて完成せられた此の翻譯は大成功であつたと謂つ

て差支へなからう。

第二の問題は翻譯の文體であつた。今日でこそ時文の型は稍決定してゐるが、その頃（明治七八年頃）には日本の時文といふべきものはなく、片假名交り漢文くづし、若しくは和文といふが如きものが行はれてゐたので、何れかその一つを選ぶより他はなかつた。而して何れも一得一失があるので、その選擇には委員は頗る苦慮せしめられたものであつた。實際翻譯の文章の上にその苦心の痕が明かに見えてゐる。又之と關聯した問題は漢文を本文とするか振り假名を本文とするかで、此の點に就いては翻譯者と輔佐者との間に大いに議論があつた所である。が遂にブラウン先生等の主張により振り假名が本文と決定した。それで此の邦譯聖書を見ると振り假名なしには讀み下せぬのがある。そして無理に讀めば頗る奇妙なる文句となる所もある。この譯文の體裁については日本人の方ではどうしても漢文風にしたい傾向があつた。それは聖書は尊いものであるから文體に於いても威嚴のあるものに爲すべきであるといふ議論で無理からぬ所である。それに對してブラウン博士は終始戰つて來た。「元來支那や日本に於いては、書物はたゞ學者の讀むものであるとしてあるが、神の言葉たる聖書は學者だけが讀むべきものでは決してない。誰でも讀めなくてはならぬ。故に如何なる日本人も自由に讀みうる様に翻譯すべきである。」と力説し續けて來られた。また、（^レ）輔佐者がよく「漢文にはかくあります」

と云ふと「イイエ、漢文は原文ではありません」と答へられたことが度々あつた。

是のごとき理由であるから、邦譯聖書は明治時代の日本の文献中でも一種獨特の風を備へた者となつた。之を最近の改譯と比較して見ると、その意義の精確なる點に於いては後者は勝れてゐるのは萬人の認める所であるが、その文體に於いて自ら一種の威嚴を備へてゐる事は後者の及ばない所ではなからうか。是の如くして新約聖書は着手後五年と六ヶ月を費して、明治十二年十一月三日に完成した。

その後ブラウン先生は健康を害されて、長く日本に留ることが出来なくなつた。しかし豫ねての畢生の願望であつた新約聖書の日本語譯といふ大事業も完了したので、今は何の思ひ残すところもなく非常に喜ばれて、やがて我が國を去らうといふ決心をされるに至つた。

ブラウン博士の歸國（井深博士講述）一八七九年（明治十二年）の夏、ブラウン氏は醫者の診斷の結果、如何しても絶対に休養を要する事となり、日本にそのまゝ居住して居ては到底その病を根治する事は不可能で、歸米して専門醫の手術を受けたなら、或は回復の望があるかも知れぬ事が解つたので、遂に意を決し、老夫人を同伴して日本を去らるゝ事となつた。その頃の事であるが、身邊の人々に向つて一度ならず語られた言葉がある。『我若し、百の生命あらば、我は喜んで、これを皆、日本の

爲めに捧げるであらう』と。實に先生は、此の精神を以つて、日本の爲めに働き、その生涯を捧げた人と云つて差し支へなからう。

横濱の住宅も片づけ、愈々歸米する前數日間、東京に出て、夫人の遠縁に當るヒュートン教授の宅に泊つてゐた。此のヒュートン氏は、東京大學の教師で、芝公園内に居住してゐたが、ブラウン老夫婦に仕へること自分の両親に仕へるが如く、夫婦で優しく待遇せられた。ブラウン先生の御病氣は、その時の診断によると膀胱炎であつたといふ。余の最後の訪問も、その時で、植村正久氏と共にヒュートン教授邸にブラウン先生を訪問したのであるが、それが最後の別れであつた。

一八七九年夏、遂に日本を辭して故郷に歸られたが、先生が歸米後、第一に爲された一つのことは生れ故郷のモンソンに至り、母上の墓に詣でられる事であつた。それから、母校たるエール大學に行き支那語の教授である舊友ドクトル、ウエルス・ウイリアムスといふ人の所に客となられた。

その後、間もなくであつたが、一日鐵道馬車に乗る爲めに少しく歩行を早くせられた爲めに、病勢が募り、翌日は可成り苦しかつたがそれにも拘らず、上海に於ける彼の門下生の依頼により、コネテイカットにある留學中の彼の子息に何か助言する爲めに其處に赴いた。然るに停車場に於いてその少年と物語をしてゐる時、突然卒倒した。幸に間もなく回復したのでオルバニーに歸り、その令息の所

に行かれたが、先生の健康はその後餘り宜しくなかつた。又、此の頃、ブラウン先生を最も喜ばしたのは、日本から來た音信で、日本に於いて愈々新約聖書刊行も完成し、一八八二年（明治十四年）四月十九日に築地新榮教會に於いてその記念祝賀會が舉行せられたといふ事であつた。而して同日講演せられたのは、ブラウン先生の同僚へボン博士と、日本人でブラウン先生の輔佐役をした奥野昌綱氏であつた。此の音信はブラウン先生には此の上もない喜ばしい音信であつた。

平和なる臨終 一八八一年（明治十四年）の夏、ブラウン先生は、老夫人を携へてオルバニーを去り、エール大學の一八三二年の同期生の舊友會に出席すべく、ニューヘブン町に赴いた。而して、故郷の町を夫人と偕に馬車を驅つて舊友、知人の家を訪問したが、その殆んど大部分の人々は既に此の世の人ではなかつた。老夫婦は、その足で、兩親の墓に詣でられ、その夜は常の如く寢に就かれて變る所がなかつたが、その夜半、何等の苦痛もなく、唯呼吸に異常があるのに驚いて老夫人が目醒されたが、その時には既に先生は永遠の安息に旅立つて居られた。齡實に滿七十歳であつた。（七十歳に數日缺いた）先生の死はその地方の田舎新聞に極く簡單に報ぜられたのみで、大都會の大新聞は何等の注意をも拂はなかつた。その葬儀の如きも頗る質素で、故郷の人々ニューヘブンの舊友、知人達が會葬したのみで嚴肅に取り行はれた。是の如くして偉大なりし新東洋の建設者エス・アール・ブラウ

ン博士は、その生れ故郷に導かれ、舊友知人の温き守りを受けつゝその愛する兩親の側に葬らるゝ事となつたのである。その時の會葬者の一人であるハートフォードの牧師トウツチル博士はその時のことを左の如く物語つてゐる。

「私は、ブラウン博士の葬儀に會して教會より墓地に迄之を見送つたが、その時、自分と共に會葬者の中にあつたウエルス・ウィリアムス博士が道すがら、殆んど獨語の如く物語られた事を忘れる事が出来ぬ。同氏はその昔、支那にあつてブラウン先生と傳道の勞苦を偕にせられた人であるが、柩の方を向いて、『彼は決して恥ずる所はないであらう』と云つた。而して最後に、東方の天の一角を望み、手を指し延べて言ふに『他日、東洋に於ける神の大經綸が全く發展する時に於て、ロピンス・ブラウンは決して恥づる所はないであらう』と云つて、感慨無量なるものがある様子であつた」と語つてゐる。

四 ブラウン塾に入る迄の井深梶之助氏

「英雄こそ時代を造る」とカアライルは云つて居るが、この言葉は英雄でない限り人は皆時代の子であるといふ意味にもなる。維新の頃翻然意を決して基督教徒となつた奥野昌綱、新島襄、本多庸一、井深梶之助、植村正久、熊野雄七氏等を想像して見ると、一脈の共通性がうかゞはれる。それは彼ら皆封建時代の士であつて、歐化主義全盛後に生れた所謂新時代の人ではなく、鎖國當時に養成された日本人の特性がその儘基督教の感化によつて磨かれたといふもの、換言すれば封建の武士がパプテスマを受けて基督教徒となつたと云ふ特性がある。

井深梶之助氏の人格と品性には丁度氏が成人される最中、あの維新の大更新の場合に遺憾なく發揮された我が國古來の武士の精神と、その波瀾中に靜かに而かも力強く存して居たヘボン、ブラウン兩博士の基督教的人格との感化が可成り多いと思ふ、氏は氣骨ある會津武士が基督教徒となつた一つの典型と云へる。今更氏の人格品性に對して贅言を弄すまい。以下明治學院の五十年史が自ら氏の面目

を躍如たらしむる所があるであらう。たゞ後日の參考として、氏が武家に生れ、武士としての教養を受け、あの維新の大波瀾に遭遇して變轉極まりなき境涯の中に、遺憾なく急激な時代の變遷を味はつて、武士の魂たる脇差を身邊から離しえない中に永遠の光輝ある基督教眞理を發見するに至つた徑路を略述して見る。

鳥羽伏見の役 慶應三年の冬十一月である。江戸在住の薩摩の浪士は市中を横行して亂暴を極め果ては、江戸市中の巡察役たる莊内藩主酒井忠篤の家敷を焼き、剩へ軍艦に乗じて品川より遁れた。それは薩摩の武人達の宿望たる討幕の企圖が運ばないといふ不平からであつた。徳川の臣僚達はこの薩人の横暴を大いに憤慨して、當時大阪城に居を移して居た慶喜公に、事の由を訴へた。慶喜公は從來薩藩の横暴に激昂し勝ちの部下を制止し續けて來たが江戸の變報を聞くに及んで到底薩藩とは並び立つ事は不可能なるを知つた。折ふし京都守護職會津藩主松平容保、及び所司代桑名藩主松平定敬の二氏が他の諸將と共に「近者二三の大藩權力を恣にし専横極りなし。願はくば兵を率ひて京師に入り姦邪を攘ひ以て君側を清めん」との請願に及んで來た。慶喜公意を決して、討薩表を草して、進軍の令を傳へた。時は慶應四年(明治元年正月三日)であつた。會桑の兩軍は鳥羽伏見の二道から京師に入らうとしたが、薩長藝三藩の兵の外尾越の兵をも加へた官軍は維新の大業を成すは此の一舉にありとして

盛んに撃つたが爲めに幕軍は大に敗れて大阪に退いた。慶喜公は容保、定敬其の他老中板倉勝靜、小笠原長行等とも軍艦回陽號に駕して江戸に還つた。之を鳥羽伏見の役といふ。

征討の號令發布 慶喜公は薩長の横暴を君側より除かうとして不運にも賊軍の名を得た。正月十日京師の朝議は定つて有栖川宮熾仁親王を征討總督とし西郷隆盛を總督府參謀とし橋本實梁を東海道、岩倉具定を東山道、高倉永祐を北陸道、澤爲量を奥羽の各々先鋒として聖護院宮嘉仁親王を海軍總督として海陸二方面から旗鼓堂々と討幕の大軍が關東及び奥羽に攻め寄せてきた。

慶喜公の恭順 當時江戸には兵器糧食共に充實して堅牢なる軍艦のあつたばかりではない、譜代の諸大名は死力を盡して二百五十年來の舊恩に報じようとの士氣に燃えて居たから、若し戰端が開かれたならば天下の形勢は那邊に傾いたか測知られなかつたが、慶喜公は勝安房に命じて固く將士を制せしめた。また自らは謝罪書を認めて朝廷に奉り、二月十一日には江戸城を出で、上野大慈院に閉居して恭順の實を表はした。將士は切齒扼腕して公の不起を惜んだ。遂に勝、西郷兩氏の談判となり四月十一日に江戸の城池兵仗は官軍の手に引渡され大總督宮は城に入り給ふた。慶喜公は水戸に隱退した。

松平容保降らず 且て會津桑名の兩藩が慶喜公を擁して京師に入らうとしたのは薩長の專横を憎めるが爲で、王師に抗せんが爲ではなかつた。とは謂へ薩長兩軍が王師の首腦として襲ひ來るに及んで

は之に降ることは出来なかつた。仙臺の伊達慶邦、米澤の上杉齊憲容保の爲に案じて奥州の官軍參謀世良修藏に哀を請ふたが赦されなかつた。そこで慶邦齊憲等大小二十有餘藩は白石に會盟して薩長に對戦するの備へをなした。茲に於て江戸北陸の血に餓えた薩長軍は奥羽征討のために進軍しそめた。白川、棚倉、岩城平、二本松、三春の諸城は順次に落ちた。白川に居つた薩の參謀伊知地正治は云つた。「仙臺は枝葉なり、會津は根幹なり。宜しく之を滅ぼすべし」と。官軍は主力を若松の牙城に向けることゝなつた。

井深宅右衛門重義、これより先、慶應四年正月に、會津の藩士にして嘗つては江戸詰の折大目附軍事奉行勤務となり、其後は藩に歸つて日新館(大學寮)々長たる井深宅右衛門重義氏は越後小千谷の君公の所領守護の爲に遊撃隊々長として出征して居た。宅右衛門氏は徳川の初期、まだ會津藩主が保科氏と稱せられた時分から代々家老の家柄たる井深茂右衛門家の一分家であつた。當主宅右衛門重義の妻は八代子と云つて、家老西郷頼母氏の第四女に當るものであつた。此の二人の間に安政元年六月十日に生れた長男梶之助氏の外に、男二人女五人が擧げられて居た。

梶之助氏、小千谷に出陣した井深宅右衛門氏の傍らに義經袴を穿ちぶつ裂き羽織を着、髪はたぶさにして六連發の銃を手にして侍つてゐる年齢漸く十四歳の少年が居た。言はずもがなそれは梶之助氏

である。長州軍の先鋒隊は懸て北陸道を北へ北へと進軍して、この年の春四月越後と上洲との國境の三國峠を越へての長岡を陥れて小千谷の會津所領方面へと逼つて來た。宅右衛門氏は部下を率いて小出島に迎へ打つたが、何分にも敵は數百の多勢、味方は僅か二百に足らぬ寡勢であつたため、破れざるを得なかつた。然し梶之助氏は幼少ながら味方の陣に敵の一武士が白刃をひつさげて切り込んで來た折、かたへの垣間から一發の銃を發して見事に之を斃したこともあつた。

籠城 小出島の合戦に敗れた會津武士は、その夜陰に乗じて八十里越の山路まで引返して尙も越後の敵と相對陣してゐた。その夏八月奥羽本道白河方面の味方の戰運は甚だ急を告げて來た。薩軍の參謀伊知地氏は土佐軍の參謀板垣氏と力を合せて、遂に八月の初旬白河城を占領して了つた。會津軍は殆んど全力を盡してその北上を防いだが、堤の切れた勢で其後は會津の本城へと攻めよせてきた。百方策竭きた城下には「家並觸れ」が出で、十五歳以上の男子は悉く三の丸に集まれといふ事であつた。それは八月二十二日である。梶之助氏は此の度は鬚を切つてフランス帽を被り、筒袖だん袋を着その上に大小の刀を差し、銃を僕に擔はせ、右手には槍をとつて三の丸に出掛けた。その日君公は瀧澤村まで御出陣となつた爲め、梶之助氏は其の護衛兵として出掛けて行つた。その夕から敵の砲聲は次第々々に近付き、味方の負傷兵が刻々と運ばれて來る様子が見えた。翌二十三日の朝である、敵兵

は既に眼前に近附いて砲彈はちろか小銃彈さへ君公の側に落ちる有様となつた。

會津の運命は焦眉の急に逼つた。玄武、青龍、朱雀の諸軍團は悉く城外に出で、命の限り防戦して居た。城内に残るはほんのうら若い年齢十五歳より十八歳までの少年軍白虎隊であつた。事ここに至つては、その少年軍さへ二百數十年の君恩に死を以て報いんが爲めに繰出すべき時となつた。二十三日の早朝であつたが、梶之助氏が君公の傍に侍りながら城内に入らうとした時、嚙曉たるラツパの音に足並を揃えて白虎隊は城門を出て行つた。彼らは町の内外で死力を盡して敵兵と戦つて幾多不歸の客となつて了つた。梶之助氏は尙ほ數ヶ月白虎隊に加はるには年齢が足りなかつた。この日の午後敵軍は愈々若松の市内に攻め寄せて兵火を放ち殺戮を初めたので、幾多老幼婦女子も或は自刃し或は敵手にかゝつたが、城内に避難して來る者も數多かつた。遂にその夜から鶴ヶ城内の君公と武士達は長の籠城をしなければならなくなつた。

越後の敵と對抗してゐた井深宅右衛門氏は籠城の直前君公のお側御用人を拜命したので急遽本城に引返したが若松に來り見れば敵は既に之を方圍してゐた。やむなく一面の圍みを破つて入り君公の身邊に侍る事となつた。又梶之助氏は誰の取なしか未だ父御がお側に奉仕しない前から小姓に取立てられて、最も安全な鐵門といふ安全地に容保、喜徳兩公と共に避難する事になつてゐた。堀は深く石垣

は堅固な爲め、流石に官軍も容易に落しかねて籠城は九月二十二日迄の一ヶ月間續いた。然し彈丸は文字通り雨霰と落ち來つて負傷者戰死者は日々に多くなつた。それ以上不安の種となつたのは糧食と彈藥の刻々缺乏して行く事であつた。君公は身命を賭するは覺悟の前であつたが、頑是ない幾多の幼童や頼りない老幼婦女子の身を慮るにつれて、この上は凡ての責任と恥辱を一身に引いて降服するの外はないと考へた。臣僚達は餘りの運命の拙さに此上は君公と城を枕とすべしと諫めたが、遂に聽かず二十二日降服の白旗を城の櫓にひらめかせた。やがて城門外に幕屋が設けられて、容保、喜徳兩公は見るも哀れな麻上下に草履をはき、脇差を外して同じ様の家老を一人伴つて官軍の諸將の前に城下の誓を樹てに行かれた。この哀れな君公の様子を見るに見兼ねて臣僚の一人秋山篤氏は自刃して了つた。

開城 一度城下の誓の成つた時、官軍は城内に侵入して兵器、城池を悉く收めた上、老幼婦女子は附近の在家に預けられその他所屬の武士は悉く捕虜として猪苗代町に護送された。君公は瀧澤村の一寺院に幽閉される事となつた。

梶之助氏の幼時の修學 十歳の時に藩の武家の子供の例に従つて日新館に入れられて文武兩道を學ぶ事になつた。最初は四書五經の素讀を修めたが、素讀試験には見事に及第して其の成績が優良であ

つた爲めに君主から近思録一部を拜領した。習字は安積秀之助氏に就いて尊圓流を學んだが、十三歳にして君主から其の成績優良の爲め御硯拜領に預つた。十四歳にして武術を修めたが、馬術は大坪流槍は一旨流、刀は一刀流、弓は道雪派を學んだ。この武術を學ぶこと一年にして天下は亂れたので、其の儘戰場に出られる事となつた。

捕虜となる 少年梶之助氏は猪苗代に護送されてやはり丸腰の捕虜となつた。時に氏の同僚山川健次郎と後の東海散士、柴四郎氏とは土佐藩の司令部に赴いて君公の寛大の處置にあづかるやうにと請願に及んだ。やがて容保、喜徳兩公は江戸に護送されて久留米藩におあづけとなつた。梶之助氏の嚴父宅右衛門氏は君公のお側勤めであつたから無論一緒に幽閉の身となつた。諸臣も多く江戸送りとなつたが猪苗代の捕虜で梶之助氏だけは不思議にも婦女子の許に歸れとの命に接した。誰のとりなしてかうした赦免にあづかつたか今でも諒解出来ないさうである。

日新館の再興 越えて明治二年の正月である。居残つた會津の藩士たちは零落の極に臨んだこの會津藩を昔日の姿に返すには青少年の教育を復興させるは如くはないと感じて日新館は兵火にあとかたもなくなつたところから城外の鹽川町の役場を學校として前の日新館のまゝに方々から生き残つた青少年を糾合して館長中根彌次衛門氏の許で學問をさせることゝした。梶之助氏は同年七月二十三日に

その再興した藩の學校に入學したが同時に他生徒の取締役を命ぜられた。學ぶこと約半年明治三年一月には成績優良のかどをもつて優等の御褒美にあづかつた。然し何分にも藩の零落の底にあつた爲めそれはほんの巻紙の一片に書いた目錄に過ぎなかつたが淋しい母御は之を見てこの上なくよろこばれたさうである。

洋學修業の決心　これより先明治二年の十月に梶之助氏は時代の學問をなすには洋學を始むるに如かずと考へた結果江戸表に出て是非とも洋學修行を致さうと決心をしたが何分にも困窮の場合とて藩にもそのやうな準備金のある筈はないが、館長中根氏はその志を嘉して「御自分儀洋學修行申付候此旨可被得其意候以上」との辭令を渡されたが無論藩から路金の出やう筈もなかつた。

上京　越えて三年四月梶之助氏は母御の苦勞して整へられた二分金三枚を懷にして忠僕菅井三之助に半日路を見送られて大小を帯び合切袋をさげ草鞋ばきで母御のもとを出られた。途中白河で鶴ヶ城落城の直前はげしい戦のあつた跡を目的あたり眺めて感慨は無量であつた。その後大田原、宇都宮を通つて大利根の中流權現道から船に乗つて川口町に着き江戸川筋に乗りかへてその月の十七日日本橋小舟町へと到着した。

萱野權兵衛の切腹　容保、喜徳兩公並びに藩の諸臣が赦さるゝためには誰か藩の高官のものが切腹

をしなければならぬことゝなつた。梶之助氏が江戸に着いた折は丁度筆頭家老萱野權兵衛氏が割腹して君公と諸臣はそのために赦され新橋圖南藩屋敷に移された時であつた。梶之助氏はそこに尋ねて父御と久々の感慨深い面接をされたものである。

徳水院の洋學所 舊會津藩即ち圖南藩では此上もなき貧困の境遇ながら青少年の修行を忽にするを好まないところから、芝山内の徳水院といふ一寺院を借り受けて、二十名程の藩の若者達を合宿させ舊幕頃開成所で教官をしてゐた千村五郎といふ洋學者に囑して、英學を學ばせてゐた。梶之助氏は五月五日此處に入學することになつた。A、B、Cは實にこの時から學び初められたさうである。千村氏は頻りに福澤諭吉氏の著、「世界國づくし」「西洋事情」などの翻譯を勧めたさうであるが、梶之助氏は是等の書によつて初めて世界といふ事、文明文化といふ事に氣が就きそめたさうである。然るにこの徳水院洋學所は其後三ヶ月で何かの事情で閉鎖されることになり、二十名餘の藩の學生達は、土佐、小倉、宇治の諸藩に依託されることゝなつた。そこで八月二十四日梶之助氏は山川健二郎氏柴四郎氏等とも土佐藩に預けられることゝなり、鍛冶橋内の同藩の長屋に移された。土佐藩の洋學塾長は沼門守一といふ人で中々の學者で氣概もある男であつたと云ふ。

苦學時代

越えて明治四年一月十日土佐藩「お預け」の學生全部は圖南藩にかへされることゝなつ

た。従つて梶之助氏の父宅右衛門氏も南部に退いて行かれたので梶之助氏はいよ／＼自活修業せねばならなくなつた。只一人頼るべき伯父がゐた、それは母の令兄西郷頼母氏であつた。

修文館學僕となる 所がその時分神奈川縣立の修文館で一人の學僕を採用するといふ噂を耳にしたので、早速單獨で横濱に出掛けて行つた。幸に採用されて校舎の掃除や教師方の用達をする傍ら勉學の出来る身分となつた。所が一つ不自由な事は、修文館では食事を與へ、課業に聽講は許してくれるが小遣錢其他の費用は一錢も給して呉れなかつた。其處で止むなく武士の子には魂の様に思つて秘藏して居た脇差を賣つて書物を買つたものである。寢具としては父が越後の合戦で敵から分捕した毛布を一枚所有して居たきりで、其年の冬の嚴寒には何とも仕様がなない程寒くて、夜其の毛布の上に板戸をはづして載せて見たり、夜中に方々歩いて見たりした。それよりも困つたのは、夏蚊帳のなかつた事ださうである。殆んどその困窮の状態は言語に絶して居たが、前途に對する希望が心身に充ち満ちて居たので到頭それも淺き通した。

フラウン氏の知遇 修文館に凡ての學生から學者として又徳望家として多大の尊敬を拂はれて居た一人の西洋人が居た。それはサムエル・ロピンス・フラウン氏であつた。梶之助氏は其の西洋人の態度の如何にも高尚であること、教授の方法が頗る巧妙且つ嚴格であること、何となく其の人柄の背後

に一種の靈力の罩つて居る事を感じて、私かに敬服して居たが、それが基督教の偉大な宣教師であるとの事は毛頭知らなかつた。所がふとした事から其の人から聖書の講義をさく端緒をえた。

基督教に接觸する動機 學僕時代、明治五年の春であるが、計らずも梶之助氏の眼に異様な光を見せた文書があつた。それは中村敬宇先生の筆になつた「擬泰西人建白書」である。内容は日本天皇陛下に奉つたものとして西洋の文明開化の様子を縷々と述べ、今や日本がその一端を採擇して將に東洋に雄飛せんとするを慶賀し、この上は西洋文化の根本を爲して居る耶蘇教を一日も早く日本に移植して國家の宗教と爲すべきの必要があるといふのであつた。先に「世界國づくし」や「西洋事情」などによつて、海外に心を馳せた梶之助氏は、文意を掬むに至つて成程と首肯せざるを得なかつた。同時に豫て若松の城下大成殿で教はつた「父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、兄弟序あり、朋友信あり」といふ五倫の道以外に、それよりも廣い大きな眞理と道徳のある事を想見せざるを得なかつた。又、舊幕の旗本篠崎某氏から、「君、幕府の滅亡は神の攝理だ」と聞かされた時には、會津の落城の爲めに薩長に對し、不俱戴天の恨を懷いて、その復讐のために臥薪嘗膽の苦惱を忍んでも勉學大成しようと思つて居た氏の意衷には青天の霹靂の様に感じた。そして一種の疑惑の中にも全世界を支配す 偉大な神の力といふものに心を傾けるようになった。その時高木貞作氏から聞いたのは横濱山下町の小會堂でジェ

ームス・バラといふ米國人が月曜毎に聖書の講義をして居るといふ事であつた。氏はやがて日曜毎にバラ氏の下に通ふ事となつたが、其處には既に押川方義氏、植村正久氏等が道を聽いて居たものである。しかしバラ氏の講義は梶之助氏には全く荒唐無稽な言の様に思はれてどうしても耶蘇教の真相が捕捉出来ない所から、益々好奇心が湧いた。或日の事ウイルソンス、リーダーの一の巻を開いた處が、耶蘇が小兒達を祝福して居る繪があつた。ブラウン博士の時間にそつと師の許にその繪を携へて行つて其の意味を質ねた。所がブラウン氏はじつと井深氏の顔をながめて居たが、「お前は其の事を知り度いのか、若し知りたければ日曜の朝海岸通り三十九番のヘボン氏の治療所に來い」といふ事であつた。前述のブラウン氏に基督教を聞き初めるに至つた動機とはこれである。その後日曜毎に指定の場所に行つては創世記の第一章からの講義を聞く事になつた。同時に「天道溯源」「真理易知」の漢文の書物を讀んだが、多大に啓發と感動とを受けて、基督教眞理の偉大さを漸次と感銘するようになった。そしてブラウン博士によつて横濱三十九番ヘボン氏の治療所で洗禮をうけたのは、明治六年一月第一の日曜であつた。

五 築地 大學校

明石町を河岸に衝當つて河に沿ふて左に曲ると、その曲り角には芝生の豊かな立派な邸宅があり、そこには明治十三年以來築地大學校々長ジョン・シ・バラといふ人が住んでゐたことは前に述べた。この邸宅の北隣り(七番地)に、當時この河岸を散策する者は、邦人でも白人でも一寸眼をとめて見る、二階建の小さからぬ建物があつた。間口は十間程で、中央に玄關があり、その間口十間の本館の兩端からは後方に向つて二つの翼が出てゐて、謂はゞ變則なH字形をなして居つた。屋根は鶯色、壁は鼠色、玄關の上には「築地大學校」といふ横書きの看板がかけられてゐた。然し少し學校の内容を知つたものは、校長がバラといふ名であるところからバラ大學とも呼んでゐた。この建物の附屬建物としては、H字形の後方に一棟の横長の食堂及び賄部の建物があつた。この大學校の北隣りは空地で、大學校の教授達が學生を相手に、日本の野球競技の濫觴期を劃した地であつた。その空地を隔て、北に當つて十三番英和女學校即ち後の青山女學院の建物が建てられて居た。築地大學校は右の通りの建築であつたが、その全部が校舎であつたのではない。兩翼の二階は寄宿舎になつてゐて、大小十二の學

生の宿室があつた。階下が所謂大學校で、そこには受付の事務室と教授室の外に五つの教室と講堂が一つしつらへられてゐた。

開校 明治時代の少年期と思はれる當時（明治十三年）の青年の海外の文化に對する智識慾は格別に旺盛であつた。新しい世界、新しい生活、新しい思想、それらに對する渴望憧憬は、到底我々の思ひ及ばないものであつた。従つて交通の不便ながらに全國から笈を負ふては新帝都に蝟集して神田の開成校に、芝の慶應義塾に、其の他の私塾に身を寄せては盛んに洋學ことに英語の修得に努めた。この時、此の築地の一角に存した築地大學校がそれらの青年の眼に觸れなかつたとすれば、それこそ不自然である。果せるかな、反響は甚大であつた。開校は明治十三年の九月十五日であつたが、十三年の在學證書を調査して見ると、開校早々入學生は實に四十五名を數へてゐる。一段悉しく云ふと、九月十三日附の千葉縣、志田清保氏年齢十五年が筆頭で、其月中には三十八名の入學生があり、十月以後年末までには更に六名増加して四十三名となり、大學創立以前の學生（横濱のへボン私塾と先志學校より來れる）二名を合して前述の四十五名となつてゐる。左に記念のためその名を録して見よう。氏名の下の數字は當時の年齢である。

志田 清保（千葉） 15

牟田 武一郎（長崎） 16

山名 次郎（鹿兒島） 15

徳久 謫 (鹿兒島) ?	坂本重俊 (鹿兒島) 17	坂井郁太郎 (鹿兒島) ?
大竹甲子 (新潟) 16	江木信一郎 (廣島) 17	池島龍太郎 () 17
渡邊健雄 (大阪) 16	池田虎治 () 20	西村庄太郎 (神奈川) 16
田代一太郎 (福岡) 16	大島曹太郎 (神奈川) 16	黒田恒六 (廣島) 20
増田秀雄 (静岡) 20	堀江喜三郎 (東京) 17	中溝清一郎 (長崎) 19
内田糸太郎 (群馬) ?	山岡邦三郎 (大阪) 18	關口長一郎 (同) 20
内山慶吉 (新潟) 15	吉水隆太郎 (鹿兒島) 19	岡村正雄 (東京) 20
中尾亮三 (静岡) 18	和田健三 (長野) 20	山本中助 (鹿兒島) 15
飯田幸吉 (山口) 17	内田清太郎 (秋田) 16	倉町元太郎 (長崎) 18
植村正度 (東京) 19	池田不二男 (兵庫) 20	馬場銚作 (東京) 18
速水潜龍 (滋賀) 18	小高庸吉 (千葉) 18	片野綱治郎 (神奈川) 16
島田龜吉 (岐阜) 18	津田安平 (山口?) 18	熊谷駒之助 (東京) 16
青山彦太郎 (山口) 18	三浦眞一郎 (山口) 14	佐藤熊藏 (東京) 17
中山辰太郎 (長崎) 18	手塚金作 (宮城) 20	北條龍太郎 (長崎) 17

この外石本三十郎氏服部綾雄氏等は既に最上級生として單に學生としてのみならず、學校創立の諸般の事務に當つて居た。

明治十四年に在學證書を提出して在籍した人々は左の百三十二名である。

有馬良橋 (和歌山)	19	大槻得吾 (福岡)	18	中川愛咲 (東京)	14
池田清胤 (東京)	18	菅野昭太郎 (東京)	16	林甲子二郎 (栃木)	18
安藤元太郎 (愛知)		小島三代吉 (新潟)	15	日向茂八郎 (東京)	14
吉田肥治理 (秋田)	17	林西二 (東京)	15	岡野英太郎 (茨城)	17
居初久米吉 (東京)	13	西川龜次郎 (鹿兒島)	19	吉良重長 (鹿兒島)	17
長谷清吉 (福島)	17	野村彦介 (鹿兒島)	19	山神省三 (東京)	18
安井勝次 (兵庫)	15	北邨達治 (新潟)	16	林鈇藏 (東京)	18
前田恒太郎 (三重)	17	神田龍藏 (新潟)	11	佐藤虎之助 (新潟)	18
橋詰楠次 (東京)	21	柳田義之進 (札幌)	17	長瀬甲子磨 (長崎)	15
堀越充三 (東京)	15	增田秀雄 (静岡)	21	嘉瀬郷次 (千葉)	16
薄定吉 (岡山)	19	竹下謙介 (東京)	18	平川榮三郎 (東京)	15
北村七郎 (長崎)	17	田中新十郎 (鹿兒島)	18	松本米治郎 (愛媛)	20
川村金太郎 (神奈川)	9	河野通二 (鹿兒島)	19	小山作之助 (新潟)	17
澤村眞 (熊本)	18	新井金藏 (東京)	15	松本二郎 (山口)	18
川畑竹馬 (鹿兒島)	19	長井於菟四郎 (東京)	16	增田貢米 (福井)	
宮武能太郎 (愛媛)	18	土屋謙造 (福井)	12	篠原松造 (東京)	17
岸野次郎作 (埼玉)	19	中川與吉 (東京)	17	喜多島又四郎 (東京)	16
寺林正秋 (石川)	19	廣川廣四郎 (新潟)	18	丹野宗治 (宮城)	18

辛島廣次郎 (大分)	16	大脇正助 (鹿兒島)	18	鈴木己之吉 (千葉)	14
山口壯藏 (兵庫)	17	北島 亘 (東京)	15	船田清平 (愛媛)	16
二階堂直之輔 (鹿兒島)	16	鈴木安民 (埼玉)	16	矢野保助 (愛媛)	18
島 參郎 (福岡)	18	持田唯三郎 (埼玉)	21	小川一眞 (群馬)	22
鈴木(松井)安三郎 (東京)	15	岡部長春 (大阪)	19	酒匂彦輔 (鹿兒島)	17
飯野友藏 (秋田)	18	神原金藏 (岡山)	16	戸田恒馬 (大阪)	17
澤柳友治 (長野)	19	佐野確二郎 (福井)	15	有村甲子彦 (鹿兒島)	17
酒井醇太郎 (新潟)	17	廣津武人 (福岡)	18	榛澤昆清 (静岡)	14
宮之原軍吉 (鹿兒島)	16	稻葉 晃 (東京)	14	田中欽三郎 (神奈川)	24
平山 武成 (鹿兒島)	18	工藤 造酒之丞 (青森)	19	森脇信夫 (埼玉)	15
松田得太郎 (東京)	13	菅浪久次 (東京)	16	松浦 郁 (東京)	16
青木慎九郎 (東京)	19	熊倉四郎 (新潟)	13	宇野澤義晴 (東京)	18
安倍貞松 (宮城)	17	岡見義治 (東京)	20	益山新吾 (鹿兒島)	22
高林甲四郎 (山口)	19	鈴木 香 (宮城)	1	岩崎武二 (鹿兒島)	19
平田常彦 (鹿兒島)	16	加藤敬二 (東京)	18	中里武之進 (東京)	23
柳澤直治 (長野)	19	中村彦一郎 (東京)	16	水上貫一 (東京)	15
足立 巽 (東京)	14	木下澄三郎 (東京)	30	松井米吉郎 (東京)	16
杉 文三 (東京)	17	越石由松 (東京)	17	安村治忠 (東京)	15

陣容及び校則(拔萃) 今左に創立當初の幹部並びに教授の陣容及び校則を摘録して見よう。

柄澤 實 (長野) 17	納所辨次郎 (東京) 18	鈴木貫一郎 (東京) 17
林 興太 (東京) 15	佐藤順治 (千葉) 18	高崎安彦 (岡山) 14
藤島三郎 ()	高井藤熊 (山口) 18	谷田貝雄江 (石見) 17
増本多美介 (兵庫) 18	荒井芳次郎 () 17	外波峰次郎 (愛知) 17
佐藤三郎 (東京) 17	谷村一佐 (山口) 17	兒島一郎 (長崎) 23
白洲文平 (兵庫) 14	鷗澤清輔 (千葉) 19	毛利英輔 (鹿兒島) 18
安藤進一 (東京) 13	吉田光衛 (高知) 19	川崎市之助 (鹿兒島) 16
中村錠太郎 (東京) 20	寒田勝平 (福島) 19	

校長 ジョン シー ベラ氏

學監 トマス アレキサンダー氏

教授 ウイリアム イムブリー氏 ジエイムズ マコウレイ氏

田村直臣氏

漢學教師 山内 貫氏

翻譯教師 村田峯二郎氏

特別講師 ヘンリー フォルズ氏

校則 (拔萃)

第一條 本校ハ日本ニ在ル米國長老教會傳道會社ノ管轄ニ屬スル者ニシテ凡テ教育上ニ關スル相當ノ諸學科ヲ設置スルヲ旨トス
 第二條 學科ヲ分ケ、英學、漢學ノ二科トス

築地大學校

一、英學科ハ豫科ヲ三年トシ、本科ヲ三年トス毎年豫科ニ入ル者ノ爲メニ級外ヲ設ク

一、漢學科ハ高等學校ニ教授スル所ノモノヲ置ク

第五條 一年ヲ分テ三期トス、其目左ノ如シ

第一期ハ九月十五日ニ始リ十二月二十四日終ル

第二期ハ一月六日ニ始リ三月三十一日ニ終ル

第三期ハ四月六日ニ始リ七月十五日ニ終ル

入 學 規 則

第一條 初年科ニ入學ヲ請フ者ハウイイルソン氏第二讀本ヲ音讀シ且ツ譯讀シ得ル者ニ非レバ許サズ

第二條 他ノ學級ニ入學ヲ請フ者ハ其生徒ノ既ニ修卒セシ學課ヲ試驗シ確實ナル認可ヲ得ルニ非ザレバ許サズ

第三條 入學スル時ハ東修金貳圓ヲ納メ每期謝金貳圓ヲ納ムベシ、東修金並ビニ謝金ヲ納ムル者ハ全科ヲ學ビ得ベシ。但シ塾生ハ

室料トシテ毎期金壹圓ヲ納ルコトトス謝金並ニ室料ハ每期ノ初ニ納ムルコトトス

第三章 塾 則

第二條 凡ソ生徒タル者ハ學業ノ迅速ニ進歩センコトヲ要シ父兄保證人ニ成ベクハ多ク金錢及ビ時日ヲ浪費セシメズ且ツ完全ノ教

育ヲ受ルヲ望ムガ故ニ學科ニ精勤出席スルハ生徒ノ責任ナルモノナリ

父兄及ビ保證人ハ親族ノ死亡或ハ危篤ノ病ニ非ザレバ授業及ビ修學時限中ニ生徒ニ歸宅ヲ促スベカラズ。生徒日々精勵シテ出席

セザルトキハ是レ徒ニ金錢ト時日ヲ消失スル者ナリ

第八條 塾生ノ課業時間

午前五時ヨリ六時迄

晨 起

同 六時ヨリ七時迄

修 課 時 間

同	七時ヨリ八時迄	朝	餐	八時十五分ヨリ正午十二時十五分迄	英學授業
	午後十二時十五分	午	餐	一時ヨリ四時迄	漢學授業
同	四時六時迄	休	憩	五時三十分	夕餐
	六時ヨリ七時迄	聖書授業		七時三十分ヨリ九時三十分迄	修課時間
十時		就	眠		

學科

豫科 第一年

第一期 ウキルソン氏第三讀本、會話及ビ譯話、ミツチヨル氏地理初歩、習字、國史略

第二期 パーレー萬國史、會話及ビ譯話、モンテリス氏地理書、習字、國史略

第三期 パーレー萬國史、會話及ビ譯話、モンテリス氏地理書、習字、續國史略

第二年

第一期 ヒツギンソン氏米國史、デービス氏算術、ギョー天然地理書、會話及ビ譯話、續國史略

第二期 グードリツチ英國史、デービス氏算術、ギョー天然地理書、會話及ビ譯話、續々國史略

第三期 グードリツチ佛國史、デービス氏算術、ギョー天然地理書、會話及ビ譯話、續々國史略

第三年

第一期 グードリツチ氏希臘史、デービス氏代數學、ハウストン天然地理書、スウイントン氏文典、十八史略

第二期 グードリツチ氏羅馬史、デービス氏代數學、ハウストン天然地理書、スウイントン文典、十八史略

第三期 ウイルソン氏動物學初歩、デービス幾何學、ハウストン天然地理書、スウイントン文典、續 八史略

築地大學校

本科 第一年

第一期 スウイントン氏萬國史、スチール氏窮理學、デービス高等代數學、ハーツ氏英文學

第二期 アンデリニー氏耶蘇一代記、スウイントン氏萬國史講義、日本外史、高等代數學、窮理學、ハーツ氏英文學

第三期 スウイントン萬國史(講義) リヂェンドル幾何學、ユーマン本草學耶蘇一代記、米文學、文章軌範

第二年

第一期 ギゾー文明史、スチール氏化學、ホキーレル舊約史、リヂェンドル幾何學、ヒツコック精神學、文章軌範

第二期 シェツド氏史學理論、フーカル博物學、ホキーレル舊約史及ビ豫言記、デービス三角法、ヒツコック精神學、通鑑攬要

第三期 ウルシイ萬國公法、スチール地質學、生理學講義、デービス氏圓錐曲線法、哲學史、ホキーレル舊約史及ビ豫言記

通鑑攬要

第三年

第一期 ハーツ修辭學、ペーリ經濟學、ホフキンス耶蘇教徵證論及教理、スチール地質學、生物學、通鑑攬要

第二期 デービス氏算法且解明、天文學、修身學、耶蘇教徵證論及教理、ペーリ經濟學、比較運動學、八大家文讀本

第三期 算法且解明、天文學、論理學、修身學、耶蘇教徵證論及教理、八大家文讀本

創立後約三ヶ月、當時神戸に出で、將來政治家たらんとして種々劃策してゐた森本介石氏が、校長バラ氏に招かれて、同校幹事として就任した。

森本介石氏とは近來「道の會」を創設して専らその宣傳に中つて居られる松村介石氏である。

以上の陣容校則から見るとこの大學校は餘程秩序の整然としたものゝやうであるが、何分入學生の

年齢や従來の修業課程には左程の制限を置いては居らず、服装等も極めて自由であつたために、可成り亂雑であつたやうである。それで十四年の春、東京日々新聞が築地大學の學生達の氣風に就いて種々と批評した末、「築地大學ならば、小米樓でも樓である」といふ輕蔑的辭句を並べたのも、單に外觀のみを視る人々には強ち不當と思はれなかつた。然し之を觀過しなかつたのは當時同大學校の最初の幹事をしてゐた森本介石氏で、速刻長文の辯駁書を投じて大いに大學のために氣を吐いた。然し一面に於て集る青年達が新進氣鋭の士であり、心底には眞面目なる國士的な氣象を抱いた者共であつた。

明治十五年六月に至つて、築地大學校は第一回の卒業生を出した。その卒業生とは横濱のヘボン塾時代から連續在學して居る服部綾雄、石本三十郎の二氏であつた。服部氏はその少し前去つた森本氏の後をうけて幹事となり、石本氏はこの年にアメリカに遊學した田村直臣氏の後を享けて英語の譯讀を擔任することゝなつた。従つて教授の陣容も大分變化がきた。明治十五年九月の一覽によると次のやうになつてゐる。

校 長 ジョン・シー・バラ

學 監 ジエイムス・マコウレイ

幹 事 服 部 綾 雄

英學教師

ジョン・シー・バラ

ジョウジ・ダブリユ・ナックス

ジエムズ・マコウレイ

ヘンリー・フオールズ

オリリー・エヌ・ベント

ジエネー・マコウレイ

石本三十郎

漢學教師

山内 貫

教師の數が斯様に著しく増加したのは、按ふに學生の數が日一日と激増したためであらう。當時築地大學に在學した人々は一様に「あの時分の築地大學は隆盛なものでした」と述懐するのが常である。

以上服部、石本兩氏のことなどによつて、築地大學校は横濱にあつたヘボン家塾の後身であるといふ事は自ら讀者の念頭に想像されたことと思ふ。この二者の關係とヘボン塾の發達に關しては別稿に詳述することとする。

六 築地大學校の追憶（寄稿）

馬場 銈 作

明治十二年も既に數日にして暮れ様とする時であつた。築地明石町の海岸に新築工事中の校舎も半ば竣工し愈々開校の日も近づき吾等は指折り數へて其日の來るのを待つて居つた時吾等を大失望に落し入れた一大事件が生じました。丁度十二月二十六日の事である。當日は朝より非常なる西北の烈風吹き荒れ砂塵を飛ばし顔を向ける事さへ出來ない位であつたが我家族は朝食を濟し集つて前夜のクリスマスに於ける樂しき思ひ出等語り合ひ居る時けたたましき出火の信號が聞えた。一同びっくり此の烈風に出火とは如何なる慘劇を來らすであらうかと、之は吾等耳の心配ではなく恐らく東京百萬の人々は均しく同様の感じを抱いた事ではあらうと思ひます。取敢へず宗十郎町の宅を飛出し尾張町へ出たる所日本橋方面は一面の黒煙り、北に向つて走る人北より逃れ來る人流石の銀座通りも雜踏を極めて居つた。先づ十字屋に立寄り田村牧師と語り、夫れより京橋に到り遙かに彼方を望めば火の手は既に南方に擴り茅場町、蠣殻町、靈岸島の方面に二三ヶ所火の手を擧げて居た、飛火のためである。築地は風下にある。心配なのは學校である。直に新富町を廻り築地輕子橋前に達

した時既に八丁堀より鐵砲洲邊は一面の火の海と化して居つた。漸く七番館に到り、半ば竣工せし校舎が盛に火の手を擧げて居るのを見た、其時の失望は實に言語に絶する斗りて有つた。然し不幸中の幸ひは此の方面の火先が此處にて熄滅し當時ドクトル イムブリー師の住はれたる六番館は類焼より脱るゝ事が出来た事である。此の火災は明治年間に於ける大火災の最大のもので、焼失戸數一萬四百九十三戸死者二十四人、負傷者八十四人。之が有名な泊屋町の火事である。此の火災は我等開校を鶴首して待ち望んで居たものに大失望を與へたのである。然し當局者の非常なる努力により翌十三年秋、遂に開校の運びに到つたのである。

新たに開いた學校は築地大學校と云はれた。名稱はエライが生徒は僅か十名内外に過ぎなかつたと記憶して居る、殆んどジョン、バラ先生の獨り舞臺で校長、舍監、會計、教授等を皆一人で務めて居られた。外に同氏の補助者として教授の任に當られたのはテ、テ、アレキサンドル師と田村直臣先生、學生中の先輩たる服部綾雄、石本三十郎の兩氏であつた。開校當時の生徒にて予の記憶して居る人は服部綾雄、石本三十郎、西村庄太郎、最所類三、山岡邦三郎、内田糸太郎等の諸氏であつた。朝夕二回のチャペルの集會も専らバラ先生が當られ、通譯は主として石本三十郎君が務められた、時には服部君が代られた事もあつた。其後横濱の先志學校と合併して一致英和學校と改稱し

ワイコフ師が加はられ、又杉森、宮地、富永、水蘆等の諸氏が入校せられ一段の氣勢を添へた。當時我國に於ては歐化思想の盛んになりつゝ在る時で人々は皆英語學習に熱中し西洋人と云へば玉石混合たとへ無學な水夫上りの者迄も迎へて英語の教師とする始末であつた。如此時に處は外人居留地の築地名稱は兎も角築地大學校教授は素養ある内外人數名である。如此有力なる英語學校は東京廣しと雖も未だ二つと見出す事は出来なかつた。殊に生徒中には石本、服部、最所諸氏の如き其語學の能に於てはとても當時の大學教授も及ぶ者少い位の人々も居つた。是れがため學校の名聲著しく擴がり多數の青年が來り學ぶ様になつたのである。明治十六七年頃は實に非常なる盛況を呈し分校さへ置くに到つた。初め分校を神田淡路町に置き後糺町富士見町に移す事となり、又寄宿舎を木挽町祝橋東詰に設けた。此の時代の方々は今日々要路に在り、社會のために盡して居られるのを見て喜しく思はずには居られない。

當時生徒等が共勵會なるものを組織し、一つは宗教のため又英語獎勵のため大いに務めたものである。明治十五六年の頃會員數名發起し埼玉縣忍行田に於て該運動を試みた事がある、此の地を選定したのは予の親戚の其地に多きため便利を得た事と予の父の後援があつた爲であつた。一劇場を借り受け晝夜二回の集會を開いたが、當時は未だ田舎に於て演說會などは珍しかつたから、今日の

中學生徒の少年の催しだつたにも不拘、來會者四五百名に及び遂に入場を謝絶するの盛況を呈した。其時の辯士は未來の代議士服部綾雄、醫學博士中川愛咲、學習院主事鈴木(松井)安三郎諸氏及予であつた。最初は晝だけの豫定であつたが有志者の懇請により夜分の集會をも開く事となつたのである。今日より見れば當時の社會の如何に幼稚だつたか判る。

予等の卒業式は明治十八年の四月の或る夜の事であつた。思ひ出せば實に騒しい卒業式であつた。其夜は稀なる暴風雨で、しかも校舎は築地の海岸であつたため風の當りが激しく、波は道路に打上げ其凄しい事筆紙に盡し得る所ではない。加ふるに兼て病氣を寄宿舎にて養つて居られた吹野惣助氏の容態甚だ悪しく、既に危険との醫士の宣告あり旁學校は上を下への大混雜、其中に同情ある校友は雨を衝て來會せられるので其接待に忙しく、實に大變な騒しい集會であつた。其時卒業證書を得たものは杉森此馬、中川愛咲の兩氏と予とであつた。

是等の事々も最早四五十年の昔物語りとなつた。思ふに吾が學院が直接間接に西洋文化を吾國に紹介した功績は決して没すべからざる所である。希くば將來に於ても過去に勝るの功績を我國家の上に盡さん事を。

七回 想

青山彦太郎

本年一月は僕の受洗滿五十年、四月は受按手滿三十五年に相當する。吾母校もまた創立滿五十年となつて其祝會を擧げる。僕にとつて本年はどの方面から見ても意義深い年だと感ずる。過去半世紀は夢の間にすぎた。併し回顧すれば感謝に隘れるのみである。

僕が初めて入學したのは明治十三年九月で、今から四十七年前の事である。今の教授たちの中にはまだ生れて居られなかつた方が多いであらう。築地明石町七番にあつて築地大學と稱してゐた。校舎は木造二階建てH形に建てられ、階下に講堂と教室數個とあり、二階全部と階下の残は寄宿舎にあて七八十名を容るゝに過ぎなかつた。學生は小數の通學生を除いて多くは寄宿生であつた。朝夕二回禮拜があつた、聖書の講義もあつた。

教師はおもに米人でバラ、マツコローの兩先生、横濱の先志學校が移つて來て教授にワイコッフ、ハリス兩先生、後またマクネヤ先生も加はられた。服部綾雄、石本三十郎兩君は最上級で、その卒業さるゝや石本君は地理の先生に、服部君は幹事になられた。石本君は博覽強記の學者として尊敬され

通譯はうまいもので、學校内は勿論教界中井深先生の外には同君の一手販賣であつた。服部君は才子として學生間に敬服されて居た。森本、松村、介石氏も幹事をされた事がある。其時分から雄辯を以て學生間に一種の魅力をもつてゐられた。「屈伸の説」と題する演説は今に忘れぬ。

教授が皆米人であつたので、必然に毎朝夕禮拜の祈禱も讚美歌も講話も英語、教場に於ける講義も教科書も悉く英語であつた。漢學を除いて教室に居る間は海外にあるやうな氣持であつた。

僕が其頃の事を追懷して深い印象に残つてゐる事の一つは、入學すると間もなく、十三年か四年か確かな事は覺へぬが、布哇の皇帝が横濱の海岸教會に御臨幸になると聞いて、物珍らしさに貧乏書生の財布の底をほたいて僕も行つて見た。嚙啞たる喇叭の音が外に鳴り響いて來た。一同は起立して奉迎した皇帝は入場着席され、井深先生の通譯で一場の話をされた。日本信徒から丁度其頃完成した邦語譯の舊新約聖書を献上した。もう一つは明治十六年に宗教改革者マルチン・ルーテル誕生の四百年記念會が明治會堂(厚生館)で盛んに舉行された事などである。

學術と辯舌とを練る目的で文學會ができた。邦語演説、英語デクレーション、文章の朗讀などやつた。討論會も盛んにやつたものだ。文學會を二部に分けて相競ふたらよからうとして、「セヲを他をアデルフキツク」と稱した事もある。

宗教運動として共勵會と云ふものを組織して互に宗教上の修養をなした。明治十七年の夏であつたかと思ふ、白石村治君と橋本好友君と僕の三人が同會から相州小田原へ夏期傳道に派遣された事があつた、かなりの好成績をあげて四五名の熱心な青年求道者を得九月歸校する前に奥野老牧師に請ふて授洗させて、白石君は一人學校を止めて引續き留つて暫く傳道された。

僕が在學當時は洋行熱が盛んでみんな行きたがつた、僕なども人並に渡米の夢ばかりみて居て洋行さへすれば偉い者になれると思つて居た、それも其筈、當時は歐化主義の旺盛を極めた頃で森文部卿などは英語を國語にしたいとさへ主張された時代だもの。學友の中最所類三君、安藤元太郎君、熊谷駒之助君などは頭到我望を達して渡航された。熊谷君の如きはウワバツシ、カレツジとユニオン神學校とを卒業し錦を着て故國に歸られたが惜しむべし右三君共に揃ひも揃つて歸朝後間もなく逝去された、石本君の如きは將來有爲の人として世に期待されてゐたが妻子を遺してプリンストンの土となられた惜しい哉。

僕は明治十九年に卒業した。式場は明治會堂時は六月二十二日順序を云へば聖書朗讀ナックス氏、英語演説愛國心青山、傳道の急務大谷幸造、日本傳道者の責任間宮小五郎、英語我邦の希望鈴木安三郎、教會歴史を讀んで感あり岩永義太郎、演説フルベツキ氏、井深先生は神學生にマッコリー先生

は英和學校の徒らに證書を授與された、來賓七八百名盛會であつた。此席上で吾が校を自今明治學院と改稱する旨當局から發表された。

僕は直に神學校に入つてインブリ、フルベツキ、ナツクス、ワデル、アメルマン、井深、大儀見先生らの教授を受けた、居る事一年にして年來の宿望を遂げて渡米する機會を得た。

感想 吾が校は米國風のカレッジの科程に據つてできた所から大學と稱したが二三年の後一致英和學校 (Tokyo Union College) と改稱された。當時我國には東京大學と大學豫備門 (今の一高) とが最高の學府で工部大學校、札幌農學校など云ふ學校を除いて高等の學校が餘りなかつた故米國風のカレッジに模した我が校が國民の注意を惹いたのは當然で高等な、ハイカラな學校として優秀な青年學生が集つて來た。

當時の學生はまだ武士魂が残つて居ていづれも憂國の志士を以て自任して居た、眞面目に勉強したものだ。二三人が誰かの室に集れば燒芋の一錢コムバニーが始り、或は口角泡を飛ばして政治論、宗教論に花を咲かせた、女の噂などをする者は一人として學生中には無かつた。

僕は母校で教育を受けた事を誇りとし其宗教的感化を大に感謝する。教授諸氏は其貴い人格を以て學生を感化した、又學友たちも僕の爲には益友で善い感化を與へて呉れたと信ずる。多くの先生達の

中で初めから終まで一番よく世話になつたのは何と云つても、マツコロー博士であつた、級では僕は先生の事を愚圖とか何とかよく言つたものだが先生には學生に對する親愛の情と偉大な所があつた。

明治學院よ汝は過去半世紀間に我國精神教育其他の上に尠なからぬ貢獻をなした。僕が將來に望む所は學院が全然邦人の資金と邦人の手に依つて經營せられ我國學界の最高權威、純福音に由れる宗教運動の本源地として大に發展せんことを祈つて止まぬものである。(一九二七年七月二十六日)

以上馬場銈作氏の寄稿にもある通り築地大學には共勵會といふ基督敎信仰を以つて集る學生の團體があつた。然しこれが隆盛を究めたのは明治十六年以後即ち一致英和學校と改稱されてからではないかと思ふ。それでその共勵會のことは一致英和學校のところへ移すことにして、こゝには今一つの學生の相互啓發機關であつた「講談會」のことを誌さう。講談會とは講演會といふ位のもので、白金に移つてからの文學會の前身とも見做すべき學生の自治團體である。

國士を以て任ずる學生達のことであるから中々その氣勢は一時上つて、毎週一回といふ可成頻繁な會合であるが辯士も聴衆もよく精勤してゐる。次にその規則書と顛末とを略記する。

築地大學校講談會合規則 (文章用字ハ原文ノマヽ)

明治十三年十月一日夜會員集會ノ上規則ヲ定ム同時會吏ヲ選定ス左ノ通り

幹事 杉森 此馬

會計 石本 三十郎

書記 山岡 邦三郎

以上

第一條 本會ノ名ヲ講談會ト稱ス

第二條 本會ノ目的ハ互ニ學暇ノ餘間ヲ以テ意見ヲ吐キ辯説ヲ述ベ知識ヲ研磨スルヲ以テ目的トス

第三條 本會一年ヲ分テ三期トス其序左ノ如シ

第一期 一月六日ヨリ三月三十一日迄

第二期 四月六日ヨリ七月十五日迄

第三期 九月十五日ヨリ十二月二十四日迄

第四條 每期會員中ヨリ幹事會計一名書記一名ヲ投票シ本會事務ヲ分擔セシム但シ再選スルヲ得ズ

第五條 會費一ヶ月金壹錢ヲ收メ本會ノ費用ニ充ツ

第六條 新ニ入會スルモノハ入會金トシテ金壹錢ヲ收ムベシ此金ハ後來退會スルコトアリトモ返還セザルモノトス

第七條 會日ハ毎土曜日トシ午前第八時ニ開キ同第九時三十分ニ至リ閉場ス

第八條 會務上衆議ヲ要スル時ハ之ヲ多數ニ決行ス縱ヒ出席ノ會員寡キモ總數ノ過半数ニ及ブ以上ハ其現員中ニテ決議スベシ此點

ハ衆員ノ許諾シタル者ト見做シ實行ス

第九條 演説者ノ時間ハ三十分ヨリ多カラズトス尤モ將ニ時限ノ盡キントスル時ハ幹事其由ヲ五分前ニ告テ該員ノ注意ヲ要ス尙陳説ノ終ラザル者ハ次會ニ讓ルベシ

第十條 演説中可成の英語ヲ用ヒザルヲ要ス若シ不得已名稱等ニ際スル時ハ諸員ノ了解ノタメ明細解辯ヲ下スベシ

第十一條 演説中妄ニ政府ヲ誹謗シ人譽ヲ傷害スル等或ハ隈褻戲謔ノ場中ヲ噪亂セシムル様ノ語ヲ禁ズ

第十二條 無届ニテ缺席スルモノハ一回二錢ノ罰金ヲ科ス三回ニ及ブ者ハ衆議ニ附ス但シ罰金ハ次回迄ニ收ムベシ

第十三條 開會後十分以上遅刻スルモノハ前條同斷ノ罰ニ處ス但シ豫メ遅刻ノ届アル者ハ三十分猶豫ヲ與フ

第十四條 場中互ニ私竊談話シ或ハ妄ニ各自ノ席ヲ離ル、ヲ禁ズ

(會員名簿ノ一部ヲ摘録シテ見ル)

十三年十月九日入會 增 田 秀 雄 十四年一月十五日入社 山 田 七 郎

同 入 社 林 西 二 十二月四日入 社 和 田 健 三

十四年一月廿七日入社 服 部 俊 雄 三月十九日入 社 野 邑 彦 助

四月二日 入 社 津 田 幸 平 四月十六日入 會 上 野 繁 太

同 斷 安 藤 元 太 郎 十四年十月八日入社 工 藤 造 酒 之 助

同 有 馬 良 橘 同 伊 集 院 兼 德

十一月二十六日入社 納 所 辨 二 郎 同 馬 場 銚 作

十二月三日 入 會 島 三 郎 (外四十名アレドモ略ス)

第一回 十月二日午前八時二十分開會

講 談 會

缺席者 津田安平 兒玉 隼

演説題及ビ姓名

感遇一則

前田善太郎

遺リテ遺ス取リテ取ス

佐々木 千之助

勞苦爲メシテ大事ヲ就ス能ス

(濱口初三代理) 山本 忠助

國 會 論

堀江喜三郎

事ハ剛毅ヲ要ス

坂本 重俊

國 會 論

堀江喜三郎

築地大學校ニ講談會ノ設立ヲ祝ス (番外)

石本三十郎

以上會員西村庄太郎君都合ニヨリ退會ス衆員之ヲ諾ス午前九時五十分散會ス

第二回十月九日午前八時五分開會

屆濟缺席者

印南甲子郎

濱口 初三

富安保太郎

竹下省三郎

牟田武一郎

熊谷駒之助

兒玉

隼

演説員及演題

蝦夷ノ民

中溝清一郎

人物論

村田峰二郎

大害ハ小過ヨリ起ル話

有馬雄一郎

勞苦セザレバ希望ナシ

栗田 彌二

書生ハ書生タル權利有ザル可カラズ

江木眞一郎

諸君ニ告グ (番外)

堀江喜三郎

書生ノ論

江木眞一郎

かういふ様な會合が十五年三月四日まで毎週土曜日毎に嚴格に催されて、四十四回になつてゐる。

その間に、十三年十一月六日、十四年四月三十日の二回には飛鳥山へ會員全體にて散策親睦會を催し

てゐる。四月三十日の記は石本三十郎氏の筆跡で次のやうに誌されてゐる。

一、四月三十日會員親睦會ノ爲飛鳥山ニ赴ク一同午前六時三十分校門ヲ出デ途ニ上ル此日天氣清麗軟風
膚ニ觸レ最モ散歩ニ適ス二時間ヲ經テ場ニ着ス直ニ旗取ヲ始メ後鬼兒子相撲等種々遊戯ヲ爲シ茶菓
ヲ喫シ遊戯ノ後各々携ル所ノ午飯ヲ喫シ畢テ瀧ノ川、愛宕神社、稻荷神社、王子瀧ヲ徘徊シ再ビ遊
戯ヲ催シ三時歸途ニ就ク會事ハ會員ノ選舉セシ委員植村正度及ビ増田秀雄ノ二君之ヲ擔當セリ

石本氏はこの講談會に都合十五回出席してゐるが氏の演題は最初から他の會員とは色彩を異にして
ゐる。第三回には耶蘇教徵證論總目緒言、第五回にはその續講、第十回には食物及消化論、第十八回
には水 H_2O ノ説、第二十一回には經濟論者ノ惑ヲ解ク、第二十四回には血液循環の發見、第二十八回に
は虛無黨ノ説第三十二回には注意ノ説、第三十五回には星霧開發ノ設理、第三十九回には讀古書有感、
之を以て見ても氏は始終讀書を以て新知識を收得してゐたやうである。

明治十五年十二月までこの講談會は毎週一回づゝ續けられてきたが明治十六年一月からは毎月一回
となり、それが明治十七年の六月二十日まで續いてゐる。十六年六月以後は稻澤謙一氏が中々活躍し
てゐる。

八　ヘボン博士

生ひ立ちと修學　ペンシルヴァニア州は海に面する部分は少しもないが、東西に二つの大きな河が流れてゐる。東の方は河口にフィラデルフィアの大都市を擁してゐるデラウエア河であり。西方のはペンシルヴァニア州の殆んど全體の沃土を霑ほす幾多の支流を合はせ流れるサスクワナ河である。その上流は遠くニューヨーク州まで及んでゐるが、ペンシルヴァニアの中央で、主流が二つに分れてゐる。その二流の出合から約十二三哩西方の支流を遡つた所に、ミルトンといふ一小都會がある。人口は現今でも二萬位のものであらうか。ジエームス・カーティス・ヘボン氏は、今を去る百十二年の昔即ち一八一五年三月十三日にこのミルトンの町で孤々の聲を上げた。父祖の閥歴に就てはよくは知られてゐない。父はスコツチ・アイリツシの血を引き、母は純正なイングリツシユの血筋であつたさうである。祖父の頃にヘボン氏一家はアメリカに移住したが、憶ふに清教徒として來たものであらう。父の名前はサムエル・ヘボンと云つて、最初はミルトンの町の判事であり、後には辯護士となつた。母は牧師の娘で、幼少から極めて敬虔な清教徒風に育てられた婦人であり、絶えず傳道、殊に外國傳道と

いふ事について興味を有つてゐた相である。この夫妻の間に五人の娘と、二人の男兒とがゐた。博士はその中の第二子で長男であつた。母の感化によつて子供達は皆基督教徒であつた。

ジエームスはミルトン町の小學校に幼少の頃ずつと通つてゐたが、十四歳になつた時に父は彼れを法律家にしようとの心算から、ニューヨーク州のプリンストン大學に送る事となつた。その大學に在學中は學校の課程としてラテンやギリクやヘブライなどの古典を修學する様に仕向けられたのであつたが、ジエームスは當時始めて同大學で講座の開設せられた化學に非常な興味をもつたさうである。それかと云つて決して古典が不成績であつたのではない、後年氏が和英語林集成を大成するに至つた語學的天才は、その時分既に發揮されてゐたさうである。然しながら、物理化學に對する彼の趣向はどうしても長くそのプリンストンに止まる事を肯ぜなかつたものであらう、在學一年にして其處を去つて將來醫師として身を立てる決心のもとに、ペンシルヴァニアの醫科大學に移る事になつた。一八三二年から一八三六年までの間、専心に醫學を研鑽して、一八三六年六月彼が丁度二十一歳になつた時、業を卒へてドクトル オブ メディシンの稱號をうけた。彼はその時最も性格に適合した職業を選んだといふ自信をもつた相である。

一面に於て彼は頗る宗教的で傳道に關しては天來の使命のやうな感じを懷いて居つたに拘らず、何

故直接傳道者とならずに醫家たるを選んだかといふには、理由がないではない。それは、彼が生來非常な沈黙家であつて、偶に言葉を出しても頗る訥辨であつたからであらう。彼は言葉よりも寧ろ實行を愛する男であつた。

ミルトン町から東南の方成り離れたフライデルフォア市の北方にノリスタウンといふ小都市がある。ジェイムス・ヘボンが卒業後その地で或る友人の後を享けて醫を開業した。その頃である氏は其の地の或る學校に教鞭をとつてゐた、ミス・クララ・リードといふ敬虔沈著な婦人と相知るに至つた。彼女はもともと名門の出で、その氣性には男子も及ばない強いものが潜んでゐたさうである。一八四〇年十月に及んで、二人は目出度く結婚した。この婦人こそ其後六十數年間、印度に於て、支那に於て、又日本に於て、凡ゆる迫害と戦ひながらヘボン博士の偉業を援けた夫人である。

夫妻とも敬虔な基督者であり、貧困者や病人を日々助けける職業に就いてゐるとすれば、其處に何らの精神的な矛盾があらう筈は無いのであるが、ジェイムス氏は卒業後も、結婚後も、どうしたわけか一日として精神の安定を得ることが出来なかつた。何か他に今少し調和的な、身の處し方があるに相違ないといふ念ひに襲はれてゐた。彼は後年その心持を追想して次の様に述べてゐる。「何故安心しませんでしたか。私は素よりアメリカを好んで居りましたが、醫者は餘り餘計すぎて私が止まればた

多くの醫者達と競ふて他人の害となると思ひました。それ故私は、醫者の無い國へ行くがよい……ほんとうに醫術を知らぬ國がある。又一人の神、眞の神、活ける神を知る國は少い。私は神を知らぬ國、醫者の無い國へ行く事がよいと思ひ、又それを我が主の命令と思ひました。其處で親の家を去り、親の國を去つて支那に行きました。」

大傳道者や大慈善家の偉業はそれらの人々が一個人としての劃策や意圖から出たと云ふよりも、殆んど皆が皆、ある不可抗な力に壓されて止むなくせられたといふやうである。前述のブラウン博士の日本渡來の動機も矢張りそれでありジエロミー・テラーもジャドソンもさうであつた。今又ヘボン氏の外國傳道の動機にもそれに髣髴たるものを我らは見ようとして居る。彼はまさしく神によつて召され遣はされようとして居るのでは無からうか。

支那の傳道 之より前、一八〇三年の頃に、北米プレスビテリアン教會大會では全國的に趣意書を發して、外國傳道の爲めに、一定の寄附を仰ぎ、人材を募つて、先づアメリカインディアン中に、進んでは東洋の諸國に宣教師を派遣する計畫をした。然し乍ら、何分國內の交通機關が不備である爲めと、人心の統一が缺けてゐた爲めに思はしく涉取らなかつた。然し、一八一八年に至つてプレスビテリアン教會と、ダッチリフォーメド教會とが協力傳道協會なるものを組織して、印度、メキシコ、南

米に宣教をする事になつた。その後又別に、北長老教會外國傳道局といふものが一八二六年に組織されるに至つて、從來の四方に派遣された宣教師達の功績に靈感をうけた信徒達は競ふて之を援助するようになり、又、傑出した人材が宣教師として志願するようになってゐた。此の時分、その北長老教會は支那を目的地としてゐたのであるが、何分同國は頑固な鎖國主義を採つてゐたものであるから、如何ともすることが出来なかつた。

ところがその支那傳道に先鞭をつけたのは英國の宣教師ロバート・モリソンであつた。モリソン氏は夙く一八〇七年に單身萬難を排して南清マカオ及び廣東に至つて、一方に於ては學校を起して支那の兒童を教育し、他の一方に於ては英支辭典を編纂し、聖書の翻譯をしては、甚大な感化と影響を與へた。之を傳へ聞いた北米長老教會外國傳道局は、矢張り方法を構ずれば支那内地に宣教師を派遣しうるを信じて、其の冒險的な壯舉に適ふ忍耐忠誠な宣教師を物色する事になつた。その募集に應じて派遣を願出でた人とは、外ではないこのジェームス・カーティス・ヘボン氏夫妻であつたのである。

一八四一年三月十五日、ボストンの埠頭から夫妻は世にも殊勝な大きな抱負をもつて、印度に船出して行つた。支那こそ目的地ながら一先づ印度に到着かうと心算からである。船はポトマック號と云つて、千噸に足りない帆船であり、十七名の船員に操縦されて居た。出帆の前日へボン氏は自分の日

記に次のやうに記して居る「安息日、昨日は私の誕生記念日であつた。私は今二十六歳になつた。それを日數にすれば九千四百九十一日と(實は九千四百九十七日)なる。私が信仰の告白をなして以來、今や約六年となる。もしも神が私の賦與された時間の各瞬間を込めて勘定したまふならば、私の責任は何んまであらねばならぬか、——私は各瞬間とも完全に神の神聖なる御法に服従すべく要求されて居るからである——二十ヶ年の間は全然神に對する私の責任を顧みずして、不義に溺れ、罪惡を犯し、自分の肉慾のまゝを行つて生活して來た。さうして私が主の弟子となると告白して以來の六ヶ年間に時間を浪費した事はいくばくであつたか、不信仰から、墮落の勢力から、世の誘惑から無効にしてしまつたものや、無益の空談や、愚劣な醜惡な思想や、又は怠慢により徒費したものなど一切を差引れば、残るものは幾干であるか、神の御法は唯一片の反逆的な又は不信的な思想をも許さない。常に彼に對する愛の動機により進退することを私共に要求するのである。又内心は誠實で純潔で聖潔であることを要求するのである。一の罪が全人類の上に死を來たした。靈性的にも、肉體的にも死をもたらした。それは私共の靈魂を暗黒を以て覆ひ生命の光を遮斷するのである。それは私共の性情を攪亂し、腐敗せしむるのである。」

何といふ敬虔眞摯な言葉ではないか。彼は飽くまでも清教徒である。彼れの目には神的ならぬもの

は之皆罪であり、人間的といふ微温い言葉で之を許容することは出来なかつた。一方一個の人間としての幸福に耽溺してゐることは彼には罪罪感が伴らつたのである。彼れの煩悶の因つて来る源はその信仰である。彼れは一個の冷靜沈黙なバンヤンである。天國に行く道はフィラデルフィアやボストンやニューヨークの都大路には見當らなくて、蕪の多い支那の原野に見たのである。

一八四一年三月十五日午前十時に船がボストンの埠頭を出て、後、長い海上の月日を氏は聖書の研究と教會歴史や其他の神學書の研究に没頭してゐた。夫人は上船當時から身體の何處かに故障を來たして、絶えず船室に横たわつて、食事さへも録々に攝りえなかつたが、船の動搖と氣候の變化の爲めに身體は日一日と瘦せ衰へてしまつた。やがて海上の旅路が二ヶ月にならうとする五月十二日に、計らずも船中産婆もなく看護婦もなく、何の具へもない中で、苦悶の中に一人の男子を産落したが、初産ながらに餘りに母體の苦勞が多かつた爲めか、それは死兒であつた。時に強烈な暴風がその大海を訪れて、ボトマック號は木の葉の様に翻弄されたといふ事である。その大風と怒濤の中で、病む妻の傍で初子の死兒を抱いて居るへボン博士の胸中は思ひ半ばに過ぎる。しかし剛膽篤信の夫人は、その間にも決して泣かなかつたさうである。

九十一日目船は印度洋を過ぎて南洋ジャバ島の附近に來たが、その時初めて夫人は甲板に出で、附

近の景色を眺めたり、食事を共にした。その後、六月十日丁度百七日目にバタビヤに着いて、久し振りに米國本土の人々に出合つてはその壯舉を大いに祝福された。滞在一週間でもはや船に乗り、百二十日目の七月二十日に目的地シンガポールに到着した。

シンガポールは當時プレスビテリヤン傳道局の支局が設けられてゐて、氏は其處で徐ろに準備して支那内地に行くべき氣運を待つた。その年であるが英支兩國の間には、あの有名な阿片戦争が起つて、その結果南京條約が締結され、香港が開かれる事となつた。又一八四三年には米支間の通商條約も締結されて、米人が支那に入國出来る事になつた。そこで、ヘボン氏は先づマカオに行つてロバート・モリソンの活動のあとを訪ねたり、其他の英國和蘭の宣教師達の苦勞の跡を偲んだりして種々の準備の未、福建省の厦門に行く事になつた。

歸米と日本渡來の準備 一八四三年ヘボン氏はその厦門の地に同僚カミング氏と共同で一の施療病院を開いた。文明の治療を慕ふて患者はふえて來た。しかし何分南清の不順な氣候は、同地在住の宣教師達を可成り惱ました。マラリア熱が猖獗して支那人の仆れる事は無數であり、六人の婦人宣教師中四人迄死んだ。その上海賊が外人を襲ふて二名は溺死せしめられるといふ事件が起り、ヘボン夫妻も熱病に冒されたのみか遂に一人の子供を失つた。二年間かうした苦勞と戦ひ續けた婦人の健康は到

底支那に止まる事を許さなかつた爲めに、何となく名残りが惜しまれたが一八四五年十一月に厦門を發して三ヶ月の海上恙なく翌年三月五日にニューヨークに歸つた。

彼は大きな使命觀を懷いて南清には向つたものゝ、神は彼を殊更日本に送るべく、かうした經綸を爲し給ふたものか、一種の失敗の感じが念頭を去らなかつた。然し乍ら、宣教師としての自尊心と自覺は少しも傷付けられては居なかつた。何か他に神の指圖があるかと心靜かに待つばかりであつた。しかし、悠悠自適するを欲しない彼は、ニューヨークの地に醫院を開業したが、折ふし同市には猛烈なアジアコレラが猖獗した。南清で腕を鍛へたヘボン氏は、そのコレラの治療に於て忽ち隨一の名譽を博した。又一方微妙な指の作用を有つてゐる彼は、眼科醫としても、其の名を全市に知らるゝに至つた。患者は群をなして氏の下に蟄集したが爲め、市内に三ヶ所の邸宅を構へ、又別莊をも備なへて一躍してニューヨーク市の屈指の名醫且つ德望高き紳士となつた。ニューヨークに於ける病院の經營は其後十三ヶ年の永きに亘つた。其間に氏には蓄財も出來、名望もえて人間的には隨分に成功した幸福な人であつた。

此の間の日米國際上の進歩のあとを概觀すると、一八四五年に米艦が浦賀に來つて通商を乞ふたが、幕府は交渉を翌年に延期した。翌年又來つて通商を乞ふたが、其の目的を依然として果す事は出來な

かつた。嘉永六年及び安政元年の二回に亘つて、米國は使節を正式に日本に送つて條約の締結を慫慂した爲めに幕府は下田、函館、長崎の三港を貿易港とした。一八五六年米國は公使としてハリスを送つた。翌五十七年には井伊大老がハリスと交渉の結果、更に神奈川が開かれ、米國は日本に對して餘程の自由をうる事となつた。

日本がかやうに米國と接近しつゝあつた時、不思議にヘボン氏の念頭に宣教師としての生活の再現を願ふ志望が擡頭してゐたが、彼をして愈々それを實現させる動機は忽然として與へられた。しかしそれはヘボン氏夫妻にとつては此上なく悲しむべき事件であつた。神の人を用ひ給ふ攝理は實に人間の意表に出で、居る事を痛切に感ぜざるをえない。ヘボン氏夫妻は三人の愛子を殆んど連續的に失つたのである。普通ならば一切の希望を失つて神をも恨むべき時に、夫妻は涙の彼方に永遠の國を觀望して、それに慕進する爲め數ある大邸宅や別荘や病院を棄て、自費で日本宣教に向ふ決心をした。

當時プレスビテリアンミッシヨンは、日本に宣教師を派遣する爲めその第一人者として好適の人物を秘かに物色して居たが、ヘボン氏の意志と疎通する所があつて、遂に彼に第一日本宣教師の辭令を與へる事にした。一切の所有と設備を人手に渡して渡航の準備に取掛つたが、氏の父母は限りなく離別を惜んで思ひ止まらせようとした。又氏の凡ての友人知人達も無謀の企として彼を諫めたが、天下

にたゞ一人心から彼の行を賛成し勵ませるものがあつた、それはヘボン氏夫人であつた。

日本渡來 一八五九年四月二十九日丁度彼が四十四歳の時である。ニューヨークの埠頭から夫妻相携へてサンチヨ・バンザ號で日本に向つた。その行を見送つた當時のニューヨーク市の銀行家キルマン氏の夫人は後にかう述懐してゐる。

「日本の宣教は大切には相違ない、第一流の人物をも必要であらう。しかしヘボン氏程の高潔堪能な紳士を送る必要が果してあるだらうかと疑はざるをえなかつた」と。小さな帆船の航路は遅々として進まず、百七十五日目に漸く江戸灣内の神奈川沖に投錨した。安政六年陽曆十月十八日、彼は足跡を同地の濱邊に印したが、夫れは全くプロテスタント宣教師としての最初の足跡であつた。こゝに日本は長年の國禁を破綻せしめて最も健全なる世界宗教を迎へざるをえなくなつた。神は必ず勝利をえ給ふのであるが、ヘボン氏上陸後環境との矛盾撞着の生活は一通りではなかつた。ヘボン氏自らの言葉によつてそれを偲ばふ。

「私共が始めて日本へ足を踏み入れた時には、日本に於てドウ云ふやうに待遇するであらうかといふことを考へて居りました。日本の國はキリスト教には反對でございました。キリスト教の信者とあれば殺すといふ事を知つて居つた。それだから何うであらうかといふ事を思ひました。けれども唯心

を靜かにして深く考へ、父の御心に任せて、キリスト教を弘める道を開くようにしたいとの一念を懷きながら神奈川駐劄の領事の所へ往きました。所が此領事と云ひますには、あなたは一種異なる種類の人である、元來日本との條約は商業の爲に約束を結んだ者なるが、基督を宣る事に付ては條約の個條にかいてない。乍併先づ出来る丈けのことは保護をして取計ふように致しませう。開港場の頭に相談を致すから二日程待つて呉れと申しました。そこで毎日々々領事館へ行ききました。所が開港場の頭も承知したといふ事でございます。就ては自分は何處に居てよいかといふに、神奈川に三つの寺院が有る、其の一つを選めばよい、といふことで、その中の一つの寺を選んでその處に住居しましたのでござります。」

成佛寺　へボン氏の選んだ寺とは神奈川の成佛寺であるが、震災にも焼けず幸に今日まで残つて居る。今日では瓦葺になつたが、へボン氏の宿つた頃は草屋根の粗末な建物であつた。その本堂を改修してどうにか住めるようにしたが、約半月の後十一月一日にブラウン氏が渡來して其處に同居する事になつた。

今後日の爲めに成佛寺の地理的位置をのべて置かう。東神奈川驛で省線電車を降り、山手口に出て、線路に沿ふて横濱に向つて約四町行くと堀がある。その堀の角を右に曲つて一丁半行けば道が二つ

に分かれる。堀のない左の道を真直ぐに約三丁行くと右側に郵便局がある、その少し手前が四角になつてゐるが、その角を左にとり山の手に向つて約一丁行く。すると右側に成佛寺の入口がある。小さな本堂と右側に庫裡があるばかり。庭には一本の松樹が昔を語り顔に榮えてゐる。神奈川太田町の近くで、飯田横町と知られてゐる。

へボン氏が成佛寺宿泊當時の日本人の生活状態と衛生状態とは真に記述するも恥かしい位であるが、氏の事蹟を活かさんが爲めに、以下へボン氏自身の言葉を藉りて記して見る。「乞食の多いのに加へて、厭ふべき忌はしき悪疾が公然と路傍にさらされて居る。日本にはその頃病院てふものがなかつたからである。三人の中で一人は必ず痘痕をもつて居た。盲人の多いのは普通であつた。天然痘は常に絶えないで時々大流行を來した。腫物だらけの忌はしい頭を持つて居る人は至る所で見かけた。肺病は又猛烈な破壊をなして居た。不思議にも畸形兒を見なかつた。それは生存することを許されないからだ」と云ふ噂だ。夏の暑い日には男子は常に腰に白布を纏ふて居るのみだ。衣服を腕の下に抱へ込んで裸體で日中を歩んで錢湯から、自分たちの家々に歸つて來るのは勇肌の人々の常習であつた、又村落では女子が路傍で行水をつかつて居るのを見た。」

かういふ状態を目撃した氏は、どうしても民衆を文明の恩澤に浴せしめ度いといふ一念から、早速

附近に治療所を設けたが、新しい治療法の效驗が著しい爲めに、毎日貧民の病人が群がつて來た。その様子を垣間見た武士たちは何か氏の治療には間接な目的がありはしないかと、猜疑の眼を放ち初めた。萬延元年神奈川奉行へ差出した神奈川驛山手本陣名主石井源右衛門の異人聞書には次の様な事が見える。

「亞米利加國の醫者へボンと申す者日本の言葉少しく覺えたる趣にて、日本人に逢へば片語交り、色々手眞似して甚だ可笑く見受候。然るに、戸部浦の漁師仁介眼病を患ひ洲千島辨天に願懸け、毎日お百度を踏み候ところ、へボン仁介と戸部にて出逢ひ、眼病を癒しやるべしとて僅かに一點の藥水にて忽ち痛み止み申候。右の次第漁師共の間に傳はり一方ならず評判に御座候」又、その秘録なるものにはかう書かれて居る、「戸部浦の漁師共へボンの療治にて難病全快せるもの五六人あり、泣いてへボンの恩を謝し候。或は切支丹宗の一派かとも疑ひ候へ共更に其の動靜も相見えず實に珍らしき異人候」かういふのは確かに一部の人々の見方であつた。實際又詳細にへボン師らの行動を觀察すると、本國派遣の役人ではなく、それとて利を追ふ商人ではなく、徒らに日本人に好意好感を以て人々を引著けようとする怪しい風體の異人であつた。それで日本人への感化が多くなるに従つて神奈川奉行は今更の様に注意を嚴にして、役人が成佛寺に押入つて檢べた結果、書物を點檢しようとしたり可成り

壓迫を加へた。その擧句に到々奉行はヘボン氏の治療所を差止めして、この男は切支丹の邪宗門を宣傳へる疑があるといふ廉で、寺の門には大刀を横へた張番をつけ、滅多に日本人が彼に近付かない様にして丁つた。それは幕府の方の云譯では虚に乗じて浪士がヘボン氏を殺さない様に保護を與へるといふのであつたが、其れも一面の事實であつたに相違ない。何分當時は攘夷論は盛で浪士は白人を斬る事を憂國の精神の發露と思はれて居たから。どれ程外人がさうした刃にかゝつたかは次の山本教授の言葉に照して想像される。

「當時江戸横濱及びその附近に於て浪士の爲に外人の死傷せしものを舉れば、安政六年七月二十七日露國西伯利亞提督の率ひたる艦隊の士官と水夫は横濱海岸に於て水戸浪士小林某の爲に、襲はれ士官は虐殺せられ、水夫は重傷を負へり。同年十月十一日佛國副領事ロレンの從僕支那人二人は浪士の爲に、襲はれて致命傷を負ひ、同年十一月英國公使館の通詞傳吉なる者白晝、東禪寺門前にて暗殺せられ、萬延元年二月蘭人二名は横濱の街頭にて慘殺せられ、その八九月頃佛國公使の從僕伊太利亞人ナクールは濟海寺の門前にて薩藩士の爲に一刀を浴せられ負傷す。かくの如く暴徒の爲に殺傷せられしものが相尋いで露佛英蘭の四國に關係せしは不思議と云ふべし。而して米國に關係あるもの、未だ殺傷されしものなかりしが、同年十二月五日に至り暴徒は遂に米國公使館員ヒュースケンを江戸麻布仲

の橋に襲ふて之を傷け死に至らしめた。而して水戸浪士が井伊大老を櫻田に襲ふて之を殺害せるより、以來攘夷黨の氣焰當るべからざるものあり、苟も攘夷の爲とあらば、政府の不利となるも之を決行するを盡忠報國の道なりと心得、貴賤を問はず手掛り次第之を殺害するを以て名譽とし、浪士の、跋扈する事益々甚だしく、文久元年五月水戸の浪士有賀半彌等十四人は高輪東禪寺の英國公使館を襲ふて英國人二人を傷け衛士及び馬丁等三人を殺し、同年八月には有名なる生麥の變あり、英人ロペルトリンは殺され、他の二人は傷く。文久二年五月二十九日には再び英國公使館内に暴徒侵入して英人二人を殺傷するあり、而して其暴徒は當時公使館護衛の任に當つて居た松平波守の家來伊藤軍兵衛なる者であつたと云ふ同七月には佛國士官の横濱にて負傷せるものあり。その十二月には御殿山公使館に放火するものあり。文久三年九月には佛國士官を程ヶ谷にて襲撃するものあり、元治元年には英國の士官を鎌倉にて殺害するものあり。外國人殺傷事件は頻々として起つた。「かういふ状態の時に米本國から送つて來た十字架上のイエスを描いた聖畫が、奉行の官憲の目に止まつた。さてはへボン氏は豫想通りの切支丹であつたと事態容易ならぬ形勢になつた。そこで、米國公使館は急にへボン氏は公使館付醫者であり、ブラウン氏は公使館付牧師であると幕府に聲明して漸く事なきをえたが、氏の身邊は其の後随分危険であつた。或時には備入れた日本人が政府の探偵であつたりした。しかしへボン氏

の勝れた徳は、さうした浪士をさへもよく感化したようである。ヘボン氏自らがかういふ事を云つて居る。寺の門の外には兩刀を腰にしたる武士が四人づゝ斷へず立番をして居る。内には英語を解する日本人は居らず又日本語の解る米國人もなく隨分不自由であつた。何しろ此三年間に十五人の外國人が此處彼處で殺害されたのであるから、油斷のならぬ時代であつた。或時定次郎と云ふ日本の家僕を雇ひ入れたが、二週間程經て自分の方から暇を呉れと云つた。何うしたのだと聞くと、自分は何藩とかの武士であるが、夷人の内情を探り隙もあらば斬り捨てようかと思つて家僕に入込んだのだが、貴方は夷人とは思はれぬほど親切で仁義道德を辨へて居られるから殺すに忍びぬ。自分の考に誤謬のあつたことを悟つたから御免を蒙つて歸りますとのことであつた。その後も家僕を雇入れると屢々政府の探偵であつたことが解つた」と。

一八六四年長州を幕府が討征してからは流石に強硬であつた攘夷論も漸次下火となつて、開國の氣運が盛になり、一方尊皇論者は大政奉還を唱へて來た。その時分にヘボン氏も兼ねてから横濱の居留地谷戸橋際に建設してゐた邸宅が完成して、神奈川を引上げ其處に移つてゐた。時代は刻々に移つて慶應年間に入つてからは、日本自らが各國に留學生を派遣するようになるし、條約國には幕府から使節を派遣して漸次と日本在住の外人達も自由をえた。其處でヘボン氏は一個の醫者として三十九番の

邸宅で開業をしたが、神奈川在住當時の噂を傳へ聞いて居た人々は、又もや氏の門前に殺倒してその治療を受けたものである。殊に俠客や浪人達が氏を慕ひ寄つて醫療を乞ふたが、それは前述の定次郎の如き浪士から氏が如何にも義俠的で高潔の徳を具へて居るのを傳へ聞いたものであらう。

へボン辭書 氏が成佛寺に幽居してゐる時に先づ着手したのは和英辭書の編纂であつた。參考書もなく通譯者もなく全くの暗中摸索の様な日本語研究から、漸次と組織的な研究に入り、遂に日本語の文法を發見して動詞の語尾の變化などを組織的に分類するに至つたが、その事業は何と云つてもへボン氏一生の異彩でなければならぬ。之は成佛寺に同居したブラウン博士にもその勞の一端を歸すべきであらうが、その文法を基礎として日本語四萬言を蒐集してアルファベットの順に並べ、一々適當な英語を配置したといふ功績は、全くへボン氏自身の絶大な根氣と後來の人々に對する奉仕の念に立脚して出來たものである。それは日本來航の安政六年から滿五年の歳月を毎日々々丹念に編纂を續けて、元治元年の秋までに大成したものである。全く之は奇蹟的な出來榮えて、單に我々日本人が驚歎感謝すべきものと云ふよりも寧ろ世界的文献として萬人が何時までも尊重すべきものでなければならぬ。折角辭書は脱稿したがおしむらくはそれを日本で印刷する用意はなかつた、それで慶應三年五月まで保留しておき、之を携へて其の校正の爲め岸田吟香氏を同行して上海に赴いて上梓する事にな

つた。今學院にはその第一版及びヘボン氏の手記になる原稿が昔のまゝに残されて居るが、何れも永遠に保存尊重すべきものである。

ローマ字綴創始　ヘボン辭書の編纂と共に我國の忘れてはならないのはヘボン式ローマ字綴の創始である。その今日まで種々の綴方が唱道されたが、何れも先づヘボン式綴に準つたものであり、新形式のローマ字は何時しか消えて何時の間にかヘボン式に歸りつゝあるが、之はヘボン氏が何れ程奥深い研究に立脚してその綴方を創めたかを證明するものである。今やローマ字綴りの幾多の刊行書や雜誌や新聞などがあるが、之等は大抵はヘボン式を採用して居る。又商品や建物や商店などの名稱は多くローマ字に綴られて民衆の前に表現せられて居るが、一つとしてヘボン式に準らないものはない。我々が片假名を用ふる時に、弘法大師を思ひ出すとすれば、ローマ字を用ふる時には矢張りヘボン博士を思出すべきではあるまいか。小學校でも中學校女學校でも今は全國的に之が教へられてゐるが、どれ程社會生活の便益を増進して居るか知れない。この一事だけでも日本はヘボン博士を忘るべきではな

5。
精錡水　ヘボン辭書の校正役として岸田吟香氏は博士について上海に行き、八ヶ月間その勞に當つて遂に大成した。その後岸田氏は種々の方面でヘボン氏を助けて居たが、ヘボン氏は岸田氏の勞を謝

する爲めへボン眼藥即ち精銚水の處方を教へられ、岸田氏はその發賣を政府の認可の下に行つたが、日本の津々浦々まで販路が擴張されて、岸田氏は豫想外の富をうるに至つた。又へボン眼藥精銚水の名は明治年間には云ふに及ばず昭和の今日に至るまで人々に重寶がられる目藥である。

又博士に永く仕へて居た料理人に牧野久七といふ人があつたが、博士歸國に際して彼に眼藥の調査法をさすけ之を賣藥として生計の資に供せしめたとも傳へられて居る。

東京横濱兩聖書翻譯委員會 以上の功績にも増して日本の文化ことに精神文化に至上の影響を與へたものは何といつても博士の聖書翻譯事業である。神は舊新約全書を日本に移殖せんためにとくにこの博士を二三の共勞者と共に送致されたと云つて過言ではない。聖書翻譯は、ブラウン博士の章にも述べた通り、決して博士の單獨の仕事ではなかつた。新約聖書に於てはブラウン氏に多大の功績を歸せねばならず、舊約聖書に於てはヴァーベック博士に一半の功を歸せねばならぬ、前者は主として横濱委員會の手になつたものであり、後者は東京委員會の手になつたものである。けれども横濱東京兩翻譯委員會を一貫して此大事業に中つたものはへボン博士一人よりなかつた。ブラウン博士は明治六年より明治十二年までの比較的短時日である。その前後拾六年間の長年月を精勵刻苦少しも倦むことを知らずに此事に丹精したのは正にへボン博士一人である。この東京委員の事蹟についてはヴァーベ

ツク博士の章に稍詳しく述べてゐるからこゝに重複は避ける。たゞ愈々兩卷が完成して、記念すべき明治二十一年五月二十一日、東京新榮教會で盛大嚴肅な捧獻式が催されたが、七十歳を越えたヘボン博士は都合十六年間の翻譯者としての勤勞が自ら與へる榮光を全身に浴びながら教壇に立つて横濱委員會の完成した新約聖書を左手に、東京委員會の完成した舊約全書を右手にして如何にも暗示深く兩卷の全會衆の前で重ね合せながら、清らかな細い聲で

『基督教の兄弟よ、今や私の勤むべき唯一事が残つてゐる。それは常任委員の譯せる舊約全書と、横濱委員の譯せる新約全書とをば、茲に日本に於けるプロテスタントの宣教師全體の名に於て——或は私は云はん、米國と英國にある基督の全教會の名に於て——一卷のバイブルとなすべく兩書を一つに合せる事である。而してそれを日本國民への親愛を表すの贈物となす事である。西洋の基督教國民は、この國民に與ふるに、如何に貴重なる物品よりも、金銀珠玉の山嶽よりも、この聖書を措て他に如何なるものを贈る事ができるか。願くば、この神聖なる書物をして、西洋の人民にありし如くに、この國民にもあらしめよ。——生命の本源、歡喜と平和の使節、眞正なる文明と社會的政治的繁榮と偉大との泉源たらしめんことを。願くば、聖書をして、かの預言者エゼキエルが見し、神の御位より流れ出る河水が、到るところに生命と癒しとをもたらしし如くあらん事を。而して私共は、神にして父な

る御方が、人の子に賜りしその驚くべき賜ものに向つて、又その賜ものをこの國民に賜はりし事に向つて、滿腔の熱誠をさしげて感謝すべきではあるまいか』

と語られたといふ事を誌して置かう。沈黙寡言なヘボン氏のこの言葉程並居る人々に深い感激を與へたものは絶えてなかつた相である。明治學院同窓の人々はこの情景を想像して永遠の誇りと歡びと尊嚴とを感ずべきではあるまいか。學院は聖書を基礎として立ち、その創始者としてこのヘボン博士、またその共勞者たるブラウン、ヴァーベック兩博士を擁してゐるのである。

以下後年の參考資料として、ヘボン博士が譯されたまゝの聖書の數節を採録して殘して置かう。原稿は丁寧なローマ字を以て綴られてゐる。惜むらくはインクの色が年々に褪せてゆくが、如何にすれば之を防ぎうるであらうか。西洋人の書いた日本文として何時の世に是以上のものが出よう。

Matai den fukuinsho Dai go sho

- 1 Yaso oku no hitobito wo mi, yama ni nobori, zashitamashini, sono deshiachi kare ni kitarinu. Sunawachi kuchi wo hiraki sore ni oshiete iwaku, Kokoro no uchi mazushiki mono wa saiwai nari. Sore sono hito no kuni wa tenkoku nari. Kanshinu ni no wa saiwai nari, sore s no hito wa ngusame wo ukuru mono nari. Yasahiki mono wa saiwai nar, sono hito wa kuni wo tamotu mono nari. Dekawaku got-ku tadas-

hiki wo shiō mono wa saiwai nari. Sore, sono hito wa akasaruru mono nari. Awarenu mono wa saiwai nari, Sore, sono hito wa awareni wo ukuru mono nari. Kokoro no uchi kiyoki mono wa Saiwai nari, Sore, sono hito wa Kami ni naniyuru mono nari. Mutsu majiku sasuru mono wa saiwai nari, Sore, sono hito wa kani no ko to toneraru ni mono nari. Tadaishi koto no tame ni seneraruru mono wa saiwai nari, Sore, sono hito no kuni wa tenkoku nari.

6 : 24 以下

Nanjira Kami to takara ni kanetsukoru atawazu. Kono yuveni ware nanjira ni tsugen. Inochi no tame ni nani wo kurai, nani wo nomi, matawa mi no tame ni nani wo kin to omompakaru nakare. Inochi wa kate yori tattoku, mi wa koromo yori tattoki mono ni a-zazaruika. Sora no tori wo omoiyo, makazu, karazu, kura ni takuwaezu. Saru domo nanjira no ten no chichi kore wo yashinai tamo. Nanjira wa sore yori ito tattoki mono ni arazu. Nanjira no uchi tare ka omompakari wo motte sono inochi hitotoki wo yoku nobanya. Mata naniyuveni koromo no koto wo omompakaru. Ni no yuri no ikanishite sodataruka omoiyo. Sore wa tsutomezu tsunugazu. Ware nanjira ni tsugen, Soromon no ito sakan naru toki de saye, kono hana no itotsu hodo mo yosowa zariki.

九へボン塾

發端 文久二年の春である。まだその頃の横濱は市でもなく町でもなくたゞの一漁村であつた。勿論安政六年の神奈川横濱兩港の開港條約以來、英露佛蘭の諸條約國から公使や領事が派遣されては居たものゝ、居留民は尠く、危険の多いがまゝに幕府から護られながら戦々兢兢々として寺院に假寓して事務を取つて居た頃である。横濱の地理的容子も今とは非常な變り方で、今の元辨天町の邊から元町のあたりにかけて只一條の帶のやうな陸地が山の麓に沿つてゐるばかり、その地の幅とても北の方の廣いところが百間位南端は漸く三十間位のものであつた。従つて今の最も繁華な伊勢佐木町姿見町蓬來町萬代町のあたりには滿々と潮が湛えられてゐて、今日のあの大都市は夢にも思ひ浮ばれなかつた。

遠い奥の井土谷村の方から一筋の河が流れてきて、中村川となり、山の手の麓の堀割を流れて陸地の南の先端で海に入つてゐる。今ではその河口に山下橋が架せられてゐて、その橋上からは横濱港の大防波堤が一望のうちに見える絶景の場所である。あの邊一體を明治の初年頃はまだ元村と云つてゐた。その元村の川口から第二の橋、即ち谷戸橋の際に一戸の風變りな家が建設されつゝあつた。屋根

が思ひ切つて廣いわりに斜面がゆるやかであるため棟が自然と高くなつてゐる。庇は長く伸びて四方の先端には大きな止瓦が飾られてゐる。それに檐が低くて何となく屋内が暗さうに感ぜられるが、その代り落つた感じが深い。これだけの構造から云へばそれは日本の寺院の建築様式に外ならないが、その廣い瓦屋根の中腹に前後二つ宛の張り出し窓があり、その窓には鎧扉がついて居り、その窓のわきには赤煉瓦のストロブの煙突があり、檐下の一角の廻廊には荒目の竹垣があつて、それにすひかづらを捲つかせようとしてゐるのを見ると、この建物は單なる東洋趣味から出来たものではなくて必要よりか趣味よりか多大に異國情緒の加はつてゐることが解る。

それは安政六年に神奈川に上陸してのち、三年の間成佛寺といふ寺院に假寓してゐた、ヘボン氏が己が治療所として、また住居として建てたものであつた。何分西洋建築士は未だ渡來せず、日本の大工達はまだ洋風建築を見たこともない時代であつたから、ヘボン氏は假寓たる成佛寺に大體の骨子を擬して、間取や通風や暖房の装置を西洋風にしつらへたものである。一見寺院に見えてそこに異國情緒の漂ふてゐたのはこのためであつた。

日本の文明史にとつて横濱の一角にあつたこの異風な建物は實に重要な意義あるものであつたが、先年の大震災災は之をも跡もなく消してしまつた。今では災後片附けられもせず累々と積まれた煉瓦

の間に雑草が隙間もなく生え繁つてこゝをそこ知る由もないが、せめてへボン家塾の後身である明治學院に哺まれた我々だけでも、今は人々の念頭から何の追憶もなく去らうとする此の地を覺えてあの温厚な老夫妻を偲ばうではないか。博士が五年間朝な朝な早朝の五時に起き出で、は丹念な努力を拂つてあの老大な和英語林集成を完成した處、日本に於ける洋醫の學及び術の濫觴形を劃して毎日數百人の患者を懇切に治療し、貧民の家には自ら往診して眞に基督者としての愛隣の龜鑑を垂れた處、また彼れが明治六年以後は五年と六ヶ月間毎日々々午前八時から十二時迄の尊い時間を避いてブラウン博士やグリーン氏と新約聖書の邦譯に従事したと云ふ事、尠くとも是位のことには忘れてはならない。その他、博士が神奈川から一漁村にすぎぬ横濱に來られた頃官命を帯びて自ら今の海岸通り本町の方面を測量して後の横濱の市區制定に偉勳のあつたことや、維新改革の頃朝廷と幕府との間に事を構へた際英佛兩國がとの隙に乗じて事情愈々錯雜しようとした時、公使パークスを援けて我國の平和のため大いに盡瘁したさうであるが、之等のことは國家も横濱市も忘却したものか、あの居留地三十九番地には只草茫茫として心ある少數なる者のみの低徊するところとなつてゐる。謙遜なる博士は自分の名が竹帛に垂れることも、大理石の紀念碑の樹てられることも好まなかつたに相違ない。唯神の前に己が最善を盡して走るべき馳場を馳せて永遠の平和に入るを最も喜ばれたのであらう。博士はその志望を

完うせられてゐる。然し吾々は人間なるがゆゑにこの慕ふべき博士の姿が日一日と人々の念頭より淡くなつて行くのを悲しまずには居れない。けれども茲にはこれ以上博士の日常生活とその徳とについては誌さうとは思はない。へボン治療所が一方に於て青年男女の教育機關となり、延ひては築地大學の前身たるへボン塾となつた纏末のみを誌したいと思ふ。

へボン氏の傳中にも見る通り、へボン夫人はもと教育家であつた。博士は不言實行の人で言葉よりも文字、教壇よりも手足を勞する人物であつた。醫師宣教師として日本に渡來するには何うしても此の夫人と一身同體である必要があつた。夫人は教育家として子弟を導き、博士は實行家として基督教の真相を人々に證しする任務をもつてゐた。

文久三年に、愈々治療所が出来上ると、博士夫妻は成佛寺の三年の住居をすて、越して來た。公然と基督教の宣傳は許されてゐないまゝに博士は治療に従事し、夫人は子弟の教育に手を染め初めた。高橋是清氏、林董氏等はその頃各々幼童として女生徒と共に夫人の前で洋學を修めたものである。その男女混淆のへボン夫人の家塾、それが抑々後の築地大學校の濫觴であつた。その男女共學の風は明治五年迄續いてゐた。服部綾雄氏が十歳で沼津を出で、横濱に參りへボン塾に托せられし時は、まだ女學生と一緒に勉強したものであつたと、後に服部氏自ら述懐してゐる。その明治四年の頃女生徒は

別に設けられた一つの洋學塾に移されることになつたのであるが、それはかうである。明治三年にブラウン博士と共に北陸の新潟からミス・キダーといふ婦人宣教師が横濱に越して來たが、ヘボン老夫の女學生だけの教育を托せられることになつた。そこで女史は一つの女學校を創設する決心をして、横濱の西北野毛山に一家屋を卜して其處へ預つた女生徒を移して行つた。之が抑々現在のフェリス女學校の發端である。その後ヘボン塾は男生徒ばかりであつたが、一時稍々衰微の傾があつた。といふのは、高島嘉右衛門氏が藍謝塾高島學校いふのを設けて、ジョン・バラ氏を聘して青年を集めて、大いに洋學を鼓吹し、又一方には、横濱修文館があつてブラウン氏が専ら洋學教授の任に當つてゐたので、志ある青年達は皆その方面に向つてゐたからである。併しヘボン塾は依然として數人の生徒を擁してゐてルーミス氏、オー・エイ・チグリーン氏等が授業を續けてゐた。

全盛期 ところが、ヘボン家塾が稍隆盛に向ふ機運が到來した。といふのは明治七年に高島氏の藍謝塾が不幸にも祝融に見舞はれて、數百の學生が離散する事となり、東京本郷お茶の水玉操學校が解散になつて森本介石氏外數氏がヘボン塾に入塾することになつたからである。

其後明治九年に高島氏の塾と縁故の切れたジョン・バラ氏は、プレスピテリアンミッシヨンから依頼されて、ヘボン家塾で専ら育英事業に當ることになつた。之がヘボン家塾が横濱バラ學校と云はれ

るに至つた所以である。その時分石本三十郎氏が遙々長崎縣から笈を負ふて横濱に來り、バラ塾に學ぶことになつた。また原猪作、山口準之助、鶴徳次郎、鶴儀三郎、篠原銀三、太田留助、角屋省吾、石原保太郎、服部綾雄、之らの人々はその新塾長ジョン・バラ氏の下で英學並に聖書の研究をしたものである。これよりさき明治八年ジウラジ・ウイリアム・ナツクスといふ小壯學者が渡來して居たが氏はミッシヨンより囑されて、バラ氏を助けることになり、漸次にその家塾は堅實味を加へて來た。明治九年に森本介石氏がそのバラ學校に修學した追憶談があるが、それをこゝに轉載して見やう。私達は玉操學校解散後色々相談した結果又佐賀縣の人で石川某と云ふ人と、今學習院に居らるゝ松本源次郎博士とが横濱のバラ學校にあつて、私達にすゝめて呉れたので私達はその學校に入らうといふ事に定めた。それで、私達の中から長田時行氏、原地政敏氏、村田肇次郎氏、それから私とが選ばれて横濱に談判に行つた。然しその時はまだ寄宿舎がなく、校舎が一棟あつたゞけ、生徒は皆通學生であつた。で寄宿舎を建てるまで待つて呉れとの事で私達は待つてゐた。その中に寄宿舎が建つたから來いとの事で、私達十二三人で愈々行つて入學した。非常に親切に英語を教へて呉れて、しかも月謝も安く學資が大層安くつくだのみんな大喜びでゐた。たゞ耶蘇教だけが嫌で朝夕の禮拜や色々の集會には仕方なしに出席はするが、もし耶蘇教にでも入れれば同志の中から破門するなど、我々東京から行つた者達

原

修

問

答

答

太

の間に堅い盟を立てゝゐた。その頃の生徒には私達と一緒に東京から行つた者の他に、服部綾雄氏、石本三十郎氏、太田留助氏、角谷省吾氏、成毛金○郎氏などがあつて、いづれも通學してゐた。さうして既にみんな耶蘇教に入つてゐた。全體で二十四五人位居たやうに覺えてゐるが、上級下級の別なく凡て一クラスになつて教へられてゐた。そんな調子でバラ先生は大喜びでやつて居られた。やがて十月十一月十二月と經つて一番頑固であつた自分が突然一番最初に耶蘇教に入つた。その中にだんだんバラ先生では充分に學問を得られないで不満足になつてきた明治十年になつて自分は通辯にならうと思つて一生懸生に會話を稽古した。波止場へ行つて西洋人の小僧なんか菓子位呉れて話しを練習したりなんかした。そして學校中で一番英語が出来るやうになつた。たゞ石本三十郎氏には敵はなかつた。あの人だけには自分は敗けてゐた。その内にノックス先生が學校に來られた。學者であつてその人の説教によつて信者になつた者が多勢あつた。その時分になつて來た學生には、折田兼至、根本正、神崎直三、などいふ人々があつた。その頃傳道が極めて盛んな時代であつて、我々は住吉教會に行つてゐた。南小垣洲吾氏が牧師で松山高吉氏が讚美歌を教へたりなどして働いて居られた。ある時分は四十人も一度に洗禮を受けた事もあつた。」

移轉擴張(築地大學校) かうしたへボン家塾は明治十三年に築地大學校の創立に至るまで引續いて

居たが、明治十年の一致神學校創設當時、太田留助氏は其處に移り、それ以前に原猪作氏、石原保太郎氏其他二三人の人々はカラゾルス氏の英學校に移つて行つたりして又もや幾分の衰潮を來した。その上思想的にバラ氏の學校は一つの打撃をうけた、それは東京の開成南校に一人の有名なる動物學者モールズ氏が來つて盛んにダーウインの進化論を唱道した結果、聖書の尊嚴が大いに疑はれるようになり、又一方ベンサム・ミルやスペンサーの巧利説や實證説が切りに叫ばれたために、青年の思想が甚だ動搖して、基督教の諸説に疑惑を懷いてバラ氏の下を去るものが可成り多かつたが爲めである。そこで横濱では何となく前途が暗く感じたため、學生も教師も須らく東京に出て今一層組織的な教育機關を設置しなければならぬといふ議を起すようになり、又ミツションも之を當然と認められた結果、明治十三年に愈々築地七番地に校舍を建築して築地大學校を開校することゝなつたのである。

十 ヴァアベック博士

生ひ立ち ヴァアベックといふ姓は和蘭と獨逸の兩國に跨つて古來幾多の家族を有して居る。従つて

ギドゥ・エフ・ヴァベック氏の祖先も、その古へに於ては果して和蘭人であるか、獨逸人であるか分明しない。しかし氏の祖先に幾多の宗敎家を出して居る事は事實であつて、有名な宣敎師ヴァン・レーア(Dan Laer)氏も彼の一族のものであつた。モラビアン派の巨頭チンツェンドルフ伯はアムステルダムムのヴァン・レーアの家に來つて滞在した事もあると傳へられる。一八三〇年一月二十三日に彼は和蘭のザイストの町に孤々の聲を上げた。昔からこの町はモラビアン宗の盛んな所で、今日でも幾多の敎會史上の史蹟が残つて居る。父はカアル・ヴァベックと云つて相當の資産家であり、母はレム・ケラマンと云つて、素は女流敎育家であつた。ギドゥはそれら夫妻の八人の子供の中六番目として生れた。幼時モラビアンの小學校に學んで居たが、優れて感情の美しい子供で、詩や音樂を殊の外愛好して、人と口論する事は出来る丈け避ける傾向があつた。ピアノやオルガンは子供の時から巧に彈奏したが、ギターやヴァイオリンも仲々上手に弾じたさうだ。この美しい感情と才能は全く母から來たものである。母はもとイタリー系の歸人で、その祖先は宗敎改革以前に既に新敎的な信仰をもつてゐた爲めに、法皇から國外に追放せられたものであつた。

コツペルの丘 ヴァベックの一家はザイストのコツペルといふ丘の世にも美しい邸にモラビアン宗の信徒として高潔な美しい生活をして居つた。父は子供の敎育のために色々の犠牲を拂つて家の設備

をなし、小鳥や花などを澤山家の周囲にしつらへて居たといふ事である。ギドウは小學校を卒へてから、ユトレヒトの或る工業學校に送られてそこで製圖や機械工業の一端を修得した。その頃コツベルの家族にはだん／＼と不運が到來して、一家は住み馴れた美しい家を離れなければならなかつた。

其の時分ヨーロッパに於て青雲の志を懷くものは競ふて北米に移住したものであるが、ギドウは義兄ジョウデ・ヴァン・デュールスの呼寄せもあつたので、北米に渡つて身を立てる決心をした。デュールスは宣教師であつて西インド諸島の土人の爲めに働いて居た。

アメリカ移住 一八五二年九月二日に彼は和蘭を去つて大陸に渡つた。彼はその時二十二歳であつた。アメリカに渡つて後、従來は Verbeek と書つてゐたのを Verbeck と直した。それは彼が之迄の長い歴史的な思出に對する執着を捨て、本當の神につけるヤンキ―と爲つて見ようとの決心があつたからだと云つて居る。一八五三年十一月にアルカンサスのヘレナと云ふ場所の土木技師として傭られた。そこで暫く橋梁の設計や製圖などに毎日忙しく過した。大きな抱負と理想を以つて、この感情の美しい篤信なモラビアンの一青年は、新大陸でかうした實生活に入つたのであるが、四邊の同僚の振舞や奴隸が聖日に働かされてゐる様子などを見て居ると、何となく自分の抱負や幻影に矛盾した世界が展開されて居る様に思はれた。従つて幼時のコツベルの丘の生活が追想され懷まれて魂には云ひ

知れぬ渴望を感じた。他の同僚が何の懸念もなく亂暴な素行に時を過す翌日には彼は二十哩も歩いてヘンリー・ビーチャーの説教を聞きに行つた相である。今一つ彼を苦しめるものがあつた。それはアルカンサスの暑苦しい氣候が北海に面した和蘭の地に育つた彼の身には、どうしても適應しなかつたことである。健康は日一日と衰へて遂には激務に堪えられなくなり一八五四年七月には到々床についた了つた。その頃アルカンサス全土に渡つてコレラが猖獗を極めて、周圍には續々倒れるものがあつた。所が不思議にも彼ばかりは呻吟の中にも生命が保たれてゐた。その時分彼は時々瞑目しては若しも健康が今一度回復されるならば、一切を捧げて神と人類とにへ仕よう、といふ祈をした相である。その誓ひを彼は最も忠誠にこの世の生涯の終りまで貫徹した。

八月になつて義兄の住んで居たエリー湖畔のグリーンベイ(綠灣)に連れて來られてその年一杯を静養する事になつたが、散策の出来るようになつてからは、始終湖畔の岡巒を跋渉しては清爽な氣持になつた相である。しかしどうしても前の土木技師になる氣は起らず、それとて前途何にならうといふ明瞭な幻影があつた由でもなかつた。それがギドウに時々可成りな不安を抱かせた相であるが、一切を神に委せて外よりの召を待つてゐた。

新日本の黎明 當時はクリミア戦争の勃發した年で、歐洲の風雲は何となく荒れてゐた。その影響

○
は日本に迄も及んで英國はロシアの東方政策に備へる爲めに、どうしても日本と通商條約を結ぶ必要があつて、可成り強硬に幕府にせまつて既に米國に開いてゐた長崎と函館の二港を英國へも開かせることにした。日本は以上の二港を開きはしたものの、方針としては嚴格な鎖國主義を奉じて居た。

村田若狹 幕府は肥前の藩主鍋島氏に沿海を警戒せしめて本邦人の海外に脱走する者及び外國船の沿海を荒さゞらん事を期してゐた。鍋島氏は家老の一人で智勇に猛けた村田若狹に命じてその責務に當らしめた。若狹は屈強な一隊の武士を率ひて要所々々を鎮守し、又船を浮べては港灣の警戒に當つて居た。所が或日のこと出島の邊を警戒して居る時に或る和蘭人からセバストポールの海戰の畫を貰つたが、本邦の戰爭に比して海外の武備の如何にも完備せる容子を見て尠からず感動した。又同時に日本を本當に世界の先進國と比儒する國とするが爲めには、どうしても歐米の文化をとり入れなければならぬと思はざるをえなかつた。

若狹は其の後日夜小舟で外船に近寄つては色んな觀察を爲して居た。或日の事長崎灣内に英船が一隻淀泊してゐる時の事であつたが、水上に一卷の書物が漂ふて居るのを見た。早速家來に命じてそれを拾はせた。内容如何と色々考究して見たが、如何にも見當のつかぬところから、和蘭人の所へ持つて行つた、處が彼らは若狹に向つて、此の書はバイブルと云つて宇宙の創造主と、イエス・キリスト

の事に就いて書いたものであり、日常道德と宗教の事が審かに書かれて居る。又之は歐米諸國の文明の源であると告げた。兼々耳にしてゐたキリシタン宗の經典かと悟つた若狭は好奇心を益々そゝられて家臣の一人、江口某を出島に送つて表面は醫學の研究といふ事にしながら、一意専心に聖書に關する知識を修得せしめた。又その聖書は既に漢譯になつて居るといふ事を聞くに及んでは、今一人の家臣を支那に遣してその譯本を買はせる事にした。村田氏の邸は佐賀にあつた所から、自らは其處に居つて何のそれらしい風情も見せずに絶えず家臣を馳らせては熱心に舊新約聖書の研究を進めたものである。従つて折ある毎に白人に就いて字句の意義を問はせて居たものであるが、神の經綸と云ふべきであらう、やがてヴァベック氏の與へようとする手と、村田氏の求めようとする手とが相觸れる時が來た。

オウバン神學校 ギドゥは世界の大事に關する神よりの召が早晚來るべきことに、思ひ及ぶべき筈はない。グリーンベイの閑靜な姉の家に靜かに身心を養つて居た。所が今一人の姉婿ヴァン・デユール氏が神學の研究を完成する爲めにニューヨーク州のオウバン神學校に在學して居たが、ギドゥに手紙を寄せて將來傳道者として身をたてる爲めにこの神學校に來つては何うかとの意をもらして來た。ギドゥは之こそ自分の靈魂に最も満足的な生涯を描き出す動機となるものであると確信して、直ぐ様義

兄の意を迎へるといふ書を發して、一八五六年の九月に同市に向つた。

感情の美しい上に頭腦の優れて明晰な氏は諸教授からも學生間にも忽ち敬愛される身となつた。又テノールの歌手として神學校のクアエアに加はる事になり市中にも名聲をあげた。彼の性行に就いては當時氏を目撃した或る紳士が次の様に述べて居る。「行動には落着きがあり羞かむかと思ふ程に遠慮勝ちであるが、他人に喜びを與へようが爲めには全く自らを忘れてしまふ美しい素質があつた。」この自己制服の特長が彼の生涯を貫いて本當の勝利をえさせたとグリツフィス氏は謂つてゐる。

彼は卒業の年に學校から選ばれて校内に集つてくる獨逸系統の人々に獨逸語の説教をする任に當つた。獨逸系統の人々は古來條理整然として而も深みのある説教を聞きたがる性質を持つてゐるが、青年説教家ヴァベック氏の説教には多大の尊敬を拂つたさうである。處が毎週その禮拜に列する會衆のなかにマリア・マニヨンといふ若い篤信な婦人が居た。此の婦人はオウバン町の西南、オアスコ湖に沿つたアウトレットといふ町にあるサンドビーチ教會に屬して居たが、そのサンドビーチ教會とは後年ギドウ氏が軛を共したエス・アール・ブラウン氏の牧して居た教會であるそしてこの婦人とは同教會の産んだ三人の婦人海外宣教師の一人でありまたヴァベック夫人となつた婦人である。

在米オランダ人の義舉

英米兩國は無論、佛蘭西も露西亞も再三日本に接近しては、一日も早く門

戸の開放を懲慙しては居たが封建三百年間培はれた我國の攘夷思想は容易に溶けるべくもなかつた。その間にたゞ一人日本に相當に迎へられ、ある程度の自由を與へられて居つたのは和蘭人である。和蘭人は古來日本と保つてきた友誼の上から、また世界の大勢より見て、日本の鎖國は不利益なるを知つて公式に遠く一八五二年に日本に諫言を與へて居たが、日本は頑として聞かなかつた。オランダ人の豫言通りに一八五三年に米人ペルリが態々渡來して頻りに通商を求めたが議纏らず之を歸還せしめた。翌年五四年に幕府は大勢に抗し難くて大英斷を以て日米假條約を結んだのであるが、これも多大の條件が附けられて居た爲め、文化の風も到底我國の濱土を自由に訪れるわけには行かなかつた。その日本の不自由な状態を見るに見兼ねて開國の日の早からん事に焦慮して居たのは前述の通り和蘭人であるが、米國に在住する和蘭人は和蘭本國のため、且つ米國のために何うしても日本開發のために一肘の勞をとらざるをえなかつた。之が抑々ダツチリフオームド教會が日本宣教のために資金の不足をも顧みず逸早く起つた譯である。一八五九年二月にニューヨーク第五大街のダツ・チリフオームド教會の總會に一の記念すべき事件が擡頭した。それは教會員は次の事を宣言したことである。「日本和蘭兩國は古來長き友誼を保てり、今や日蘭兩國はアメリカ合衆國に對して益々緊密なる關係を保たんとす。米國のダツチ改革教會は米蘭兩國を代表して他に先んじ日本に福音を宣傳すべき使命を有す」

總會は滿場一致この宣言を可決すると同時に、二名の長老は各々年額八百弗を支給し、教會自體は又八百弗を年々支給して三名の宣教師を日本に派遣するといふ事になつた。この決議を直ちにリフオームドミツシヨンの傳道局に上進した所が、傳道局は深き感謝と喜びとを以て三名の候補者を募集する事になつた。

日本へ それより前、オワスコアウトレットの牧師ブラウン氏は支那の宣教から歸還してのち牧師としては多大の成功をあげ乍らも胸中に使命感の上から一沫の不安を抱いて外國宣教に出づべき日を待つて居た。無論傳道局はその有爲な傳道者にまづ日本渡航の儀を交渉をしたが、ブラウン氏は立所に許諾した。今一人の宣教師は純粹の和蘭生れの青年である事を條件として、各方面の神學校に照會した所がオウバン神學校々長はギドウ ヴァアベック氏を推薦して來た。そこでオワスコのブラウン氏はオウバンに至つてヴァアベック氏に會ひ人物を考査することゝなつたが面會匆々兩者には肝膽相照すものがあつたためか、ブラウン氏は熱心に彼れを共勞者として傳道局に推薦した。早速三月二十二日ヴァアベック氏はカユガ市の第二長老教會で接手禮を受けて教師に任命されたが、その日は附近の多勢の和蘭人が相集つて感激の深い一場景を呈したといふ事である。翌二十三日氏はダッチリフオームド教會に教職籍を轉じたが一晩丈けプレスビテリアンの教師であつた事は面白い事實である。次で四月二

十八日にアルバニー市に行つてアメリカの市民権を獲得しようとしたが、和蘭の國籍の移轉が不明瞭であつたために其の市民権はえられなかつた。この爲め彼は終生無國籍者として通つた相である。その後ブラウン氏の教會に行つて嘗つての相知の婦人マリア・マニヨンと結婚式をあげ、着々日本渡航の準備を急いだ。

一八五九年五月七日ニューヨークから前述のサブライズ號に乗じて氏はブラウン氏とシモンズ氏とその各々の妻と共に船出して行つた。その光景を見送つたジェームス・バラ氏は次の様に述べて居る。

「一八五九年の五月にニューヨークの埠頭から記念すべき船サブライズ號が船出した事は到底忘れられない。埠頭には國旗が漂ふて居り、陸には殷々たる砲聲が響いて居た、それは云はずもがな從來ジバングと呼ばれて居た國に恩寵の使節なる三名の男子とその妻達を送るべく放たれた砲聲であつた。」その航海の様子に就いてはブラウン氏の略傳に述べて居るから此處には省く。

長崎 ヴァベック氏は妻を上海に残してブラウン氏シモンズ氏にも別かれて單身長崎に行つたがそれはその年の十一月七日で、米國を發して百八十七日目であつた。長崎上陸の直前を彼はかう記して居る。「その日の曉の光と共に私の眼前に現はれた風光の美しさは到底筆舌に盡せない。之に較ぶべき

景色はヨーロッパに於てもアメリカに於ても私は見た事が無かつた。先づ鏡面の様に滑らかな港に投錨した船の甲板に居ると想像せよ。遠近には十六隻の船が静かに碇泊して居る。前方には薄霧の中にその名も歴史的な出島が横はり、その兩側と後方には廣やかな市街が白い屋根と白い壁を見せて居る。しかもこの市街の三方は常緑の色とりどりの岡巒に閉ざれて居り、その山腹の所々には寺院の屋根が見えて居るとする。さすれば、私の上陸の曉に眺めた長崎に稍髣髴たるものを諸君は見るであらう。」と。其の日の午後にはヴァベック氏は長崎の地に永遠的な事業の第一歩を履みしめたのであつたが、其の時分既に英國監督教會の有名な宣教師ウィリアムス氏とリギンス氏とが同地に在任して宣教に従事して居た。

○ 長崎には古來殆んど治外法權になつてゐた和蘭人の居留地出島といふ所がある。維新直前の外人達には極めて危険な時期でもこの出島だけには安泰な空氣が漲つてゐた。ヴァベック氏は純粹の和蘭人であつたから、全く無條件で其の出島の中に枕を高ふして睡る事が出来たのであつたが、日本人への使命を感じてゐる氏には、その様な一身の安全を計る氣持にはなれず、殊更に日本人家の間に居住の場所を見附けた。領事も大いに斡旋する所があつて可成り大きな家を半ヶ年十六弗の家賃で借りた。其の家を根據として彼は徐々に傳道の大使命に取掛つた。頃は切支丹禁制の高札が町の辻々に掲げら

れ、拷問の物凄しい聲が夜な夜な聞え、町人は武士の前には土下座して叩頭し、浪士は覆面して夜中徘徊しては外人を殺害するを義人の務めと考へてゐるやうな時代である。

綾部氏　ヴァベック氏は泰然とこの間に處して志ある青年に英學を教授し初めた。同時に上海の妻に書を發して定住の家の具へられた事を告げ、一日も早く渡來するやうにと知らせた。妻は翌十二月の二十九日に長崎に上陸して聽て異國の意味深い新年を迎へた。年が變つて二名の青年が彼の下に教へを乞ふて來た。その中の一人は誰であらう實に村田若狹の實弟綾部氏であつた。若狹は實弟を所々の外人宅に潜かに遣はせては聖書の知識を探索させてゐたものである。ヴァベック氏は計らずも日本青年から聖書に關する教を乞はれたのであるが、餘りに事の意外なのに夢かと疑ふばかりであつた。然し滿腔の歡喜を覺えてそれから日曜毎に自分では傳道説教をするやうな氣持で淳々と福音の眞髓を説いて聽かせた。二名の生徒は始めて基督教の何たるかを略想像しうる様になつた相である。

避難　極めて小やかな其の英學塾とバイブルクラスは長くは續かなかつた。何故かと云へば、當時英艦が鹿兒島に押寄せた事と、赤馬關で長崎人と英米佛蘭の諸艦とが砲火を交へた事とにいきり起つた浪士達は、到る處で外人の役所や商館を焼打ちし、國の別なく異人と見れば之を暗殺するといふ事態容易ならざる事となつて來て、ヴァベック氏自らも、各方面よりの忠告によつて出島の中に避難

せざるをえなくなつたからである。麴てその出島さへも浪士達の襲はんとする形勢になつた爲め多くの外人達と共に船を艤して上海に逃れた。しかし其の避難は永くはなかつた。といふのは一八六四年（元治元年）幕府は攘夷思想鎮壓の爲めにその頭目たる長州を征伐し、徒らに外人を殺害するものは之を嚴刑に處するといふ方針に出たからである。其處でヴァベック氏は再び長崎に歸つて、前にもました便利をえて青年の薰陶を始めた。その年であつたが、村田若狹の紹介があつた爲めであらう、肥後の藩主細川家から蒸汽船一隻の買入方を依頼された、又同時に歐米より輸入した戦器や船舶用機關の操縦法について教へを乞はれた。ヴァベック氏は當時の手紙に、自分の若き頃ほひに受けた工業教育が今かうして福音宣傳の助けにならうとは、と深い感慨があつたと述べてゐる。兎も角氏の人物と智能とは長崎内外の有力者間に認められて來つゝあつた。

長崎外語學校 萬延元年のことである、當時長崎の奉行は外國人の漸次に増加するを見て、一の外國語學校の設立の必要なるを覺えた。それより前ヴァベック氏は村田若狹の舍弟と今一人の青年とに英語を教授してゐたが、それらの人々を通して氏が英獨佛蘭の四ヶ國語に堪能な事が奉行の耳に聞えたので、奉行は氏を新設の語學校の校長として迎へた。その學校が長崎に有名な濟美館學校の濫觴である。氏はそれを快諾して年俸千二百弗を受ける事になつた。また慶應三年には大隈重信氏が致遠館

といふ一英學校を設けて氏に薰陶を依託した。そこで岩倉具定公、石橋重朝、丹羽龍之助、中島永元、江副廉造、中野建明氏等が學んださうである。此れ以後一八七八年即ち明治十一年迄氏は全く自給宣教師として日本の爲めに働いたものである。

ヴァベック氏の教育家としての名聲は忽ち四邊に擴まつて、熊本の國士横井小楠は自分の甥二名、即ち伊勢氏及び長沼氏の兩人を送つて教へを受けさせたのを初めとして、單に九州ばかりでなく、全國の秀才が集つて來た、岩倉具視兄弟、大隈重信、副島種臣氏など近き將來廟堂に立つべきの人が競つてその門に集つた。氏はその子弟の才幹と將來政治家としての使命とを想見して、新約聖書を教へると共に米國憲法を逐條的に講解して聞かせた。維新當時の岩倉、木戸、大隈、大久保の諸氏が可成りに卓見のある施政の方針を定めえたのは、往年長崎に於てかやうな指導をうけた事に少からず起因したに相違ない。事實上この小やかな語學校は、維新の大業を完成せしめた政治家達の搖籃であつた。

若狭他二名の受洗 綾部氏(村田若狭の弟)が仕官してから、若狭の基督教研究の媒介者をしてヴァベック氏の下に屢々質疑を運んで居たのは、村田氏の家臣本野某であつた。所が慶應二年の五月、村田氏は是非共ヴァベック氏に個人的に逢ひ度いといふ意をもたらしした。何分先方は大藩鍋島の家老の事であるから、ヴァベック氏も事の如何様に運ばれるかを懸念して居たが、受諾の意を與へると旬日な

らずして村田氏は本野氏綾部氏外數名の從者を從へてヴァベック氏を訪れて來た。村田氏とヴァベック氏とは基督敎に關してしばらく談合を重ねたが思ひの外深く村田氏が聖書の諸眞理を了解して居るのに少からず驚いた。グリツフェイス氏はこの談合の顛末を詳細に彼の著「ヴァベック傳」に叙して居るが、こゝには轉載の餘裕はない、ともかく村田氏はヴァベック氏の前に從來の長期間に亙る指導を心から感謝した上に、聖書の眞理は萬人の認めざるをえない事實であると告白して、この上は身命を賭して洗禮を受くるの希望があるとの心底を嚴然たる態度で披瀝した。ヴァベック氏は意外の所望に此の上もなく喜んだが、攘夷思想、殊に切支丹とプロテスタントとの別目のつかぬ周圍を思ひ、適當保護すべき施設も法律もないのを思つて流石にためらつたが、餘りに村田氏の決心の確いのに動かされて、同月十七日の夜に氏は自分の客間で會衆もなく長老の祈もないが飽くまでも森嚴莊重な洗禮を村田若狹及びその實弟綾部氏、その家臣本野氏の三名に授けた。同時に彼らは村田家一族の安泰の爲めに、この事實は決して他言はしないと誓言し合つた。「水上から拾ひ上げし一冊の聖書は拙者共の身命を救ひ出したモーゼ(抽出し)であつた」と云つて若狹は喜んださうである。その後村田氏は佐賀の田舎に引退して漢譯聖書を邦語に移す事に丹精してゐたが明治七年に六十一歳に業半ばに永眠してしまつた。

ヴァベック氏の工學に關する造詣の深い事が追々と知られたため、新進の諸大名は競ふて彼を自分の藩に招かふとした。加賀の前田氏、土佐の山内氏、肥後の細川氏などは禮篤ふして彼を招聘したが、工學は彼自身の使命ではないと知つて、懇懇に辭退した。その中維新の大業が成つて岩倉、大隈氏等が廟堂に立つに及んで、二氏はヴァベック氏に是非とも中央政府に來つて、諸制定の顧問となり、傍ら早晚創設されるべき大學の設立者となつてもらひ度いといふ懇請をうけた。氏の名聲は一日と擴大して遂に最高機關の顧問とならうとして居たが、氏はそれを少しも喜んで居ない。一八六七年の暮の手紙に、「私は一個の愛の宣教師の身分ながら、かゝる事どもを語るべき必需品となりつゝあるを悲しむ。かゝる名聲は正しく箴言二十七章二にもとるものである。余は我らの父なる神が戀て單なる名聲のみならずそれ以上のものを與へ給ふを祈らざるをえない」とかう書いてゐる。

明治元年天下の情勢は一變してさすがに頑強であつた攘夷思想も緩和されたのを觀望して新帝國の内地を視察するため大阪に出た。當時大阪は後藤象次郎氏が行政上の主權を握つて居つた。後藤氏は嘗つて氏の門に學んだ一人である。又副島種臣氏の紹介によつて小松氏にも會つたが、同氏は是非江戸に赴いて大學設立のために一臂の力を籍して貰ひ度いと改めて懇請した。

上京 開けて明治二年の春、時の太政官三條實美は長崎縣知事を通して正式の大學設立の爲めの招

聘狀を寄越した。氏は之に答へて「熟考の結果遂に貴下の招聘に應ずるを欣快と存じ候」といふ書を送つて、長崎を去ることに決つた。その明治二年の出京の頃は後の東山學院々長として多大な感化を子弟に與へたスタウト氏が渡來後間もないことであつたと傳へられる。東都附近にはその當時多くの外人が在住して居り、又一書を海外に出すならば、その道の専門家を招かれぬでもない時に、態々かうしてヴァベック氏を長崎より招くに至つたのは、彼が英學校當時餘程深い印象を大隈、岩倉の諸氏に與へて居つたに相違ない。

集議院顧問 出京後氏は毎日衆議院會議に列席して文字通り最高諮問機關たる位地を占めた。當時の最高官とは三條氏を始め、岩倉、徳大寺、大久保、副島、木戸、佐々木、廣澤、松平の諸氏等であつた。平民の名字使用、乗馬の許可、斷髮、廢刀の事から廢藩置縣の大事業に至るまで逐一相談に與つた。又一方幕府の洋學所を開成所と改めて新政府の直轄する最高の學府たらしめ、總てそれを大學南校と稱し、後工部大學、法律學校、を合併せしめて、後の帝國大學に進展すべき計畫をも定めた。やがて廢藩置縣が實現されると、中央政府には民部、大藏、兵部、刑部、宮内、外部の諸省が設置され、諮問機關としては待詔院、集議院、彈正臺、公議所が設けられた。氏はその公議所にまた席を移して法律の制定に日々參與した。明治四年、行政上の組織が大體終了したので、専ら大學南校の教頭と

して教鞭をとることゝなつた。

辭任と叙勲 大學南校の教頭たる職責は、明治四年から明治七年までの約束であつた。其の期間の追々と終りにせまるにつれて、氏は切實に傳道事業に盡粋したいといふ志望を燃やしてゐた。それで明治七年の七月一日になるや直ぐ、政府に辭表を呈出して身を退いたが、政府は非常に氏を惜んで、其の時分創設された華族學校の教授として更に數年間中央政府を援助してもらひ度いと懇請されたが、それを固辭し、たゞ元老院の院外顧問及び華族學校の科外講師といふ面目を残すに止めて、全く野に下り傳道に身を投ずる事となつた。時に彼は四十五歳であつた。畏くも天皇陛下は彼の偉功を嘉せられて、政府を去るにのぞみ勲三等旭日章を賜ふた。

東京一致神學校と氏 その後九州に中國に傳道旅行を續けたが、明治十年には東京に暫く居を落付けて基督公會と日本基督長老教會との合同のために大いに盡力した。また東京一致神學校設立の爲に大いに斡旋して、自らその講師として最初からタムソン博士と共に教鞭をとる事になつた。氏は其頃を追懷して、「自分の生涯に最も忙しい時代であつた。政府からは時々重大問題の調査を委託され、華族學校に於ては月三回定期に皇族方のために倫理講演をなし、一週二日は神學校に於て説教學、舊約釋義の講義を續け、一週三回自宅に於てバイブルクラスを開き、日曜には講壇に立つ外に時々傳

道旅行に出かけた」と云つて居る。かうした朝野に關する勤勞が續けられた爲めに、明治十一年の春にはいたく健康を害したので、その夏意を決して、一ヶ年の休養を爲すためにカリフォルニアに渡航した。明治十二年九月靜養一ヶ年にして、健康を大いに回復して家族相具して再渡來し、その後は専ら東京一致神學校の教授として、又聖書翻譯者として餘生を充實させる方法を計つた。

東京聖書翻譯委員會 明治六年以後横濱のエス・アル・ブラウン氏宅に於て一つの聖書翻譯委員が設けられ、ブラウン氏を委員長としてヘボン・グリーン、奥野、松山の諸氏が日々新約聖書の翻譯に従事して居たのが、追々と完成期に近附いて居たが、之とは別に舊約書の翻譯の爲めに、明治九年十月三十日築地在任の長老派宣教師タムソン博士は各派の宣教師バイバー、ライト、シヨウ、ワデル、グリーン、イムブリーの諸氏を招いて東京聖書翻譯委員會の組織の提案をした。議は其設立を可決したが、何分舊約書は浩瀚である爲め各地の宣教師が分擔し、中央には修正委員なるものを設けて各地よりの原稿を取纏める事とした。しかし何分各派宣教師の所在地が遠隔の地であるが爲めに文章の統一が出來なかつたり、譯語上の意見が齟齬したり、研究が不充分であつたりして、遂に折角のタムソン氏の提案は成功し兼ねた。一八七八年(明治十一年)に至つて横濱の新約聖書の仕事が一通り濟んだために、その委員長たるブラウン氏はバプテスタ派のナタン・ブラウン氏、組合派のグリーン氏へボン氏マク

レノ氏等を改めて糾合して、第二次舊約聖書翻譯委員會を組織した。先づ聖書の分擔をしたが、タムソン氏は創世紀、ヘボン氏は箴言、デビッドソン氏は列王記略上下、フアイソン氏は約書亞記、ヴァベック氏は詩篇をと夫々分擔した。其の後四年、略々各分擔の譯が終了した頃。輒ち明治十五年に中央に三人の修正委員をあげる事になつた。ヴァベック、フアイソン、ヘボンの三人がそれである。そのうちヘボン氏を委員長としてヴァベック氏の家に、またヘボン氏の家に、一週四回乃至五回の會合をしては組織的に舊約聖書の編纂に當つた。その間實に七年の長時日でその爲に捧げられた努力は全く思ひ半に過ぎる。ヴァベック氏の詩篇の原稿が氏の手記のまゝにオルトマンズ博士の手許に残されて居るが、最初は黒インクを以てローマ字で書かれ、それを赤インクで訂正し、更に紫インクや青鉛筆で以て縦横に推敲洗練してゐる。殊に詩篇十九篇や二十三篇の如きは全面鉛筆紛綜して殆んど字句を追ふに苦しむ程であるが、残されたローマ字句を辿り辿つて見ると、我々の讀みなれた聖書のあの名文が殆んど其儘に現はれてくる。何といふ努力、何といふ忠勤入念であらう。感激の涙なくして誰が之を凝視できるか。信仰である、捧身である、靈感である。そこに出生地は西歐であり修學の地は北米であらうとも、東洋の言葉しかも複雑極りなき日本語を以て、淑清流麗の古今の名文が氏のペン先から流出でた。信仰か靈感か。天與の才能か全くヴァベック氏が詩篇に表した文章は到底我々日本

人でさへも追従しえないものがある。記念のために氏の原文のまゝをこゝに載録して置かう。

詩の五十四篇（寫眞參照）

一 おろかなる者はその心のうちに神なしといへり。かれらは邪にして、憎むべきとがをなせり。善きをおこなふ人なし。

二 かみはさとさものと神を求むるものと、あるやああらぬやを見んとて天より人の世を見おろしたまへり。

三 かれらはみなそむき、かれらは悉くけがれ、善きことを爲すものなし。一人もあることなし。

四 惡しきことをおこなうものは知覺なきか、物をくらふがごとくわが民をくらひ、また神をよぶことをせざるなり。

五 かれらはおそるべきことのなかりしときにも大いにおそれたり。そは神は汝をかこみしものゝ骨をちらしたまへば、（？）神はかれらを捨てたまひければ、（？）汝かれらをはづかしむべし。

之を見ると吾々の讀む詩篇の獨特の文體は全くヴァベック氏の翻譯文に基てゐることが解る。因にヘボン氏の自譯になつたものには箴言の外に何西亞書、約耳書の二書がある。

聖書翻譯の大事業を完成したヴァベック氏は又もや神學教授の職に歸つたが、その時は最早學院は

Waka 33. (Empress 卍 14.) 11 words

1. Iwaka-nashi mou ne. Sore kakeba
no shiki ni: Kanuki tsuki tsuki tsuki
keteba eg. tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki

2. Kami tsuki tsuki tsuki tsuki
no mo tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki

3. Kami tsuki tsuki tsuki tsuki
koto tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki

4. Kami tsuki tsuki tsuki tsuki
koto tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki

5. Kami tsuki tsuki tsuki tsuki
koto tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki

6. Kami tsuki tsuki tsuki tsuki
koto tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki

7. Kami tsuki tsuki tsuki tsuki
koto tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki

8. Kami tsuki tsuki tsuki tsuki
koto tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki

Waka 34. 4. 卍 15. 11 words

1. Kami tsuki tsuki tsuki tsuki
no mo tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki

2. Kami tsuki tsuki tsuki tsuki
koto tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki

3. Kami tsuki tsuki tsuki tsuki
koto tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki

4. Kami tsuki tsuki tsuki tsuki
koto tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki

5. Kami tsuki tsuki tsuki tsuki
koto tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki

6. Kami tsuki tsuki tsuki tsuki
koto tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki

7. Kami tsuki tsuki tsuki tsuki
koto tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki

8. Kami tsuki tsuki tsuki tsuki
koto tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki
tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki tsuki

白金に移されて居たので、現在の總務部の建物に明治二十五年の春から、日々専任教授として出勤しては舊約釋義、新約聖書緒論、説教學を講じた。又明治二十八年以後は再び學院理事員として經營に關與し、教授時間を減じて宣教に従事したが、横濱在住のジエームス・バラ氏と非常に昵懇で、絶えず傳道の軛を共にした。

永眠 一八九八年(明治四十年)三月十日赤坂區葵町の自宅で、ヴァベック博士は六十八歳を一期に娘に看られながら正午過ぎ極めて靜かに永眠したが、その一ヶ月前の二月六日には娘と共に横濱に出掛けて、バラ氏と三月には伊豆の田舎を傳道旅行すべき日程を打合せたといふ事である。

葬儀は永眠の日より三日の後、芝日本基督教會でタムソン博士を主とし、バラ氏本多氏和田氏マキム氏井深氏等によつていとも崇嚴に行はれ、諸方よりの花輪を以て飾られた棺は、近衛の儀仗兵に護られて青山の墓地に運ばれた。同日各新聞は長文の哀悼の辭を掲載したが、「國民の友」の卷頭には次の様に掲げられた「ヴァベック博士の永眠により我が日本は尊き一人の庇護者教師友人を失へり。彼は和蘭に生れ、亞米利加に學び、日本に教ふ。我が今日の文化は彼による所多し。現代知名の政治家學者中彼の指導によりて學びしもの幾許なるを知らず。氏は我國在住四十年、審さに我が國文化の發芽と盛花と果實とを目撃せり。以て彼の慰みなりしなるべし。されど我等は彼が最後の呼吸に至るまで

我が日本の幸福と安寧とを祈り續けしを忘るべからず。」と。その後暫くにして大隈侯等舊師を憶ふの切なるより、資を集めて大理石の一墓碑を青山に樹立した。

ワイユフ氏と先志學校

先志學校の創設 明治十四年の頃のことである。横濱市の居留地、山の手の土方坂の急勾配の道を約一丁ばかり登つて行くと、樹木が鬱蒼と茂つて居た。その邊まで行くと、眼界が可成に廣くなつてゐて、間近には横濱灣が展開して居り、各國の汽船帆船の碇泊してゐる状景が手にとるやうに見え、少し晴れた日には雲煙の中に房總の山々さへ見渡された。そのこんもりとした茂みの中に、粗末な木造平家の校舎らしい建物と、その真下に寄宿舎らしい建物とがあつた。毎朝毎朝、すぐ上の可成に立派な石造の家から、體軀の大きい年齢三十五六(實は二十五歳)と見ゆる西洋人が現はれて、その校舎の中に入る。それを合圖に寄宿の生徒達が手に手に英語の聖書と讚美歌とをもつて集る。やがて窓を通じて英語の讚美歌の合唱が聞え。聖書の輪讀の聲が續く、そのあとはまた森閑となる、敬虔な祈りが捧げられてゐるためである。再び讚美歌の聲がきこえて、先程の西洋人はもとの石造のうちへ消え

て行く。西洋人が去ると、申し合せてゐるやうに、また十代を越えない二十名近くの寄宿生が、洋服の折目を正して、いそいそと、土方坂を降りて行く、或者は税關へ、ある者は商館へと急ぐのであつた。この學校とも寄宿舎ともつかぬ、横濱山の手四十八番の寮舎、(現在のフェリス女學校の眞下にあたる)之が米國リフオームド・ミツシヨンの創立した先志學校であり、その西洋人とは後のワイコフ博士である。

講堂と寮舎の二階とは廊下續きになつてゐる、その寮舎には六室程の宿室と、賄部屋とがあつた。そこには前記の、晝間は役所や商館に勤務しては、夜は洋學を修めようとする青年が二十名程宿つてゐたのである、糸我といふ信州上田の人で多少國漢文の素養のある基督教徒が、あとしさんといふ妻女と二人で、甲斐々々しくその寮生の食事や衣服の世話をしてゐた。夕刻になると市街から寮生達が三々伍々と歸つて来る。食事を濟せて七時頃になると、合圖の鐘がなる。寮生は揃つて講堂に入るのであるが、その時分までには、街の方々から十四五人の外來の學生も集つてゐる。やがて前記の西洋人が、その講堂に入つてきて、黑板の前に立つて、英語會話、英語作文、音讀等を教へる。當時二十歳の星野光多氏は、寮舎の二階の一室に居られて寮生の監督に當る傍ら、英語譯讀を擔當して居た。また熊野雄七氏の嚴父熊野與氏亨堂と號す儒者が一週二晩位來られては漢學の講義をされた。

ワイコフ氏の爲人 先志學校はがやうに小さな學寮であつたが校長ワイコフ氏の人望は甚深なものであつた。まづ六尺豊かで、肉附の豐滿な體軀、著しく太い頸、高くて恰好のよい鼻、その奥に炯々として輝きながら限りなき柔和さを現はしてゐる大きな青い眼、それを縁どつてゐる地味な黒い青銅の眼鏡、高い額、その上に房々と稍無雜作に櫛けづられてゐる暗黄色の髪、健康そのものゝやうに血色がよくて威嚴のある稍圓き顔の輪廓、響きがあつて氣品のある太い聲、之等の具象的條件はまづこの校長に逢ふ程の人々に何となく畏敬の懷ひを抱かしめるに充分であつた。然しワイコフ氏の内なる尊さは、この立派な表面的條件も及ぶものではなかつた。先づ同校長の心情は徹頭徹尾基督教的教育家のそれであつた。一切の才幹はその使命の爲に捧げ盡されてゐた。もし彼れに野心があつたとすれば、それは主の御旨に飽くまでも忠順に、神國建設のため異教國で育英の事業に中らうといふ事であつた。彼れの頭腦の明晰鋭敏であつた事は、彼れが往年母校たるラットガルス大學で物理學の教授をしてゐた事に調しても明らかである。また彼れが優秀な教育家であつたことは、渡來の直前ラットガルス大學の豫備校々長の椅子を占めてゐた事跡によつても想像される。

ワイコフ氏の門下の一人が述懐して彼れは嘗て怒氣を帯びた言語を發したことはなかつたが、生徒は一人として彼れを侮るものはなかつた。またこの學校長に命ぜられたことは誰一人これを等閑にす

るものもなく蔑視するものもなかつたと。之を以て想見すると、彼れは正しく威ありて猛からず努力なくして人心を收攬しえた典型的な紳士また教育者であつた。彼れはまた教授の務めを果す點に於ては、個人教授、團體教授の場合を論ぜず、實に孜孜として倦むことを知らなかつた。英作文の幼稚なる間違ひを一々丹念に修訂添則し、言葉の概念を學生に會得せしめるために手振身振を持つて飽かず努める點、讚美歌を教ゆるに自らタクトを取つて微細なる注意を拂ひながら節音を指導すること、眼光紙脊に徹するの深い洞察を持つて、自らには専門外なる、文學上の作品を嚙碎味了して塾生に會得せしむる事、而も朝夕塾生とともに敬虔なる禮拜をなして、自らに全能者の存在、基督の神聖、人間の兄弟性を學生に感得せしむること、實際彼れは嶄然として頭角を現はしてゐた我基督教々育界の名教授であつた。

明治十四年の春、ワイコフ氏は日本に渡來して、その秋からこの先志學校の育英事業に中つたのであつたが、それがワイコフ氏にとつて我日本に於ける最初の育英の試みであつたかといふと、さうではない。事ここに至るまでには、ワイコフ氏には種々の準備が與へられて居り、日本の人情風俗、ことに青年の氣風に關しては相當に了解の出來てゐたものである。以下井深博士の述べられしワイコフ氏の略歴によつてそれを知ることとする。

ワイコフ氏略傳 マルテン、エヌ、ワイコフ先生は北米合衆國ニウゼルシート州の人なり、西曆一千八百五十年四月十日ミドルブシ町に生る、嚴君ゼコブ・ワイコフは農家なり。先祖は第十七世紀に於て和蘭より米國に移住したりと云ふ。

先生は郷里の小學校を卒業シラトガルスカレジに入學するの志を立て一千八百六十七年に先づ其豫備校に入り翌年滞なくカレジに入學したり、先生は少年の時より學業に熱心なるのみならず、神を敬ぶの念篤く十五歳の時信仰を告白して教會に加入したり。且つその大學に入學する目的も卒業後神學を修めて牧師たらんとするにありき。

ラトガルスカレジに學ぶこと四年首尾よく規定の試験に及第し學術優等の名譽を以て卒業したり。是れ實に一千八百七十二年にして先生は方さに二十二歳なりき。然して此に特に注意すべき一事あり、即ち先生は卒業式の翌日直ちに日本に向て出立したる事なりとす。其理由如何となれば是より先き越前福井藩主は後に「ミカドス エムバイヤー」の著者として名を知られたるグリフィス氏を招聘して藩校の英語教師たらしめたり。然るに同氏は或る事情の爲に同校を辭するの必要を生じたれば、適當なる後任者を紹介せられんことを氏の母校たるラトガルスカレジに交渉したり、此に由りて同校の教授會は種々詮議の上遂に先生を最も適任者と認めて推薦したるなり。其時未だ二十二歳の青年を此の

如き責任ある地位に推擧するは如何のものにやと異議を唱へたる者ありしに校長チャムベル氏は我は彼が人物を知れり、決して氣遣ふに及ばずとて動かざりしと云ふ。此に由て之を觀るも先生の溫厚篤實にして好く人を容るゝ雅量あると共に人の信任に背かざるの節操とは早く既に先輩の間に知られたりと見ゆ。

斯の如く先生は卒業の翌日即ち千八百七十二年六月二十日母校を辭し海陸無事同年即ち明治五年七月二十四日横濱に上陸し、東京に數日を費して後直ちに越前福井に赴き同藩の青年學生に英學を教授したり。然るに翌年文部省の招聘に應じ教育顧問として來朝したるモルレー博士なる人あり同博士夫妻の一行中に、ミス アンナ シー・ペーヤルドと云ふ年若き一婦人あり、是れ即ち今のワイコフ夫人にして到着の當日東京に於て華燭の典を擧げられたり。

先生は爾來福井の英學校に於て教鞭をとること二年期滿ちて歸省せんとしたるに、明治政府の懇請に由り、新潟英語學校に於て教授することとなり此處に留ること二年然して後東京英語學校に轉じ、此處に教ゆること滿一年明治十年に至り一旦日本を辭して歸國したり。歸國後は母校たるラトガルスカレッジの講師として物理學を教授し一年の後同校教授會の懇請に由り更にサンマルビルと云ふ町に一の大學豫備校を起し、其校長として三年間育英の業に従事したり、然るに明治十四年に至り米國リフ

オームド教會は横濱に一の英學校を設立せんとするの計畫あり同教會の外國傳道局は其創立者を求めて先づ第一に先生を以て最も適任者と認めたり。依て先生は其招聘に應じて再び來朝することとなり同年横濱に來りて一の英學校を創立したり、之を名けて先志學校と云へり。

この先志學校に入塾してゐた人々の氏名は不幸にして知る由はないが、現第一外國語學校々長村井知至氏、前札幌農科大學教授和田健三氏、前陸軍大學教授野矢丈夫氏、實業家正村正氏等が在學してゐたことは事實である。

ところが此の先志學校の存續は極めて短期間であつたといふのは、同校を支持してゐるリフオームドミツシヨンが、プレスビテリアンミツシオンと日本に於ける傳道及び育英の事業に於て緊密なる提携をなすに至つた結果、この先志學校を、明治十六年九月に至つてプレスビテリアンミツシヨンの經營する東京の築地大學校に合併することゝなつたからである。これより先、明治十六年の一月に、横濱の共立女學校の月曜の夜の集會を發端として、日本全國に渉る最初の大リヴイヴルが燃焼しそめた。そのリヴイヴルに觸れて奮然決意する處があつて星野光多氏は生涯を傳道に捧ぐべく、同年七月先志學校を辭し、上州高崎の地に赴いた。その歳の九月である。先に神學校經營に於いて協力の實を擧げたプレスビテリアンとダツチリフオームドの兩ミツシオンは、普通教育に於ても互ひに協力しようと

いふ事になり、先志學校は東京の築地大學校に合併することになった。ワイコフ氏はその夏一家を舉げて東京築地十八番に移つてきた。

十二 東京一致英和學校

創設 築地大學校の幹事として年齢僅か十七歳の服部綾雄氏が就任し、石本氏が殆んど同じ年輩で既に日本の英語界の重鎮として自らも任じ、他人も許して教鞭を取つて居たが、その築地大學校の命脈は極めて短かゝつた。といふのは、前述の横濱先志學校が、明治十六年愈々職員生徒共に築地大學校に合體することゝなつたからである。

築地大學校の玄關の鴨居の上には櫛の横看板がかけられて居た。それは明治十三年の頃、芝露月町教會の牧師をして居た極めて能筆の安川亨氏が「築地大學校」と揮毫したものであつた。その看板が明治十六年の九月に至つて取りはずされて、墨痕新しく「東京一致英和學校」と書換へられるに至つた。同時にエム・エヌ・ワイコフ氏が教授として加はることになり、野矢丈夫氏、和田健三氏、正村正氏等が學生として横濱から越して來た。同時に從來の豫科三年本科三年の課程が、豫科二年、本科四

年と改められ、其の他の學制に就ても一段の進歩を來すに至つたが、それは主として若き乍らに經綸の才に更けてゐた服部綾雄氏の方寸から出たものゝやうである。

名稱が東京一致英和學校と云ふのは、云はずもがな從來の築地大學校の經營者であるプレスビテリアン・ミツシヨンと先志學校の經營者であつたダッチリフオームド・ミツシヨンが提携するに至つたことを記念せんが爲めである。その合併の年に發行された學則を見ると、校長といふ名前は削除されて從來の兩校の校長バラ氏も、ワイヨフ氏も一個の平教授として名前を連ねて居る。それはこの一致協力に記念するため、その後の學校の管理は凡て合議制によることゝなつたのではあるまいか。兎も角一致神學校にも校長はなく、明治十九年の明治學院創立當初に於ても院長も總理も推戴されて居なかつたといふ事は明治學院の發達史の面白い特色である。幹事とは庶務を管理して對社會的にその學校を代表するものであつた。

當時の在學生は合計百三十八名であるが、それは所謂本科生丈けで、豫科生としては尙ほ五六十名を數へた。間口十間の校舍として之れ丈けの學生を收容するのは、無論最大限であつた。それで、どうしても何處か適當な場所へ豫科生丈けを收容すべき校舍を建てる必要を感じた。之に就いて大いに劃策する所のあつたのは矢張り服部綾雄氏である。十六年の冬から徐ろに準備をして、十七年の春、

一つの學校を神田淡路町二丁目四番地に起すに至つた。それは「英和豫備校」と云つて、一致英和學校の豫科に當るものである。それ故嚴密に云へば、この二つを合併して始めて東京一致英和學校と云ふべきであるが、從來の學院の歴史では、後者を一つの獨立した學校のやうに遇してゐる。それで便宜上この豫備校のことについては稿を改めて詳述することとし、こゝには一致英和學校の陣容と校則並びに合併當時の在學生氏名とを紹介することにする。

東京一致英和學校規則

○學 曆 (明治十五、十六年)

九月十四日	秋期入學試業	同	十五日	同
同 十七日	同 學業始ル	同	十一月三日	休業 (天長節)
同 二十三日	同 (新嘗祭)	同	十二月二十日	秋期 試業
同 二十一日	同 學業終ル	同	同	冬期 休業
一月 四日	同 入學試業	同	同 五日	同
同 六日	同 學業始ル	同	同 三十日	休業 (孝明天皇祭)
二月 十一日	同 (紀元節)	同	三月二十九日	冬期 試業
同 三十日	同 學業終ル	同	同	春期 休業
四月 六日	同 入學試業	同	同 七日	同

東京一致英和學校

同 八 日	同	學業始ル	六月二十八日	同	試 業
同 二十九日	同	學業終ル	同 三十日	同	演 說
七月一日	同	卒業式			

○教員及職員

教 授

數 學	ジョン、シー、バラ	米國(當時歸國中)
心理學史學	マスターオブアーツジェームズマコウレイ	米國
物理學化學	マスターオブアーツエム、エヌ、ワイコフ	米國
英語學道德學	缺員	(本期米國ヨリ來ル)

助 教

英 語 學	オルリー、ベントン	米國
譯 讀	石本三十郎	長崎
漢 學	小林信近	千葉
和 學		
幹 事	服部綾雄	静岡

○編制及ビ教旨

第一條 本校ハ在日本米國プレスビテリアン及リホームド教會傳道會社ノ管轄ニ屬シ周全ナル英學ノ著學科ヲ教授シ之ニ加ルニ和漢學ヲ以テスル所トス

第二條 本校ハ生徒卒業ノ後更ニ高等ノ文學又ハ學術ヲ講究シ且國民タルノ義務ヲ盡スニ適應セル諸學科ヲ教授シ實際事ニ臨テ能ク之ヲ處スルノ才能ヲ養成スルヲ旨トス但唯生徒ノ智育ノミニ注意セズ大ニ德育ニ力ヲ盡シ智德兼備ノ學士ヲ養成セン事ヲ期ス而テ其修身道德ノ基礎トスル所ハ固ヨリ基督敎ノ眞理ニ由ル者トス

○學科課程

第一條 本校ノ學科課程ヲ四ヶ年トシ之ヲ前後ノ工科トス。前科ノ生徒ヲ第一年生及ビ第二年生トシ後科ノ生徒ヲ第三年生及ビ第四年生トス

第二條 英學科ハ生徒ヲシテ英文ヲ作り之ヲ譯スルノミナラズ自在ニ之ヲ語ルコトヲ得セシメンガ爲メ教場ニ於テハ必ズ英語ヲ用キルモノトス

第三條 英學科ノ教授ハ可成的口授實驗ヲ以テシ參考ノタメ傍ラ適當ノ教科書ヲ用ユ

第四條 學課中英語ヲ以テ諸學科ヲ修ムルノ方法完備セリト雖モ猶生徒ヲシテソノ學ヲ大成ナサシメンガタメ漢學科ヲ設クル者ナレバ生徒ハ怠ラズ勉勵スルヲ要ス

第五條 和學科ヲ設クル所以ノ者ハ生徒ヲシテ古今ノ和文ヲ了解シ且眞正ノ日本文ヲ作ルコトヲ得セシメンガタメナリ、本科ニ於テハ和文文法和學史、和學書講語作文等ヲ教授スルモノトス

第六條 學科並ニ其課目左ノ如シ

第一 年

課目	第一期	第二期	第三期
文 學	文法作文 米國史	同 佛國史	同 英國史

東京一致英和學校

理學	文學	課目	和漢學	聖書	數學	物理學	文學	課目	和漢學	聖書	數學	物理學
化學	修辭、萬國史 文明史、道德學 耶蘇徵證論	第三年	史記列傳論語 物語日記	使徒行傳	幾何	物理	日耳曼文 作史	第一期	日本政記 文明史略 文法物語	福音書	代數	自然地理
同上	同上	第二期	同上	同上	同上	同上	希臘史	第二期	同上	同上	同上	同上
同上	同上	第三期	同上	同上	同上	同上	羅馬史	第三期	同上	同上	同上	同上

數學	三角法	同上	同上
聖書	舊約史	同上	同上
和漢學	日記史傳 左傳孟子	同上	同上
課目	第四年	第一期	第二期
文學	修辭 哲學 心理學 附論理學	同上	同上
理學	化學的物理学	同上	同上
數學	微積分	同上	同上
和漢學	和歌、史傳 大學、中庸 文章軌範	同上	同上

○別科

第一條 別科ハ左ノ課目中一課目又ハ數課目ヲ選ビテ專修セント欲スル者ノタメニ設ク即チ別科課程左ノ如シ

- 音 樂
- 簿 記 法
- 經 濟 學
- 萬 國 公 法

東京一教英和學校

- 第二條 別科生ハ教員先ヅ學力實ニ所選ノ課目ヲ學修スルニ堪フルヤ否ヲ査定シタル上許否スルコトトス
- 第三條 簿記法ハ生徒十名以上經濟學萬國公法ハ同六名以上ニアラザレバ教授セズ
- 第四條 別科專修ノ期限ハ各一ケ年トス

○入學及退學

- 第一條 入學ヲ望ム者ハ每期ノ始メニ施行スル入學試業ニ合格スルニ非レバ許サズ
- 第二條 入學試業後入學ヲ望ム者ハ教員ノ意見ニヨリ之ヲ許否スルコトアルベシ
- 第三條 本校第一年級ニ入ル者ハ齡十四年以上ニシテ豫備校卒業ノ者若クハ卒業者ニ等シキ學力アル者タルベシ
- 第四條 第二年以上ノ級ニ入ルヲ望ム者ハ其入ラントスル級ニアル生徒ノ既ニ履踐セル諸課目ノ試業ニ合格スルヲ要ス
- 第五條 入學ヲ望ム者ハ第一號書式ノ入學願書ヲ差出スベシ。但シ豫備校ヨリ進入スルモノハ入學願書ヲ要セズ
- 第六條 入學志願者ニシテ他ノ校ヨリ來ルモノハ其校ヨリ退學證書ヲ持參スルヲ要ス。
- 第七條 入學ノ許可ヲ得タル者ハ第二號書式ニ準ジ保證人連署ノ上在學證書ヲ差出スベシ。
- 第八條 保證人ハ二十年以上ノ男子ニシテ東京府内ニ住シ一家計ヲ立ル者ニ限ルベシ。保證人若シ宿所轉移或ハ印章ヲ改ル等ノ事アル時ハ速ニ届出ツベシ。
- 第九條 外來生疾病或ハ止ヲ得ザル事故アリ缺課スルトキハ成ベク速ニ保證人ヨリ其事由ヲ詳記シタル届書ヲ差出スベシ尤モ疾病ナレバ醫證ヲ添ヘ其旨届出ベシ、萬一無斷缺課スルコト四週間以上ニ及ブトキハ其事故ノ如何ニ拘ラズ退學ノ者ト視做スベシ。但シ學生ニシテ臨時下宿通學スルモノモ亦本條ニ準ズルモノトス。
- 第十條 生徒疾病ニ罹リ或ハ其他止ヲ得ザル事故ニ由リ退學セント欲スルモノハ必ズ其事由ヲ詳記シ保證人連署ヲ以テ願出ベシ但シ疾病ナレバ醫證ヲ添テ願出ベシ。

第十一條 一旦退學セシモノ再ビ入學ヲ望ムトキハ新募生ト同一ノ手續ヲナスベシ

第十二條 生徒若シ怠惰不行狀又ハ校則ヲ犯ス等許スベカラザルモノト認ムルトキハ直チニ退校ヲ命ズ

〇 塾 則

第一條 塾生ハ先ツ幹事ノ認許ヲ得ルニ非ザレバ疾病ノ故ヲ以テ缺課スルコトヲ許サズ。但シ病氣ニテ缺課シタル日ハ外出ヲ禁ズ
若シ醫師ノ診察ヲ請ヒタキモノハ其旨幹事ヘ届ケ、歸塾ノ節醫證ヲ差出スベシ。

第二條 一學課タリトモ無斷缺課スル者ハ其故ヲ詳記シ教員ノ認許ヲ得ルマデハ停學セシムベシ。

第三條 塾生外出セント欲スルモノハ必ず休憩時間或ハ土曜日ニ於テスベシ。課業及自修時間ハ如何ナル事故アルモ外出ヲ許サズ

但父母及保證人ノ疾病ニテ至急ヲ要スル時ハ此限ニアラズ

第四條 午後六時ヲ以テ本校ノ門限ト定ム故ニ此時ヲ限リ休憩時間ト雖モ塾生外出ヲ許サズ

第五條 塾生止ヲ得ザル事故アリ缺課セント欲スル時ハ保證人ヨリ其事由ヲ詳記シタル願書ヲ差出スベシ、詮議ノ上之ヲ許スコト

アルベシ

第六條 方正ノ慣習ハ健康及萬事ノ進歩發達ニ補益アルモノナレバ塾生ノタメ課業時間ヲ定ムルコト左ノ如シ

午前五時ヨリ六時迄

晨 起

同 六時ヨリ七時迄

自修時間

同 七時ヨリ八時十五分

朝餐及休憩

同 八時十五分

講堂ニ集ル

正午十二時ヨリ午後一時迄

聖書授業

同 九時ヨリ正午十二時迄

和漢學授業

同 四時三十分ヨリ六時三十分迄

午餐及休憩

同 午後一時ヨリ四時三十分迄

英學授業

同 六時三十分ヨリ七時三十分迄

休憩

同 五時

夕 餐

聖書授業

同 七時三十分ヨリ九時三十分迄

自修時間

東京一致英和學校

九時三十分ヨリ十時迄

休 憩

十時

就 眠

第七條 校内ノ戸障子及器物等ヲ毀損スル者アラバ修繕費ノ全額ヲ償納セシムベシ

○生徒費用

第一條 入學スル者ハ東修金三圓ヲ納メ毎學期受業料金三圓ヲ納ムベシ

第二條 塾生ハ毎學期室料トシテ金一圓油料トシテ金五十錢ヲ納ムベシ

第三條 別科生ハ一課ニツキ毎學期受業料金一圓ヲ納ムベシ

第四條 受業料室料等ハ毎學期ノ始メ十日以内ニ該一學期分ヲ納付スベシ、而テ納付後如何ナル事故アリテ缺課又ハ退學スルモ既

納ノ分ハ還付セザルモノトス

第五條 月俸ハ物價ノ高低ニ從テ定リナシト雖モ大凡金三圓乃至金三圓三十錢ヲ通例トス其金ハ毎月末期方へ拂フベシ

生徒姓名 (明治十五、十六年)

飯野友藏 (秋田)	西 小司馬 (熊本)	岩崎 武二 (鹿兒島)
堀越充三 (東京)	伊藤吉郎 (福岡)	富安保太郎 (福岡)
稻澤謙一 (島根)	千松美朗 (千葉)	池島龍太郎 (長崎)
銚子友二郎 (廣島)	早川伊三郎 (東京)	神崎 一 (福岡)
林 西二 (東京)	金田辰吉 (茨城)	馬場銚作 (東京)
加瀬郷次 (千葉)	二階堂直之助 (鹿兒島)	横山隆仙 (石川)
外波峯三郎 (愛知)	芳野市郎 (東京)	戸田恒馬 (大阪)
高井藤熊 (山口)	岩橋四郎 (和歌山)	高崎安彦 (岡山)

岩崎瀧雄 (福岡)	竹下謙介 (山口)	稻葉晃 (東京)
田中又太郎 (岡山)	池田長吉 (神奈川)	伊達基理 (札幌)
長谷川義純 (東京)	寒田勝平 (福岡)	林甲子次郎 (栃木)
神原金藏 (岡山)	林與太 (東京)	菅野照太郎 (東京)
辛島廣治郎 (大分)	中牟田利良 (長野)	川田喜三郎 (鹿兒島)
中原尙德 (鹿兒島)	吉田光衛 (高知)	長井於菟四郎 (東京)
高林甲子郎 (山口)	永田善之助 (大阪)	高室善平 (東京)
直井市介 (千葉)	高山晉熊 (熊本)	村上浩 (長野)
田中富士太 (東京)	内田糸太郎 (群馬)	田中新十郎 (鹿兒島)
宇野澤義晴 (東京)	谷村一佐 (山口)	鴉澤清輔 (千葉)
土屋謙三 (福井)	納所辨二郎 (東京)	都築正勝 (東京)
中川愛咲 (東京)	中村錠太郎 (静岡)	中村芳三郎 (神奈川)
中崎鏡男 (石川)	岡見松五郎 (大分)	長井喜助 (鹿兒島)
大槻得二 (福島)	長谷清吉 (福岡)	久能三輪 ()
永澤小兵衛 (宮城)	黒岩休太郎 (鹿兒島)	村井大藏 (京都)
安村治忠 (山口)	牟田武一郎 (長崎)	安井勝治 (兵庫)
内山宇之助 (神奈川)	柳澤直治 (長野)	植村正度 (東京)
山神省三 (東京)	野矢武夫 (福島)	増田秀雄 (静岡)

東京一致英和學校

大場百郎 (千葉)	益山新吾 (鹿兒島)	岡部長春 (大阪)
岡部明二 (東京)	岡田福藏 (神奈川)	岡見義治 (東京)
小野澤孝太郎 (栃木)	江副保太郎 (佐賀)	熊谷駒之助 (東京)
足立 巽 (東京)	葛岡宗吾 (東京)	安藤進一 (東京)
矢野保助 (愛媛)	安藤元太郎 (愛知)	安村治義 (山口)
青山彦太郎 (愛知)	柳内義之助 (札幌)	淺井清五郎 (東京)
山中光五郎 (岡山)	齋藤精太郎 (東京)	松井米吉郎 (東京)
佐藤喜太郎 (鹿兒島)	増田貢米 (福井)	酒井醇太郎 (新潟)
増本多美助 (兵庫)	木下隆三郎 (東京)	吹野宗助 (神奈川)
藤岡照太郎 (三重)	河野通二 (鹿兒島)	後藤廣太郎 (岐阜)
相川富三郎 (長崎)	水上貫一 (静岡)	赤坂和三郎 (埼玉)
清水由松 (東京)	荒井 清 (東京)	白石熊藏 (長崎)
安東折枝 (福岡)	白洲純平 (兵庫)	青木愼九郎 (東京)
宍戸造酒太郎 (宮城)	有馬良橘 (和歌山)	平田孝二郎 (鹿兒島)
佐野確太郎 (福井)	日向新五郎 (青森)	佐久間 延二郎 (静岡)
森田吉之助 (鹿兒島)	坂元重俊 (鹿兒島)	毛利英輔 (鹿兒島)
岸野次郎作 (埼玉)	望月開作 (静岡)	喜多島 又四郎 (長野)
北島 互 (福井)	北村七郎 (佐賀)	北村達治 (新潟)

宮武熊太郎 (愛媛)	菅沼久次 (東京)	篠原松造 (東京)
白洲文平 (兵庫)	正村正 (愛知)	平田常彦 (鹿児島)
平山民成 (鹿児島)	廣川廣四郎 (新潟)	森脇信夫 (東京)
持田唯三郎 (埼玉)	關口長一郎 (群馬)	杉森此馬 (福岡)
鈴木(松井)安三郎 (札幌)	杉文二 (東京)	鈴木巳之吉 (千葉)

以上百三十八名

共勵會 築地大學校以來の談話會に相壁をなしてやはり明治十五年の頃から一致英和學校時代へかけて傳統して來た學生の團結が今一つある。それは共勵會である。講談會が學術を主とするに對して之は飽くまで基督教信仰を中心としたもので、今日から見れば基督教青年會とも云ふべきものであつた。その會員の大多數は講談會の會員である。不幸にしてその資料としては明治十六年二月以降のものよりない。明治十七年十一月の記録によつて、之は既に東京一致英和學校と改稱してからであるが参考のため、會員の氏名を掲げて見よう。

服部綾雄、石本三十郎、馬場銚作、中川愛咲、青山彦太郎、増田直米、橋本好友、堀越充三、白石連、鈴木巳之吉、森脇信夫、岡田福道、北島互、北島研三、稻澤謙一、濱口初造、荒井清、篠原松三、北村達治、内田糸太郎、内田清太郎、吹野惣介、吉田光衛、納所辨二郎、内山卯之松、藤澤玄吉、江副、岡部長春、林西二、池島瀧太郎、安井勝治、藤島三郎、マコーレー、ジョンバラ、ワ
イコッフ、天野三郎、白洲文平、平井七三郎、杉森此馬

地方會員

山岡邦三郎、増野悦奥（以上西京同志社）、清木由松、關口長一郎、高林甲子二郎、和田健三、柳内義之進（以上札幌農學校）、大島曹太郎（横須賀）、永澤小兵衛（陸前三日町）、富安保太郎（福岡）

海外會員

熊谷駒之助、安藤元太郎、安藤進一、松井米吉郎、菅野照太郎、野矢丈夫、岡見義治、北島互、藤澤玄吉

會合は毎週一回、最初は毎土曜日の午前九時から催されてゐた。按ふに講談會のあとの時間を當てる心算であつたであらう。ところが何分にも講談會の辯士の意氣が上りすぎて時間が長くなり勝ちのため、あとから夕刻に移した容子がある。明治十六年十月六日の記事は左のやうになつてゐる。

午前九時本會ヲ開ク、會長石本祈禱、馬太傳五章十三——二十、二十八章十六——二十迄ヲ朗讀ス石本演説

書記報告次ニ會計報告アリ、衆員之ヲ受ケ可トス

野矢丈夫佐藤——入會ヲ乞フ衆之ヲ許ス

次ニ役員改選

會長服部綾雄、書記杉森此馬、會計熊谷初之助、商議員石本三十郎、關口長一郎、野矢丈夫

前會長席ヲ退キ新選會長席ニ就キ議事ヲ開ク

第二條中ノ築地大學校ヲ一致英和學校ト改ム

安藤元太郎、勸議學校教會設立ヲ計ランタメ離時會（ ）ヲ開カン事ヲ乞フ衆員同意可決ス

石本勸議最早十一時ナルヲ以テ解散ヲ乞フ、衆員同意會長祈禱ヲ以テ閉會ス時十一時半

この記事に見える學校教會設立の儀は段々と聲を高めて、その後中會まで提案されたが、中會では之を許さなかつたといふことである。ともかくこの時分は日本の信仰勃興に臨んでゐたため、築地の青年の宗敎心にも中々に旺んなものがあつて毎回この共勵會には二十乃至三十名の出席があつたやうである。

一三 神田英和豫備校

創設 大震災直前の萬世橋停車場はよい建物であつた。ルネッサンス式と云はふか、赤煉瓦に花崗岩石材を配置したもので、それが菱形のスレート葺の屋根によく調和してゐた。正面には廣瀬中佐の銅像があり、右斜の肩には石造の大きな神田郵便局がどつしりと構えてゐた。震災後萬世橋停車場は眞に殺風景なコンクリート造りに變つたが、それにも増して衰れなのは神田郵便局である。震災直後の俄か造りのバラックを今尚ほ保ち續けて、くずれた石材が四邊に尙ほ散ばつてゐるやうな仕末である。その神田郵便局の眞後に幅十間もあらうかと思はれるアスファルトの立派な道路が、小川町に向つて斜交に引かれてゐる。小川町に向つて最初の二丁目は連雀町で、二番目の町の右側が淡路町二丁

目である。その二丁目は三番地と四番地とになつてゐるが、手前の一角近頃丸善の文房具の倉庫と賣店になつて居る邊り、其處が四番地である。その所は、明治十七年九月に我が明治學院の前身の一つ英和豫備校の建てられた場所である。その豫備校とは前述の通りに築地一致英和學校の豫備門であるが、何故其處にさういふ施設をするに至つたかといふ理由には大體二つある。第一は前にも云つた通り、一致英和學校の建物が狹隘に失した事、第二は餘りに築地が都心に離れて居るが爲めに、學生の通學に不便なためである。服部綾雄氏の個人の履歷書の一節に『明治十七年八月府下神田區淡路町二丁目四番地ニ英和豫備校ヲ設ケテ、以來同校に校長タリ』と記して居る所から推量しても、又、杉森此馬氏から熊野雄七氏に宛てた書信中に『豫備校の開設は一致英和學校の一大革新事業に有之候事と存じ候』とあるより見ても、時勢の日進月歩の進展と歩調を合せるが爲めには、どうしても都心に出て、積極的政策をとらなければならぬといふ、服部氏の想念が之を企だてしめたのに相違ない。

然しながら何分突然の企であつたから、學校とはいふもの、從來活版工場であつた陋屋を速急に改築した頗る粗末なものであつた。教師は服部氏の外に當時二十三歳の石本三十郎氏、同じく二十七歳の杉森此馬氏、四十五歳のバラ氏、三十四歳のワイコフ氏、其他マコウレイ氏、ハリス氏、マコウレイ夫人など、一致英和學校の教師達が、交々來たものであつた。かやうに校舍は見すばらしかつたが

何と云つても教師の大部分は白人であり、邦人とても當時には一騎當千の傑出した少壯英學者であつたから、忽ち都下の書生達の注意を引いて立錐の餘地なき程學生は集つた。しかも其の中には桐島俊一、多田素、水蘆幾次郎、宮地謙吉の如き人々や、學院と淺からぬ關係をもつた人々が居つた。けれどもこの豫備校の命脈は極めて短かつた。といふのは明治二十年九月に至つて、荏原郡白金村に現在の明治學院が創設されるやうになつて、本校は他の二校、即ち東京一致神學校、東京一致英和學校と共に、白金に移されたからである。

英和豫備校規則

第一條 豫備校ハ本校（一致英和學校）ニ屬シ入學ヲ志ス初學者ノタメニ之ガ豫備ヲナシ英語學和漢學ヲ教ユル所トス
 第二條 豫備校ノ課程ヲ二年トシ此二年ノ課程ヲ卒業スルモノハ本校第一年級ニ入ルヲ得セシム即チ學科課程左ノ如シ

課目	第一 年		
	第一期	第二期	第三期
文 學	音讀、譯讀 會話、習字	同 上	同 上
數 學	算 術	同 上	同 上
聖 書	福音書	同 上	同 上
和 漢 學	文法、物語、十八史略 劉向新序	同 上	同 上

神田英和豫備校

第 二 年

課 目	第 一 期	第 二 期	第 三 期
文 學	音讀、譯讀、會話 習字、作文	同 上	同 上
理 學	地 理	同 上	同 上
數 學	算術、幾何	同 上	同 上
聖 書	福音書	同 上	同 上
和 漢 學	文法、日記、日 本外史、蒙求	同 上	同 上

第三條 豫備校第一年級ニ入ルベキ者ハ小學校卒業ノ者若クハ該校卒業者ニ等シキ學力アルモノタルベシ
其他ノ箇條ハ都テ本校ノ規則ニ從フ

以下の氏名は現在學院に残つてゐるだけの在學證書によつて調査したものである。無論之以外にも
在學生のあつたことは事實である。

生徒姓名(明治十八年)

小倉 銳 喜 (十七)	太田 正 平	松平 鐵太郎 (十八)
玉置 琢 夫 (十五)	大城 元 吉 (二十)	星野 元 治 (十二)
(明治十九年)		
津輕 良 次郎 (十五)	桐 島 係 一 (二十二)	堀 内 謙 吉 (十六)

伊藤杉一郎	岡村謙次郎 (十九)	佐久間清次郎 (十七)
柳澤直治	角田三次郎 (十九)	出口晋吉 (二十二)
蘭邊宜穎 (二十八)	木下政次郎 (二十)	加藤敬三
太田恒治 (十八)	山利眞男 (十六)	田中一松 (十六)
下村德策 (二十一)	三宅半三郎	神戸喜一郎 (二十二)
緒方平吉 (十五)	大久保園二郎 (十五)	筒井又七
西邨成美 (二十)	山田百太郎	市川紀元二 (十四)
尾崎文雄 (十四)	石井市太郎 (十八)	中澤敬治 (十九)
鹿子義明 (十六)	高木六次郎 (十六)	箕浦陽吉 (十五)
松崎榮 (十八)	服部房治 (十七)	桑原羊次郎
加藤勝 (十四)	門井佐太郎 (二十三)	島名果一 (十五)
内田次郎 (十九)	宮島愼三郎 (十七)	丹羽但一 (十七)
星野惠輔 (十四)	九富奎二 (十六)	伊東與人 (十五)
倉橋宗次郎 (十三)	熊澤仲次郎 (二十)	石尾三郎助 (十八)
佐原浩 (二十三)	村山初太郎 (十九)	萩原嘉輔 (十九)
山本増吉 (十六)	津田安麻呂 (二十三)	高石泰五郎 (十五)
福原道太郎 (十八)	三浦兔毛次郎 (十九)	關戶敬吉
清水英太郎 (二十)	篠原竹次郎	多田廉太郎 (十八)

女部田德松 (十九)	中島毅之助 (十九)	中村豊治郎 (十五)
渡邊雄之助 (十七)	大橋次郎 (十八)	尾澤鎮平 (十六)
齋藤 萬	前川馬五郎 (十九)	金須 盛 (十七)
津島陳四郎 (十三)	池田龜三郎 (十九)	飯塚猪三郎 (十六)
小原政次郎	高柳二郎	小久保 恭三郎
馬場彦治	鷺津俊三郎 (二十一)	鈴木龜太郎 (二十)
戸田一男 (十二)	齋藤 都 (七)	林 十一 (十七)
松田三郎 (十六)	本間盾吉 (二十三)	今村佐吉 (十八)
川澄 恭 (十五)	粟屋信一	兒玉平吉
十時 元 (十九)	丹羽但一 (十七)	村瀬道三 (十四)
齋藤善吉 (二十)	横田定藏 (十二)	高石泰五郎 (十五)
女部田德松 (十九)	芳野一 郎 (十七)	小出道也 (十四)
加藤 勝	西澤岩太 (二十一)	小原政次郎 (十九)
太田末吉	高崎四郎 (十六)	戸田一男 (十三)
木暮麟一		

英和豫備校の追憶(寄稿)

以下の一文はこの英和豫備校に明治十八年に在學せられた宮地謙吉氏の追憶文である。

東京一致英和學校の豫科として神田區淡路町の二丁目四番地に東京英和豫備校の設立せられた翌年に私は田舎の中學校を卒業して一致英和學校に入學する英語力の不足を補ふ爲とて半ヶ年間この學校に編入せられました、學校と云ふと甚だよいけれども元活版屋の家屋を賃借りしたのでから誠に粗末至極のものでした入口に四疊位の生徒控所があり其左向ふが教室で机は唯今母校賄處にある様なベンチに腰掛けある丈、二階の一部は十二三人を容るゝ寄宿舎がありて其の横に一の教室があるのみで即ち二教室二組で生徒の數は全體で五十人位でした、體操があるでなし理科があるでなければ至て簡便でした、學科は悉皆英語で教授さるゝのみで無口のマツコロー先生がイムブリー先生著のエチモロヂーを、日本語の皆目解からぬバラ先生が算術を、甚だ多辯なミセスマコーレー先生が會話を、其れに日本人としては石本三十郎先生が譯解を教へられたのみで田舎出の私には薩張り解からぬ事のみで當時は誠に閉口でした。學校と云ふよりはマルデ家塾の様なものでした。英語さへ出来れば誰でも勝手な級に入らるゝ様で三十幾つと云ふ朝鮮で一旗擧げて十七年事變に逃げて來た李桂弼君があるかと思へば十四五歳の可愛い酒井清三郎君の様な人も英語をベラ／＼やつていた様なものでした。私が今も忘れぬ二三のことを追想すれば第一バラ先生の算術科の時でした。私は田舎で代數も幾何も三角もやつて來たし且數學は最も得意のものだつたので學校に入つて算術四則雜

題を學ぶと知つて實に驚いたのでした。然し英語が薩張り解からぬから例題はいつも想像でやつたが大概は巧く出來て居りました。處が或日バラ先生に呼出されて一の例題をやらせられました、間違がなければ何事もなかつたゞらうが少し間違があつたと見へて先生が何かペラ／＼注意して下さいました。其の注意の英語が分る筈がないから萬事がトンチンカンでした、先生は愈々親切に早口に何か注意されました。そうなると私の頭は愈々困亂して最早皆目分らぬ事となつた其時先生は大さな聲で *Oh! Stupid boy!* と云はれました其の英語は勿論分らぬが發音を記憶して歸つて字書で探出してからは愚鈍な私も聊か發憤し爾來大に數學に勉めたのでした。今もバラ先生當時の面影が頭に彷彿たる感あるのです。

英作文英會話と來たら又格別で私は其教場に出るのが恐くて身に汗する位でしたが同級の彼の井深老先生の御令弟で後陸軍特別通譯官として日清日露兩戰役に支那人に化けて殊勳あり後擧げられて代議士となられた井深彦三郎君は所謂群鷄中の孤鶴とでも云ふべき乎西洋人と對話せらるゝ様には一同舌を卷いて感歎していました。又同級生に福島縣人で篠崎と云ふ人がいました。えらい達辯家で何か事があればいつでも率先し口角泡を飛ばして辯論するには田舎出の口も開けぬ私等にとりては一の驚異でした。然しこの日本語の雄辯家も *Pro.* と *Con.* との區別が全く出來ぬのでいつも英語

の時間に教師から叱かれ彼れをして噫英語は學び難ひ哉との歎聲を發せしめしは實に皮肉な事でした。彼今如何幸に健在なるや否や。入校後間もない時でした、四疊位の小控所に三月の寒い朝早く登校して三四人のものと一所に火鉢を圍んで始業時間を待つて居ました互に殷動な名も知らぬ者計りですから無言で對座中でした、私が不圖誤つて火箸を弾ね舉げて皆に灰を被ふらするの不始末をしたのでした、傍に居た頭髮蓬々如何にも蠻カラな恐はさうな人が突然『君失禮ぢやないか』とどなつた。不始末をした私は恐ろしくて何と云ふて詫るやも知りませんでした。幸い井門亭と云ふ年上の人が詫びてくれて何事もなく了りましたが田舎から出た計りのものには誠に怖しくて其後暫くは其人が恐くてならなかつた。が不思議でありますか其人は其れから築地の一致英和學校で同級生となり、白金で一所に卒業し後二十幾年かの間母校で同勞者となり今尙特に親愛を忝ふして居る水蘆幾次郎君でしたのは、水蘆君果してこの事を記憶せらるゝ乎否。

朝鮮事件に逃げて來た朝鮮有志家李桂弼君の外二三人の同志が三階の寄宿舎に居ました日を経るにつれ私も段々友人も出來休暇時間等に寄宿舎に出入する事もありました其の内に李某と云ふ最少年の鮮人と親くなりました六月の末でした氏は先輩李桂弼君等の勸戒を退けて當時朝鮮政府からの今歸鮮せば國事犯の大罪を許すとの通知を堅く信じ近日決意歸鮮すとして退校したのでした。私は彼が

近き内に其父母に遭へるとして非常に喜んで私に別れを告げた事が今尙記憶に鮮かであります。而して氏等幾十人を載せた船が釜山に到着するや否や皆捕はれて殺されたと云ふ事を其秋築地の一致英和學校で聞た時は轉た悲惨の情に耐へなかつたのでした。

明治十九年のクラスボーイズ 石本三十郎氏が明治十九年に用ひられたレコードブックには左の様にクラスボーイズの名前が記されて居る。

1st. year.

Ejiri	Banno	Hara	Hanajima	Hoshino	Kurahashi
Kutomi	Miyajima	Niwa	Totake	Uchida	Yoshino
Koide	Shimano	Ishii	Shirasu	Ito	Hagiwara

2nd year.

Fujita	Hakone	F. Hattori	Ichikawa	Itawi	Iwasaki
Kadoi	Kamada	M. Kato	Kawasaki	Kuwabara	Matsudaira
Murase	Nagano	Okada	Ogura	Ota	Takehisa
Wachi	Yasuda	Yoshimura	Totake	Kinnazawa	Okubo

Nishizawa	Okamura	Sakuma	Tanaki	Tamura	Koike
Saito	Matsumura	Hayashida	Masui	Sahara	Ishii
Tomimaga	Takahashi	Nakamura	Ida		

一四 一致神學校の緊縮策とその後

明治十五年頃までの東京一致神學校は前述の通り何れかと云へば雜然と各種の神學生を合體した感
を免れなかつたが、追々と歳を重ねるにつけて、當初の人々は卒業したため、十五年の春にはイムブ
リー氏の指導で大分思ひ切つた整頓を行つた。それは單に對學生の事のみでなく教授會の方でも大い
に校紀を緊縮する方法を取つた。今左に明治十五年一月四日の教授會の記録を摘録して見よう。

出席者 イムブリー、マクラレン、アメルマン (以上常任教授) イ・アー・ミラー、井深梶之助
(以上講師並ビニ助教授)

イムブリー氏祈禱を以て開會を宣す。推されて議長となり。アメルマン氏書記たり。

決 議

一致神學校の緊縮策とその後

一、毎月第一土曜の午前十時定期教授會開催のこと。

二、書記は學生出席簿を調製し、今後入學志願者は必ず教授と面接して直接の申請をなし其申請をさらに詮議の上出席簿に登録すること。

三、學生もし各學年の終りに於て上級の科程を修學せんと欲せば必ず所定の試験を受けしむる事

四、試験を受けざる者は原級に止め、出席不規則なるものには勸告をなすこと。

五、勸告の上尙不規則なる者には退學を諭示する事。

六、學業の成績平均點數四十點以下の場合先づ之に注意し、學年の點數四十點に足らざる場合は上級に進ましめざる事。

是等のことは從來の如く老壯年の學生を對手にしてゐる間は容易に行ひ難いものであつた。期は漸く熟してきたものであつたが教授會がこれを決議する迄には餘程の準備が要つたやうである。

豫科の設置 同月二十六日の教授會では學生の學力平均のために豫科設置が決議された。けれどもこの豫科とは緊急の必要から出來たもので神學初歩と漢文の外、一日三時間宛英語を教授して速急に語學の素養を進展させようとするものであつた。そしてその英語の講師としては小崎弘道氏が招かれることゝなつた。漢文の教師の名は明記されてゐないが創立の始からの山内賞であつたらうと思はれ

る。

學生の學級別 又在學生を明確に級別にした、それは次の通りである。

四年級 加藤敏行、小林格、山本秀煌、太田留助、青木仲英

三年級 坂野嘉一郎

二年級 烏山金八、村井正堂、宮島引太郎、加藤虎彦、武田繁之介

一年級 林武太郎、加藤敏

豫科生 志賀雄吉、早川金平、岩永敏太郎、大谷好藏、吉野市太郎、三宮盛繁

特別生 長老 渡邊利平、長老 菅金藏、長老 倉澤、執事 鈴木勸助、執事 尾崎宗孝

この時分、學生もまた中々緊張して一致神學校懇話會なるものを作つて、學校に邦語部と英語部との二部を組織して貰ひたいと訴へるところがあつたが、教授會の方ではまだ、語學の出来る學生が少數なために之を受納れかねた。

入學試験科目の選定 處が九月より新學年を迎へるに際し優良學生をうるために同年六月一日の教授會で入學試験科目を定めて之を遂行することとした。

和漢文講讀、日本外史、四書評論、八大家文集、算術、代數、地理、萬國史、物理、化學、聖書の

歴史的一般知識

但し有力と認められる學校卒業生は無試験で入學を許された。また同年九月から設けられる英語神學部に入學希望のものには、以上の試験は一切英語でもつて行はれることゝなつた。

英語神學部の制定 従來の豫科生が非常に熱心に英語を修得したためと、今一つは懇話會の要求もあるところから、十五年の九月からは英語神學部を設けた。その學科目は次に述べる邦語神學部の科目中說教學、カテキズム、新約神學、基督傳、道德學を除いて残り全部を英語でもつて講述されることゝなつた。この歳に従來主として築地大學の方に關係してゐたナックス氏が招かれて、英語部の指導に當る事となり、一年の契約でヴァーベック氏の後をうけて教へてゐたミラー氏はやはり新學年も說教學とカテキズムを教へることゝなつた。

邦語神學部科目選定 新學年に際して新たに配當された教授科目は左の通りである。

第一學年 舊約歴史、舊約緒論、基督傳、福音書釋義、ハイデルベルヒカテキズム、新約聖書神學
說教學、道德學

第二學年 舊約歴史、舊約緒論、基督傳、福音書釋義、ハイデルベルヒカテキズム、新約聖書神學
說教學

第三學年 聖書人物論、聖書起原論、使德行傳研究、辨正論、組織神學、教會學、說教學

第四學年 聖書人物論、聖書起原論、辨正論、パウロ書簡研究、教會學、組織神學、教會史、說教學

かやうにして當初の一致神學校を可成的に組織立て、新學年を加へ、入學者を募集したが十八名の志願者をえた。そのうち當年の六月に築地大學を出た服部綾雄氏と飯塚八百太氏が本科一年に入學を許されその他のうち八名は勤勉に登校する旨を誓つて特別生として在學を許された。

緊縮一ヶ年學生の數は著しく減じた。また服部綾雄氏も性格的に神學の修得に適しなかつたためか殆んど出席しなくなつた。明治十六年四月に在學した人々の氏名を記して見ると次の通りである。

加藤虎彦、鳥山金八、長坂忍、林武太郎、吉野市太郎、岩永義太郎、大谷幸造、三宮守重、人見龜司、三浦宗三郎、中須治胤、間宮小五郎、青山准次郎

大體このやうな趨勢でもつて明治十九年の合併期に進んで行つた。明治十八年に卒業生を缺如してゐるのはこの緊縮策のため多くの入學生をえない上、服部飯塚兩氏が途中から退學したためである。

綜 合 編

一 明治學院の創設

三校の合併問題 試みに神學部の同窓會名簿をとつて、明治十九年から明治二十二年に至る四ヶ年間の卒業生の一班を見ると、全く、未曾有の多數で五十五名を算する。又その間の一致英和學校の卒業生の數を見ても、五十二名の多きに達してゐる。これを合すると、百名を超過してゐるが、之以外に二三年間在籍した者、半年か一年修學した者の數はどれ程あつたか知れない。少くも二百二十三名の學生が、明治十六年から十九年までの右の二校の校庭を賑はせてゐたと想像が出来る。

ブラウン塾が東京一致神學校に齎らされた事は、實質的に云へば、退嬰であつたと啞く向も無いではないが、今一段大きい見界から云へば、矢張り、神學部が後の政府公認の一専門學校となる爲めに履まねばならぬ道程であつた。たゞ惜むらくは、創立當時井深氏も植村氏も未だまだ若かつたために

教鞭をとる事が許されてゐなかつた結果日本語の不自由な外人のみがその指導に預つたので、さういふ吐きが起つたのであらう。ともあれ、一致神學校は順調な歩みを續けて、天下に幾多有爲の傳道者を送り出した。

へボン家塾が築地に移されて築地大學校となつた事は無論大きな進展であつた。ジョン・バラ氏の生涯は、他の事業は兎も角、この一時期を劃した事だけでも意義はある。その後横濱先志學校を合併してワイコフ氏を迎へ、一致英和學校となり、益々陣容は整つて學生は集つた。その餘波として神田に豫備校が創設され、ますます大發展をした。しかし、三つの學校のどの一つをとつて見ても、將來東京の屈指の學校となるに相應しい施設をもつたものは一つもない。校舎といひ、地所と云ひほんの苟且でそれ以上發展すべき餘地は少しも無かつた。こゝに於て當事者達が將來を觀望すればする程、築地の不便な事、有する施設の不備な事を感じざるをえない。同時に三學校を合併して、東京市内か或はその近邊に一つの基督教カレッジとして日本に雄飛する學府を創設しようと劃策するに至つたのは當然である。

明治學院理事委員會の設立 三學校を合併するに當つて先づ必要であつたのはその諸學校を經營して行く主體であつた。無論從來の通りプレスビテリアン、リフオームド、スコットランドプレスビテリ

アンの三布教團體が維持してゆくののであるが、經營の局に當るべき主體がなければならぬ。そこで各
 ミッションから代員を選び、日本人をそれに加へて一つの理事員會を組織した。當時は未だ我國には
 財團法人の制度が敷かれてゐなかつた爲めに、その理事員會とても私の契約から成立つ一團體に外な
 らないは勿論である。けれ共、兎も角従來は慢然と協力經營してゐた三學校を一つの明確な規約のも
 とに一括して、瞭然とした主體が瞭然とした方針のもとに此後發展させて行かうと云ふことになつた。
 先づ其の最初の理事員の氏名を列記しよう。

マストル オブ アーツ ジョルジ・ウイリアム・ノックス(北米長老教會)

マストル オブ アーツ マルチン・エヌ・ワイコフ(リフオームド教會)

ジョン・シー・バラ(北米長老教會)

ヂエムス・エル・アメルマン(リフオームド教會)

ドクトル オブ デビニタイ勳三時ギド・エフ・ツアベック(リフオームド教會)

マストル オブ アーツ セオドル・エム・マクネア(北米長老教會)

バチエロル オブ アーツ ヒュー・ワデル(スコットランド長老教會)

マストル オブ アーツ 大儀見元一郎

この理事員の任期とその選出法については、

理事員中外國人ハ日本基督一致教會ニ關係アル外國ミツシヨンノ總會ニ於テ選舉シソノ任期ヲ二ケ年ト定メ本邦人ハ其ノ任期ヲ定メズ若シ本邦人ノ中缺員ヲ生ズルトキハ一致教會ノ大會ニ於テ其ノ補員ヲ指名シ本學院設置者ハ之ヲ選定ス

となつてゐる。之を見ると、外人理事員は其の任期が有限であるが、本邦人は終身である。本邦人理事員に缺員の生じた場合は一致教會の大會から指名されるといふ事になつてゐるが、これは最初の理事員會が日本基督一致教會と緊密な關係をもつてゐた事を示してゐる。外人の理事員は、プレスビテリアン三名、リフオームド一名、スコットランドプレスビテリアン一名となつて三つのミツシヨンが

從四位

井 深 梶 之 助
石 本 三 十 郎
熊 野 雄 七
中 島 信 行
服 部 綾 雄
植 村 正 久

それぞれ代表されてゐる。本邦人の夫れは、凡て一致教會に屬する基督教信徒である事は勿論である。また外人と本邦人の數の比率は同數であり、理事員會に於ける外人と本邦人との權限は全く均等であつた。之等は極く最近の本學院理事會の組織にまで踏襲されてゐた。

明治學院創立案の制定 明治十九年四月二十九日である。築地十七番の一致神學校に於て紀念すべき理事員會が開かれて新設の學府の一切の基礎となるべき *Plan of Organization* 明治學院創立案が制定された。その全文は左の通りである。

明治學院創立案

アメリカプレスビテリアン及リフオーム下兩教會のミツシヨンはスコットランドの一致プレスビテリアン教會のミツシヨンと協議の後、一八八六年（明治十九年四月）二十九日決議されたる以下の事項を協力ミツシヨン會議に陳述せり。

現在の一致英和學校及一致神學校は、之を合併して單一なる主宰の下に來らせ、且つその最高の成功の爲めに外人租借の必要なき市中の場所に移轉するを宜しと認む。これらの案を遂行せしむる爲めに以下の事柄を提示す。

一、現在の一致英和學校及び一致神學校は今後單一の組織となす。その學府は完全なる基督教育を

授け、特に青年をして基督教教師として訓育するを以て目的とす。此の學府は第七條に於て示さるゝ理事員會の管理するものたり。同理事員會は一致基督教會大會及びリフオームド、プレスビテリアン兩ミッションを代表す。

二、同學府は三箇の學部に分たる。即ち邦語神學部、普通學部、専門學部とす。

三、邦語神學部の職責は日本語を以て完全なる神學教育を授け、特に青年をして中會の試験に應ずるの準備を爲さしむるにあり。その修業年限は三ケ年たるべし。その諸教授は理事員會によつて任命され、理事員會に從屬し同學部の管理をなすものなり。

四、普通學部は英語を以て完全なる訓育を授け、實社會に出づると共に高等中學校の最高級及び本學府の専門學部學生たるの準備をなさしむ、その修業年限は六ケ年たるべし。同學部教授は理事員會によつて任命され、理事員會に從屬し、同學部を管理する者なり。

五、専門學部は規定の正科課程を授け、又之に付隨して神學並に他の特種の科目を選択修學せしむ

(一) 正科生はその正科課程即ち歴史心理學、論理學、倫理學、哲學史、英文學、論文、辨證學

其他教授會に於て重要なりと認むる學科を必須課目とす。

(二) 神學科課目としては系統神學、舊新約歴史、釋義、緒論、教會史、教會政治、牧會學說教

學を置く。教授會の決議により以上の諸課目の或るものは邦語神學科の學生と共に日本語を以て教授さる事あるべし。

(三) 特設課目としては政治經濟學、高等數學、天文學、物理學、拉典語、希臘語、ヘブライ語教授法を置く。教授會の證議により學生の數及びその要求に鑑み、以上の學科の一つを保留して他を適用するを得。

(四) 専門學部に入學せんとする者は普通學部を卒業せる者、試験に合格せる者、或は相當の免狀を呈示する者たるべし。修業年限は三ヶ年とす。正科學生は神學科及び選科の學生と共に教授會に於て適當と認められし者に限り卒業免狀を與へらる。

(五) 普通學部教授は邦語神學部教授と共に専門學部の教授たるを得、而して理事員會に從屬し同學部の管理をなすものなり。

六、(一) 本學部の總攬及び監督は協力ミツシヨンの七員及び財産保管委員(第七條に定む)の手中にあり。理事員會の外人理事員は協力ミツシヨン會議に於て最善と認めらるゝ方法により選ばれる。

(二) 正規の理事員の外發言及動議の權を有するも決議權なき院外議員を置く事を得。協力ミツ

シヨンの凡ての男子委員及び教授會の全員(但し理事員にあらざる者)は院外議員たるを得。

(三) 學府の總攬及び管理に關係する權能義務に附隨して理事員會は次の事を委託せらる。(A) 諸教授の任免移動及び各學部の教授課程の指定、(B) 學府内諸役員の任免、(C) 諸教授雇員(ミツシヨンの諸員は含まず)の俸給の決定、(D) 財産の管理、(E) 年報の調製、(F) 財政報告を含む、その寫本は大會及び協力ミツシヨンに提出さるべし。(F) 理事員會の權能及び義務は協力ミツシヨンの協賛を経て理事員會の三分の二以上の賛成若しくは理事員會の協賛を経て協力ミツシヨンの三分の二以上の賛成によつて増減すべきこと。

七、財産管理委員會(有限責任)は、日本法律の要求に基き組織せらる。この委員會は以下の人々を以て組織す。

井深梶之助、服部綾雄、石本三十郎、植村正久、大儀見元一郎、三浦徹、熊野雄七(三浦徹氏の辭任により)中島信行氏選舉せらる。

本委員の死及び辭任の場合、其の後繼者は殘留の委員の絶對多數の選舉により大會の指名を待つて選出さる。

八、協力ミツシヨン(本國傳道局の同意により)は以下の目的の爲めに本財産管理委員に資金を提供

す。

(一) 學府の施設に必要とミッションの認むる限り東京市内外に土地建物を購入し賃借し建築するため。

(二) 學府の收入を超過する俸給及び經常費を支拂の爲め。

九、財産管理委員の一名が彼の屬せる教會或は中會に於て基督者たるの面目を失せる場合彼は猶豫なく辭表を提出すべきものなり。

十、アメリカ及スコットランドのリフォームド及プレスビテリアン教會が本學府を設立する目的は基督教の學問及び教育を日本一致基督者會に關聯する基督教研究並び基督教教育のために一學府を設立するにあり。されど以上の諸ミッションは將來外國の補助の必要を要せずして日本一致基督教會が本學府の教育及び財政上の全責任を保證する日の近からん事を希望す。この目的と希望を達成する爲め日本人中の特志家が本學府の發達及び支持のために應分の寄附をせらるゝを望む

十一、協力ミッションと本財産管理員との間には以下の項目を含む契約をなす。

(一) 諸ミッション及び其他を通じて提供されたる資金は本財産管理委員により、基督教教育の發展の外何物にも用ひえざる神聖なる委託金と見做さる。

(二) 本財産管理委員は協力シツシヨンの七員と共に前述の條項に掲げられたる理事員會を組織す。

(三) 理事員會の決議にしてそれを有效ならしむるため財産管理委員會の批准を要する場合には猶豫なく其れを受けうべきものとす。

(四) 規約の改正によりて以上の決議が法規上認めらるゝ場合は、財産管理委員は本學府の凡ゆる財産を理事員會或は其の後繼者に譲るべきものとす。

いよ／＼この創立案によつて、三校の合併が就成宣言されると、從來の東京一致神學校は明治學院邦語神學部、一致英和學校は明治學院普通學部本科、神田英和豫備校は明治學院普通學部豫科と改稱されることになつた。(但しこの明治學院といふ名稱はその後に決定されたものである。翌明治十九年五月二十四日、三校合併後始めての理事會が再び東京一致神學校の圖書室で開かれた。議長席にはジヨウジ・ウイリアム・ナツグス氏が就き書記としてはエム・エヌ・ワイコック氏がその任に當つた。その際は最早合併の方法などは問題とせず、直ちに具體的問題に入つた。その一つは合併した學校には何と命名すべきかといふことであつたが、異論百出であつたため、特別委員會に附託せられた。第二はその新學府を東京市の何の邊に移轉設立すべきかといふ重要な問題であつた。それも事重大である

丈けに、種々討議の末、アメルマン氏と大儀見元一郎氏の二名を特別委員に選定して、専ら候補地の研究に當つてもらふ事になつた。この二つの議題を委員に附託して第一回理事員會は閉ぢられた。

名稱 翌六月二十一日第二回理事員會は同所に開かれて、専ら新學府の命名を討議した。特別委員は先づ三つの候補名をあげた。即ち(一)一致學院、(二)共同學院、(三)明治共立學院。之らの名稱は夫々相當の由來と意義とを有つてゐて、何れを選ぶべきかに就いて可成り論争があつたが、結局、明治學院といふ名を選ぶ事にした。その際には移轉候補地の問題には觸れなかつた。

敷地 敷地委員たるアメルマン博士と大儀見元一郎氏とは、始終東京の各地を巡視しては土地を物色してゐたが、牛込矢來町の一部に某華族の所有する約七千坪の空地を見出した。將來この牛込方面は學府の所在地として極めて好適であると思ひ、早速購入の交渉を初めたが、所有主は長く貸與するが買却はしないといふ方針であつたが爲めに、理事員會の意向とは結局齟齬するに至ると見越して交渉は遂に不調に終らしめた。

丁度その話の不調に了つた矢先、十九年十月二日の理事員會へ、當時芝區の西方に隣接した荏原郡白金村字玉繩にあつた約一萬坪の高臺であつた。の賣りものがあると安川亨氏が通告して來られた。そこで新たに井深梶之助氏が理事會を代表して安川氏と同道で白金臺町方面に住む所有者と交渉する

ことゝなつた。此處はもと攝州三田藩主九鬼氏の下屋敷であつたが、明治維新の後に一段石井省二郎といふ人の手に渡されてゐた。明治十九年の井深氏が交渉を初めた頃は、その石井氏から薩摩屋事林といふ商人の手に移されてゐたものである。交通上から見るとこの臺地は幾分東京市の西に偏してゐる嫌はあつたが、ヴァーベック氏やノックス氏は東京市は追々と西に西にと發展して往つて、遂には大森と續き川崎と續き、やがては横濱と極く密接な聯絡をとるに至るであらうといふ豫想の下に、井深氏等を勵まして、その臺地購入の事を進捗せしめた。

白金玉繩臺 然しながら遠い豫想は兎も角として、當時は殆んど人跡さへ絶えた頗る寂寥な所であつた。試みにその概要を述べると、先づ西側即ち現在の白金小學校の壯大な建物と相狹んで居る窪地の所から云へば、あの邊一體は叢林の下に淺茅が鬱蒼と生茂つた沼地で、その東側即ち臺地の麓には一流の細い河が清正寺の方へ流れてゐた。無論この沼地へ散策に出掛ける人影なども見られなかつた一軒の荒果てた植木師の家が今の中學部の下あたりに在つたばかり。學院設立後でさへ鴨がその草叢に卵を産む爲め屢々降りたといふことである。東側即ち現在では名光坂から五反田方面に向つて電車軌道の敷設されてゐる丹波町の通りも、其の時は清正公の方へ雜草に蔽はれた細い道があつて、一二軒の古刹があるばかり、極めて寂しいものであつた。學院購入後この道は取擴げられたといふ事では

ある。北側の臺地續きは現在の通り海軍墓地で、その周圍の密林には狐狸が尠からず棲んでゐて夜などは始終その鳴聲が四邊の寂寞を破つてゐた。又西南の現在の岡崎氏邸の在る邊りから今里の高臺にかけては、舊南部藩の鴨池屋敷で、天を摩する樑や櫓の大木が鬱然と立並んで居て、其の奥の方には何時頃出來たとも知られぬ可成りに廣い池があつた。鴨の集まる事は莫大なもので、宮城の壕と何かの連絡があつたものか、半藏門の下に鴨の群る時にはこの池が寂しくなり、向ふの鴨の滅じた時には此方の池に群がつたといふ事である。又現在の今里の交番の在る邊りから西側の臺地、舊鍋島男爵邸邊りにかけては、全體が麥畑で、其の邊りに銃獵禁止の立札が掲つてゐた。無論家らしい家の見えやう筈はないたゞあの瑞聖寺の高い屋根が今のまゝにあつて、樹間に梵鐘を毎夕響かせて見た。南側即ち現在の學院正門の眞正面の廣い屋敷は、現在の郵便局の裏即ち西町の通りをも加へて五反田街道に接する所まで、廣茫とした麥畑で、大久保公爵の所有地であつた。今では随分立派な屋敷町になつたが、當時は粗末な番小屋が一軒畑の片隅にあつたばかりである。

この臺地は白金村玉繩六百四番地、同六百九番地、同六百拾番地、同六百拾一番地、同六百十二番地、同六百十三番地、同六百十五番地、同六百十六番地、同六百十七番地、同六百十八番地、同六百十九番地、同六百十四番地、同六百三十一番地、同六百三十二番地、同六百三十三番地、同六百三十

四番地、同六百三十五番地、同六百四十六番地、六百四十七番地ノ二、六百四十七番地ノ二、同六百四十八番地、同六百四十九番地、同六百五十番地の合計二十三筆九千二百五十四坪であつた。高臺の内部に就いて云へば南の通りに面する部分は可成り急な勾配の土堤で、樗や檜の大木が林立して居り東寄りの角の處には大きな公孫樹一本と櫻の古木が七八本茂つてゐた。丹波町側は南寄りの所に荒廢した家屋が二三軒ありその傍に臺地に入るべき小さな門があり、それから北方海軍墓地までの間には矢張り樗や檜や其他の巨木が林立してゐた。西側は大半竹藪で、今の雨天體操場から食堂の邊りは叢林となつて薄暗いまでに茂つてゐた。構内の今の運動場は大部分茶畑で、今の總務部から笹尾氏邸の邊には梅林があり、現チャペルの入口と覺しき邊の木々の間に古い茶室風の建物が二棟あつた。現在の高等學部の校庭となつて居る邊りは、低い濕地になつてゐて、矢張り樗、檜、樗その他の雜木が薄暗い程に茂つてゐた。其の他は一面の叢原であつた。ことに熊笹が到るところ地を蔽つてゐた。

愈々此處と斷定して、薩摩屋から賣渡書の交附されたのは明治十九年十月十二日の事で、支拂はれた代價は九千五百圓であつた。その一萬圓に近い金はプレスビテリアンミツションが築地居留地の元ジョン・シート・バラ氏の居た六番地とそれに隣る七番地（築地大學校所在地）に所有してゐた地上權を賣却してえたものであつた。

土地所有者 以上の経過によつて白金臺の土地は學院の所有に歸したが、さて所有者を誰とするかといふ問題が生じた。といふのは當時はまだ財團法人の制度がない上に、外人は日本國內に土地を所有する權利を認められてゐなかつたからである。そこでその歳の九月にノックス博士の後を受けて理事員會議長となつてゐた井深梶之助氏が恰も一私有財産のやうな形式で所有することになつた。

私立學院設置願 一度この高臺が明治學院の手に移されると森閑としたその境に急に人足が繁くなつた。片田舎には珍らしい西洋人が見分に來たり、若い紳士が建築士らしい人を伴つて實地踏査をしたりした。しかし不思議なことには武藏野の秋色が深くなればなる程それらの訪客も稀になり風の吹く十二月にはまたもとのやうに寂れてしまつた。けれどもそれは大活動の始る前の中休であるに外ならなかつた。その間に服部綾雄氏井深梶之助氏石本三十郎氏はヴァーベツキ氏、イムブリー氏、ワイコフ氏等と膝を交へては質疑攻究しながら寧日なく『私立學院設置願の編纂に従事してゐた。幸に東京府知事(當時は高崎五六氏)に提出されたものゝ副本が保存されてゐるので、學院建設の基礎として永く記念するため全文を掲げよう。二十六行の大判美濃罫紙に細字で二十八枚に互つて認めた願書に詳細を極めた學科配當表教科書表器械器具目錄表豫算表が添付されたものであつたが、そのうち豫算表を除いて他の添付書類は悉く紛失してしまつた。按ふにサムダム館の出火の際焼けたものであらう

私立學院設置願

一設置之目的

本院ヲ分チ普通學部及專門學部トス而シテ普通學部ヲ豫備科及本科ニ分チ英語ヲ以テ博ク普通ノ學科ヲ授ケ、本院ノ專門學部又ハ官立ノ諸專門學校ニ入ルノ準備ヲナサシム、其學科課程ハ倫理、和漢文、英語、數學、地理、動物、植物、生理、物理、化學、地質、論理、心理、史學、簿記、星學、唱歌、圖畫、體操、等、專門學部ニ英文學、史學、理財學、高等數學、物理學、心理學、論理學、倫理學、神學、ラテン語、ギリシヤ語、及ヘブル語ノ諸學科ヲ置キ、以テ各學科專門ノ業ヲ授ケ特別ニ學士教師傳道師ヲ養成ス

一名稱 本院ヲ名テ明治學院ト稱ス

一位置 本院ハ府下荏原郡白金村第六百四十七番地ニ設ク

一學科學期課程及教科用圖書

普通學部學科學期課程ハ別表甲號同教科用圖書ハ別表乙號之通リ

普通學部教科用器械專門學部學科學期課程及同教科用圖書器械ハ聲調之上追テ申可仕候

一試驗規則

試業ハ每學期ノ終リニ於テ之ヲ行ヒ該學期中ニ履修セシ全科目ノ試業ヲ受ケシム

凡ソ試業ハ教員ノ見込ニヨリ口述若クハ筆記ノ法ヲ以テ之ヲ行ヒ其ノ成績ヲ案シテ驗點ヲ附ス試業ノ驗點數ハ各科目一百點ヲ以テ最高點トス

生徒ハ試業ニ於テ各科全點數ノ十分ノ四以上ヲ得而シテ各科ノ點數ヲ合算シ其全點數ノ十分ノ六以上ヲ得タル者ニアラザレバ及第スルヲ得ズ

普通學部本科第三年ノ終リニ至リ試業ノ成績優等ニシテ平素ノ品行方正ナル生徒二名ハ褒賞ヲ授與ス
普通學部及專門學部規定ノ學科ヲ卒ヘ毎學期ノ試業ヲ完フシタル者ニハ各部ニ於テ卒業證書ヲ授與ス

一起業終業時限

授業時限ハ日ノ長短ニ隨ヒ適宜前後スト雖モ起業時限ハ午前九時終業時限ハ午後四時ヨリ後レザルヲ法トス

一休業日

定期休業ハ日曜日土曜日紀元節天長節紀念日十一月二十三日夏期冬期及春期ノ休業日トス夏期休業ハ七月一日ヨリ九月十五日ニ至リ冬期休業ハ十二月二十四日ヨリ翌年一月八日ニ至リ春期休業ハ四月一日ヨリ同月八日ニ至ル

一入學退學規則

每學年ノ始メ一回生徒ヲ募集シ其定員ヲ百名トス但シ時宜ニ依リ臨時募集スルコトアルベシ、第一年級ニ入學ヲ許ス者ハ齡十二年以上品行方正身體健康ニシテ高等小學校卒業ノ者若クハ該校卒業者ニ等シキ學力アル者タル可シ。第二年以上ノ級ニ入ルヲ望ム者ハ其入ラント欲スル級ニ在ル生徒ノ履修セシ諸學科ニ付學力ノ試験ヲ受クベシ

一生徒心得

本院ニ在學業ヲ修ムル者ハ我邦ノ實用ニ供スル道義學術ヲ修ムルナレバ敬神愛國ノ大義ヲ重ンジ殊ニ品行ヲ正クシ志操ヲ直クシ虛文ニ馳セズ空想ニ流レズ寡ヲ應用ノ道ヲ素ムベシ、身體ハ才智ヲ貯フルノ器ニシテ德行ヲ載スルノ車トモ云フベキモノナレバ常ニ飲食ヲ節シ肌膚ヲ清潔ニシ運動ヲ適度ニスル等凡ソ攝養ノ道ヲ守リ氣力ヲ壯健ニセン事ヲ勉ムベシ
本院ノ規則ヲ遵守シ職員及教員ノ指揮ヲ從ヒ之ニ敬禮ヲ致スベシ
日々ノ課業ヲ怠ルコトナク教場ノ出入ハ必ズ其時ヲ守リ教場ニ在リテハ凡テ制服ヲ着用スベシ
生徒ノ交際ハ互ニ相親睦シ信義禮讓ヲ尙ブベシ

明治學院の創設

一 生徒罰則

課業ヲ勉勵シ時限ヲ堅守シ規則ヲ遵奉シ職員及教員ノ指揮ニ從フハ院中ノ樞要ナレバ之ヲ破ル者ハ輕重ニ依テ之ヲ訓戒ス

生徒左項ノ一ニ該當スル者ハ退院ヲ命ズ

一品行不良或ハ怠惰ニシテ屢々訓戒ヲ加フルモ悛改セザルモノ

一故意ニ規則ヲ犯シ或ハ他人ヲ煽動シテ犯則セシムル者

一寄宿生ニシテ幹事ノ許可ナク外泊スル者

一 入學生徒學力

入學ヲ許ス者ハ高等小學校ノ卒業者若クハ該校卒業者ニ等シキ學力アル者トス

一 入學生徒年齡

入學ヲ許ス者ハ齡十二年以上ノ者トス

一 生徒定員

生徒ハ寄宿生二百名通學生二百名ヲ以テ定員トス

一 職員及教員職務心得

本院ニ於テハ院長ヲ缺キ理事員十四名ヲ置キ該員會議ニ於テ本院ノ事務ヲ總轄ス。幹事ハ庶務主任トナリ本院ノ事務ヲ調理シ及其
定規ヲ維持シ生徒ノ勤惰及容儀品行ヲ監視ス

教授ハ各自專任ノ學科ヲ教授ス

講師ハ理事員ノ依頼ニ應ジ一學科或ハ二學科ヲ講述ス

助教授ハ教授ノ職ヲ助ク

舎監ハ幹事ノ指揮ニ從ヒ舎内ニ在テ在舎生ノ行狀ヲ督責シ舎内ノ秩序ヲ維持ス

一 教員々數

本院ノ教員々數ハ左ノ如シ

一教	授	十一名	一講	師	三名
一助	教授	六名	合	計	二十名

一 職員及教員品行學力履歷

府下萩町區富士見町壹丁目二十一番地

理事員兼幹事 静岡縣士族 服部 綾雄 (二十三年十一月)

履歷等ハ次項ニ記ス

府下麻布區笹笥町三番地

理事員兼教授 神學 福島縣士族 井深 棍之助 (三十一年五月)

履歷等ハ次款ニ記ス

府下京橋區明石町七番地東京一致英和學校内

理事員兼教授 英語學動物學生理學 長崎縣平氏 石本 三十郎 (二十四年二月)

履歷等ハ次款ニ記ス

府下下築地居留地十九番地

理事員兼教授 神學ラテン語 米國人 ジェームス・エル・アメルマン (四十三年)

一西曆一千八百六十二年米國ニューヨーク府大學ヲ卒業ス

明治學院の創設

- 一 同年ニウヨルク大學ヨリバチエロル・オブ・アルツ大學位ヲ受ク
- 一 同年ニウヨルク府中學校教員第一等免許證ヲ受ケ後三年間中學校教員タリ
- 一 同千八百六十五年ニウヨルク府大學ヨリマストルオブアルツ大學位ヲ受ク
- 一 同千八百六十八年ニウゼルセイ州ブランズウツク神學校卒業ス
- 一 同千八百七十六年日本ニ來リ以來東京一致神學校ニ於テ神學教授タリ
- 一 同千八百八十五年ニウゼルセイ州ニウブランズウツクラウトガルズ大學ヨリドクトルオブデビニテイノ學位ヲ受ク
- 一 罰ヲ受ケ訴訟等ニ關係ナシ

府下築地居留地十六番地

理事員兼教授 神學グリッキ語心理學 米國人 キリアム イムブリー (四十一年)

- 一 西曆千八百六十五年ニウゼルセイ州プリンストン大學校卒業ス
- 一 同年プリンストン大學ヨリバチエロルオブアルツノ學位ヲ受ク
- 一 同千八百六十八年同校ヨリマストルオブアルツノ學位ヲ受ク
- 一 同千八百七十年プリンストン神學校卒業ス
- 一 同千八百七十五年日本ニ來リ以來東京一致神學校ニ於テ新約聖書註解教授タリ
- 一 同千八百八十四年プリンストン大學校ヨリドクトルオブデビニチーノ學位ヲ受ク
- 一 罰ヲ受ケ訴訟等ニ關係ナシ

府下築地居留地六番館

理事員兼教授 數學星學簿記學 米國人 ジョン・シ・バラ (四十五年)

一西曆千八百六十六年ヨリ同千八百七十一年マデ米國ニウゼルシイ州テナフライ中學校教員タリ

一同千八百七十二年ヨリ同千八百七十五年マデ日本横濱高島英學校教員タリ

一同千八百七十五年九月ヨリ横濱居留地三十九番地英學校ニ於テ英學教授ニ從事ス

一同千八百八十年四月以來東京一致英和學校ニ於テ數學教授タリ

一同千八百八十四年九月英和豫備校教員ヲ兼ヌ

一罰ヲ受ケ訴訟ニ關係ナシ

府下築地居留地六番館

理事員兼教授 史學倫理學 米國人 シエームス・エム・マツコウレイ (三十八年)

一西曆一千八百七十年ウエストミンスター大學校卒業ス

一同年ウエストミンスター大學校ヨリバチエロルオファアルツノ學位ヲ受ク

一同千八百七十四年ハミルトン神學校卒業

一同一千八百七十七年アイアマバンコク英學校教頭トナル

一同千八百八十年日本ニ來リ以來東京一致英和學校ニ於テ心理學及史學ノ教授タリ

一同千八百八十四年九月英和豫備校教員ヲ兼ヌ

一罰ヲ受ケ訴訟ニ關係ナシ

府下築地居留地十八番地

理事員兼教授 物理化學 米國人 エム・エヌ・ワイコフ (三十六年)

一西曆千八百七十二年ニウゼルセイ州ニウブランズウツク、ロツトガルス大學校卒業ス

明治學院の創設

- 一 同年ロットガルス大學校ヨリバチエロルオフアルフノ學位ヲウケ
- 一 同年日本ニ來リ五ヶ年間文部省御雇トナリ福井新潟縣東京三英語學校ノ教員タリ
- 一 同千八百七十五年ロットガルス大學校ヨリマストルオフアルツ學位ヲ受ケ
- 一 同千八百七十八年ヨリ本國ニ歸リ後五ヶ年間ニウブランスウツク中學校ノ教員タリ
- 一 同千八百八十一年ニ日本ニ再來シ横濱山手四十九番館先志學校々々長トナル
- 一 同千八百八十三年九月ヨリ東京一致英和學校ニ於テ物理學及化學教授タリ
- 一 同千八百八十四年九月ヨリ英和豫備校ノ教員ヲ兼ヌ
- 一 罰ヲ受ケ訴訟ニ關係ナシ

府下麻布區市兵衛町二丁目二十五番地田中信良備

理事員兼教授 神學ヘブル語 英國人 ヒュー ワデル (四十六年)

- 一 西曆千八百六十七年アイルランドベルファストニ在ルクインス大學ヲ卒業ス
- 一 同年クインス大學ヨリバチエロルオフアルツノ學位ヲ受ケ
- 一 同千八百六十九年アセムブリー神學校卒業
- 一 同千八百七十四年日本ニ來ル
- 一 同千八百八十六年九月田中信良ノ備トナリ英學教授ニ從事ス
- 一 罰ヲ受ケ訴訟ニ關係ナシ

府下牛込區市谷仲之町八番地

理事員兼講師 神學ヘブル語 静岡縣士族 大儀見 元一郎 (四十年十月)

履歷等ハ次款ニ記ス

府下京橋區入舟町七丁目一番地

理事員兼講師 米國人 ジー・ニフ・ウオルベツキ (五十六年)

一西曆千八百三十年ネゼルランドニ生ル

一同千八百五十九年ニウヨルク州オウボロン神學校卒業

一同年九月日本ニ來リ同千八百六十二年ヨリ十六年間日本政府ニ奉事ス

一同千八百七十四年ロツトガルス大學校ヨリドクトルオブデビニテイノ學位ヲ受ク

一同千八百七十七年日本政府ノ勳三等ニ叙セラレ

一罰ヲ受ケ訴訟ニ關係ナシ

府下築地居留地十八番地

教授 英語學英文學 米國人 ハワルト ハリス (三十七年)

一西曆千八百七十二年ニウゼルシイ州ニウフランスウツク ロツトガルス大學卒業ス

一同年同大學校ヨリバチエロルオブアルツノ學位ヲ受ク

一同千八百七十五年同校ヨリマストルオフアルツノ學位ヲ受ク

一同千八百七十六年ニウフランスウツク神學校卒業ス

一同千八百八十四年日本ニ來リ長崎ニ於テ英學教授ニ従事ス

一同千八百八十五年四月ヨリ東京一致英和學校ニ於テ英文學教授タリ

一同年九月英和豫備校ノ教員ヲ兼ヌ

明治學院の創設

一 罰ヲ受ケ訴訟等ニ關係ナシ

府下築地居留地二十七番館

教授 神學論理學 米國人 ジョルジ ウイリアム ナツクス (三十三年)

一 西曆千八百七十四年ニウヨルクハミルトン大學卒業ス

一 同年ハミルトン大學校ヨリバチエロルオブアルツヲ受ク

一 同千八百七十七年オーボルン神學校卒業ス

一 同年ハミルトン大學校ヨリマストルオブアルツノ學位ヲウケ

一 同年日本ニ來リ四年間東京一致神學校ニ於テ説教學及基督敎證據論ノ教授タリ

一 同千八百八十六年フエネロサ氏ニ代テ日本帝國大學ノ倫理學及心理學ノ講師トナル

一 罰ヲ受ケ訴訟等ニ關係ナシ

府下築地居留地十四番地

教授 論理學心理學理財學 米國人 セオドル・エム・マクネア (二十八年)

一 西曆千八百七十九年ニウゼルセイ州プリンストン大學校卒業ス

一 同年同大學ヨリバチエロルオブアルツノ學位ヲ受ク

一 同千八百八十二年プリンストン神學校卒業ス

一 同プリンストン大學校ヨリマストルオブアルツノ學位ヲ受ク

一 同千八百八十三年日本ニ來リ翌年ヨリ東京一致英和學校ニ於テ論理學及理財學ノ教授タリ

一 罰ヲ受ケ訴訟等ニ關係ナシ

府下築地居留地二十九番地

講師、神學グリーキ語 米國人 ロゼイ ミロル (四十二年)

一西曆千八百六十七年プリンストン大學校卒業ス

一同年プリンストン大學校ヨリバチエロルオブアルツノ學位ヲウク

一同千八百七十年プリンストン神學校卒業

一同千八百七十二年六月日本ニ來リ横濱ニ於テエス アール ブラウン氏ト共ニ英學及神學教授ニ從事ス

一同千八百七十八年以來東京一致神學校ノ講師タリ

一罰ヲ受ケ訴訟ニ關係ナシ

府下京橋區明石町七番館東京一致英和學校内

助教授 英語學植物學和漢文學 福岡縣士族 杉 森 此 馬 (二十九年)

一安政六年三月二十五日筑後國柳川ニ生レ十一歳ニシテ柳川傳習館ニ入り和漢學ヲ修ム

一明治七年熊本英學校ニ入り米國人キヤブテンチエーンスニ就テ英學ヲ研究ス

一同九年三月柳川師範學校ニ入學シ同年十二月同校卒業

一同十三年四月東京一致英和學校ニ入り英語ヲ以テ普通學諸學科ヲ修ム

一同十七年六月同校卒業

一同十八年九月以來英和豫備校教員タリ

一罰ヲ受ケ訴訟等ニ關係ナシ

府下築地居留地六番米國人ジョンシーバラ妹

明治學院の創設

助教 英語學唱歌 エー・ビー・バラ (三十七年)

一西曆千八百七十一年ニウヨルク州女子師範學校卒業後十年間ニウヨルク州及ニウセルシイ州ニ於テ女學校教員タリ

一同千八百八十四年九月日本ニ來リ千八百八十五年以來英和豫備校ノ教員タリ

一罰ヲ受ケ訴訟ニ關係ナシ

府下築地居留地六番

米國人 ジェー・エム・マコウレイ妻 シェー・エム・マコウレイ (三十五年)

一西曆千八百七十二年ベンシルベニア州女子師範學校卒業後三年間ウイルミントン學校ノ教員タリ

一同千八百六十七年サイアン國バンコク府女子英學校ノ教員トナリ四年間其職ニアリ

一同千八百七十八年ニ日本ニ來リ以來東京一致英和學校ニ於テ英語學ノ助教タリ

一同千八百八十五年九月英和豫備校教員ヲ兼ヌ

一罰ヲ受ケ訴訟等ニ關係ナシ

府下麻布區飯倉片町三番地

助教授兼舍監 體操 士族 内田秋藏 (二十八年六月)

一明治九年八月七日教導團へ入隊

一同十年四月十日實地研究ノ爲鹿兒島へ出張被申附

一同十年九月點乎定ニ付歸京

一同十一年三月十六日被任二等軍曹

一同十一年三月十六日東京鎮臺附被申附

明治學院の創設

一同十二年十一月一日鹿兒島逆徒征討之際慰勞ノ爲賞金下賜

一同十四年二月三日武器掛被申附

一同十六年一月三日被任一等軍曹

一同十八年三月十五日滿期ニ付後備軍艦員被申附

一同十八年六月十四日明治學館ニ於テ簿記學卒業

一同十八年六月二十六日北豐島郡公立谷田小學校教員被申附

一同年體操傳習所出張員ニ就キ普通體操傳習圖畫助教授ハ未定ニ付備入ノ上追テ開申可仕候

神奈川縣久良岐郡中村貳番地

長崎縣士族 熊野雄七 (三十二年八月)

一同治三年九月舊大村藩命ヲ以テ出京安井息軒ノ門ニ入り儒學ヲ研究ス

一同四年四月慶應義塾ニ入り英學ヲ修メ後横濱ニ出テ米國博士エス アール ブラウン氏外數名ノ英米教師ニ就キテ同學ヲ研究ス

一同九年十一月東京府屬官學務課擔任ヲ命ゼラル

一同十年三月辭表ヲ捧ゲテ退官ス

一同年三月以來米國人設立ノ横濱山ノ手二百十二番館共立女學校ニ於テ和漢英ノ教授ニ從事ス

一賞罰ヲ受ケ訴訟等ニ關係ナシ

府下糺町區上六番町二十二番地

東京府平民 植村正久 (二十九年)

一同治四年横濱縣立市學校ニ入り米國博士エス アール ブラウン氏ニ就キ英學ヲ修メ後同氏ノ塾ニ入り英學諸科及神學ノ研究ス

明治學院の創設

- 一 同十年東京一致神學校ニ於テ尙神學ヲ研究ス
- 一 同十三年一月東京下谷教會ノ牧師トナル
- 一 同十五年六月同教會ノ牧師ヲ辭シ以來著述翻譯等ニ從事セリ
- 一 賞罰ヲ受ケ訴訟等ニ關係ナシ

府下牛込區市ヶ谷仲之町八番地

静岡縣士族 大儀見 元一郎 (四十年十ヶ月)

- 一 明治三年十二月日本國ヲ去リ北米合衆國ニ至リ翌年同國ミシガン州ハリランドホープ大學校豫備科ニ入ル
- 一 同十二年七月ホープ大學ヲ卒業シパチエロルオブアーツノ學位ヲ受ク
- 一 同年十月ニウゼルセイ州プリンス頓神學校ニ入り神學ノ餘暇博士ヨングニ就キ實地天文學ヲ學ブ
- 一 同十三年十一月同州ニウブランスウツク神學校ニ移ル
- 一 同十五年四月同校卒業
- 一 同年五月オルバニー中會ヨリ基督教教師ノ任ヲ受ク
- 一 同年七月ホープ大學ヨリマストルオブアルツノ學位ヲ受ク
- 一 同年十一月歸國
- 一 同十七年九月以來東京一致神學校ニ於テ舊約歴史舊約文學及ビ教會政治等ノ講師タリ
- 一 賞罰ヲ受ケ訴訟等ニ關係ナシ

府下麻布區築筒町三番地

福島縣士族 井深 梶之助 (三十一年五ヶ月)

Hoogyo. 崩御 death of Mikado

Hooshaizen 放火 to burn & destroy.

Hoosammi 頭冠 covering the head with a handkerchief -

Hooshaizen 寶器 a brown ^{hoizen} Hooshaizen - a comet.

Hooshaizen 蜂起 a revolt or insurrection of samurai against their lord. (through the insurrection)

Hooshaizen 奉 ^{hoizen} to make presents to emperor, or offering to Kami. Hooshaizen -

Hooshaizen 奉公 service, work,
 ^{hoizen} to serve, minister.

Hooshaizen 奉公人 a servant.

Hooshaizen 宝物 things rare, valued & esteemed, heirloom of the family

Hooshaizen. 雑, 雑, 雑 to busy, mter,

Hooshaizen. 法名 name given to a person after death -

Hooshaizen 奉納 offerings to Kami. Hooshaizen. (of any thing).

Hooshaizen (a kind)

Hooshaizen 豐年 fruitful year.

Hooshaizen 蓬萊 name of a country - symbolical collection of pine, bamboo & plum
 into crane & tortoise -

Hooshaizen 放捨 dissipation, licentious, given to sensuality & gambling.
 absolute
 "na mono.

Hooshaizen 菠薐草 spinach.

Hooshaizen 鳳輦 Mikados chariot. Two wheels can drawn by a bull etc

Hooshaizen 沙鍋 an earthen ware dish

- 一安政元年六月岩代國會津若松ニ生レ十歳ニシテ日新館ニ入り文武諸藝ヲ講習ス
- 一明治二年東京ニ留學シ翌年横濱修文館ニ入り英學ヲ修メ其後米國博士ニス、アール、ブラウンノ塾ニ入り英學諸科及神學ヲ研究
- 一同十年東京一致神學校ニ於テ尙神學ヲ研究ス
- 一同十三年一月東京麴町教會ノ牧師トナル
- 一同十四年同會牧師ヲ辭ス
- 一同年四月以來東京一致神學校ニ於テ教會歴史ノ教授タリ
- 一賞罰ヲ受ケ訴訟等ニ關係ナシ

府下京橋區明石町七番地東京一致英和學校内

長崎縣平民 石本三十郎 (二十四年)

- 一文久二年九月肥前國大村ニ生レ八歳ヨリ大村藩儒者熊野家ニ從ヒ和漢學ヲ修ム
- 一明治七年六月大村玖鳴小學校ニ入り同八年七月小學全課卒業ス
- 一明治八年横濱ニ出デジョン、シ、バラ氏ニ就キ英學ヲ修業ス
- 一同十三年九月東京一致英和學校ニ入り英語ヲ以テ普通學科ヲ修ム
- 一同十五年六月同校卒業ス
- 一同年九月同校助教トナル
- 一同十七年八月英和豫備校ノ教員ヲ兼ヌ
- 一同十九年九月東京一致英和學校ノ英語學及生理學ノ教授トナル
- 一賞罰ヲ受ケ訴訟等ニ關係ナシ

明治學院の創設

府下鞆町區富士見町一丁目二十一番地

静岡縣士族 服部 綾 雄 (二十三年十一月)

一文久二年十二月駿河國沼津ニ生レ八歳ニシテ渡邊孝氏ニ就キテ和漢學ヲ修業ス

一明治五年横濱ニ出テ縣立市學校ニ入りエス、アール、ブラウン氏ニ就キテ英學ヲ學ビ後米國博士ヘボン氏夫人及ジョン、シ、バラ氏

ニ就キテ同學ヲ研究ス

一同十三年九月東京一致英和學校ニ入り英語ヲ以テ普通諸學科ヲ修ム

一同十五年六月同校卒業ス

一同年九月同校幹事トナル

一同十七年八月府下神田區淡路町二丁目四番地ニ英和豫備校ヲ設立シ以來同校々長タリ

一賞罰ヲ受ケ訴訟等ニ關係ナシ

仔細に之を見ると随分當初の學院の面目は今日のそれと異つてゐることが解る。設置の目的といふ處に『本院ヲ分テ普通學部及ビ専門學部トス、而シテ普通學部ヲ豫備科本科ニ分ケ英語ヲ以テ、博ク普通ノ學科ヲ授ケ』とあるが之は自國語を以て學問を授けうる今日とは時代が餘程隔離してゐる事を示してゐる。中等程度の學科を今日尙英語を以て教授してゐる處は日本全國何處にもあるまいが、明治初年には文部省自らが『外國語ニテ教授スル中學規則』を設けて、英、佛、獨の國語によつて中等教育の教科を授けてゐたが、それは大學に入つて直ちに外國教師の専門學科に關する講義を理解しうる

に足る豫備教育を施すを目的とするものであつた。それゆゑその種の中學校は中學校と高等學校とを合せたものに相當してゐる。(文部省編輯學制五十年史)明治學院普通學部とは此種の課程に做つたものであらう。

「専門學部ニハ、英文學、史學、理財學、高等數學、物理學、心理學云々……以テ各科専門ノ業ヲ授ケ特別ニ學士教師傳道師ヲ養成ス」とあるが、之は形式こそ違へ、現今の高等學部及び神學部はそれぞれ専門學校として成立して當初の抱負をそのまゝに果してゐる。次に生徒の定員に就いては「寄宿生二百名、通學生二百名ヲ以テ定員トス」と誌してゐる。學生の大半を寄宿せしめるといふ事は今日では思ひもよらない。然し之も時代が然らしめたもので、電車自動車の完備した今日通學生が激増して寄宿生の減少するのは當然の歸結である。今一つは中等程度の學校が地方の大抵の市或ひは町に建設されたため態々中央都市まで出てくる必要がなくなつたことにもよる。

行政(合議制) 行政については『本院ニ於テハ院長ヲ缺キ理事員十四名ヲ置キ該員會議ニ於テ本院ノ事務ヲ總括ス。幹事ハ庶務主任トナリ本院ノ事務ヲ調理シ其定規ヲ維持シ生徒ノ勤惰及容儀品行ヲ監督ス』とある。學院創立の初めに於ては院長も總理もなくて全然合議制であつた。後年管理上の必要に迫られて理事員會は明治二十二年十月にヘボン博士を總理と選定することゝなつたが、それは對外

的には明治學院全體を代表し、對內的には理事員會の意向を執行する機關としてのものであつた、總理が理事員會を左右することは出来ない。其意味に於て合議制であることには昔も今も變りはない。

幹事 この制度は随分永く踏襲されて大正元年十一月二十六日熊野幹事が普通學部長兼高等學部長となり井深總理が神學部長を兼務するに至つて甫めて廢された。この幹事制は随分その溯源は舊く、森本介石氏が築地大學校の幹事たりしに始り、服部、杉森、熊野の諸氏にと更轉したものである。

教授及講師 教授十一名、講師三名、助教授六名、合計二十名といふ計畫であるが、之は現在の專任教師三十七、兼任講師四十二名合計八十名の多さに比べると隔世の感がある。この當初の重要な地位の教授及び講師が學院の理事員を兼ねて經營そのものにも干與して居たといふこと、之は現今とは非常に趣を異にしてゐる。現今では學院より俸給を享くる教職員は凡て理事には成れなくなつてゐる。但し總理だけは理事會に出席し發言議決の兩權を與へられてゐる。

當時の邦人の理事員及び諸教授の年齢を見ると、實に驚く計りに少壯氣鋭である。服部氏は二十三歳十一月、井深氏は三十一歳五ヶ月、石本氏は二十四歳二ヶ月、杉森氏が二十九歳、植村氏が同じく二十九歳、西洋人とても大方は三十代の人々である。それらの人々が遠き學院の前途を觀望する時には實に胸中氣勢の鬱勃たるものがあつたに相違ない。彼等の一人が當時『本學院また能く其の意を

體し從來の方向を保守して愈々整備を求むるの務めを怠らざれば遂に歐米各國の諸大學と比肩して盛大を競ふに至るの日また決して期し難きにあらざるを信ず』と誌してゐるが、おそらくこれは一片の夢想や空想の所産ではなからう。また必ずしも彼等の抱負の誇張でもあるまい。何分にも明治の初年に大隈氏岩倉氏木戸氏の如き政府要路の大官達から顧問として教師として多大に尊崇されたヴァーベック氏や頭腦の飽くまで明晰緻密なノックス氏やイムブリー氏、教育家として典型的な人格を有するワイコフ氏等を外人教師として擁し、内には少壯ながらに世界文化の主流なりと信ずる基督教に身を投じて、我國民衆の大勢を斯の道に來らしめなければ竭まないといふ意氣を持つてゐるばかりではない、その教養から云つても才能から云つて決して人後に墜ちないと自他共に許してゐる井深植村服部の諸氏が控へてゐる時、彼等が學院の前途をかやうに考へたことは決して不自然ではあるまい。

當初の收支豫算並びに創業費 設置願と一緒に政府に提出した、學院經營に關する一ケ年の收支豫算は次の通りである。授業科に就いては「生徒一名ニ付一學年金拾貳圓ト定メ三分シテ每學期ノ始メニ納付セシム」とある。

經費收支豫算案

收 入

一金壹萬貳千圓也

一ヶ年間收入

内 譯

金四千八百圓

授業料

金三百圓

東 修

金七千圓

寄宿料

支 出

一金一萬〇百圓也

一ヶ年間支出

内 譯

金壹千四百六拾四圓

俸 給

但 幹事俸給

月 金三十圓

邦人教授

月 金三十圓(二名)

同

月 金二十五圓(一名)

同助教授

月 金二十五圓(一名)

同

月 金十三圓(一名)

外國人教授助教講師ハ無俸給タリ

金百九十二圓也
小使俸給但月給金八圓(二名)

金七千圓也
寄宿生費用

金貳百圓也
書籍買入費

金貳百圓也
器械買入費

金五百圓也
營繕費

金五百四十四圓也
雜費

殘金貳千圓也
積立金

かう誌されてゐる。勿論之はごく概算的なものに相違ないが、兎もあれ極めて樂觀的な豫算である。生徒の授業料を四千八百圓と見積り寄宿料を七千圓として一ケ年の經常費から俸給の總て拂つて尙二千圓の積立金を残して行かうとする。計畫は寧ろ壯とすべきであらう。これ程創立當時の人々は社會の大きな反響を期待してゐた。その期待は單にかういふ數字に現はれてゐるのみではない、懸て樹てらるべき寄宿舎へボン館の大建築に具體化せられた。

創業費收支豫算は次の通りである。

一金貳萬貳千圓

創業費總收入

内訳

金六千圓

米國人サムダム夫人寄附

金九百圓

同 ナツクス氏寄附

金貳千圓

同 ヘボン氏寄附

金五百二十三圓六十錢

同 ミロル氏夫妻寄附

金三千七百圓

同 ハリス氏寄附

金百一十一圓九十四錢

同 インブリー、ミロル兩氏寄附

金八千四百圓

同 プレスピテリアン、リフオームド兩ミッション寄附

金二百七十一圓五十錢

同 ゼフレイ氏寄附

金九十二圓九十六錢

同 マクラレン夫人寄附

以上

一金貳萬貳千圓

創業費總支出

内訳

九千圓

地所買入費

金一萬一千圓

校舍建築費

金千圓

雜費

先づ以上列記した事柄が白金臺に明治學院の樹立される基礎案であつた。萬端遺漏なき願書が作製されたのは明治二十年一月十一日、同日府下荏原郡白金村六百四十七番地明治學院設立者熊野雄七外五名總代麴町區富士見町一丁目二十一番地静岡縣士族服部綾雄の名義で東京府知事男爵高崎五六氏の許へ提出された。處が待つ事十數日、同月二十二日附で『書面學校設置ノ儀認可候事、開校ノ期日ハ前以テ届出ツベシ』といふ書面が達した。茲に白金臺は始めて明治學院の永遠の礎の置かるべき處と定つたのである。

二 建築と移轉

建築と敷地整理の決議 明治十九年十月二十一日築地一致神學校圖書室で開かれた理事員會で次の事項が決議された。

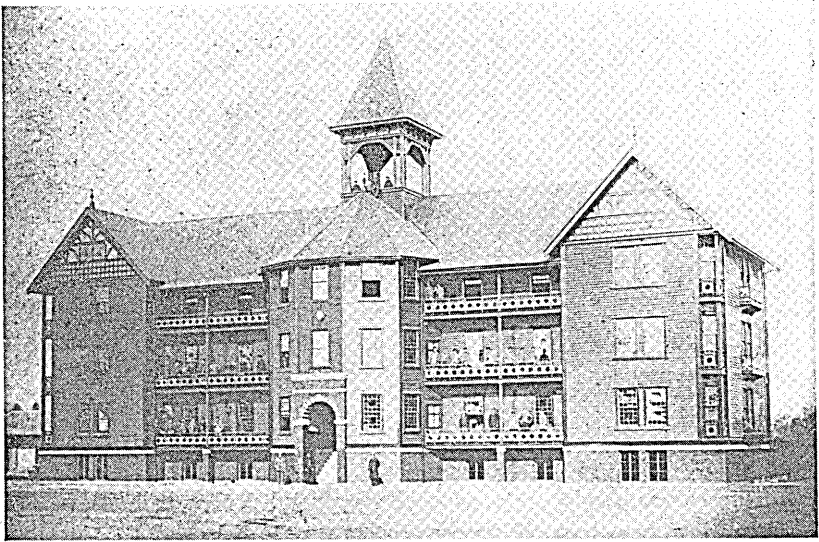
一、リフオームド ミツシヨンより資金の提供さる曉明治學院理事員は速やかに新たに購入の土地に校舎を建設すること。

二、アメリカカブレスピテリアンミツシヨンより資金の提供さる、曉、明治學院理事員は速やかに同地所に寄宿舎を建設すること。

三、三百弗を超過せざる範圍の資金を用ひて敷地を適當に整理すること。
そして同日整地委員としてアメルマン氏、井深梶之助氏、バラ氏、石本三十郎氏が擧げられた。

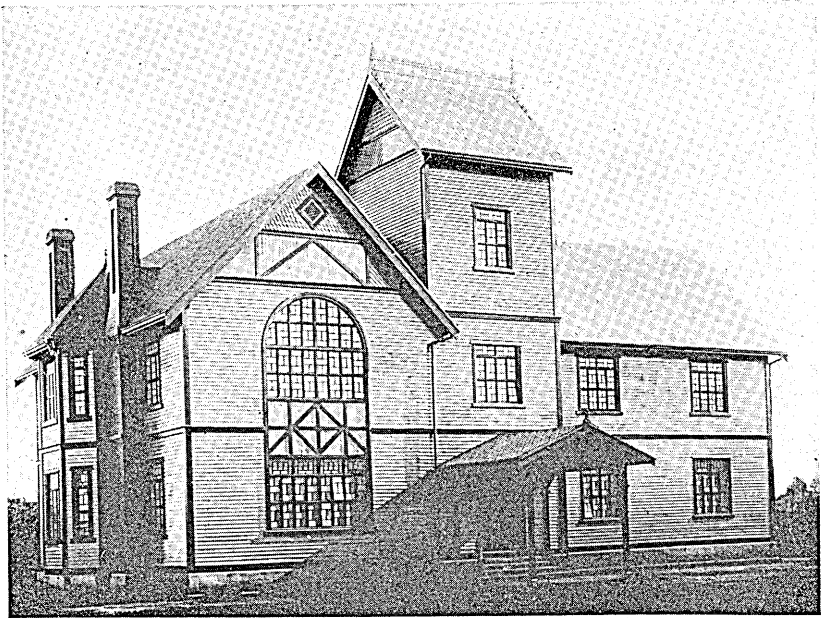
サンダム館 明治二十年一月十二日學院設置の認可が下りると、學院理事員等の喜びは一通りて無かつた。冬の過ぎるのを待ち兼ねて二月の末から白金臺地の雑木を切倒したり、梅林を移したり、熊笹をのけたりして建築に取掛つた。當時大阪の屈指の建築請負師藤田組が引受けたものである。先づ石材を以て基礎工事をなし、樺の材木を柱とし、檜を用ひて壁や床を張り、随分堅牢な三階建の校舎が出来た。建坪階下百〇四坪七合七勺九才、二階九十坪九合六勺九才、三階九坪、合計二百四十七坪六勺八才二階の北側には四百人を容れるに足る講堂を拵へた。建築費總額は七千圓。その資金はリフオームドミツシヨンに關係深き米國富豪サンダム氏未亡人が亡夫の記念のために全額を提供した。

ヘボン館 それと同時に白金臺の海軍墓地に面した側に、當時東京隨一と云はれた木造大建築へボ



館　ン　ボ　へ　舊

(の圓萬一約金の時しれら讓に社商善丸を権版の成集林語英和が士博ソへ年一十二治明)
 (のもるたし失焼に時同と眠永の士博日一廿月九年四十四治明し築建に臺金白て以を員金)



(白てしと舎校の初最院學年一十二治明) 館ムダンサ舊
 (す失焼月一十年三正大れき築建に臺金)

ン館が日本土木會社の手によつて建築されつゝあつた。ヘボン館はその名の示す如くヘボン博士の記念館であるが、明治五年に第二版を出版し、明治十九年に丸善商社に著作権を譲つた和英語林集成の版權移譲によつて得た金を、博士が學院に提供した事によつてこの建築物が建てられるに至つたものである。その坪數は左の通りである。階下百二十九坪五合五勺五才、一階百〇四坪五合四勺、二階百〇四坪五合四勺、三階百〇四坪五合四勺、屋上檣四坪、合計四百四十七坪一合七勺五才。屋内地下室は全部コンクリートで、雨天體操場に當てられ、柔道擊劍の道場にも用ひられた。一階より三階までは全部寄宿室で、東部、中央部、西部の三部に分たれ、各宿室は寢室と書齋の二つに分れ、一室に寢臺は三臺、若くは四臺造りつけられてゐた。合針宿室は二十八、寢臺は百十二であつた。この建築に關する資金は大略一萬圓であつたと傳へられる。

明治學院創業當時の建物は以上の二館であるが、サンダム館はその後殊に二階の講堂の大きな洋燈の下で毎週一回金曜の夜に行はれた文學會によつて、可成り深く在學生の印象に残つたし、ヘボン館の方はその五階の檣が非常によい眺望を占めて居た事、西には武藏野から秩父の山々の彼方に富士を見渡し、東には品川灣の海水の彼方に房總の山々を眺んで、廣やかな眺望を占めて居た事、及び有志の人々が其處で朝な朝な早天祈禱會をした事、又澤山の窓から靜かな夜の校庭に懐しい燈の光を放つ

て居た事などによつて、矢張り在舎生の腦裡に深く刻まれてゐたが、惜しい事には今は二館とも白金の丘から姿を消してしまつた。

移轉 とも角以上の二館が完成した明治二十年の九月に京橋區築地明石町の一致英和學校と、從來神田淡路町二丁目四番地にあり、その當時ほんの短期間麴町區富士見町一丁目二十一番地に移されてゐた英和豫備校の二校が、白金臺に移される事になつた。白金に移されると同時に學院の教授陣容は幾分その趣を異にした。それは前述の學院設置願の中に書かれてゐる諸項目に準じたもので、先づ院長たるべき位地に教頭といふ名目でヘボン博士が推された。その下に三つの學部が置かれた。

(一)普通學部 (二)邦語神學部 (三)専門學部である。

普通學部の筆頭教授はヘボン博士であり、バラ、ワイコフ、マコウレイ、ハリス、マクネヤ、石本三十郎、服部綾雄氏等が正教授として諸科目を擔當し、助教授としては杉森此馬、エ・ピ。バラ女史、アール・エフ・バラ、内田秋藏の諸氏が就任してゐる。石本三十郎氏は英語の外に動物學、杉森氏は同じく英語の外に植物學を擔當してゐる。内田氏は體操、圖畫を教へる外に舎監としてヘボン館在宿生の監督の任に當つた。

邦語神學部 この部はサンダム館落成と同時に白金臺に越す事は出来なかつた、それは新築校舎に

神學生を收容する丈の餘地が無かつた爲めに、明治二十二年ハリス館の落成を待つて漸く移轉したものである。然し十九年の合併の時限り、東京一致神學校といふ名稱を廢して、明治學院邦語神學部となつてゐた。それで、今は學院の一學部としてその陣容をここに記載して置かう。

筆頭教授 系統神學聖書神學

ジエームス・エル・アメルマン

教授 辯證論、說教學、牧會學

ジョージ・ウイリアム・ナックス

同 舊約歴史、聖經文學

ヒュー・ワデル

同 新約聖書註釋

ウイリアム・イムブリー

同 教會歴史

井深梶之助

講師 新約聖書註解

イー・ロセイ・ミラー

同 聖地々理、聖地考古學

大儀見 元一郎

同 說教學

ギド・エフ・ヴァベック

同 辯證論、牧會學

植村 正久

員外教授 英語

石本三十郎

専門學部

この部は全く新しく組織された二學部であつて、學生もたゞの三名より無かつた。この

學部は強ひて云へば二科に分れてゐる。一つは英語神學部であり、他は正科と謂つた。併し教授にはその區別はない。筆頭教授としてはウイリアム・イムブリー氏が選ばれて、組織神學、自然神學を教ゆる外に心理學を擔當し、同氏の下にマクネヤ氏とワイユフ氏の二氏が居つて前者は論理學、後者は拉典語を教へて居た。生徒は一致英和學校の課程を卒業した者を收容したものである。

學生及生徒 移轉當時の學生及生徒の總數は二百八十四名である。その中普通部即ち一致英和學校からの移轉者は第四年級一名、第三年級十三名、第二年級二十九名、第一年級三十三名である。その四年級の一人とは三校合併後の第一回の卒業生白洲文平氏である。同氏の明治二十年六月の卒業式は實に堂々たるもので、京橋區木挽町厚生館で内外の貴賓を多數招待して、白洲氏には英語の卒業演説を爲さしめて大いに學院のために氣勢を擧げたと傳へられてゐる。参考のため二三學生の年齢を調査して見ると、移轉の當月多田氏は滿二十年一ヶ月、植木氏は滿十六年、宮地謙吉氏は滿二十一年、小城徳太郎氏は滿十七年であつた。

豫科學生 即ち麴町富士見町の豫備校から轉じて來たものは總勢百七十八名の多數で、其の中二年級は九十八名、残り八十名は一年級であつた。この外

神學部學生 がある。まだ白金臺に來ては居なかつたがその總勢は三十名。邦語學生が一、二、三

の各年級を通じて九名宛、英語學生即ち學院専門學部に屬する者が二年級に一人、一年級に二人であつた。邦語最上級には秋葉省像、江川勝信、古澤久治、兒玉庄吉、和知牧太の諸氏が居り、第二年級には馬場銚作(英語部)、尾島眞治、高木熊次郎、武藤健の諸氏が居り、第一年級には細川劉、鈴木鎗次郎、陶山斌二郎、大石憲英の諸氏が居た。此三十名を加へると學生の總數は二百八十四人となる。

管理法——理事員局 管理の最高機關は前述の通り理事員會であるが、合併後はそれを理事員局と名附けた。理事員の大部分は校内に教鞭をとる人々であつたから、尠くとも月一回は定期集會をして學院全體に關する催し施設の増減、教員の任免、學生の賞罰、其他萬端に互つて可成り微細な點まで討究協議して、基督教教育の徹底を計ると同時に、各學部の連絡を保つにつとめた。

教授會 理事員局の下に普通學部、邦語神學部の兩教授會があつた。當該學部の管理並びに教授に就いて、矢張り毎月一回定期集會を行つて、訓育の徹底を計り、その教授會並に理事員會の決議は幹事が之を校内に實施するの責任をもつて居た。

三 學 制

學制は大別して前述の三學部に分たれてゐる。以下各學部について當初の學制を簡略に記載して置

く。
普通學部 『本學部ノ學科ヲ分チ本科豫科トシ本科ノ課程ヲ四學級ニ分チ、豫科ノ課程ヲ二學級ニ分ツ。一學年ヲ以テ一學級ヲ終ルモノトス』と定義されてゐる。即ち豫科二年本科四年都合六學年の課程である。

豫科學科課程表

第 一 年 級

學 科	第 一 期	第 二 期	第 三 期
倫 理	道德の要旨 五	同 上 五	同 上 五
和 漢 文	講讀(漢文) 作文(漢字交り文) 五	同 上 五	同 上 五
英 語	讀方、譯解、作文、習字 一五	同 上 一五	同 上 一五
數 學	算 術 五	同 上 五	同 上 五
地 理	自在畫 一	萬國地理 二	同 上 二
圖 畫	自在畫 一	同 上 一	同 上 一

體操 普通體操
合計 六

第二級

倫理 道德の要旨

和漢文 講讀(漢文) 作文(漢字交り文)

英語 讀方、譯解、作文、會話

數學 算術

地理 萬國地理

圖畫 自在畫

唱歌 單音唱歌

體操 普通體操

合計 八

本科學科課程表

第一級

倫理 道德の要旨

和漢文 講讀(和文漢文) 作文(漢字交り文)

學制

體操 三
合計 三
同 上
七
三六 三

倫理 五
同 上
五

和漢文 三
同 上
三

英語 二〇
同 上
二〇

數學 三
同 上
三

地理 二
同 上
二

圖畫 一
同 上
一

唱歌 三
同 上
三

體操 三
同 上
三

合計 四〇
八

四〇

二五

同 上

同 上

二五

體操 三
合計 三
同 上
三六 三

倫理 五
同 上
五

和漢文 三
同 上
三

英語 二〇
同 上
二〇

數學 三
同 上
三

地理 二
同 上
二

圖畫 一
同 上
一

唱歌 三
同 上
三

體操 三
同 上
三

合計 四〇
八

四〇

二五

同 上

同 上

二五

第二 年 級

圖	地文及物理	生理及健全	歷史	數學	英語	和漢文	倫理	合計	體操	唱歌	圖畫	動物	歷史	數學	英語
用器畫		生理及健全	英國史	幾何	講讀、文法、作文、講演	講讀(和文漢文) 作文(漢字交リ文)	道德の要旨	八	普通體操	單音唱歌	自在畫	動物		算術	講讀、文法、作文、會話
一	五	五	五	五	五	二	五	三五	三	三	一	二	五	一四	
同	地文		佛國史	同上	同上	同上	同上	九	同上	同上	同上	同上	米國史	代數	講讀、文法、作文
一	五		五	五	五	二	五	三五	三	三	一	二	三	五	一一
同	物理		獨國史	代數	同上	同上	同上	九	同上	同上	同上	植物	同上	幾何	同上
一	五		五	五	五	二	五	三五	三	三	一	五	三	五	一一

學制	第四年級										第三年級									
	倫理	合計	體操	唱歌	圖畫	簿記	論理	化學	物理	歷史	數學	英語	倫理	合計	體操	唱歌				
	道德の要旨	一〇	兵式體操	復音唱歌	用器畫	單記	論理	化學	古代	代數	修辭、作文、講演	道德の要旨	九	兵式體操	單音唱歌					
五		三四	三	三	一	一	二	五	五	四	五	五	三四	三	三					
同上		一〇	同上	同上	同上	復記	同上	物理	同上	幾何	同上	同上	九	同上	同上					
五		三四	三	三	一	一	一	五	五	四	五	五	三四	三	三					
同上		一〇	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	三角法	同上	同上	九	同上	同上					
五		三二	三	三	一	一	二	三	五	四	五	五	三四	三	三					

英語	講讀、作文、講演	五	同上	五	同上	五
歴史	古代	五	同上	五	同上	五
地質			地質	二	同上	二
星學	地球、太陽系、天體、恒星	五	同上	五		
心理	心理	三	同上	三	同上	三
理財	理財	二	同上	二	同上	二
體操	兵式體操	三	同上	三	同上	三
合計		一八	八	三〇	七	二五

右ニ掲ル學科ノ外音樂、ラテン語、ドイツ語ノ三科ヲ副置シ音樂ハ生徒ノ望ニ從ヒ正科ノ餘暇ヲ以テ之ヲ兼修セシメラテン語ドイツ語ハ本科第三年生及第四年生ニ限リ望ニヨリ毎週二時間ヅ、之ヲ修學セシム

之を通覽して、現在の科目配當表と著しく違ふところは倫理の時間の異常に多いこと、授業時間の存外多いことである。豫科二年に於ける一週四十時間を、土、日兩日を除いた五日間に配當して見ると一日平均八時間の授業をすることになつてゐる。その上數學といひ地理といひ教科書は凡て英書であつた點を考へ合はすと、學生達も随分に忙がしい日々を送り迎へしたと思はれる。同時に教師の擔當時間も非常に多い。豫科を二組宛とし本科を一組づゝとして第二學期に於ける授業時間を通算すると一週二百九時間となり、之をへボン博士を除く十一名の普通學部教授助教授に割當てると一人當

り一週五日(平均)十九時間となつてゐる。

宗教々育 (禮拜及聖書授業)

さりながら、諸教授の日々の仕事は以上に列記した課程の教授に留つてはゐなかつた。それに注がれる努力と均等な努力、否ある人にとつては更に深い熱誠を以て、日々別個な宗教教育が施されてゐた。

一、教授ハ毎朝(日曜土曜ヲ除キ)課業ニ先テ、必ズ生徒ヲ講堂ニ召集シテ眞神ニ感謝祈禱ヲナス。サンダム館の二階の講堂に全學院の教授と學生とは相集ふて毎朝課業前に禮拜をなしたものである。マクネア氏とワイユフ氏は主として讚美歌を指導し聖書朗讀と祈禱は諸教授が交互にその任に當つたものである。

一、生徒在學中各學級ニ依リ聖書ヲ教授スル事左ノ如シ

豫科第一年級 新約聖書福音書

同 第二年級 續キ

本科第一年級 同 續キ

同 第二年級 同 使徒行傳

同 第三年級 舊約聖書歴史及預言書

學 制

之は前述の學科配當表にある科目以外に教授したものである。この外に『毎日曜日午前講堂ニ於テ安息日學校ヲ開キ生徒ヲシテ聖書ノ眞理ヲ學バシム』とある。また『月曜日、火曜日及木曜日午後六時ヨリ專ラ在舍生徒ノタメ聖書ノ講義ヲナシ月曜日午後七時ヨリ同ク説教ヲナシ生徒ヲシテ基督教ニ基キ各自ノ徳性ヲ涵養セシメント欲ス』とも誌されてゐる。かやうにして教養した基督教信徒の學生をどうして統一してゆくかといふ事にも當局者の思念は既に注がれた。それは一覽第四章第十の生徒の結會といふところに『本學部ニ在ル基督教信徒相謀リ共勵會ヲ設立シ會員互ニ獎勵シ以テ其智徳ヲ高尚ナラシメ有爲活達ノ元氣ヲ養成シ兼テ眞正ノ宗教ヲ擴張シ文明ノ基礎ヲ鞏固ナラシムルノ目的ヲ以テ毎月第二土曜日ニ獎勵會ヲ開キ感話質問演説等ヲナシ毎週水曜日夜ニ祈禱會ヲ開ク』とあるによつても明らかである。

獎學の方法―文學會

獎學金及褒賞金 學生に勉學の精神を鼓吹するため、また一面には有爲にして貧困なるものを補助するために獎學金の制度が設けられた。その規定は次の通りである。

『本科三學年ノ終リニ於テ該學年中在學シタル者ニシテ學年評點九十點以上ヲ得且ツ平素ノ品行方

正ナル者二名ヲ選デ之ヲ與フ、當選者ニハ各五拾圓ヲ十ヶ月ニ配附シ翌年ノ初メヨリ在學中毎月金五圓ヅ、授與スルモノトス。』當時五拾圓といふ金は、一ヶ年間の授業料十五圓、舍費六圓、食費約三十圓を支拂ふに足るもので、奨學金をえたものは一ヶ月一圓足らずの小使錢を父兄から支給されるならば優に最後の一學年間の修學が出来たものである。

第二の奨學法は褒賞金である。規定としては「毎年五月本科第三年生ニ英語演說文ヲ作ラシメ評點八十點以上ヲ得タル者ヲシテ卒業證書授與式前ノ月曜日ニ於テ演說セシメ主意及演說方ニ優等ナル者二名ヲ選ビ高點者ニ褒賞金拾圓ヲ與ヘ次點者ニ同金五圓ヲ與フ」といふのである。この後者の賞金も當時の金額としては可成に莫大なものであつたから、青年學生の競學心を鼓吹した事は勿論である。けれどもこの二つの方法よりも更に學院に學ぶ青年學生を自由にかつ思想的に培つたもの、また學院の歴史に於て可成に重要な意義を有するものは文學會である。

文學會 文學會は表面では生徒の創意によるもの、如く成文上見られるが、當初は學院の當局者と共にワイコフ、服部氏等の發案したものであつて、經濟的にも精神的にも當局そのものが補助してゐたことは明らかである。規定には『生徒相謀リ英和文學會ヲ設立シ其規則ヲ定メ、英文朗讀、英語演說、邦語演說、邦語討論ノ諸科ヲ設ケ每週一回講堂ニ集會シテ之ヲ行フ、本學部ニ於テハ毎年若干ノ

金額ヲ支出シテ新聞雜誌等ノ購入費ヲ補助シ集會ニハ教授一名必ズ臨席シテ生徒ノ作文演說討論等ニ批評ヲ加フ、本科生ハ必ズ入會シテ共ニ勉勵スルヲ要ス』とある。また『毎年卒業證書授與式ノ前日ニ於テ大會ヲ開キ内外朝野ノ貴賓ヲ招待シテ其覽觀ニ供ス』とある。時は國會開設の機運が追々に熟しつゝある頃で、我國では單に青年學徒のみならず、苟しくも政治を論じ思潮に著眼するの士は皆等しく辯論演說を尊重しました欣んでそれに耳を傾けた頃であつたから、この文學會は當局の豫期した以上盛んなものとなり、従つて、之が學院の教育に與へた影響は甚大のものであつた。その文學會の經過は後に調査粗述するつもりである。また之は直接獎學法とは云ひえないかも知れぬが『日本基督一致教會ニ屬スル教師ノ子息ニ限り授業料ヲ要セス』との明文が既に記載されてゐる。之は本院が白金に移轉するに先達つ明治十九年(千八百八十六年)十一月十一日の理事員會に於ける決議であつた。

學年 曆

九月十三、四日

入學試業

同 十五日

第一學期授業開始

十一月三日

休業(天長節)

十二月二十日

第一學期授業終ル

同 二十一日

試業始ル

同	二十三日	試業終ル(後冬期休)
一	月 九日	第二學期始ル
一	月 二十六日	休業(明治學院紀念日)
二	月 十一日	休業(紀元節)
三	月 二十七日	第二學期終ル(春期休業)
四	月 九日	第三學期始ル
六	月 十九日	第三學期授業終ル
同	月 二十四日	卒業説教
同	月 二十五日	第三學年應賞英語演説
同	月 二十六日	和漢文學大會
同	月 二十七日	卒業證書授與式
同	月 二十八日	夏期休業始ル
九	月 十五日	同休業終ル

この學年曆によりて見ても懸賞演説や文學會なるものが可成重要視されてゐることが解る。

四 明治學院の順調期（明治二十年——二十六年）

へボン館の大建築とサンダム館の校舎とを備へて愈々開校した當初の明治學院は、二百八十四名の學生と、普通學部に十二名の専任教師とをもつてその勢仲々當るべからざるものであつた。恐らく東京市内に私立の學校として、之れ程の廣濶な地所と壯大な寄宿舎と瀟洒な校舎と、英語に就いては比類のない堪能者である石本三十郎氏を始め、服部綾雄氏杉森此馬氏等を控え、教養の深い幾多の外國人を擁して居た學校は他になかつたに相違ない。

志ある青年達は競ふて此白金臺に集つた。それは特別に基督教的教育を受けようとするのでは無くて完備した設備の下に完全な英語教育を受けようとして集つたものである。しかし無論彼らの修學の期間中に人格の高潔なそれ等内外人から、思はず知らず基督教的感化を受けて居た事は事實である。兎も角明治二十年以後明治二十六年に至る六年間は、先づ明治學院の第一期順調時代を劃したものといつて決して差支へはなない。二十年十二月（普通學部本科）のレコードブックによつて見ると左記の通りの在籍者がある。

Senior

Abe

Endo

Maki

Nakada

Shomura

Tada

Tochiya

Yasunura

Yoda

Juniors

Miyachi

Kinuchi

Ueki

Hosoni

Uchida

Tomiyama

Fujiiki

Hashimoto

Ogawa

Okuda

Kaku

Mizunashi

Tsuchikada

Hoshino

Yoda

Kihara

Kitajima

Kuki

Miyamoto

Moriyama

Oki

Shirasu

Sakai

Sophomores

Akiyama

Fujiita (R.)

Fujiita (G.)

Hayashida

Hoshino (I.)

Hoshino (M.)

Imai

Ishiwara

Iwasaki

Kato (H.)

Kato (T.)

Kawai

Kobayashi

Miyoshi

Nakanura

Nikura

Okamoto

Ozaki

Sato

Ota

Wada

Yoshimura

Freshman

Akada

Hirato

Ikari

Isono

Ito (T.)

Kato

Kojima	Kurihara	Matsura	Nagata	Oda	Ogura
Omori	Saneto	Shimazaki	Takahashi	Takesaki	Takehisa
Tamagi	Tarui	Nakamura	Tominaga	Yachi	Yashizu
Yoshinaga	Harada				

先づ此の間に學院の建物の増設について述べて見よう。邦語神學部はサンダム館中に校舎を得兼ねた爲め、當分築地の十七番館に残留して居た事は前に述べた。しかし教授會理事員會の開催上非常なる不便を來す事と、學制統一に困難のあるのは當然である。

ハリス館 所が、恰かもよし北米フィラデルフィア州のハリスといふ篤信なるプレスビテリアン系の基督教信徒が、明治學院の施設のために、明治二十一年四月金三千弗の寄附を申込みました。學院理事會は夫れを以て當分の邦語神學部用校舎として、又明治學院幹事の居宅として、築地七番地にあつた元築地大學校の校舎を白金に移轉する事と決つた。工事は明治二十二年の四月から始められて夏中に從來エイチ形であつた校舎をエル字形の建物に直し建坪階上階下共に九十五坪となして白金の地に移した。そして、その名を寄贈者の名に因んでハリス館と稱した。同年九月に邦語神學部はこの建物に移された。

神學部校舍兼圖書館 翌明治二十三年明治學院理事會はハリス館移轉費の殘額に、兩ミツシヨンの寄附金其の他を合して神學部校舍の建築を開始した。約半歲にして同年六月二十四日其の獻堂式を行つた。この建物のことに關しては別稿に述べるがその出來によつて、普通學部の學生は自由に出入して讀書しうる圖書館をえたことは非常なる便益であつたに相違ない。

この落成と同時に、暫らくハリス館に假寓して居た邦語神學部は之に移轉される事となり、從來便宜上郊外の一家屋を賃借して寄宿して居た神學部學生は、ハリス館を專屬の寄宿舎と定められたが爲めに、之に移る事となつた。

ミラー氏の邸宅寄贈 築地元一致神學校の建物の後方筋向ひの明石町二十九番地にイー・アー・ミラー氏が立派な私宅をもつてゐた。何分ミラー氏は當時の宜教師中切つての裕福者であつたが爲めに、一宜教師の邸宅としては可成りに立派なものであつた。明治二十一年十二月六日同ミラー氏は明治學院理事會に對して將來學院の講堂を建設する費用として、その土地邸宅全部を寄贈したいと申出られた。しかしそれには一條件として寄贈者の名前をその禮拜堂に附して呉れるなといふ事があつた。學院理事會はその旨を帶して有難くミラー氏の好意を受ける事となつた。

明治英學校の設立 白金臺のサンダム館は普通學部本科生の増加と共に、幾分狹隘を感じたためか

それとも白金は交通の稍々不便なため年少の學生を集めるのに困難を感じたためか明治二十二年十一月の理事員會で左のやうな決議が行はれた。

一、文部省よりの許可あり次第有樂町方面に學院の一分校を設け、之を明治學院分校と稱すべき事

二、開校と同時に豫科學生を同所に移すこと。

三、マコウレ一氏を専任教授となす。

四、大綱は學院理事員會の命に據り日常の些事は之を専任の教授に委託。

五、訓育上の管理は教師の代表者たる校長に従ふものとす。

六、入學生の年齢は十四歳限りとす。

七、入學金一圓月謝金一圓と定む。

八、左の經常費を認む

家賃金二拾圓 一ヶ月

校長俸給金四拾圓 同

譯讀教師俸給金三拾圓 同

漢文教師俸給金拾五圓 同

數學教師俸給金拾五圓	同
使丁手當金五圓	同
校長住宅家賃金五圓	同
人力車夫費金拾圓	同

合 計 金壹百五拾圓也

この原案に基いて石本杉森の諸氏は家屋を物色しそめたが翌二十三年一月の理事員會では家は新橋近くに見當つて學院の一教師北見氏がそこに住み専ら生徒の面倒を見ることになつたと報告されてゐる。又北見氏は同日の理事員會で明治英學校の幹事に任命され、其月から明治英學校は開校された。然し開校はしたもののその成績は頗る思はしくなかつた。そのためか約半年の後の六月の理事員會には再び白金に歸還させてはといふ動機が出てゐるが植村氏石本氏ナックス氏が特別調査委員となつてまづ一學年即ち二十四年六月までの經過を見てからと決議されてゐる。ところが明治二十三年九月に至つて、如何なる理由か麴町區山手中六番町に移轉したが越えて二十四年三月には如何にも二つの學校を經營する事は教授の時間から見ても經費から見ても不經濟であるが爲めに、もとの白金臺に移す事となつた。

理事長の變遷 次にはこの期間中の人事に關する事を概観して見る。創立以來理事員會議長として大いに學院の爲めに盡瘁したナックス氏は、議長を辭して明治二十年本國に歸る事となつた。ナックス氏の議長のあとを受けたのは井深梶之助氏であつた。井深氏の時代に愈々白金移轉の大事業が大成し明治二十一年に至つてヴァベック博士が理事員會議長に選舉された。翌明治二十二年にはアメルマン氏がヴァベック氏の跡をついで議長となり、その後ながく氏はその位地について居た。

服部幹事辭任杉村氏就任 年齢十八歳にして築地大學校の幹事となり、其の後神田英和豫備校の校長となり、又明治十九年の白金移轉當時は學制の制定や政府との交渉や、建築請負師などの折衝に於て大いに敏腕を振つた服部氏は一身上大いに思ふ所あつた爲めか、明治二十一年三月學院理事員會に辭表を呈出して遠くアメリカに旅出つ事となつた。井深氏等は切りに氏の明治學院との關係を斷たるゝを惜んで、その辭意を翻させ様と八方つとめたが、氏は遂に意を動かさずに學院を去つて了つた。そして後任としては杉森此馬氏が擧げられ、幹事の椅子を占められた。

ヘボン氏總理に擧げらる 明治二十二年十月二十一日學院理事員會は學院の對外的代表者の必要を感じて、徳望高きヘボン博士を滿場一致で推舉した。ヘボン氏は老體決して其の任に叶はずと云つて頻りにそれを辭退したが、理事員會は井深梶之助氏が教授兼副總理としての地位をしめて實務をとる

といふ條件を提して切りにその就任を慫慂した爲め、博士も遂にそれを承諾された。同時に井深氏は副總理として學院全體の訓育上の責任をもつと同時に權能を與へられる事となつた。

井深副總理の留學 明治二十三年七月井深副總理は北米合衆國ユニオン神學校に一ケ年留學することとなつて當分副總理の職を辭された。その不在中は杉森此馬氏が井深氏に代つて一切の管理をされることとなつた。

ヘボン博士の總理辭任 明治二十四年九月、井深梶之助氏がユニオン神學校で一ケ年間教會史の研究をして歸朝すると、之を待設けてゐたやうにヘボン博士は學院理事員會へ總理職辭任の書面を提出された。それは同年十月十三日のことで、全文は次の通りである。

明治學院理事員會がその總理職を余に與へられしは誠に感謝に堪えざることなれども、熟考すれば老顏その職籍を完うし兼ね候へば、此の上は辭任致して理事員諸氏の手任せたく存じ候。

十月十三日、ヘボン博士も列席の上でこの辭表は鄭重に受理されて、ジョージ・ウイリアム・ナツクス氏と田村直臣とが學院を代表して左の通りの感謝決議文を老博士に手交することとなつた。

ヘボン博士に對する感謝狀

明治學院理事員會は今や名譽法學博士醫學博士ジェイ・シー・ヘボン氏の辭表を受理するに中り、博

士の奉仕に對し深厚なる謝意を表す。

過去四年間博士は明治學院教授並びに總理として本學院理事員會並びに教授會を好感を以て指導せられ、またその健康の許す限りは登院して實務に中られたり。博士の寄贈による二棟の優良なる建築物は博士の學院に對する深き關心の好記念物として永く存すべし。されども博士の奉仕と寄贈品に當まさりて我等が博士の名を尊重すべき所以は博士自らが明治學院の以て特質となすべき徳性を最もよく體現せられたることなり。

學徒として博士は完璧なる並びに新約全書に於て示さるゝが如く、東西兩洋の文學の精髓を究められたり。慈善家としては宣教師及び醫師の典型たるべく、『受くるより與ふるは幸なり』との主の御言葉を心に銘せられて廣く同胞に仕えんがため惜みなく己が所有の凡てを提供されたり。基督教徒としては、王たり救主たるイエス・キリストを基礎として己が生涯をその上に建設されしなり。

今明治學院理事員會はヘボン博士の熱心なる主張により、その辭表を受くるに當り滿腔の敬意を表す。願はくば博士の眞實なる愛と尊むべき記憶のうちに明治學院を覺えられん事を願ふとともに博士の生涯の薄暮の神より來る完き平和のうちに過され、殘る生涯のさらに神の臨在とその恩寵の證たらんことを祈る。

千八百九十一年十月十三日

明治學院理事員會代表者

ジョージ・ウィリアム・ナックス

田村直臣

老博士は悦んでこれを受けられ、次いで總理後任の議がその議席に齎らされた。ノックス氏は動議として井深梶之助を推薦したが、忽ち満場一致でヘボン博士の後任と決定された。

井深梶之助氏總理就任 同年十一月六日井深新總理の就任式がサンダム館講堂に盛大に催された。その時舊總理ヘボン博士は新總理に學院の管理の全權を委譲する印として、壇上で鍵を一箇手づから井深氏の手に與へた。又會衆に向つては『井深氏はその名の示す通り梶であります、私は明治學院といふ船にこの新しい舵をつけました。この船はこれからどの様な方向に乗り出しても、此の舵は決して針路を誤りませぬ』と滅多に諧謔を弄しない老博士は非常な喜びを満面に見せながら總理職委譲の挨拶をした。

又丁度その時日本基督教會の大會が開かれて居たが、稻垣信氏が大會を代表して祝辭を述べたが、『今日になりて菊造らうと思ひけり』との古句を述べて、井深氏の榮譽とその前途に羨望と祝賀の意

をのべて多大に趣を添へた。又式後學生達は井深氏の身邊に集つて胸上げをして學院全體が非常に慶賀の氣に満されたと傳へられる。

五 明治學院憲法及び職制の制定

明治二十四年十二月十七日井深總理の就任後一ヶ月學院では一切の條規の基準となるべき憲法と職制が理事員會で制定發表された。憲法の方は明治十九年三校合併の機會に起草された明治學院創立案と大同小異である。職制の方は大正元年の幹事制の廢されるまでの可成長い間踏襲されてゐた。現在の憲法及び職制とは可成異つてゐることは勿論である。

憲 法

一 明治學院ハ北米合衆國プレスビテリアン教會及ビアメリカリフオームド教會の兩ミツションがスコットラード一致プレスビテリアン教會ノミツショント合議ノ結果建設シタル一學府ナリ。

二 本學府ノ目的ハ完全ナル基督教教育ヲ授ケ特ニ青年ヲシテ基督教教師トシテ訓育スルニアリ。協力ミツション並ビニ其ノ他ノ財源ヨリ得ル一切ノ資金ハ神聖受托金トシテ此ノ目的ノタメニノミ

用キラル。

三 本學院ノ總攬並ビニ經營ハ理事員會ニ因ツテ定メラル。

四 理事員會ハ七名ノ外人七名ノ日本人ヨリ成ル。外人理事員ハ協力ミツシヨニヨリ選舉サレ、日本人理事員ハ日本基督教會ノ健全ナル信徒タルヲ要シ、理事員會ニテ選舉サル。任期ハ二年ト定ム

五 協力ミツシヨニ屬スル男子並ビニ本學院教授ハ凡テ陪席員タルヲ得、陪席員ハ發言權ハ有スルモ決議權ハ無キモノトス

六 本學院ノ總攬並ビニ經營ニ關スル權限ハ左ノ如シ。

イ 本學院内ノ凡テノ役員ノ任免移動、但シ幹事ハ除外シテ總理ガ理事員會ノ協賛ヲ經テ任免移動セシムルモノトス

ロ 教授及ビ教員ノ任命移動並ビニ諸種ノ教導法ニ關スル指定

ハ 協力ミツシヨニ所屬員以外ノ役員教師雇員ノ俸給ノ決定

ニ 學院財務ノ監査

ホ 年報及ビ精算書ノ調製、寫本ハ各協力ミツシヨニ送達スルモノトス

七 本學院ノ役員トハ、總理、會計、幹事ノ三名トシ、其ノ職分ハ理事員會ニヨリテ決定サル。

八本學院ハ普通學部神學部ノ二學部ヲ含ム。各學部ノ教授會ハ理事員會ノ指揮ヲ待チテ當該學部ヲ管理ス。

九學院ノ資産ハ理事員會ニテ選バレタル四人ノ法定財産管理人ガ理事會ヲ代表シテ所有スルモノトス。

一〇理事員會ノ合法的決議ヲ有效ナラシムルタメ法定財産管理人ノ批准ヲ要スル場合ハ猶餘ナク其レヲ受ケウベキモノトス。

一一規約ノ改正ニヨリテ以上ノ決議ガ法規上認メラル、場合ハ法定財産管理人ハ本學院ノ凡ユル財産ヲ理事員會或ハ其ノ後繼者ニ讓ルベキモノトス。

一二此ノ憲法ハ協カミツシヨンノ協賛アリテ理事員三分ノ二以上ノ賛成若シクハ理事員會ノ協賛アリテ協カミツシヨンノ三分ノ二以上ノ賛成アル場合修正サレウルモノトス。

五 職 制

總 理

一總理ハ理事員會並ビニ普通學部神學部教授會ノ議長タルベク、又公式ニ學院ヲ代表スルモノナリ
二總理ハ兩教授會ノ實行主體ニシテ、學院ノ管理訓育上諸教授ヲ指導ヲナシ、又兩教授會ノ決議施

行ノ責任ヲ有ス。

三學生ノ不行跡ヲナセル場合總理ノ判斷ニ於テ輕微ト見做ス場合ハ、之ヲ總理自ラ適當ニ處置スルヲ得、事重大ナル場合ハ當該學部ノ教授會ニ提議ス。

由々シキ犯則者ノ生ゼシ場合總理ハ直チニ停學ヲ命ジ速カニ主簿並ビニ最近ノ教授會ニ報告スルヲ要ス。學生ノ放校ハ必ラズ教授會ノ決議ヲ經テ後行フベシ。

學院ノ秩序ヲ保ツタメ總理ハ必ラズ教授會ノ擁護アルモノトス。總理不在ノ節ハ幹事或ヒハ教授ノ一名學生ノ秩序ヲ保ツベキ責任ヲ有ス。不在中ニ起リシ事ハナルベク速カニ總理ニ報告スベキモノトス。

四學院内ノ教授或ハ教員ニ就キ總理ニ告訴アリタル場合、次ノ順序ヲ以テ處理セララル。

- イ 當該告訴者ヲ招キテ先ヅ詳細ニ事ノ真相ヲ確カメ同時ニ由々シキ結果ニ到達スベキヲ諭示ス
- ロ 總理ニシテ當該問題ヲ尙考慮スル必要アリト認メタル場合秘カニ當人ヲ招キテ懇談ス
- ハ 懇談ノ後總理若シ考慮繼續ノ必要アリトスル場合ハ教授會ニ其事件ヲ提出ス
- ニ 必要ナル限り教授會ハ多數決ヲ以テ總理ガ該事件ヲ理事員會ニ提出スルノ權限ヲ准允スルヲ

得

五總理ハ日曜日及ビ其他ノ日ニ學院内ニ行ハル、禮拜ヲ指導監督スベシ。又學科目トシテノ聖書教授以外ノ學院内ニ於ケル一般ノ宗教的集會ヲモ指導監督スベシ。學科トシテノ聖書教授ニ就イテハ定期ニ或ハ臨時ニ總理自ラモ分擔スルヲ希望サル。

學院ノ精神の統一ノ總理ノ努力ニ對シテハ學院ニ關係スル凡テノ職員ノ基督教の感化力ニ因ル公私ノ協力ヲ受クベキモノトス。

幹 事

一幹事ハ學生ガ教室外ニ在ル場合ノ直接ノ監督者ナリ。幹事ハ總理ニ直接ノ責任ヲ有ス。ソノ職分ノ執行ニツキ教授會ノ何レカヨリ受ケタル報告ハ總理ヨリ受クルモノト同様ニ執行スルヲ要ス。若シソノ職分ノ怠慢ナリシ場合ハ教授會ニ提議セラル、ニ先ンジ總理ノ注意ヲ受クベキモノトス。

二幹事ハ學生ノ入學登錄、退轉學ヲ司リ、寄宿舎ノ宿室ヲ指定ス。

三幹事ハ一日尠クモ一回寄宿舎ノ宿室ヲ改メテ、學生ノ學務其ノ他一切ノ行動ノ秩序ヲ保タシム、適當ノ理由アル場合學生ヲ臨時外出ヲ許シウルモ、疑惑アル場合ハ決定ヲ保留シテ總理ニ協議ス。凡テノ由々シキ不秩序ハ總理ニ報告シ、學院ノ器物ノ損傷ハ主簿ニ報告ス。又總理ノ委託スル範圍ニ於テ訓育指導ノ實際ニモ當ルベキモノトス。

四普通學部在學生ノ父兄保護者ト必要ナル通信ヲナシ、職務ニ關スル凡テノ質問ニハ適宜ノ應答ヲナスベシ。

五出席簿ノ變化ハ詳細主簿ニ報ズベシ。

六當該施設ノ缺如セル場合幹事ハ總理ニ代リテ東京府、區役所其ノ他トノ交渉ヲ完フスベシ。

七幹事ハ諸般ノ事務處理ノタメ一定ノ時間執務スベシ。

主 簿

一主簿ハ普通學部神學部ノ正確ナル出席簿ヲ保管ス。

二主簿ハ理事員會會計圖書委員ヨリ資金ヲ受ケ又學生ヨリ月謝其ノ他ノ校ヲ金支拂ハル。又以上ノ收支計算ヲナシ毎年九月最終ノ會議ニ八月末日迄ノ精算ヲナシテ普通學部教授會ニ提出スルノ義務ヲ有ス。神學部教授會モシ之ヲ要求スル場合ハ同様提出スベキモノトス。

三主簿ハ學院ノ認ムル俸給賃金獎學金賞與金並ビニ以上及ビ以下ノ條項ノ許ス限リソノ職分ノ執行ニ關スル入費ヲ支拂フ。

四主簿ハ使丁、門番、大工、庭師、給仕ノ監督ニ中ル。

五主簿ハ學院ノ圖書ヲ除ク外ノ一切ノ建築物並ビニ動産ノ管理ヲナス。

六主簿ハ必要ナル小修繕ニ配慮シ、當座ノ必需品ヲ購入スベシ。其ノ他ノ購入ニ關シテハ教授會ノ
指令ヲ待ツベシ。

七主簿ハ所管ノ事務ヲ處理スルタメ一定時間執務スベシ。

圖書係

一圖書係ハ書庫並ビニ讀書室ヲ管理ス。

二圖書係ハ教授會ニテ採用サレタル規定ニ從ヒ學生其ノ他ニ圖書ヲ貸與ス。

三圖書係ハ教科書ノ使用ニ關シ貸料及ビ依託金ノ支拂ヲ受ク。以上ノ金錢並ビニ教科書賣渡ヨリ得
タル金錢ハ之ヲ主簿ニ支拂フモノトス。

教授會書記

教授會書記ハ書記トシテノ通常事務ノ外當該學部ノ年報ヲ作製スベシ。但毎年六月ヲ以テ學年ハ終
了スルモノトス。教授會ノ承認ニヨリ其ノ寫本ハ學院理事員會書記並ビニ明治學院ニ於ケル協力ミ
ツシヨンノ年會書記ニ送達サル。

六 藤村氏の學びし頃 (明治二十年——明治二十四年)

明治二十年の晩夏白金臺にペンキの色も鮮やかにサンダム館とヘボン館とが深い緑の中に高い姿を見せた頃である、三田の英語學校から一人の大人しい、しかもどこかに秀れた天賦の仄見える、容貌の整つた十六歳の青年が普通學部一年級へ入學して來た。云はずもがなそれは島崎藤村、島崎春樹氏である。

藤村の生ひ立と學院入學 氏は長野縣西筑摩郡神坂村で明治五年二月十七日に生れた。父は正樹と云つてもと平田篤胤の門人、非常に子供の教育に熱心で氏の七八歳の頃には歡學篇や孝經論語などの素讀の出来るやうに教育した。氏は明治十三年九歳の頃東京に遊學して京橋區鎗屋町の姉婿高瀬氏の家から泰明小學校に通つた。明治十五年高瀬氏の同郷人吉村氏の家に移つた。吉村氏は非常に書生を愛する人であつた。明治十七年十三歳の頃から海軍官吏石井其吉氏について英學を始めた。明治十九年十五歳三田の英學校に入學した。可成に程度の高かつた普通學部本科一年に無事入學の出來た春樹氏の英語は、その時分年齢のわりに上達して居たものと思はれる。

氏の學ばれたのは學院移轉の當初から明治二十四年の六月まで、丁度本科の一週學年に中つてゐる。この期間には學院の施設の上から云つても在學生から云つても隨分學院の歴史に覺えらるべきことが多い。また學院そのものも日本の基督教界は云ふに及ばず一般の思想界にも可成に輝やかしい光明を投じてゐた。この時代に就いて、幸に島崎藤村氏は好著『櫻の實の熟する頃』に隨分細やかに學院の生活を描き出して居られるから之を處々轉載させて貰ふ。

百日紅 「界隈の寺院では勤行の鐘が鳴り始めた。それを聞くと夕飯の時刻が近づいたことを思はせる。捨吉は學校の廣い敷地について、亞米利加風な講堂の裏手のところへ出た。樹木の多い小高い崖にのぞんで百日紅の枝などが垂下つて居る。その暗い葉蔭に立つて獨りで手眞似をしなからしきりに英語演説の暗誦を試みてゐる青年がある。捨吉よりはずつと年上の上級生であつた。」
白金臺の夕暮である。瑞聖寺の左手の森に夕日が春くさまが見えるやうである。かなりの後まで舊サングラム館の後は急勾配の土手で、險峻な粗末な坂道もあつた。成程百日紅があつた。それは今中學部の號令臺のところに移殖されてゐる。學院周圍の自然はすつかり趣を變へたが瑞聖寺の梵鐘と松嚴寺の勤行の鐘とは今でも時折きこえてゐる。

「捨吉は寄宿舎の方へ歸つた。同室の學生は散歩にでも出かけたかして、部屋には見えない。窓のと

ころへ行つて見ると、食事をすました人々が思ひ思ひの方角をさして廣い運動場を過ぎつゝある。英語の讚美歌の節をうたひながら、庭を急ぐものがある。張り裂けるやうな大きな聲を出して暗い木蔭で叫ぶものがある。向ふの講堂の前から敷地つゞきの庭へかけて三棟並んだ西洋館はいづれも捨吉が教へをうける亞米利加人の教授達の住居だ。白いスカートを涼しい風に吹かせながら庭を歩いてゐる先生方の奥さんも見える。

夕方の配達を済ました牛乳の空罐を提げながら庭を歸つて行く同級生もあつた。流行歌の一つも歌つてさかせるやうな隱藝のあるものはこの苦學生より外になかつた。學校に文學會のあつた時、捨吉は一緒に餘興に飛び出し、夢中になつて芝居をして騒いだことがある。夢から醒めたやうな道化役者は牛乳の罐を提げて通る座頭の姿を見るにも絶えなかつた。

誰が歌つて通るのか聞きなれた英語の唱歌はすぐ窓の下で起つた。捨吉はその歌をさくと同じやうに調子を合せて口吟んでみて、やがて自分の机の方へ行つた。「

如何にもなつかしい學院の原始時代の風情である。明治二十一年から二十二年にかけて、三軒の教授館は順次に出來た筈である。近頃は牛乳配達をする學生はあらかくなつた。それだけ現代の方が進歩したのかも知れぬが何となくゆかしく過去は想像される。

寄宿舎 「安息のない、惱ましい、沈んだ心地で、捨吉は寄宿舎の部屋の方へ引返した。各の部屋

は自習室と寢室との二つに分れてゐる。寢室の壁によせて疊の敷いた寢臺が作りつけてある。そこへ彼れは身を投げるやうにして、寢臺へ顔を押あて、祈つた。」

捨吉と同じ經驗をしたもの果して幾人であらう。青年頃を單なる放洩無心の時代と云つてはならぬ。そこには云ひ難きの悩みがあり、祈りがある。ヘボン館のベッドの一つ一つはどれだけ多くのさうした苦惱や祈りのさゝやきを聞いたことか。

「第三學年も終に近いころであつた。翌朝教室の方へ集つて見ると、その學年の終りにある英語の競争演説の噂がしきりとされてゐる。下級の學生の美望の中で、教授達の家庭へ一同が招待された夜の樂しさなどが繰返される。捨吉が同級の中には随分年齢の違つた生徒が交つてゐた。『お父さん』と云はれるやうな老成人まで學びにきて居た。

エリス教授が教室の戸をあけて入つてきた。教授の受持は主にエロキューションなぞであつた。

『Now Gentlemen』

とエリス教授は至極鄭重な殷勤な調子で一切亞米利加式に生徒を紳士扱ひにするのが癖だ。」

その當時の西洋人はたゞ口先だけで生徒を紳士扱ひにするのではない。日本の學生のために生命を捧

げるつもりで來てゐた。心と心との教室であつたに違ひない。

郊外 「捨吉は講堂の前から緩漫な岡に沿ふて學校の表門の方へ出、門番の家のそばを曲り、櫻の木の下から學校の敷地に沿ふて裏手の谷間の方へ坂道を降りて行つた。一面の藪で樹木の間から朽ちかゝつた家の屋根などが見える。勝手を知つた捨吉は更に深い藪について分れた細道を降りて行つた。竹藪のつきたところで坂も盡きてゐる。彼れはよくその邊を歩きまはり、林の間に囀る小鳥を聞き、奥底の知れない方へ流れ落ちて行く谷川の幽かなさゝやきに耳を澄したりして、時には御殿山の裏手の方へ、またずつと遠く目黒の方まで獨りで歩きに出かけたことがあつた。四邊には人も見えなかつた。誰も遠慮もないこの谷間で彼れは堪らなく壓迫されるやうな切ない心を紛らさうとした。沈黙し鬱屈した胸の苦痛をそこへ洩らしに來た。張りさけるやうな大きな聲を出して叫ぶとそれが淋しい谷間の空氣へ響き渡つて行つた。一羽の鳥が薄明るく日光の射し入つた方から舞ひ出した。彼れはそこに小高く持上つた岡の裾のやうな地勢を見つけた。その小山へも馳登つて、青草を踏みちらしながらまたそこで力一ぱい大きな聲を出して怒鳴つた。」

この記事の示す郊外は今では殆んどその當時の想像さへ浮ばぬ藤山氏邸のあたりかとも思はれるが、兎もあれ、從來學院に學んだもので大崎目黒方面の郊外を愛しなかつたものがあらうか。大崎下屋敷

の水車のあつた邊から池田侯の森のあたりの自然は長い間學院の生徒の叫喚に山彦を返したものだ。

「基督教の倫理や教會歴史を神學部で講ずる學校の校長が捨吉の方の組へもきて時代分けになつた英吉利の詩と散文とを譯してくれた。この校長の正確な語學の知識は捨吉の心を悦ばせた。」

當時の井深副總理に違ひない。副總理が普通學部で英語を講じてゐた。部が異ると今では教授同志でさへ顔も名も知れなくなつてゐる。

圖書館と夏期學校 「捨吉にはもう一つ足の向く窓がある。新らしく構内に出來た赤煉瓦の建物は一部は神學部の教室で一部は學校の圖書館に成つて居た。まだペンキの香ひのする階段を上つて行つて二階の部屋へ出るとそこに澤山並べた書架がある。一段高いところに書籍の掛りも居る。時には歴史科を受もつ頭の禿げた亞米利加人の教授が主任のライブラリアンとして見廻りに來る。書架で圍はれた明るい窓のところには小さな机が置いてある。そこへも捨吉は好きな書籍を借りて行つて腰かけた。」

明治二十三年捨吉が三年生の時この圖書館は出來上つた。捨吉は一生懸命に *Englishmen of Letters* を讀んだといふ。後年賀川豊彦氏はやはり此圖書館でカントやヘーゲルやヘフディングやフリンントやバウンを讀んだといふ。大正十二年の九月一日の大地震で、この古城の一室のやうな圖書館は碎かれて

しまつたが、思へば惜しい。白金に學ぶ者の心あるものが古代中世近世の宗教家や哲人や詩人に自由自在に親しんだのはこゝであつた。羊皮で裝禎した三百年も昔にローマで書かれたといふラテン語の日本の文法書もあつた。ニケア會議以前の教父達の書簡集もあつた。淺田榮次といふ語學者がシカゴ大學で研究した時用ひたといふサンスクリットの書物もあつた。モンゼンのローマ史、メリベールのローマ史、グロートのギリシヤ史、此のやうな大きな古典ものは皆揃つてゐた。それよりも學問に憧れを持つ學生の胸を躍らせたものはホーメロスのイリアッドやオデッセイ、ツキデイデスのヘロボネソス戰役史、ビンダルの敍情詩、デモスセネスの雄辯集等がギリシヤ原文に行きとどいた注釋がつけられてずらつと並んでゐることであつた。ラテン語の書物にはセネカ、シセロ、マーカスアウレリアスのものなどは勿論中世からルネイッサンスに至るまでの大低の名著は備はつてゐた。たとひそれらは讀めないとしてもどれ程青年達の好學心を勵ませたか知れない。神學書の方面はおそらく日本隨一の程度に蒐集されてゐたものである。聖書、ことに日本譯聖書の發達史に關する資料は明治學院を措いて何處にもその比を見なからう。ガツラフがシンガポールで漂流人を相手に譯したといふ古い木版刷の約翰傳を開いてその冒頭の一句

『ハジマリニカシコイモノゴサル、コノカシコイモノゴクラクトモニゴサル、コノカシコイモノゴ

と拾ひ讀みした時に奇怪と驚異の感に打たれなかつたものがあらうか。

明治二十三年には基督教青年會の第二回の夏期學校が學院のサンダム館で催された。それに就いては次のやうに誌されてゐる。

「日本にある基督教界の最高の知識を殆んど網羅した夏期學校の講演も佳境に入つて來た。午前と午後とに幾人かの講師に接し、幾回かの講演を聞いた人達はチャベルを出て休憩する時であつた。……人々のつかふ扇子が白く動いた。そして思ひ思ひに夏期學校へ來て見た心持ちを比べ合つて居た。……やがてまたベルの音が講堂の下の入口の方で鳴つた。屋外へ出て休んで居た聽講者等まで階段を登つて來た。チャベルの方へ行く講師の一人が捨吉達を見て居る前を通つた。文科大學で心理學の講座を擔當する教授だ。

『Mだ』と昔は低音で捨吉に云つた。基督教界にはあゝいふ人もあるかと、捨吉も眼をかゞやかして、沈着な學者らしい博士の後姿を見送つた。

續いて舊約聖書にたづさはつたと云はれる亞米利加人で日本語に精通した白髮の神學博士が通つた同じく詩篇や雅歌の完成に貢獻したと云はれる宗教家で文學の評論の主筆を兼ねた一致教會の牧師

が通つた。今度の夏期學校の校長で東北の方でその人ありと云はれ、見るからに慷慨激越な氣象を示したある學院の院長が通つた。破鐘のやうな大きな聲と悲しい沈んだ聲とで互ひに夏期學校の講壇に立つて一方をイザヤに擬するものがあれば、一方をエレミヤに擬するものがある、聲望から經歷から相對立した關西組合教會の二人の傳道者が通つた。新撰讚美歌集の編纂委員たる長い白い髯を生じた老牧師が通つた。青山と麻布にある基督教主義の學院の院長が通つた。

「M」といふのは元良勇次郎氏であらう。白髮の博士とはタムソン氏であらう。それから後は植村正久氏押川方義氏宮川經輝氏澤山保羅氏奥野昌綱氏本多庸一氏等ではあるまいか。

「残る二學期の終には、いよ／＼四年生一同で卒業の論文を作つた。捨吉もそれを英文で書いた。學校の先生方は一同をチャペルに集めて、これから社會の方へ出て行かうとする青年等のために前途の祝福を祈つてくれた。聖書の朗讀があり、讚美歌の合唱があり別離の祈禱があつた。受持々々の學科のもとに先生方が各々署名して花のやうな大きな學校の判の押したのが卒業の證書であつたやがて一同は校堂を出てその横手にある草地の一角に集つた。皆でよつてたかつてそこに新らしい紀念樹を植えた。樹の下には一つの石を建てた。最後に捨吉は菅や足立と一緒にその石に刻んだ文字の前に立つた。『明治二十四年——卒業生』」

硬骨黨の存在 繪畫に彫刻に詩に文に若々しい憧れを抱く一派の青年島崎春樹氏馬場勝彌氏戸川明三氏等がゐるとともに、他の一面には明治十六七年のリヴィグルによつて清教徒風の信仰生活に導かれ、オーソドックスの教義を眞向に振かざして剛毅朴訥の生活これ青年の本領であると自重する硬骨の一派があつた。然し彼等は決して文藝の學生達に對して反抗をするのでもなければ攻撃をするのでもない。只至極眞面目にその硬骨振りを發揮してゐた。文藝の人々が『柔かい黒羅紗の外套の色澤、聞き惚れるやうなしなやかな編上げの靴の音、自分の好みによつて造つた軽い帽子、半ズボン、長い毛絲の靴下』といふ扮装で文學會でバイロンやシェリーの戀愛詩を誦んじたり、ハインを論じたりする時にこの硬骨の連中は象の足のやうな太い汚れたズボンに兵隊靴を穿ち髪は茫茫、髯さへ見せて、寄り合つては哲學を神學を政治を憲法を參政權を論じ、一面學院の軟弱な氣風を慷慨してゐたものである。其硬骨黨を代表するものは小倉銳喜、河井龜輔、笹尾彥太郎、小川豊吉の諸氏であつた。

押川方義氏の影響 當時日本の基督教界に重きをなして、青年ことに硬骨の青年の畏敬の標となつてゐたのは何といつても押川方義氏であつた。彼れの胸中に漲つてゐた基督に對する宗教的熱誠と徹底したる國粹主義とは演説をなすごとに彼れの言々句々に火花を散さずには置かなかつた。まして明治二十二三年頃と云へば歐化主義の反動が囂然たるとして起つた時で、天下の輿論が國粹論に傾き、

そのクライマックスの如くに憲法が發布され、教育勅語の煥發された頃である。かういふ思潮に處すべき硬骨の青年ことに硬骨の基督教青年達が押川氏を以つて時代の指導者、理想の人物として欽仰したのは尤ものことである。明治二十三年押川氏が英京より歸朝の時であるが右の學院硬骨の青年達は氏を新橋驛に迎えた。シルクハットを被つて威風堂々と汽車より降り立つ氏を見るや河井龜輔氏が一同を代表して奉書の紙に誌した建白書を奉つた。それにはよろしく東都に出て、我等青年を導き、基督教界に風靡しつゝある軟弱なる一派の空氣を一掃し、基督教の眞の精神主義を唱導されたいと誌してゐた相である。その新橋驛頭の建白書がどのやうな結果を齎させたかは今日知る由はないが、ともかく當時かういふ一派の思潮のあつたことは事實でありまた面白いことである。そしてこの硬骨黨が濃厚な清教徒的色彩を帯びてゐるところが他の學校に於ては見られない特徴である。明治二十五年の七月にこの硬骨黨の代表者の一人が普通學部を好成绩で卒業して遠く北米に留學に出かけた。それは創立五十年のこの時學院高等學部長として就任してゐる笹尾彥太郎氏であつた。

笹尾彥太郎氏 笹尾氏は明治四年二月長州下關で生れた。三歳にして母を失ひ且つその頃から家運が傾いたところから幼少の頃から審さに辛酸を嘗めた。氏が十二歳の頃父は大阪に出て、商東をして居たが、圖らずも英國の一宣教師から基督教を聽いて大いに悟るところがあつた。その後まだ未知の

青山氏が下關に傳道に赴かれた時、遠く大阪から氏に書を送つて下關の笹尾家の居宅を基督教講義所として用ひられることを勧められた。之が抑々笹尾兼太郎氏が基督教に接し始めた發端であつた。尤も兼太郎氏は幼少ながら我家を耶蘇教の講義所に用ひられることは、末代までの耻辱と感じて、最初は飽くまでも居宅使用を承知せず、泣きわめいたために青山氏等は廣告の提灯をたゝんで歸つた相であるが、歸りしなの青山氏の物柔しい態度が何となく心根の寂しかつた兼太郎氏の魂を捉へたものである。その後は氏の方から却つて青山牧師に道を求めて行つた。

十三歳の春、氏は豊浦中學校に入學した。その後明治十九年の中學校令發布によつて行はれた學制改革の節長州山口町に設けられた高等中學校一年級へ明治二十年四月に編入試験を受けて許された。處が何分にも家計が不如意であつたため、充分の學才はありながら高等中學の修學を續けかねて明治二十二年の夏苦學の志を抱いて上京白金臺に來つて普通學部本科一年に入學することゝなつた。在學中は一方勞役をしながら勉學したものであるが成績は頗る優秀で、ことに數學と語學は得意であつた。明治二十五年六月氏は櫻井鵬村氏小島碩鳳氏等と同期生として學院普通學部を卒業して、その八月に北米オーバシ神學校に遊學することゝなつた。その後、紐育、伯林、ハレ、ボン等の學府で學ばれ遂に明治三十六年ボン大學で哲學博士の稱號を得、同年歸朝仙臺東北學院教授として赴任した。

學生 大體以上に於て順調期六年間の輪廓を述べたが、次には其の内容たる學生の出入について概観して見よう。この間の卒業生は合計九十三名である。足掛け七年間としては其の數は決して多いとは云へないが、今更考へて見ると、最もよく明治學院の本領がこの間に於て發揮されて居るのではあるまいか。その後及び現在の明治學院は、一の準備課程を授くる學校に過ぎなくて、假令五年間の學院の修學を卒へたとしても、其の間の宗教教育の問題は別として、ほんの一般中學の課程を卒へたに過ぎない爲め、尙ほ數年専門或は大學の課程を履まなければ一個の人間として社會に立てないのであるが、之に比べると我が學院順調期六年間のそれは全く學生の修學を大成せしめて社會に送り出した觀がある。勿論それら卒業生の中には其後海外に留學したり、帝國大學に學んだりした者が無いではないが、大部分は學院を出て直ぐさま社會人として働きたものであつた。従つて彼ら我が學院を本當の母校と感じ、いつまでも愛着をもつて學院を思ひ、時に臨み折に觸れて昔日を追想しては、現在の學院の卒業生が何となく其の母校に對する感情の細やかさを失つて居るのでは無いかと憂ふる者の多いのは、蓋し當然ではなからうか。又學院の同窓會に臨んで見ても出席者の大部分は矢張り學院順調期の六七年間に出来たものが多い。又卒業生相互の親しみについても矢張りこの間の人々に優るものは蓋しあるまい。明治二十四年の卒業生友野茂樹氏の如きは殆んど今日でも同窓會には出席しない事は無い

位であるのみか、三人の男の子を悉く學院に修學せしめて可成りに不便な横濱の本牧から日々通はせ、現在は親子四人が同窓會々員となつて居る。其の外明治二十七年卒業の一色虎兒氏は現に同窓會幹事長であり、北村重昌氏なども殆んど同窓會をかゝした事は無い。現在の學院理事長多田素氏を始め小城徳太郎氏、岡本敏行氏、植木萬里氏、戸川明三(秋骨)氏、笹尾灸太郎氏、塚田福三氏、中田傳藏氏、依田義三氏、宮地謙吉氏、水芦幾次郎氏、淺見好太郎氏、今は故人の松浦和平氏其他此の間に卒業して今でも學院と直接間接密接な關係をもつて居る人々の名前は實際に枚舉に違がない。之を以て見ても今後とも明治學院は學生を完成して社會に出ず事が何れ程大事であるかといふ事をしみじみ感ぜざるをえない。又この間に學院に在學して居つた人々で社會に相當名聲を知られ、學院にその後も直接間接の關係を保つて居る人の名前を舉げて見ると、白洲文平氏、和田英作氏、三宅克己氏、入江祝衛氏、梶原長八郎氏、堀田達次氏、正村正氏、相川富三郎氏、高島徳右衛門氏、清水由松氏、矢島四郎氏、中島久萬吉氏、木村鷹太郎氏、富安保太郎氏等がある。

順調期間に於ける學制の變遷　移轉後明治二十三年までは普通學部は豫科二年本科四年の課程であつたが、二十三年九月からは本科に五年級を附設してそれを選科とした。次いで二十七年に至つて從來の本科豫科を改めて、高等科普通科とし、高等科二ヶ年、普通科五ヶ年とした。この年から學院に

とつては實に傷ましい時期である反動期に入つて流石に盛んであつた白金の丘は一時廢趾の如く寂しくなり初めるのである。

七 植村正久氏

學院順調期の第二年目即ち明治二十二年九月學院理事會では當時の一番町教會牧師植村正久氏に交渉して神學部教授としての就任を慫慂した。幸に氏は承諾されて、その秋から系統神學、聖書神學、宗敎哲學を講ぜられるやうになつた。植村氏と學院との關係は、井深氏とともに横濱のブラウン塾の頃からであり、三校合併當時からは學院理事員として關係されてゐたが、この年からは正教授として更に縁故は深くなつた。

出世と生立ち 井伊直弼が幕府の元老となり、米使ハリスが再度渡來して將軍に謁した安政四年の十二月に上總國武謝田村の醫中村氏の家で一人の男子が生れた。名を植村道太郎と命じた。父は植村禱十郎といひ母は中村氏の娘でていと謂つた。植村家は代々徳川幕府の旗本として芝露月町に大きな屋敷を構えてゐたが、禱十郎氏の代に至つて、幕府の勢が頓に衰退したところから、植村家は武謝田

村に領して居た土地で農を營むために移つたのであつた。道太郎氏はこの武謝田の邑で十三歳まで育てられたが、父禱十郎氏の身にもつてゐた祖先よりの遺産は歳と共に周圍の奸佞な商人達の手にかゝつて消えてしまひ、農にはまだ手馴れぬところから、窮乏は洗ふがやうに迫つてきた。その上母人なるといふ女は生來氣丈ではあつたが蒲柳の質で、絶えず喘息に悩まされてゐた。その間に道太郎の下に今一人の男子が生れたが、幼少で世を去つた。従つて兩親の此世の希望と歡喜とは一途に長男道太郎の上にあつたのは勿論である。

母 彼女は中村家累代の好學の血を擔つてゐたものか、病弱と貧困とに苦しみながらも非常に和漢の學を好んだ。その心根は嘗自分のみが書を読んで樂しまうとするのではなく長男の道太郎氏にも此世に於ける最高の學問を修業させたいといふのが畢世の願ひであつた。また一方植村家は累代武術に秀でた人々を出して徳川の諸將軍に仕へてゐた家柄に鑑みて、道太郎氏を文武兼備の英雄加藤清正の如き人物に育て上げたいと念じてゐた。そのためこの母御は永い間清正公の信者であつたと謂はれる。明治四年の頃(道太郎氏十四歳)一家は新開地横濱に引越して、薪炭の店舗を構へたが家計はますます苦しくなるばかり、母の畢生の祈願である道太郎氏の修學も仲々思ふやうにさせられなかつた。

道太郎氏洋學修業 明治五年の頃横濱山下町の小會堂でジエイムス・バラ氏が志ある青年を集めて

英學を教授してゐた。道太郎氏は一方に於ては家業の薪割やその配達をしながらその英學塾に通つて英語の修業を始めた。ところが學問に熱心な母は道太郎氏の傍でその復習や豫習を注意して見聞きしてゐるうち、Spelling や單語を覚えてしまつて、果ては道太郎氏に種々の質問を課しては、英學の修業を助けられた。またその當時教科用の英書を購入することは、その家にとつては仲々重い負擔であつたが、母御は殆んど食物を節してもその事だけには事を缺かせなかつたさうである。明治六年九月、小會堂の英學生は山の手二百十一番のブラウン家塾に移されたが、一ヶ月十圓の月謝と高尚になつた教科書を取揃えて勉學させることは植村一家の一通りの骨折りではなかつた。明治七年、生來博覽強記の素質の備はつた道太郎氏の英學はもう人後には滅多に墜ちない程進歩したので家に英學教授の看板を掛けてボトレン、萬國史を修學の餘暇に講じた。また母御はリーダーの一、二卷を初學者に教えて一時は横濱太田にあつた植村一家は小さな英學校のやうな様を呈した。

ブラウン塾で修學の歳を重ねるにつれて一般普通學の外にアメルマン氏やミラー氏について基督教神學をも修めたが、井深梶之助氏と植村正久氏とはその成績が最も優秀であつた。明治十年九月に東京築地に東京一致神學校が創設せられるに及んでブラウン塾の學生の多くは前記の通り此處に移されたが、植村正久氏はその時横濱バンドの一人としてその校に移されて、明治十一年六月、井深梶之助

氏、瀬川淺氏等とともに第一回卒業生としてその校を出た。

その後明治十二年から氏は下谷教會の牧師として聘せられ牧會の傍マクラレン氏の舊約歴史の翻譯や眞理一斑などの著述に筆を染められた。明治十九年學院の創立の際は第一回の理事員に學げられて親しく學院基礎の確立のために盡力せられた。氏はその十九年の頃から一方に於て一番町教會の確立を計られる傍文筆を揮つて大いに思想界に雄飛しめられた。けれども氏が眞實に我國の思想界に甚大な影響を與へ始めたのは明治二十二年九月明治學院神學部教授に擧げられてから後のことである。

日本評論の發行 明治二十三年我國國會開設によつて、我國思想界の諸潮流が歴然として政治、經濟、文學上の主義に現はれ、帝國の全國民が右往左往その何れに聽き何れに従ふべきかに廻迷遲疑してゐる時、決然として基督教主義を以て百般の人々に行くべきの方向を指示する評論が現はれた。それはその歳の三月八日に植村正久氏編輯執筆のもとに創刊された日本評論である。今左に氏が天下に布告した同誌發行の主意書を記載して置く。

「方今新聞雜誌の發行豈啻汗牛充棟のみならんや然れども決然基督教主義を執て政治文學經濟其他社會百般の時事を論評する者果して幾何かある。議論光明正大にして枉けず阿らず其思ふ所を公言し其信ずる所を吐露するもの亦果して幾何かある。余儕深く茲に慨する所あり即ち一雜誌を發行し

題して日本評論と曰ひ獨立の筆硯獨立の議論を以て奮然文壇上に立たんとす。余儕賦性謏劣學薄く識
足らずと雖其期する所は基督教によりて日本の政治文學其他百般の弊害を芟除し更に之に與ふるに靈
活なる生命を以てするにあり。嗚呼江湖の人士淑女願はくば愛讀の榮を賜ひ余儕をしてその責任を盡
し天職を完ふするを得せしめよ。」

之と同時に創刊號より遂次に發表さるべき論題が布告された

何故に余は大同團結の主義を取るや

大 江 卓

何故に余は自由主義を取るや

大 井 憲 太 郎

何故に余は改進黨を取るや

尾 崎 行 雄

何故に余は愛國公黨に族するや

植 木 枝 盛

何故に余は保守黨に族するや

未 定

此の日本評論の發刊に同情を以て植村氏に寄稿を承諾した人々は左の通りであつた。當時の天下の
名士を悉く網羅したといつて差支へはなかつた。

大江卓、伊勢時雄、長谷川辰之助、大西祝、島田三郎、大井憲太郎、水野遼、中江篤介、三宅雄
二郎、柴四郎、三上參次、朝比奈知泉、吳文聰、押川方義、門野幾之進、小崎弘道、落合直文、

宮部金吾、高田耕安、高橋五郎、巖本善治、平岩愼保、尾崎行雄、井深梶之助、植木枝盛、徳富猪一郎

かういふ陣容と態度とで發刊された日本評論は毎月二回第二第四の土曜日に送り出された。そして卷頭には何時も植村氏自身の筆になる歐洲及び日本の文藝に對する批評が掲つてゐたが、氏の態度は飽くまでも基督教に徹してゐるところが非常に力強い。その第十二號にはゴエケを論じて居るが、その批評の態度を見るたりアリズムに拘泥せずヒューマニテリアンに流れず、嚴とした基督教の立場からかう云つてゐる。

「ゴエテは俗界の豫言者にして其の喜ぶところ下にあり、彼は俯して地を眺め談笑喜戯の間に美を説きよく人情を分解す。ゴエテは自らの天性を完備ならしむるを以て一生の企圖とし、其の精神愛の至情に發するもの極めて微なり。彼れが處世の方針、身を修むるの標準は審美的にして道徳を主とせず、醜美雅俗の疑題つねに其の胸中に往來すること繁く、善惡邪正に關する思想を懐くこと稀なり。……ゴエテの人に異るはその優に於て存しその劣に於て存す。或は凡夫鄙俚の境界を脱して天に近くものあり、地に下るものあり。ゴエテは其の後者に屬するものにあらずや其の風采は歐洲人の畫きたる聖天使のごとくならず、東洋の辨財天女に左も似たり。羽衣は着れども婀娜たる下界

の美人たるを免れざるなり。

と誌しそのあとに縷々としてゴエテの享樂主義を述へ

『みやばしら太しきたて、萬代に今ぞ傳へん鎌倉の里』と詠じたる實朝は忽ちにして禪師公曉が刃の錆と消え、その鎌倉は寂しき浦の漁村となりき、由もなく人を溺愛するものは、また由もなく其の人を嫌惡するに至る。その負ひ難き重荷を身邊の世界に負はせて妄りに安慰幸福を求むるものは終に失望して世を厭ひ人を惡むに至らんこと必せり。野路の村雨に遭ひ、道邊の小祠に憩ひて之を望むに吾が家に在るの便利を以てす失望せざらんと欲するも豈其れ得べけんや。ゴエテの一生また之に類するものなきが。」

これは實に植村氏ならでは出來ない批評であり表現ではなからうか。ワイマールの第二人者が晩年に懷いた寂寥と哀愁を洞觀して餘りが無い。最後の結論に氏はかう喝破してゐる。

「我病あり、人は忍耐せよと云ふ、忍耐も可なり。たゞ我は癒なんを求むること切なり。慾を制して、失望の逆境にも忍耐すること可なり。然れども吾人は堅固なる眞正の理想境を求む。ゴエテはこの事につき何等の説ありや。噫彼が生命論は確實なる目的を示すこと能はざるなり。」

審美の悅樂も道德の遂行も所詮は超越的な神に對するの信仰に齎らされない限り、靈魂は安住をえな

いと氏はゴエテを材料とし實證として説破した。

カアデナル・ニューマンの死 明治二十三年(千八百九十年)八月十四日カアデナル・ニューマンが八十九歳の高齢で永眠したとのロイタル電報が日本の諸新聞にも掲載された。植村氏は直ちに筆をとつてその月二十三日發行の日本評論に次の如き一文を寄せてゐるが短文よくニューマンの面目を傳へてゐる。

「ニューマンは英國社會に於て極めて履歴多き人なり。そのオックスフォード大學に在るや深邃謹嚴なる意見を講述して大に勢力ありけるが、一旦深く考ふる所ありて羅馬教會に加入し終に擧げられて大僧官となり爾來道のために盡すこと枚擧に遑あらざるなり。ニューマンは神學の大家なり。然れどもその技倆は茲にとゞまらず。その文章はよく一世を壓倒するに足れり。ニューマンの純潔冷臆にして威嚴犯すべからざる散文は今の世その右に出づる者なしとは公平なる批評家の咸な許認する所なり。其の有名なる「ユニベルシチイサルモンズ」は説く所至妙の境に達し、靈眼炯々として心魂の秘奥に貫通し、讀者の意識を明地に洞見し其の徳性を喚起作興して自ら神人兩間の玄妙妙道を覺らしむるの力あり。余は之を一讀して宗教上の思想に一大光明を得たるものゝ一人なり。今や忽然此の恩人の訃音に接す。豈に悵然たらざるを得んや。英國は氏において最も敬愛すべき聖徒

及び絶大の文豪を失へりと謂はざるべからず。ニューマンの著書頗る多し。彼の「グラムマルオブ
アツセント」の如きは必ず不死の書中に算へらるべきものか。其の詩才また非凡にして作る所世に
嘆賞せらるゝもの少からず。現にわが國の基督教徒はその新讚美歌集に於てニューマンの詩を吟詠
しつゝあるなり。(第百六十三章)

カアテイナルニューマンは千八百一年にロンドンの富家に生れ、同年八月十四日を以てその高潔
剛毅なる現世の生涯を終れり。其の詩の末句に曰く、

神のみつかひのかほは　ゑみつゝわれをむかへん

彼れが秀美偉大なる心魂はこの將然言を已然言とはなしつるならめ。」

福音週報(後の福音新報)この日本評論の創刊と殆んど日と同じうして植村氏は福音週報を創刊され
た。第一號は明治二十三年三月十四日の金曜日に出てゐる。発行日は毎週金曜定價は一部二錢五十二
部(一ヶ年分)は九十五錢である。内容體裁ともに現今の福音新報と大した相違はないが、初期のもの
ほど植村氏の雰圍氣が濃厚に表はれてゐるやうに思はれる。當初は日本基督一致教會に信條の改正憲
法の制定が行はれようとしてゐる時であるから従つてそれに關する議論が仲々多い。傳へ聞くところ
によると一致教會の信條と憲法とは大部分學院のイムブリー博士の起草したものであつた。それは博

士一流の用意周到鑿穿精緻を極めたものでそこには寸毫の餘地も間隙も赦されてゐなかつた。植村氏は流石に博士の緻密さには敬服したが、日本に於ける教會の將來を思つて幾分疑懼を懷かざるをえなかつた。そこで福音週報の創刊號の竜頭で、暗にイムブリー氏の企圖に反對の氣勢を示した。

「近來信條改正の議英に米に各派教會に起りて辯難攻守の最も盛んなる亦怪しむに足らざるなり。蘇國の所謂自由長老教會には往年教授ロポイトソン、スミスを異端者なりとして之を彈劾し久しきに亘れる大紛議を生じたることありしが昨年の末に至り同國グラスゴーに有名なる博士マーカスドゥツ氏の基督論及び贖罪論を以て信條に違へる異端なりとして此に一場の葛藤を生じて議論頗る沸騰せり。余輩は之等の事實を見て細密なる信條の弊、狹隘なる神學の害怖るべきものあるを知れり舊來の條々には不條理の點少からず、之を改正するは今日の急務なりとて、其の説歐西に盛んなるに漫然とその疑題たる信條を其の在るが儘にて吾邦に採用せんことを主張するものあり。余輩その道理を解するに苦しまずんばあらざるなり。余輩日本の基督教徒たるものは神學の新田を開拓し歐米の短を捨て、その長を採るに於て最も都合よきものなりと謂はざるべからず。日本神學の基礎を立て其方針と定むる實に今日に在りとす。漫りに外國の糟粕を輸入しました好んで之を甜めんとするに至りては余輩深く之を遺憾とせざるをえず。……化石然たる信條を固守し將來に争を起し分裂を

生ずるの種子を此の傳道の春に播し置んとするに至りては余輩その不可なるを知る……今日に於て妄りに信條を細密にし子子を瀉し駱駝を呑まんが如きは教會に不利を遺すこと小々に非るなり。」
之等は當時の基督教界に仲々重きをなした意見であつたに相違ない。福音週報發行の主意として社告にかう誌されてゐる。

「福音週報は平易通俗の文體を以て基督教を説明し内外の教勢を細精に報導し、凡そ基督教徒の知を研き徳を建て道に進むに益あることは之を記載して漏すことなく、殊に道を未信の人に傳へ、疑義を啓き惑を解くの一事に至りては最も注意して之に従事せんと欲す。福音週報は基督教徒の好牧師、求道者の顧問、家庭の良友、兒女の保姆を以て自ら任じ、忠實懇倒に其の義務を盡さんと欲す」
日本評論は以て天下萬般の歸向を知らしめようとするものであり、福音週報は以て日本の一致教會のみならず基督教會全般の發展進歩を促さうとする意圖から出たものである。此の二誌の刊行だけでも一大事業であるのに、植村氏は一番町教會の牧會に、明治學院神學部の専任教授としての職責に、地方の傳道に、講演に可成に多い時間を捧げてゐる。どんなに多忙であつたかと思ひやられ、また氏がどれ程勢力的であつたかも想像される。而も氏は教役者中に無双の讀書家であつて、西歐の神學書の新刊は勿論、文藝の評論創作とも重要なものは決して見逃がさなかつた。

氏の説教 氏の説教には日本人ならでは、又氏ならでは保持しえない風格と力とがあつた。それは日本基督教會の信條に適はしい神と基督に對する幽嚴な信仰と理念が骨子となり、氏獨特の神學と和漢洋の豊かな詞想とが筋肉をなして語り出される一つの統一思想であり訴へであつた。然し氏の説教の著しい特徴は右のやうな學的準備の完璧であるといふ以外に人生に對する比類なき洞觀に基いてゐたことを忘れてはならぬ。その洞觀の高潮に於ては氏自らの豊富な單語を以てさへ、屢々表現に窮して壇上で暫し瞑目默考することさへあつた。さうした瞬間に不圖氏の唇から洩れ出た珠玉の言葉は、單に氏の神學や文學の教養から出たものではなくて、正しく氏の信仰と天才と獨創から自然に湧き出たものであつた。さういふ場合聽衆はあらゆる想像を以てしても尙充分に捕捉しえないが、しかもその模糊たる言葉の背後に何物か永遠的な眞理の存するを思はしめられた。それで氏の成功した説教とは、眞理を寸毫遺漏なく説明し終へたといふものではなくて、何れかと云へば短く、かつ一言また一言と遅々として暗示深く語り出た時にあつた。斯様な場合、心ある聽衆は何物か考ふべきの問題を心に抱かせられて黙々と家路を還るのが常である。氏は洞觀の秀れた詩的説教家であつた。氏は文筆をよくした。然し詩人たるには餘りに基督による人間愛が漲り過ぎて靜觀の境に一生を處しえないものがある。神學者としては既に一家をなしてゐたが一生を象牙塔に暮すには同じ情熱に過ぎてゐた。

ゆゑに氏が若し文筆を以て終始したとすればやはり一世に呼號する評論家であつたであらう。然し彼は最も賢明に有らゆる才幹と技倆と教養とを十字架のもとに持ち來つて教壇の人となつた。奮勃たるその愛は迷える多くの魂の上に注がれた。蓋し氏の使命感もまたそこに充足をえたに相違ない。氏を學院が正教授として迎へたのは確かに白金臺に一異彩を添へたことであつた。

八 明治學院神學部の確立

明治二十三年九月迄、嚴密な意味に於ては明治學院神學部といふものは無かつた。邦語神學部といふ一學部と専門學部の中に一選科の形で存した英語神學部の二つがあつたばかりである。それが明治二十三年に一大改革が行はれて、從來の邦語神學部と英語神學部とが合體して、明治學院神學部なるものゝ確立を見た。

學部の編成 かうして一の統一が出來たとは云へ、内容は矢張り英語、邦語の兩學部に分れて居て、何れも三ヶ年の課程を履む様になつて居た。たゞ入學の資格に於て英語神學部は明治學院普通學部若くは之と同等の課程を具備する學校の出身者に限られて居るに反して、邦語神學部の方は適當なる推

薦があれば受容れられるようになって居た。左に新制度の組織及び制度の抜粹を挿入して置く。

英語神學部

一本學部ノ修業年限ヲ三ケ年トシ其學科課程ヲ定ムルコト左ノ如シ

第一 年 級

有神論及ビ非有神論、組織神學、教會歴史、新約聖書註釋、書翰、說教學、萬國公法、社會學及ビ人類學、哲學史、辯證史、和漢文學

撰 科 希臘語、羅甸語、獨逸語及ビ佛蘭西語、教育學

第 二 年 級

倫理學、組織神學、教會歴史、新約聖書註釋、四福音書、說教學、辯證學、漢文學

撰 科 第一 年 級ニ同シ

第 三 年 級

倫理學、註釋、教理史、教會歴史、說教學、牧會神學、辯證學、漢文學

撰 科 第二 年 級ニ同シ

全生徒ノ爲ニ儒道、佛道及ビ神道ニ就キテ講演ヲ開ク

○邦語神學部

一本學部ノ修業年限ハ英語神學部ニ同シ

第 一 年 級

舊約史、組織神學、說教學、福音史、辯證學、漢文學

第二年級及び第三年級ノ學科課程ハ後日公示スベシ

◎入 學

○英語神學部

- 一 普通學部若クハ之ト同等ノ學科課程ヲ具備スル基督教主義ノ學校ノ卒業生ハ試験ヲ須ヒズ本學部第一年級ニ入學ヲ許ス
- 一 第一年級ニ入學ヲ願フ者ハ普通學部本科三、四年兩級ノ學科ノ試験ヲ受クベシ試験科目中充分ニシテ優等ナルモノアル時ハ教授會ノ決議ニ隨テ他科目ノ試験ヲ免ス事アルベシ
- 一 學科ノ中途ヨリ入學ヲ願フ者ハ前述ノ科目及び其入ラント欲スル級ノ修了シタル科目ノ試験ヲ受クベシ
- 一 本學部ト同等ノ學科課程ヲ具備スル他ノ神學校ヨリ轉學セント欲スル學生ハ該校教授會ノ證明ニ依リ本學部ニ入學修業スル事ヲ得ベシ

○邦語神學部

- 一 善良ナル學校ヲ卒業シ或ハ之ニ匹敵スル同等ノ學力アル者即チ普通ノ教育ヲ満足ニ受ケタル者ニシテ平易ナル英文ヲ解スル者ハ入學スルヲ得ベシ
- 一 神學研究ノ資格ヲ備ヘ後日教師タルニ充分ナル旨ノ推薦書ヲ教師或ハ外國宣教師ヨリ得テ入學ノ時コレヲ呈出スベシ
- 一 傳道學校ノ生徒ニシテ該校長ヨリ證明書及び推薦書ヲ得タル者ハ入學スルコトヲ得ベシ
- 一 入學シタル後ト雖モ充分ノ學業成績アルニアラザレバ修學スルヲ得ズ
- 一 學科課程ハ可及的英語神學科ノ課程ト同一ニスルコトヲ勉メ而シテ授業上實際不都合ナキ時ニハ兩部ノ生徒ニ同時ニ授業スルコトアルベシ
- 一 學生ハ教授會ノ指揮ヲ受ケテ實地ノ傳道ニ従事スベシ

明治學院神學部の確立

一 學生ハ教授會ニテ必要ト認ムル限り明治學院ノ諸規則ヲ遵奉スベシ

◎選科

一 英語神學部ノ學生ハ教授會ノ許可ヲ得テ每期普通學部ノ撰科ヲ修ムルヲ得

◎試験及ビ卒業證書

一 本學部ノ學生ニハ別ニ試験ヲ執行セズ日課ノ成績ヲ以テ其優劣ヲ定ム

但缺席數全出席數ノ十分一ニ達シタル時或ハ學力不充分ト認ムル生徒ニハ試験ヲ執行スベシ

一 學期評點ハ日課及ビ出席評點ニ依リテ之ヲ定ルモノトス

一 學年評點ハ每學年ノ終リニ於テ三學期評點ノ平均點數ニ依リテ之ヲ定ムルモノトス

一 全科評點ハ每學年評點ノ平均點數ニ依リテ之ヲ定ムルモノトス

一 本學部ノ課程ヲ終リ試験ヲ完フシタル學生ニハ理事員局ヨリ本學部卒業證書ヲ授與ス

この新制度は從來の東京一致神學校が頗る不規則、亂雜であつたに比し、今後年毎に整頓せしめる端緒となつた。

校舎の新築 此の年の改善に於て今一つ顯著なものは新校舎の設立であつた。バラ氏が記した二十三年六月附の受領書によると、リフオームド、プレスビテリアン兩ミツションから二千五百弗の金をえた事は明瞭であり、又ハリス館移轉費の殘額約四千圓、それに加へて約六百圓の金が特にこの神學部校舎建築のために、主として横濱の日本基督教會信徒から寄附されたとも云はれる。して見ると合

計一萬圓内外の金がこの建物の爲めに用意された。請負師は成田忠吉氏で、設計はランヂス教授であつた。

二十三年六月に出来上つた校舎は總煉瓦のその當時では仲々莊麗なもので、二階は書庫、その下現在の會議室は讀書室となり、一隅にエレベーター様の昇降機を設けて、所要の書物が上から降される様にするつもりであつた。南側の二階の二教室は二枚の大きな引戸で仕切られるやうになつて居り、禮拜の爲めや合併講演のためには其處が開かれて兩側の教室の丸い凹みの所に講壇が設けられるやうになつて居た。其の眞下の二教室は現在と同じである。屋根の構造は餘程今とは變つてゐる。塔は無くて中央に大きな棟があり、その右側には今一つ陣笠風の丸屋根、左側には正十角錐の屋根が聳えて居た。書庫にはマクラン氏の寄贈になる幾多の神學書や築地一致神學校時代に買入れた古典が可成り納められて居た。此建物の坪數は階上階下何れも七十五坪である。

教授と擔任科目 この年大儀見元一郎氏は講師を止めて傳道に専念し諸教授の擔任科目も合併當時とは大分變つて來た。擔任科目は左の通りである。

教會歴史、舊約聖書註釋

チエームス・エル・アメルマン

新約聖書註釋、教會政治

ウイリヤム・イムブリー

組織神學、哲學史

チヨーチ・ウイリアム・ナツクス

教會歴史、説教學

井 深 梶 之 助

教會神學、倫理學

植 村 正 久

英 語

石 本 三 十 郎

福 音 史

(講師)

ヒ ヌ ー ・ ワ デ ル

卒業生

この二十三年の卒業生は神學部の空前絶後の多數であつて、五十年の歴史に嶄然と頭角を現して十九名の多數を誇つて居る。而かも現在に至るまで尙存命して傳道に従事して居る人も可成りに多い。永井直治氏、田中義一氏、山田賢藏氏、伊藤貫一氏、村岡菊三郎氏、津久井新三郎氏等は當年の出である。光小太郎、大石保、内田芳雄、山口吉次氏等は既に故人となつた。憶ふにこの年にかゝる多數の卒業生を出したのは、所謂邦語神學部の結末をつけた爲めと云へる。その後は合併以後入學した人々が可成り長い修學期を経て出される事になつたので、急に數は減じた。明治二十四年には多田素氏が一名、翌二十五年には星野又吉、和泉彌六、中島久米吉、小川豊吉の四氏が出て居る。

東京傳道學校の顛末

ところが滿一ヶ年の後明治二十四年六月に至つて今一段神學部の修業課程を整頓する策が講せられた。それは前年の邦語英語兩神學部を合併して神學部修業年限四ヶ年として白金の本校舎に置くことにし、簡易課程を志望する學生のために別に東京傳道學校修業年限二ヶ年を京

橋區築地十七番地のもと東京一致神學校の空校舎に置くことにした。こゝは基督教神學を簡易に教授して實際傳道者を短期間に養成するを目的とするもので、田村直臣氏、井深梶之助氏等が指導の任に當つた。不幸にしてそこに學ばれた學生の氏名は明瞭でない。またその存続もたゞの二ケ年で一學週年を経過した明治二十六年六月には閉鎖されてしまつた。

明治二十六年の再改革 二十六年の六月に又もや學制は改められて、從來の神學部四ケ年の制度は左の通りに變つた。

神學部	豫科	一ケ年
同	本科	三ケ年
同	別科	二ケ年

豫科一年は之を明治學院普通學部第四學年を以て當てることにし、本科入學生は學院普通學部卒業若しくは之と同等以上の學力あるものとした。別科とは從來の如く適當の推薦あるものを迎えて主として邦語を以て教授するものであつた。諸教授の擔任科目其の他は明治二十三年の頃のそれと大差はない。勿論この別科とは東京傳道學校の後身と見てもよい譯である。

柏井園氏の就任 明治二十六年の九月から柏井園氏が講師として神學部に迎へられることゝなつた

氏は實は神學を修得するつもりで上京したのである。柏井氏が學院に招かれるまでには次のやうな経路がある。氏は土佐國旭村で明治三年六月に生れた。幼少から學才があり、明治十四年九月高知中學校に入學明治二十年京都に同てゝ同志社普通學部第二級に入學居ること四年二十四年卒業して一旦國に歸り、明治二十六年六月まで土佐女學校の教員を勤めた。その頃植村正久氏が土佐に傳道された砌圖らずも柏井氏に邂逅して大いに氏の英才を認めるところがあつた。また氏も植村氏に東都に出てゝ修學の志ある旨を述べた。當時石本三十郎氏は志を立てゝ北米に留學してゐたところから植村氏が氏を學院に推薦して英學と歴史とを擔當せられることゝなつた。柏井氏は濃厚篤實、少しも邊幅を飾らない學者であつた。文筆をよくして青年會の雜誌「開拓者」、植村氏の「福音新報」の紙上を絢爛の文字で飾つてゐた。後年は「文明評論」を刊行して識者の注意を引いた。

明治二十八年學院普通學部は所謂反動期に入つて別記の通り著しい在學生の減調を來したが、神學部は之に反して仲々隆盛なるものであつた。本科三年生は川添萬壽得氏、長谷川峰吉氏外七名計九名同二年生には千磐武雄、郡山源四郎、長山萬次、矢島宇吉氏等の外八名計十二名、一年生には早川友三、宮川己作氏等外二名計四名、其の外豫科及び別科には計十一名の在學生が居つて、總數三十七名（研究生一名を加へて）の可成りの多數であつた。此の年前の石原保太郎、北山巖兩氏は辭任して小倉

銳喜氏が別科講師となつて居た。

九 石本三十郎氏とその永眠

明治二十六年八月熊野雄七氏が學院幹事として赴任してから間もないことである。教授石本三十郎氏が突然と志を立て、教會史研究のために米國プリンストン神學校に留學することゝなつた。その時氏は滿三十一歳で服部綾雄氏の令妹たる夫人との間に靜子音彦の二兒が擧げられてゐた。妻子眷族を故國に残して留學に出かけるには餘程の決心を要したものであつた。その動機の一には學院神學部のためといふ純粹なものゝあつたことを認めねばならぬ。何となれば氏は既に一個の英學者として東京は勿論、恐らくは日本全國に此の人ありと認められてゐたからである。氏は築地大學校時代からもう英語にかけては日本の名通譯者の一人であつて、英米の演說家が氏を傍に立たせて演說をする時にはどんなに長い文句でも、どんなに複雑錯綜した論理の表現でも、石本氏の耳から入つて唇から出る時には寸分原說者の言葉と思想とに齟齬のない立派な日本語となつてゐた。そのみではない、原說者の喜怒哀樂即ち一切の感情の閃きまでが遺憾なく再現されて聽衆に傳へられたといふことである。

氏は全く英語の天才であり、通譯界の騏驎兒であつた。

修學 氏は長崎縣大村の人で、家は貧しい鐵器商であつた。熊野雄七氏の父與氏が明治八年一家を擧げて横濱に越して來られた時、大村の藩から前途有爲と思はれる同年配の三人の少年を伴つて來た。一人は熊野氏の一族片山某氏他の二人は莊清二郎氏とこの石本三十郎氏であつた。莊氏は後岩崎家に入り、石本氏は終始一貫英語を以つて身を立てられた。明治十五年六月築地大學校卒業以來明治二十六年の夏までと云へば丁度滿十ヶ年である。この間氏は、東京一致英和學校に神田の英和豫備校に、白金移轉後は普通學部教授として、また明治英學校の教師として、神學部講師として全く十年二日のやうに孜々としてよく教鞭をとられた。そのみではない、三學校合併當時からの理事員として學院經營の方面にも多大の功績を残されてゐる。氏は服部綾雄氏や井深梶之助氏と同様に明治學院の種子であり、發芽であり、樹幹でありまた果實であつた。従つて生粹の學院兒の一人であつた。

永眠 氏は前述の通り無双の英語の天才ではあつたが、惜むらくは思想家でなかつた。獨創の才にかけては恐らく服部綾雄氏に及ばなかつたに相違ない。書物の文字は讀めても行間に潜んでゐる更に深遠な意義に對する推理と想像力については遠く植村正久氏に及ばなかつたのではあるまいか。また演壇に立つて人の言説を邦語に移すことは出來ても、文筆を以て思想を表白することは到底柏井氏

には及ばなかつた。そこに石本氏の幾分の寂寥がないではない。氏が妻子を残して遠く米國に遊ばうとするにはこの寂寥を満たさうとする一意圖がなかつたとは云へまい。無論それと共に學院神學部の充實のためといふ利他的な動機があつたのは勿論ではあるが。

明治二十八年十一月三日學院では天長節祝節を盛大に擧げて續いて學生の運動會を校庭に催した。石本夫人はその時二人の子供を連れてきては熊野夫人等と心から楽しさうに一日を送つた。その時北米プリンストンの地でその前日夫君は既に亡き人の數に入つてゐたことを誰が知らう。同月二十八日の學院理事員會の記録には左のやうに書き誌されてゐる。

千八百九十五年十一月二日北米合衆國プリンストンに於て永眠せる故教授石本三十郎氏に對する明治學院理事員會の追悼記録

「神は全知なれば、吾等の敬愛する一友にしてまた共勞者なる氏を地上の奉仕より天の憩ひに移されしは蓋し攝理の然らしめし處なるべし。こゝに以下の事項を決議す。

一 吾等を愛し給ふ父なる神の量り難き聖旨に對し吾等は恭しく服従す。されば吾等の一兄弟の洋々たる前途の今遮斷されたるを悲しむと共に、吾等の損失は彼れに於て利得なるを悦ぶ。

二 彼れが我が學院と保ちし長き緣故、最初は學生として後は教師としてまたその經營者の一人と

しての關係につき明治學院は石本教授の永眠により並ならぬ損失を體驗せり。

三 故人に對する吾等の感謝の證として理事員會は金百圓をその未亡人に提供す。

四 吾等は學生教師理事員としての氏の生涯と人格を稱揚し且つそれらの賞美に適はしきを認む。

五 彼れの死は本學院に痛切なる損失を與ふると同様、彼れの尊くもまた價值ある交友を保ちし教會及び社會にも同様なる感を與ふべきを知る。

六 未亡人に對し吾等は滿腔の同情を表し、彼女と子女のために、神の慈愛その苦惱を慰め、その心を潔め給はんことを祈る。

七 吾人はまた米國の人士が、故人の生涯を以て基督の救をえたる東方の人士として、その生涯と品性とお基督教の能力の證明と見られんことを冀望す。」

因に女靜子氏は後里見純吉に嫁し、男音彦氏は大正四年東京帝國大學英文學部を卒業後四ヶ年明治學院に奉職して居たが其後渡米し目下紐育に在住されてゐる。

憂 難 編

一 衰潮の豫感

一 沫の不安この順調期の間にも學院の當局には一沫の不安が想見された。それは

一 一致英和學校の延長たる現在の普通學部は高等專門學校にも非ず中學校にも非ざる事

二 官公立の專門學校及び中學校が簇出して相互に連絡をとり、學生は漸次にその方面に向へる事

三 歐化主義の反動が漸次に顯著になつて年々學生の減少すること
の三つであつた。

そこで學院としては現在在學中の學生を社會に送り出したあと、果して從來の通りに學生を收集しうるや否やが問題となつたのは當然である。これに備へるがためには第一に學院の學制と施設を完備し、第二には反動熱の退滅を待つゝの途あるのみであつた。學制の改革としては現在の普通學部を全然尋常中學校にして了ふか、或ひは之を高等專門程度の學校にするか、さては普通學部は之を尋常中學校

と改制して、その上に一つの高等専門の學校を新設するまである。學院理事會は後者の方針に進むことになつた。處が之を實現するためには相當の時日を要しまた持久を要する。その持久と建設のために必要なのは何といつても資金であつた。

十萬弗の基金募集 明治二十五年二月十日であるが、時の理事會は左の決議文を可決して之を米國兩傳道局に送達し、基本金十萬弗の調達を懇ろに訴へた。この決議文には學院當初の理想と創設者の廉潔な精神との躍如たるものがあるから、全文を反譯して参考に資さう。

明治二十五年二月十日兩ミッシヨン外國傳道局への上申書

この決議案は明治學院理事會に於て可決され、且つプレスビテリアン、リフォームド兩ミッシヨンの批准を得たるものなり。

北米合衆國のリフォームド同じくプレスビテリアン兩教會外國傳道局が永年の間明治學院に極めて寛容に與へられし援助に對し明治學院理事會は甚深の感謝を表し、且つ今後共その援助の繼續を願ひ、また此の際基本財産設立のため特別の盡力を依頼する事を可決す。

その基本金額は十萬弗と定め、其利息を以て總理及び日本人教授の俸給並びに經營費に當つる事この決議案の説明は左の如し。

明治學院は早や過渡期に處し、理事會は永遠の基礎の上に學院の置かるべき事を希望す。明治學院は諸ミッションの設立經營統御のもとにありし數個の學校を合併してなれるものなり。日本基督教會の牧師傳道者の多數はその修學の全部或ひはその一部分を是等の諸學校に於て爲し、又幾多の青年はそれらによりて眞理を知得するに至れり。その諸校はよく時代に適應して各々重要な任務を果せり。

然るに時代は變遷して、右の諸校は舊來の儘に留るをえず、更に高尚なる課程を授くる學校の必要を見るに至れり。プリンストン及びラットガルスの如き諸大學の他の州立諸大學を凌駕せるの諸の理由は今や日本に於て大いに重大視すべき機運に臨めり。設備整頓せる官立諸學校の出現はミッションの諸學校を今や背後のものたらしめ、之に比例して布教上の能率をも低下するに至れり。基督教徒の子弟の適當なる教育並びに日本人牧師傳道者の訓練は既に焦眉の急務なり。日本に於ける基督教徒の經驗と圓熟とは諸校の合併を期し、内外人の共同任務たらしむるを願ふに至れり。かくてミッション諸學校は合せて教會に屬する一大學並びに神學校たらしむる時機に近接したるなり。その第一歩として去る一八八六年に日本人外國人の兩者に均等なる權能を授くとの條件の下に諸校の併合を實現し明治學院の成立を見る。

その創立案はその意義重大なれば熟考に熟考を重ね慎重なるものなりしなり。如何となれば種々の理由より外國人の感化と責任とは尙多大なるものにして最初の總理また外國人なりしなればなり。然れども漸次に日本人自らはその勢力を擴張し、今や神學部に於ける教授の半以上は日本人諸教授の爲すところとなれり。普通學部に於ては外國人諸教授尙多數なるも、そは適當なる日本人教授の尙見出しえざるが爲なり。總理は現在すでに日本人なり。この経過は今後とも持續するものにて、外國人の勢力は更に更に減退すべきものなり。

神の經綸のうちには應てはこの學院の全然日本人のものたるべき日の到來するを信ず。基礎の据えられて後、他の人々のその上に建設をなすを眺むるは外國宣教師の覺ゆべき最大の歡喜なり。礎のいとよく置かるゝ時外國宣教師の事業は終了せるものにて、明治學院の今日までの経過は典型なりと云ふべし。さりながら假令外國人の事業は終焉に近付くとも教會と其の學校とは永く止まるべく。今基本財産を造らんとするは正にこの目的のためなり。

明治學院に於ける外國宣教師の事業は終了せりとは尙認めず。來るべき數年間恐らくは遠き將來も亦外國宣教師を必要とすべし。速急なる變化をなすの必要なき限り、理事員會は現状のまゝに將來も存すべく、外國人諸教授も諸ミッションの諸員として殘留し、外國傳道局に對して支給をまつべ

し。されば此の學院の基督教的及び布教的性質の安帯は將來も維持せらる。基本金は總理及日本人諸教授の俸給並に經常費に當つ。此の範圍に於て外國傳道局の支出は減ぜらるべし。以上の必然的入費は永遠の支出なれば、明治學院が今後假令外國ミッションとの關係を斷つに至るとも北米合衆國諸教會の日本に於ける姉妹教會に對する好意の記念費は永く存すべし。基本財産に關する此申請は、宣教師は勿論、今や外國よりの資金の必要なる事實を示す。日本政府は西洋の組織を模倣して努力と費用とを惜しまず教育施設の進展を圖りつゝあり。従つて今日教育機關の維持を計るは非常に入費嵩み、諸教授の俸給また騰貴せり。政府の諸學校に比して、明治學院の總理及諸教授の俸給は、勿論低廉なるも、之を大多數の基督教徒の收入及び牧師傳道師の俸給に比ぶれば、尙多きを見る。さりながら、他の同程度の諸學校の俸給と甚だしき差額ある俸給の支拂はるとすれば、如何にしてか教育的能率を維持しうべきやを知らず。日本の基督教徒の貧困は、今日學院の要する基本金を支出する能はず、日本の教會亦それを北米合衆國の諸教會に訴へざるをえざるものなり。

東京 明治 學院

プレスビテリアン
リフオーームド 兩外國傳道局御中

衰調の豫感

若しこの要求が容れられて十萬弗の資金が用意されてゐたならば、懸て來るべき反動期に學院當局の人々はあれ程までの不安に驅られる必要はなかつたのであつたが、外國傳道局の經濟狀態に到底その要求の許されないものがあつたため、一年間を置いて果然來つた反動期には實に思ふも傷ましい程井深總理熊野幹事を始めとして學院と身命を共にすべきワイコフ氏イムブリー氏等は痛心したものである。明治二十七年三月、秦庄吉、早坂榮二、一色虎兒、伊藤榮次郎、北村重昌、郡山源四郎諸氏ら十一名の卒業生を出して以後、學院は頓に寂莫の感を加へた。

二 衰潮來

試みに同窓會名簿をとつてこの七ケ年間の卒業生の數を調べて見ると次の通りである。

	高等科	普通科
二十八年	○	四
二十九年	○	五
三十年	六	五
三十一年	二	五

三十二年	〇	九
三十三年	〇	〇
三十四年	一	一
計	九	三四

之はそこに如何なる理由があつても、一萬坪の廣大な地所を有し、四階建の大寄宿舎と參階建の校舎とを備へた學校にとつては、不均衡極まる數字である。當時の白金臺が如何やうに寂寞になつたかは想像するに難くはない。教室は徒らに机の數が多く、生徒は曉の星のやうに點々として居り、寄宿舎の寢臺には主がなくて、夜に至つても燈のともらない部屋があちにもこちにもあつた。

かやうに卒業生が減退した趨勢を更に學籍簿によつて數字的に調査して見ると、學院の當局者がこのために如何ばかり氣を揉み、杞憂を抱いたかを察せられる。毎月轉學退學する者が相次いで居るからである。明治二十八年四月現在の在學生の入學當時の數と進級に至れる數とを比較して見よう。

	入學當時の數	現在數	進級に至れる者
第一年級	一三	七	九 (二名途中入學あり)
第二年級	一五	一三	五
第三年級	二七	一〇	五
第四年級	二三	八	五

衰 潮 來

計

一一六

四二

二八

何といふ寂しい傾勢ではないか。轉入轉出の多い當時ではこの數字以外幾分の移動はあつたに相違ない。けれども學籍簿はかうなつてゐる。明治二十八年に於ける一年級の如きは最も甚だしい。二十七年の九月に入學したものが十三名といふ心細い數であるに拘らず、越えて二十八年の四月には大半は他に轉じて漸く七名だけが留つてゐるといふ始末。従つて學籍簿は之を凝視するに忍びない程毎月々々退校者が續出してゐる。井深總理熊野幹事は勿論、ワイコフ、イムブリー氏等も、この突如に到來した退潮には尠からず驚き且つ憂へた。九月の新學期に至るも全學級を通じて入學者は唯十三名に過ぎなかつた。全數はますます減じて、其年の暮には實に三十八名に下つた。全體の月謝を以てしても一教授の俸給の支拂さへ困難となつた。此情勢で行けば學院普通部は自然消滅に終らざるをえない。然しそれはヘボン塾以來の歴史に鑑みて到底忍び難いことであり、創立の大方針に照してもあるべきではない。事茲に至つた理由は大體三つある。

一、明治學院普通學部は官公立と同等の特權を有せざりしこと。

二、官公立學校が著しく増設進展を遂げたるため學生の多くがその方面に向ひしこと。

三、歐化主義の反動が遂に基督教を以て反國家的宗教と感ぜしめしこと。

是等の諸理由のうち一と二とは明瞭簡明である。また其對策も資金と幾分の時間とがあれば構じられないではない。然し第三の理由はその由來が遠くもまた深いだけに一朝一夕に對抗しうべくもなかつた。勿論この悲惨な打撃を受けたのは決して明治學院のみではない、青山學院も立教學院も同志社も、その他凡ゆる基督教學校は同じ運命に遭遇したものである。今左に反動思想の由來を概述して見よう。

三 國粹論の再起

明治維新の大更新と開國の斷行によつて一時攘夷思想は姿を潜めて居た。その間に今まで阻まれてゐた歐米の文物は壓倒的な勢力で押寄せて來た。また我國とても諸外國と伍するためには急速にそれを取入れて彼我の間にある文化上の溝壑を補填するの必要があつた。その時代が所謂歐化主義の全盛期で、明治九、十年の頃丸の内鹿鳴館に夜な夜な舞踏會が催されお茶の水の女學生達が悉く洋装して市中を歩いた事などに調してもどれ程外來の風習に我國民が傾倒してゐたかゞ想像される。ところが明治十五六年の頃から封建の頃には尊王攘夷といふ形に表はれてゐた保守思想が今度は反歐化主義とい

ふ新らしい姿に擡頭して來た。そこに歐化主義者と保守主義者との確執奮馳が止むをえなくなつた。その論難攻撃の矢は單に相互の風俗慣習に對する見解の上に放たれる計りではない事國家に關する見解に及ぶこととなり、由々しき結果を齎らすこととなつた。この思想的争鬭の經過に關しては左に文部省發兌の書によつて誌することとする。

歐化思想と保守思想との暗鬭 明治十年代の後半より明治二十年代の初期にかけてその暗鬭は最も激甚を極めた。歐米の文物を悉く是とする極端な歐化主義者と、西洋のものと云へば如何なる文明の利器と雖も、之を排斥しなければ止まぬといふ極端なる保守主義者とは共に過渡時代の混濁したる空氣の中から生れた畸形兒であつた。その極端なるものは姑く置くとして、一般に歐化、保守兩思想の争は國民の精神を甚だしく錯亂紛糾せしめた。兩思想中、甲に就くべきか、乙に従ふべきかは國民の多くが迷ふ所であつた。斯くの如く五里霧中に彷徨せる國民に對して、前途の目標を明示したものは帝國憲法と教育勅語とであつた。

憲法の發布と教育勅語の煥發 明治二十二年二月十一日を以て發布せられた「大日本帝國憲法」は形式上に於ては主として獨逸の憲法に則つて制定せられたものであるが、實質上に於ては、我が建國の精神と悠久なる歴史の成跡とに基いて成れる未曾有の大典である。我が國體の特色を明白にして、

皇室の尊嚴を確立すると共に、國民の參政權を承認し、國粹論者の國體論と、自由主義者の民權論とを融合包括したものがこの大憲章である。翌二十三年十月三十日に煥發せられた教育に關する勅語は帝國憲法が法理上より明記せられた所を、教育上、道德上より諭し給へるものに外ならぬ。帝國憲法と教育勅語とによつて、國民は安んじて歸嚮する所を發見し得たのである。

教育に關する勅語によつて明示せられた國家主義の道德、國粹主義の教育は、歐化思想の渦中に沈没せる我が國民の精神を甚だしく刺戟し、外に向けたる眼を内に轉じて深く自ら省察する所あらしめた。かくて勅語の意義を述べ、義解を試みる者が續々と出た。那珂通世、秋山四郎合著の「教育勅語衍義」生田自經徳の「聖訓述義」井上哲次郎の「勅語衍義」栗田寛の「勅語述義」等、一々これを擧げることとは出来なす。

國體論の勃興 勅語の解釋は自ら國體論に觸れざるを得なかつた。明治二十三年以後國體論は次第に其の聲を高めた。内藤恥叟の「國體發揮」加藤扶桑の「日本國體論」磯部武者五郎の「國體述義」等の如き、國體を論じた多くの著書が現れた。國體論の勃興に際して端なくもこゝに起つた一事件がある。次にそれを述べる。

基督教と國家主義との衝突 國體論の旺盛なる時に當つても、基督教は決して其の鋒を鈍らさず益

々熱烈なる信者を加へた。教育勅語が全國の各學校に下賜せらるゝや、唯一の神以外には何者にも最高の權威を認めない基督教徒中には（宗教的意義を以ては）陛下の御眞影に拜禮することを拒み（侵略主義の意に於ける）國家主義の教育には反抗の態度を示す者が尠くなかつた。之は基督教徒としては信仰上一歩も譲りえない立場であつた。随つて宗教と（我國民の）教育とは衝突するが如く一面の識者達は考慮するやうになつた。明治二十五年十月、井上哲次郎は、基督教が勅語及び國體に背戾するといふ意見を「教育時論」の社員に語り、これが十一月の「教育時論」に現れると、基督教徒は囂然として井上の意見を駁した。論壇の空氣が次第に騒然たるに及び、井上哲次郎は「教育ト宗教トノ衝突」なる一文を草して、「教育時論」外二十餘種の雜誌に發表し、同二十六年四月には之を更に小冊子として公にした。井上對基督教徒の論争は一世に波及して、學者、教育者、操觚者等を盡く其の渦中に引入れた。これに關する著書のみにも數十種に及び、新聞、雜誌の記事の數、演説の回数等は殆んど數へ盡すことが出来なかつた。

明治二十七八年戰役と國民的自覺 明治二十七八年戰役は我が國文明史上の一大現象である。思想界の革新を促進し、國民的自覺を普遍にし、國家的信念を確乎ならしめた大動機である。井上哲次郎氏の筆端から端なくも流れ出て、遂に天下の輿論となつた反基督教思想はこの新らしい國民的自覺と

結合して基督教傳道及び教育に對しては殆んど致命的な打撃を與へることゝなつた。もしその儘に放置すれば學院は自滅するより外はないのである。

四 學院の新劃策

然し事茲に至つた社會の思潮は事容易に收拾の出来るものではないから期を待つの外はない。然し一面には學制を時代に適合せしめ施設を完備して學生の糾合に努めねばならぬ。もしそれが出来ぬとすれば自然消滅の外はない。消滅は宜しとしても斯程迄に外國人及び基督教に反動を來した場合、神學部への學生を如何して補給するか、之は日本の基督教傳道の前途に關する大問題であつた。

そこで理事員會は、事茲に至つた經路を詳細にプレスビテリアン、リフオームド兩外國傳道局に報道してその意見を聞くことにした。兩傳道局にても餘りに卒急の學運の流轉にさすがに驚いて慎重討議の末、次のやうな手紙を兩傳道局の名によつて送致された。

過般來貴理事會よりの報告に基き、プレスビテリアン、リフオームド兩傳道局は、特別委員を擧げ兩局の實行委員と共に、衰微せる明治學院普通學部の昨今の形勢について多大の懸念を煩はしつゝ、

考慮致し居り候。學生數は遂に四十名にも満たざる由、又從來は優勢なりし基督教感化も、大いに退嬰せる趣、誠に残念に堪えず候。かゝる狀勢の打つゞきては徒らに本傳道局に於て費用の嵩むのみなれば、茲に一策を講ずるの急なるを覺え候。出來得る限り周章と不明に失せざらん爲め、兩局は特別委員に附するに前述の實行委員の外、實情に關し正確なる報道をえばやとの意圖により、ヘボン、イムブリー、ナックス諸氏をも招き、熱議を重ね申候。

其の聯合協議の結果として且つ兩傳道局の指令により左の事項を明治學院理事會に報道致し、御考慮を煩はす事に相成り候。

一、普通學部は之を繼續する事果して妥當なりや。

イ、此の重要問題に關しては當分本國の兩傳道局は各局を代表すべき二名の宣教師以外を今後明治學院に派遣せざる事として考へられ度く候、かくすれば必然費用を大いに輕減さるべく候

ロ、若し廢止するとすれば今後基督教教師養成の爲めに如何にして神學生の補給をなしうべく候や、神學部の基礎についても一考を要すべく候

ハ、繼續するとすれば明治學院は近き將來に於て日本基督教會の管轄となしそれより經濟的援助を受けうる方策を講じうるや否や

ニ 其の結果に明治學院を導かんが爲めには現在の制度及施設を如何に改革すべきや。學院理事會は今後の管理上に關し相當の意見を有せらるゝや否や

二、積極的に米國の兩傳道局がこの緊急なる場合に學院の遠き前途の爲め考へたる救濟策を提出するとせば、以下の改善法を示して貴理事會の一考を煩はし度く候。

イ 明治學院理事會は此際理事員中より外人を除きて全然日本人を以て組織する事、外人は只だ雇として兩傳道局より一名宛の限り止め置く事

ロ 該外國人は學院理事會に於て指名し、傳道局に於て任命する事

ハ 傳道局よりの維持費援助は年額四千圓を越えざる事、且つ向ふ三ケ年間同額を支給し、其後は年々十分の一宛之を減額し十年後には傳道局よりの援助を受けざるに至らしむる事

ニ 但し天災による學院の損失に關しては兩傳道局は相當の考慮をなすべき事

以上の提言は本委員會及び兩ミッションの熱心に推薦するものにて明治學院理事會の御採用をまつ事甚だ切なるものに有之候。(以下略)

リフオームド、プレスビテリアン兩外國傳道局の名に於て

千八百九十五年二月十九日

ヘレリー・エヌ・コップ

ジエー・エル・アメルマン

ワイ・ワイ・イー・エリンウード

ジョン・ゲレスビー

持久戦 以上の外國傳道局よりの通報に接した本學院理事會は愈々態度を決めねばならぬはめになつた。其處で傳道局へは向ふ三年間の補助は願ふが、それ以上の事は事情によつて酌量して貰ひ度いと申述べて、着々持久策を講じた。

之より先、明治二十七年に從來の普通學部本科豫科の制度を廢し、普通學部は修業年限五ケ年として尋常中學校の制度に準じ、その上に修業年限二ケ年の高等科を設けて將來の高等専門學校の準備とした。しかし何分にも普通學部は尋常中學校としての資格をえて居なかつた爲めに、學生の收容は頗る困難である。明治二十九年には漸く十人の新入學生があり、明治三十三年にも漸く十三名の應募者を見ただけである。しかも夫等の生徒とても頗る不安定なもので、一ケ年修學の後に前者に於て二名を失ひ、後者に於て三名を失ひ、二年の後に於て更に前者に於て三名、後者に於て四名を失つて殆んど校庭には生徒の影なきに至つた。たゞ上級の方に不定期に英語を修得するが爲め入學者が偶に見えただばかりである。如何にも學院の前途は不安に思はれた。

尋常中學校の資格を得　しかし其の間百方力を盡して井深總理や熊野幹事の奔走によつて、明治三十一年六月十六日遂に明治十九年勅令第十五號の中學校令による尋常中學校の資格をうるに至つた。之れは學院として一時代を劃すべき事實であつたのである。流石にその效は空からずして學院には比較的多くの青年が其の年から集り初めた。約三十五名の應募者を一年生として迎へた。學院當局は一先づ安堵したわけである。茲に可成り長かつた受難期は一先づ終へたかの觀があつたが、事實はさうではない、更に深刻な受難が前途に控へて居つたのである。

五　文部省訓令第十二號

その受難とはこと國家的事實に關係するもので、學院の運命には勿論、日本國全體の宗教教育に甚大な影響をもつて居るものであつた。即ち明治三十二年八月三日、時の文部大臣樺山資紀氏及び文部次官奥田義人氏勅任參事官岡田良平氏は官公私立の別なく學科課程に就いて「法令ノ規定アル學校ニ於テ自今宗教教育ヲ施シ又宗教ノ儀式ヲ行フヲ得ズ」といふ訓令を發した事である。學院存立の所以は知識を授けると同時に、青年に基督教的眞理を知らしめ、基督教的感情を涵養せしめる事であるは勿論である。それを度外視して學院は敢えて政府の教育事業に資財を投じ入力を盡して加擔するの必

要が何處にあらうか。之を爲さざるは學院の死である。

超えて八月四日、學院では夏期休暇中ながら緊急理事員會を召集して、この由々しき訓令のもとに明治學院は尋常中學部を如何に處理すべきかを評議したが、期せずして議論は左ののやうに纏つた。

一、明治學院尋常中學部はその尋常中學校たる特權を即時返納すること。

二、普通學部の名稱のもとに學生の訓育を續け從來の聖書教授禮拜は之を執行すること。

三、我國の將來に設立さるべき基督教學校のため、且つ現存の同種の學校のため友校と協力して文部當局の反省を促がし、特權の回收に努むる事。

超えて八月五日熊野幹事は東京府に出頭して尋常中學校たるの資格を逸早く返納する手續をなし、井深總理と共に、假令學生はそのために漸次減少して一名に至るとも尙聖書の教授と禮拜とは學院の本領として遂行し續けるの決心をした。之と同時に他の諸基督教學校と提携して對抗策を講じた。その議事に預つた學院理事員は左の通りである。

議長 井深梶之助氏

書記 山本秀煌氏

同 ワイコフ氏

對抗策 この訓令が出た直後、檄を發して麻布の江原素六氏邸に基督敎諸學校の代表者達が集まる事になつた。

ジョン・シ・バラ氏

稲垣 信氏

石原保太郎氏

アール・ワイ・デビンソン氏

加藤 勝 彌氏

ギド・エフ・ヴァベック氏

巖 本 善 次氏

デビット・タムソン氏

ゼームス・バラ氏

ハワルト・ハリス氏

麻布中學校

江 原 素 六

明治學院

井 深 梶 之 助

以上の人々であつた。何分各々がたゞに代表する諸學校の運命に關聯するばかりでなく、日本全體の教育に於ける信教の自由といふ大問題に關係する事であつたから、極めて慎重に協議した上左の二點を以て政府當局にせまる事となつた。

- 一、此の訓令は政府が官公立と私立の差別を無視せること
- 一般臣民から租税を徴收して以つて設立維持せられる官公立學校に於て、一宗派に基く教育をなし其の儀式を行ふことの不合理なるは自明の事である。然るに
- 二、私立學校に於ては信教の自由を有す。

一個人或は一の理想を賛成する篤志家の寄附を以て設立維持せられる學校に於ては、經營者の信教とその主義に基く教育が許されなければならない。無論文部省の定むる學科課程は遵奉するのであるが、學科に加へて聖書を教へ禮拜を爲すは基督教學校存立の所以である。それ故基督教學校はこの訓令の範圍外に置かれなければならないと政府當局に請願しようといふ事になつた。

時の文部省の關係當局とは左の通りである。

總理大臣 山縣有朋

文部大臣 樺山資紀

文部次官 奥田義人

勅任參事官 岡田良平

時は將に列國との條約改正實施の直前で、政府當局ではその改正の結果外人が内地居住の自由をえたならば、必ず從來よりも多數の宣教師其他が移住して來て我國の青年達に日本在來の思想習慣に悖る感化を興へるに相違ない、それを防ぐ爲めには先づ既存の基督教學校を掣肘して、出來うべくば之を撲滅したいとの考へに出でたものであらう。この訓令の立案者は當時の勅任參事官岡田良平氏であつた。

前述の代表者達は請願決議を以つて先づ文部大臣樺山氏を其月の暮に訪ねた。然るに一介の武辨たる樺山氏は言を左右にして殆んど取あへないといふよりは、寧ろ、その事を知らざる様子であつた。次に代表者は次官奥田氏に逢つて是非とも其の訓令の撤回さなくば適當の諒解をえようとしたが、奥田氏は流石に法律家らしく、私立學校經營者は信教の自由は許される。然し宗教宣傳と信教の自由とは別でなければならぬといふ立論から、矢張り強硬な態度をとつて斷じて訓令の撤回はしようとしな

かつた。之はあくまで施行さるべきであり、基督敎學校は若しその訓令に反するなら、資格を返納しなければならぬといふ意である。そこで三次代表者は山縣氏に逢つて縷々として官公立と私立との區別を論じて世界の敎育の状態に鑑み、日本も亦須らく宗教敎育を認めねばならぬ、この度の訓令は實に時代錯誤であり且つ國際的にも日本の耻辱であると訴へた所、流石に總理大臣は困惑の面持をしてかゝる事のなかれかしと自分は思ふて居た、と辭儀頗る丁重で井深氏を遇つた相である。次に井深氏は勅任參事官であり當該訓令の立案者たる岡田良平氏に逢つて諄々とこの訓令の不合理な事を述べたが、岡田氏はあくまで文部省の規定以外の事を學校で教へてもならず、規定以外の儀式を行つてもならぬと主張した結果、遂に井深氏は敎育勸話の奉讀は文部省規定には無き事實を摘發して氏を兩頭論に陥らざるをえしめた相である。

さうした強硬な運動の中に立敎學院は全然校内の宗教敎育とその儀式を排棄するといふ條件を入れて中學校の資格を保留する事になつた。文部省は敵の陣容の亂れたのを見て益々強硬に訓令の施行を主張して來た。茲に於て明治學院は他に先んじて一切の中學校たる資格を廢棄して、飽くまで基督敎敎育勵行の實を示した。次いで同志社、青山學院、東北學院もそれ〴〵資格を返納して了つた。さうした確執の中に明治三十三年は迎へられて同三月に學院普通部は九名の卒業生を出したが、氣の毒に

も彼らは一人も中學卒業者としての資格を許されなかつた。それは、總理が文部當局に對してせめて其の學年の卒業生にだけでも資格を許されたいと請願したが、聽許されなかつたためである。

後年イムブリー氏が時の情況を追想して本國傳道局に左の如く云つて居る。

「過去二ヶ年間明治學院は基督敎學校として存せんか、或は閉鎖すべきかの窮地に隱忍自立し來れりその窮地に嚴然と耐忍せるは他校に對し模範を示したりと云ひて敢て過言にあらざるを信ず。また吾等の奉ぜし主義は日本の現在及び將來のための一大方針たる、教育に於ける信仰の自由、のためなりし事は忘るべからざるなり。堅忍不拔と慎重とに一貫せる態度を以て吾等の奉ぜし主義は、遂に政府の認むる處となり、本學院普通學部生徒は一度失はれたる特權を回收するに至れり。云々。」

資格の回收 尋常中學校の資格をえて滿一ヶ年にして之を拋棄した明治學院はこの度は覺悟の上ながら、又もや校庭の學生の姿を減ぜざるをえなかつた。しかし其の後頻に文部省當局と交渉を重ねた結果、普通學部といふ名目の下に明治三十三年七月在學生の徵兵猶豫の特權を回收した。しかしまだ其の時は官公立高等專門學校に入學する受験資格をえて居なかつた爲めに、明治學院ではどうしても普通學部卒業生に高等專門教育を授けなければならぬ責任を感じたので、切りに既存の高等學部完成を急いだ。その年から高等科を三ヶ年に改めて、英文學科、商業科の二科を設置した。同時に他方に

於て學院充實の爲めに切りに資金募集のことを考へ始めた。

明治三十五年一月二日附て學院理事員會は米國の兩傳道局へ次の様な手紙を送つて居る。

學院は過去二年間非常なる危機に遭遇せるも茲に前途何となく光明ありと思はしむる兆二三あり。

たゞに政府は前述の讓歩を爲せるのみならず、私立學校に對する無關心或ひは半對抗的態度を捨て、適當の施設ある限りとの條件のもとに宗教學校に幾分の好意を示しそめたり。之と共に同一の方向に於て或る更新の傾勢明らかなるものあり。その結果として基督教諸學校は繁榮の新機運に向ひつゝあるを覺え、各々奮勵しつゝあり。學生數の實際的增加もまた一種の悟悅を與ふるものなり。二年以前に於て全院の學生九十名なりしもの、當今は百六十名を數へ内百五十一名の出席者あり。

明治學院理事員會

井 深 梶 之 助

エム・エヌ・ワイコフ

ウイリアム・イムブリ

果せる哉明治三十六年五月十八日には普通學部卒業生は各官立高等學校及專門學校に入學試験を受

くる資格を有す、との通牒に接した。かくて學院は完全に聖書教育の自由を確立させるに至つた。前後八年に亘る苦難は茲に勝利を以て終了し、明治學院普通部の前途には多大の光明が輝き初めた。

隱忍學生の特徴

落莫の孤城の如き白金臺に立籠つて戦つた井深總理熊野幹事、ワイコフ氏イムブリー氏其の他の教職員の態度は、流石に雄々しくも健氣であつたが、その指導者を心から信頼して學節を全ふした數少い卒業生をも我々は永く記憶しなければならない。石川林四郎氏、南廉平氏、森田金之助氏、田島進氏、尾島喜久恵氏、里見純吉氏、鮭延信道氏、原順次郎氏、今野茂氏、鈴木春氏、横田貞治氏、匹田順氏、石原義雄氏、富尾留雄氏其他十五名である。何處の同窓會名簿でもこの期間中の我等の同窓生程少數中に異彩ある者は滅多にあるまい、大阪、神戸大丸呉服店總支配人二名里見氏富尾氏があり、東方電力の鈴木氏があり、海軍々醫石原氏が居り、前チリー公使鮭延氏あり、英學界の泰斗高師教授石川林四郎氏、傳道界では植村氏の後を繼いで富士見町教會を牧せし南廉平氏を始めとして、凡ゆる家庭の不幸と境遇上の不運にも屈せず清操を全ふしつゝある田島進氏、薄幸夭折の天才的な牧師横田氏がある。彼らが寂寥なる白金の丘で、その師等を最後まで信頼してゐた事を思へば、永遠の眠につける熊野氏、ワイコフ氏、今尙ほ天壽を全ふしつゝある井深、イムブリーの兩氏又慰さむる所が多いであらう。

興隆編

一 再興の機運

學生の増加 徴兵猶豫と高等専門學校入學受験資格をえてから、學院の校庭は幾分賑ひをめた。之と同時に學院當局では前途の目覺しい發達を豫想し、今一つは官公立學校と肩を並べて決して引けを取らないが爲めに、切りに外部の擴張と内容の充實とを圖りそめた。先づ學生の増加率を調査して見ると大體次の様である。

年次	普通部			高等部			神學部			合計
	1	2	3	1	2	3	1	2	3	
明治三十六年	三四	三六	三〇	三五	二五	九	六	四	八一〇	三二〇〇
明治三十七年	二五	六	二九	四五	三二	一七	六	四	八六	二〇〇〇
明治三十八年	三四	一〇	八	一〇	一九	二一	二	四	一一七	一二九
明治三十九年	四三	四一	五〇	四五	七三	二六	二	七	四七	三一〇

明治四十年	四三	四五	六七	九八	七五	一二	一九	〇一〇	三	四	三七六	
明治四十一年	七〇	九八	七一	四四	五九	九	七	八	八	九	三	三八六

右の様な好成績で發展をする機運に遭遇した學院幹部は、施設の増設を計らざるをえなくなつた。禮拜堂の建築に取掛つた。禮拜堂建築は現に明治二十一年の合併當時から考へられて居た事で、ロシー、ミラー氏がそれを條件として築地二十九番地にあつた立派な自宅と土地を寄附して居た事は前に述べた。明治三十五年の二月にその邸宅が一萬五千圓に賣り拂はれた爲めに、翌三十六年二月から其の金を以て學院構内に新築する事になつた。

現在の正門を出で、左五六間の街道に、天を摩する一本の大公孫樹があるが、あれは四年前までは學院の塀の中にあつた。従つて現在の正面の道幅はずつと狭くて、あの公孫樹に沿ふて今の立派な石垣の邊りの土手には巨木が立並んで居り。現在の高等學部の正面の庭は、樹木が鬱蒼とした低い沼地であつた。當時正門は今の處より七八間東に寄つて居て、正門を入るとその谷に衝當り道は左手に折れて、だら／＼坂を(現在の禮拜堂の場所)舊サンダム館の傍へ出るようになつて居た。

新講堂は場所もあらうに正門から入つた右手の可成りせゝこましい谷に建設される事になつた。恐らく白金臺中この所ほど地盤薄弱な、陰鬱な場所は無かつた。流石に井深、熊野氏等は、其の地域の不適當なるを頻りに論じたが、建築技師として萬端の設計をした獨逸人ゼール氏が頑固に其處をよし

と主張した爲め、遂に讓歩したさうである。學院建築物中之れ程費用を投じたものは其時まで無かつた。松材を埋め、其の上に石を埋めて基礎を造り、其の上に約九尺の高さに石材を疊上げて階下を設け、其上に精良な赤煉瓦で築いた。周囲の窓には特に獨逸から取寄せた色彩鮮かなステインドグラスを用ひ、入口の右側には恰好のよい塔があつた。

ランチス教授の奇禍 此の講堂の建築中の事である。明治三十六年十二月十二日ランチス氏が朝霜を履んでその譜請を見る爲め四十數尺の高さに登つた時である。足をふみ滑らせて梁に渡した板から堂内に落ちて全身に大打撲傷をうけ、人事不省に陥つた。池田三男也氏が發見して大騒をして應急手當の後聖路加病院に送り、其の後一ヶ年半海外に休養するといふ犠牲的な事件が附隨して起つた。その不祥事が建築の最初からあつた爲めか、地域の不良な爲めか、出來上つた講堂は何となく初めから不安な感じがあつたさうである。

二 神學部の變動期 (専門學校認可とその前後)

南プレスビテリアンミッション合同 明治三十四年四月明治學院神學部には一つの他のミッション

が加はることになつた。それは名古屋以西、中國、四國地方を傳道の分野としてゐる南プレスビテリアンミッシヨンである。そしてその合同の結果としてサムエル・ピーター・フルトン博士が新約の教授として参加することゝなつた。フルトン博士は慶應元年米國南カロライナ州に生れて同州のプレスビテリアン大學及びコロムビア大學、ユニオン神學校で専ら新約神學ギリシャ語を修めて明治三十一年に日本に渡來し名古屋方面の傳道の傍ら三河國岡崎で英語を教授して居たが、南プレスビテリアンミッシヨンの合同の結果推されて學院に赴任新約を擔當することゝなつた。

專問學校認可 明治卅六年十一月廿八日官報によつて左の通り布告された。

文部告示第二百九號

東京府東京市に設置セル私立明治學院神學部ヲ專門學校令ニ依ルノ件認可セリ。

明治卅六年十二月廿八日

文部大臣 久保田 讓

同時に全く之と同一の認可が高等學部にもあつた。思ふにこれは明治學院の一大飛躍である。三十年の昔横濱山手二百十一番のブラウン氏の家塾より起つた一つの神學塾は其後一致神學校となり學院邦語神學部となり神學部となり、茲に文部省の認むる一專門學校の姿を取るに至つた。その後の卒業

生は皆専門學校の卒業者として社會公私の機關に遇せられる事になつたが、その代りに入學者の募集に關しても從來のやうに自由な實力主義に依る譯にはゆかなくなつた。明治三十五年の入學規定と明治三十六年の認可直後の入學規定とを比較して見るとその差には著しいものがある。

一、凡ノ本學部ニ入學セントスル者ハ福音主義基督教會ノ會員タルベシ且其牧師又ハ小會ヨリノ證明書ヲ要ス
一、明治學院高等學部第二年又ハ之ト同等以上ノ學校ヲ卒業シタル者ハ無試験ニテ本科第一年ニ入學スルヲ得
之が認可以後には

一、中學校ノ卒業者又ハ専門學校入學者檢定規定ニヨリ中學校ノ卒業者ト同等以上ノモノト檢定又ハ指定セラレタルモノニシテ明治學院高等學部第二年ヲ修了シタル者ハ無試験ニテ本科第一年級ニ入學スルヲ得

一、入學者ハ所屬教會又ハ小會ノ證明書ヲ差出スベシ

となつてゐる。前者に於ては福音主義基督教會の會員でなければ入學の資格はないといふ極めて嚴然とした特性を發揮してゐるに反して、後者では凡そ中學校卒業と同等以上の學力ありと檢定指定されたる者は先づ入學の資格があることとなつてゐる。之は専門學校認可と共に注意して見るべき一事實であらう。また明治三十二年以後は絶えてゐた別料を設けることになつたがこの度は修業年限は三年となり、その入學規定としては次のやうに誌されてゐる。

別科ニ入學シ得ルモノハ年齢二十五歳以上ニシテ相當ノ履歴ヲ有シ本學部ニ於テ神學ヲ教授スルニ十分ノ教育アリト認定シタル者ニ限ル別科ニ入學セント欲スル者ハ左ノ科目ニ就テ試験ヲ受クベシ

邦文(論文又ハ記事文)、舊約書大意、萬國歴史大意、倫理學大意、心理學大意、經濟學大意

以上の入學現定は大正七年まで殆んど變らずに踏襲されて來て、入學者の學力は認可以前に比べると大いに平均されるやうになつた。左に記念のため認可當時の神學部の教授の陣容を記して置く

教 授

教理史、說教學、教會政治

井 深 梶 之 助

舊約歴史、同緒論、釋義

イ ム ブ リ

新約釋義、同緒論、希臘語

フ ル ト ン

講 師

系統神學、聖書神學、宗教哲學

植 村 正 久

基督傳、教會歴史、英文學

柏 井 園

この當時本科に在學してゐた人々は左の通りである。

(本二)池田勤之助、松本徳三郎、島森進、鈴木高志、(本一)江川七郎、井口彌壽男、柏本根雄、口

村佶郎、西健二、大野直周、阪本朝吉、員外生、三好務、森岡謹吾、八幡太利吉、(本科三年は當年缺員)

明治三十六年はかくして多大の光明を眺めながら暮れたが三十七年を迎ふるに至つて、學院神學部には一つの悲しむべき事柄が生じた。それは植村柏井兩氏の退職された事柄である。

植村柏井兩氏の辭任 明治三十七年三月植村正久氏は牧會に専念するといふ理由から辭表を呈出した。然し今一つには學院神學部の方針に飽き足らざるがためといふ理由もあつた。理事會では事容易ならぬ問題であるため、二名の特別委員を舉げて忌憚なき氏の意向をさゝ留任を求めたが遂に聽かれなかつた。按ふに氏の胸中には日本人を以て經營し日本人を以て教ゆる一神學校即ち數年ならずして氏の手によつて設立された東京神學社が畫かれてゐたものであらう。坊間には氏の辭任の理由を、氏が教科書として採用したクラーク氏の基督敎神學概論を一西洋人が異端の書として誹謗したゝめとか氏に對する學院よりの待遇が禮を失して居たゝめとか、學院當局との確執のためなど、憶測をするものがあるが、それは何れも妥當ではない。縱令植村氏の口よりその何れかゝ出でたとしても、それが全體でもなければ主要でもあるまい。氏の人格と閱歴とはかゝる事共によつて去就を定むるには餘りに偉大である。氏はやはり日本人によつて樹ち日本人によつて營まるゝ一神學校を實現せんがために

學院神學部を去られたものでなければならぬ。同時に井深氏は歴史ある學院のために最後まで奉仕をなすべく氏と袂を別つて白金に残られたまでである。然し植村氏の辭任は尠かぬ衝動を學院に與へた。本科學生日高善一、井口彌壽男の二氏は植村氏を慕ふの餘り、學院を去つた。また豫科生にも一二名笈を收めて歸郷したのもあつたと傳へられる。當時一ヶ年間の豫定で紐育ユニオン神學校に留學中であつた柏井園氏からもやがて辭表が送達された。之に關しても誤聞がある。それによると學院は留學中の柏井氏の家族を扶助しなかつたため氏は植村氏と去就を共にしたのであると。然し當時の記録によると、柏井氏は學院理事會に對して留守中の扶助を感謝して、之を返済したいとの意を漏してゐる。兎もあれ柏井氏が植村氏と去就を共にしたことは明治二十六年の出京の動機に照しても自然であり、また植村氏が前途の劃策のため是非共柏井氏を手離しえなかつたのも當然である。

オルトマンズ博士の來任 之よりまへ明治三十五年六月に神學部に應て有爲の博士が來任した。それは九州佐賀在留の宣教師アルバートオルトマンズ氏である。博士は舊約神學舊約歴史同釋義同緒論を擔當することゝなつた。次に柏井氏の後任として、日本橋教會の牧師

松永文雄氏 が來任して明治三十七年九月から教會歴史基督傳を擔當することゝなり、同年十二月に至つて本郷教會牧師有馬純清氏が講師として一週四時間辯證論を講ずることゝなつた。また稍後れ

て明治三十九年九月には

秦庄吉氏 が専任教授として來任され、植村正久氏の擔當科目であつた系統神學聖書神學を擔當するに至つた。

イムブリー氏の外交上の功績 明治三十七年二月五日駐露特命全權公使栗野氏は露國政府に向つて遂に國交斷絶の公文を手渡した。其の翌日には我が聯合艦隊は佐世保を發して旅順港と仁川の沖合で戰鬪を開始した。それは二月八日、九日のことである。十日に至つて我が天皇陛下は宣戰の勅を降し給ふた。

何分にも世界の大帝國ロシヤを相手とする大戰役であつたので、我國朝野の懸念は一通りでなかつた。先づ世界の列強に對して我が帝國の此の戰端を開始するの止むを得ざる條理を明確にする必要があつた。日本は斷じて事を好むのではなく、東洋の安寧秩序のために至大の犠牲を拂ふともロシヤの南下を阻む必要のある事を全世界に訴へる必要があつた。時の總理大臣は桂太郎氏であり、その秘書官は我が學院出身の中島久萬吉氏であつた。

中島久萬吉氏は事態急なるを感じて、先づ我國在住の宣教師中最も見識に富み、徳望高く且つ内外人に信用篤き人を物色して仔細に總理大臣より國家のこの大事變を招くに至つた經過を聽かしめ、そ

れを世界の各地に宣揚せしめる事が適當と感じた。一日中島秘書官は白金の井深總理邸にこの相談を齎らせたが、總理はイムブリー氏以外に適任者は恐らくあるまいと告げた。其の後數日にしてイムブリー、井深の兩氏は總理大臣官邸に赴いて桂氏に面接したが、氏は懇ろに兩氏の勞を謝した上、極めて熱心に遼東半島還付の後、ロシアは漸次に滿洲を南下して遼東半島の利權を獲得し、旅順港には堅固なる砲臺を設け、更には韓國の國境をも侵して我國の安寧をも脅かさうとして居る。之は單に日本のみならず東洋に於ける世界の利權と自由を侵すものであり、日本は止むなく彼と矛を交えねばならない條理を遺憾なく説明した。井深氏は逐一桂氏の面前で之を通譯し、イムブリー氏はそれを書留めて官邸を去つた。

其の後イムブリー氏は丹念に桂氏の所説を文章に纏めて一段中島久萬吉氏に送り、桂氏の允准をえてから、改めてロンドンに送附してスペクテーター紙上に掲載した。忽ちそれは識者の目に止まつて方々の有力な新聞雜誌々上に表はれ、日本の戦端を開いた動機と態度が更によく歐米の人士に諒解されるに至つた。明治四十二年二月論功行賞の際、博士の往年の功績は當局の認める所となつて勳四等旭日章を賜はつた。

講堂の大破損 落成後一年半もたぬ明治三十八年三月關東地方に強震のあつた時、新装麗しい講

堂は見るも傷ましい程龜裂を生じて了つた。しかし未だ使用に堪へない程では無かつたが、其後四年の明治四十二年三月再び東京地方に強震のあつた時には益々破壊してしまつた。そこで専門技術を頼んで種々修理法を交渉して見たが、遂に使用に堪えず且つ修理の見込みもないと宣言された。設立後五年と數ヶ月、このミラー氏の折角の好意による新講堂は風雨にさらされて廢墟の感を年々深くするのみであつた。

三 擴張の計劃

しかし新講堂の將來の運命は兎も角それが落成した當時は、學院當事者や學生の喜びは一通りでは無かつた。毎日の禮拜は天井の高いゴジック風の窓のステインドグラスを洩れる奥幽しい光の下で行はれ初めた。従つてサンダム館の二階の講堂は之を二つに區劃して二教室を設けて學生を收容すべきかとの説も起つた。しかし又一方には之は小集會室として止め學生の文學會其の他の催しの爲めに使用し、サンダム館は今後専ら高等學部のために用ひ、普通學部の爲めには一校舎を新築するが適當であると主張する者もあつた。學院では後者の説に従つて積極的に將來のために基本金を造ると同時に

校舍新築の議を可決した。

エリンウッド氏への手紙 明治三十七年三月二十四日イムブリー博士は明治學院理事會を代表して米國プレスビテリアン外國傳道局書記エリンウッド氏へ長文の書簡を送つて大いに學院前途のため訴へる所があつた。以下その概要を掲載する。イムブリー氏は學院の今日までの發展と現在の狀勢の大略を記述した後逐條的に大體から述べて居る。

一 日本に於ける基督教々育の必要 日本の教育施設は維新以後長足の進歩をしてその制度の如きは歐米のそれに比べても遜色はない。又訓練の點に於ても、日清戰役及び今回の戰役に於ける將校士卒の活動はよくその平素の成績を證明して居る。若し基督教學校の使命が單に日本の青少年に普通教育をなすのみならば、今や其の存立の必要はない。しかし、日本政府の教育は全然宗教を無視するのみか、反つて宗教的情操の發達を阻害する感がある。若し今日基督教學校が全然跡を斷つならば、幾多の傳道者の犠牲的奉仕の結果として増加しつつある基督教徒の大切な子弟を如何にして適當に教育しうるであらうか。基督教徒は眞理に叛く感化の下にその子弟を托しえない限り現代日本に基督教學校存立の必要なるは明かなる事實である。

二 日本基督教徒は何故基督教學校を經營しえざるや 官公立諸學校は年々莫大なる資金を給せら

れて専ら施設の増進につとめて居る。町村の經費の大部分はその小學のために用ひられ、縣費の多くはその縣内に存する中等諸學校のために用ひられ、文部省の諸費の大部分は直轄學校の經營のために用ひられてゐる。若し基督教徒が一私立學校を經營して子弟に人後に落ちない教養を授けようとするれば、之ら官公立諸學校に劣らない學校を經營する必要がある。然るに日本に於ける基督教徒はその數尙ほ少數で、其の財力に於ても到底他の公共團體に及ぶべきでもない。彼らが一教會を支へ其の牧師に支給して行く事さへ仲々容易ではない。審さに其の状態を觀察すれば彼らに官公立諸學校に匹敵する教育機關を經營せしめる事は自明の不可能事である。

三 基督教諸學校の功績 然るに基督教諸學校の存立と價值には甚深なものがある。それは次の植村正久氏及貴山幸次郎氏の言葉によつて明かである。「ミッシヨンスクールの是非を批判する餘地は既がない。現今の悔改者の中七八割は基督教學校の影響を受けたものである」と前者は云ひ、後者は「日本基督教會傳道局主事たる數年の經驗よりすれば、個人よりの同局への献金の大部分は嘗つてミッシヨンスクールに學んだ者よりである」と云ふ。之れより推論すればミッシヨンスクールは傳道者の奉仕の結果を完成しつゝあると共に又其の備へを爲しつゝあるのである。今や學院は新しき時代に直面して新しき必要と機運に臨んで居る。

四 新しき必要 明治初代の基督教諸學校は當時の最善なる教育機關にして學生自らが選擇して集ひ來つた。然るに今日は官公立諸學校が諸般の設備を完備し、優良なる教師を傭聘したるが爲めに、優秀なる學生は競つて其の方面に向ひ、二流三流の學生のみが私立學校の門に來る有様である。明治學院に於ても矢張りその難を免れない。若し現在の施設のまゝに繼續するならば、聽ては退嬰して折角の使命をも果しえざるに至るであらう。優良なる學生を集めて優良なる基督教紳士を送り出さんが爲めに、我等は官公立諸學校に譲らざる施設を爲すべきである。

五 新しき機運 明治二十四五年の頃より日本の國粹論者と基督教徒との間に可成りに辛辣な國家觀念に關する論争が行はれ、朝野の人々が盛に基督教の非國家的なる事を論じたが、それが明治二十七八年の戦役の頃日本全般に起つた國民的自覺と相呼應して遂に基督教に對する嫌惡の情を喚起し、著しくミッシヨンスタールの學生は減じ、間接直接吾々は可成に重い社會的壓迫を受けたが、明治三十二年に至つては極めて具體的に一訓令となつて、文部省の法令による諸學校に於ては一切の宗教的儀式を廢せしむるに至つた。之は我ら基督教學校を經營するものゝ致命的打撃であつたが、堅忍不拔凡ゆる逆境に打勝つて教育上に於ける宗教の自由の爲めに戦ひ、數年に於て遂に我が學院は二度失つて居た學校としての特權を回復するに至つた。のみならず現今政府

の要路の人々は私立學校の特色と其の國民教育上の必要とを感得して好意の眼を拂ふに至つたが、これは正しく我が學院の發展すべき新機運である。

結論 以上の事情に照してこの際に明治學院の施設を改善するの必要ある事は明かであるが、それは大體左の方法によるべきであらう。

(一)普通學部のために一校舎を建設する事

(二)高等學部生徒の爲めに寄宿舎を設備する事

(三)教職員の待遇改善を圖り良教師の備聘につとむる事

この三つの事實を實現するが爲めには概算十萬弗の基金が必要である。その中二萬五千弗は建築其他の修理に用ひ、殘額七萬五千弗は之を預金して諸般の經常費に當てたい。

本國の基督敎徒諸君は明治學院が過般の反動時代に最もよく己が立場を自覺して陰忍自重の戰をなし、而かも今日に於て勝利をえた事、引いては此の勝利によつて將來の日本の教育の爲めに信敎の自由を保證した事、今一つはこの日本は單なる東洋の孤立國では無くて、將來は東洋の歴史に廣大無邊の影響をなすものであるとの事實を豫想して、日本の基督敎化は同時に支那及び朝鮮の基督敎化に外ならぬといふ確信より我らに必要な基金を提供せられん事を望む。

千九百〇四年三月二十四日

ウイリアムイムブリ

以上の懇ろな依頼書が米國に送致せらるゝと同時に、學院には今一つ米國に訴ふるには極めて好都合な機會が與へられようとして居た。それは千九百五年（明治三十八年）四月下旬にフランスのパリで開かるべき世界基督教青年會同盟及びオランダのザイストで開かれる萬國學生青年會同盟に井深總理が日本の基督教青年會同盟を代表して出席するといふ事が定りつゝあつたからである。學院理事會はそれを好機として是非井深總理に米國を訪問してもらひ、直接にプレスビリアン、リフォーメド兩傳道局並びに有志者に基金募集の事を訴へる方法をとらうといふ事になつた。

井深總理の渡歐 明治三十八年三月四日井深總理は日本基督教青年會同盟、同學生青年會同盟の代表者として、青山學院々長本多庸一氏と共に横濱を出帆して行つた。總理の不在中熊野雄七氏が代理總理、オルトマンズ博士が神學部長、ワイコフ博士が高等學部々長の務めを取る事になつた。

時は未だ日露戰爭の酣なる頃である。連戦連勝なる日本國民の基督教徒の代表者たる總理等は世界の至る處で盛に歡迎された。總理はパリの基督教青年會大會で交戰國のロシヤの代表者も列席の中で我等は平和を愛する者であり日露の戰雲の一日も早く治まらん事を祈りて止まない。満堂の諸君も亦

それを祈りつゝあられるが、たゞ一事正義の平和、合理的なる平和の出現の爲めに諸君は祈り且つ努めてもらひ度いと聲涙共に下るの熱誠を以て演説をされたが、ロシアの代表者は感激の餘り遽かに演壇に躍り上つて井深氏の手を握り兩人は感極つたのは勿論、議場の人一人として感激の拍手を送らなかつた者は無かつたといふ。

井深總理がヨーロッパに滞在中イムブリー氏はプレスビテリアン外國傳道局に書を送つて、井深氏が米國に於て爲すべき募金運動を懇ろに應援して貰ひたいとの依頼狀を發じた。所が細心懇切なロバート・スピーア氏は其れを傳道局の常務委員會にかけて、傳道局の快議として井深氏の運動には最善の援助するといふ意を同年四月十一日附の手紙で報じて來た。傳道局の決議文は次の如くである。

明治學院總理井深博士の北米合衆國への訪問に關するイムブリー博士の手紙は傳道局の委員會に提出さる。傳道局は井深博士を心より歓迎し、博士の日本に於ける事業の爲めに且つは當ミツションの日本に對する使命の爲めに彼の訪問を最上の程度に有效ならしむるべく全力を盡すを保證す。井深氏の責務は明治學院の爲めに基本金を募集せらるゝにあれば、傳道局は個人に訴へて各々が一千弗を下らざる限度の寄附を慫慂する事に於て氏の努力を援助す、云々、又この決議の外ロバート・スピーア氏は自宅に井深氏を留めて各方面の有力者に紹介をし訪問者と

の接衝の便を圖られるといふ事をも申出でられた。この意を巴里滞在中の井深氏に通じた。

米國に於ける井深總理 井深氏は多大の力をえて其の夏大西洋を渡つて米國に行つた。時はさしもに激しかつた日露戦争も終焉に近附いて、米國大統領ルーズベルト氏は日露の講和條約成立の爲めに斡旋奔走して居る時であつた。時の我國駐米公使は高平小五郎で、同氏は米國政府の要路の人々にも井深氏を紹介して多大の便益を興へられ大いに活躍されたものである。井深氏の米國に於ける活動はその效虚しからずして二萬五千弗の資金をえて翌年二月十三日無事歸朝する事になつた。

四 明治學院財團法人認可

明治三十八年の三月九日には兼て出願中であつた明治學院財團法人制定の件は文部大臣より認可された。その認可願寄附行爲の條文並びに物件の表示は左の通りである。

明治學院財團法人認可願

明治學院は別紙登記謄本の通り民法施行前より獨立の財産を所有致居下名外兩名は明治學院財産保

管委員の名義を以て保管罷在候得共是迄種々故障有之今日に至るまで民法施行法第拾九條に據り御認可相願候運に不至候處今般漸く從來の契約書等に依り寄附者の定として今日まで遵據致來候諸般の事項取集め別紙の通り寄附行爲として書面に作成仕候條之に依り御調査の上法人として御認可被下度此段申請仕候也

明治參拾八年貳月拾八日

明治學院代表者 井 深 梶 之 助

文部大臣 久 保 田 讓 殿

明治學院財團法人寄附行爲

第壹條 本法人は明治學院財團法人と稱す

第貳條 本法人の目的は基督教主義に基き普通及高等の教育を施し殊に其神學部に於ては基督教教師たる可き者を養成する爲め次條に規定する條件により明治學院を設立維持するにあり

第參條 本法人に依て設立維持せらるゝ明治學院は永遠に基督教主義の學校たるべし而して其教義の標準は明治二十三年十月日本基督教會大會が採用したる信仰の告白たるべし

第四條 本法人の事務所は東京市芝區白金今里町四十二番地に之を設く

第五條 本法人の資産は左の四種とす

一、本寄附行爲に添付せる目録に記載の不動産

二、北米合衆國プレスビテリアン教會及アメリカ、リホームド教會より年々各金三千五百圓宛寄

附の豫約金

三、本寄附行爲を承認して本法人に寄附せらるゝ土地建物其他の財産

第六條 本法人に十二名以上十八名以下の理事を置く

第七條 總理は職權により理事たるべしその他の理事は次の如く選舉せらるべし理事の半數は在日

本プレスビテリアン宣教師社團及在日本アメリカ、リホームド宣教師社團の二團體に於て各適當の方法に依り其各團體の社員中より同數の割合を以て之を選出し他の半數の中二名は明治學院同窓會より選出し其他は理事自ら一の團體と成りて之を選出すべし而して其被選舉權を有する者は本寄附行爲第三條に掲げたる信仰の告白を承認する所の日本人たる基督教徒に限る、明治學院より俸給を受くる教授は理事會の理事たらざるを可とす

本寄附行爲認可を得たる後の最初の理事は左の十八名とす

井	深	梶	之	助	石	原	保	太	郎
稻	垣			信	磯	部	彌	一	郎
毛	利	官		治	イ	エ	ス	ブ	リス
ピ	エ	シ	ハ	ワ	エ	チ	ビ	ブ	ライ
エ	フ	エ	ス	ス	カ	ツ	ダ		
松	井	安	三	郎	松	永	文	雄	
有	馬	純		清	渡	邊		暢	
ゼ	イ	ム	ス	エ	チ	バ	ラ		
チ	エ	ム	マ	ク	ネ	ヤ			
シ	ケ	カン	ミン	グ	ジ	ヨ	ン	シ	バ

第八條 理事の任期は二ケ年とし一年毎に其半數を改選す

但最初の理事十八名中松井安三郎以下九名は在任一ケ年とす

第九條 死亡辭任其他の事故に由り理事に缺員を生じたる時は第七條に依り補員を選任すべし但其任期は前任者の任期中とす

第十條 本法人の所有する不動産を賣却又は讓與し若くは抵當と爲し其他所有權の全部又は一部を喪失すべき處分を爲さんとする時は理事全體の三分の二の同意を要す

重要なる動産に付ても前項の規定を準用す

第十一條 本法人の收受したる寄附金は之を確實なる銀行に預け又は確實なる有價證券として保管すべし但寄附金の收受と使用との期間一ヶ月に滿たざるものに付ては此限にあらず

前項の保管方法より生ずる利子は銀行の規則又は證券の性質に従ひ遲滯なく之を元本に繰入る可き方法を取るべし

第十二條 理事會に議長、書記及會計を置く但書記及會計は理事たるを要せず

議長は議事を整理し理事會を代表す

書記は庶務に従事し理事會議の記録及其他の記録を整頓保管し又理事會に提出す可き報告書を作る

會計は一切の出納を掌り又理事會に提出すべき會計報告書を作る

第十三條 定期理事會は少くも毎年壹回開くべし理事會自ら會議の時と所とを定めざる時は議長は書記と協議の上之を定むべし

定期會の時と所とは開會の五日前に書面を以て通知すべし

定期理事會に於ては理事過半數の出席を以て定數とし其過半數を以て議決す

第十四條 臨時理事會は理事三名以上の請求に由て開くものとす

臨時理事會を開くときは必ず開會の五日前に會議の時と所との外議事の事項をも各理事に通知すべし

臨時理事會に於ては理事三分の二の出席を以て定數とし其過半數を以て議決す

第十五條 理事會は明治學院を管理する義務及び權利を有す

第十六條 理事會が明治學院を管理する權利及び義務中には左の事項を包含す

第一 總理及其他の職員を任免する事但幹事及舎監は理事會の贊同を経て總理自ら任免するものとす
總理を任免する場合には理事全體の三分の二の同意を要し其他の教授以外の職員を免ずる場合には理事會出席員の三分の二の同意を要す

第二 教員を任免する事及其受持科目を指定する事神學部教授の選任及凡て教授の免職の場合に於ては理事全體の三分の二の同意を要す

第三 凡て職員教員及其他學院より俸給を受くるものハ俸給額を定むる事

第四 豫算及決算を議決する事又凡て出納を監督し毎年會計年報を作りて記録に留むる事

第五 各學部の教授會を監督する事

第十七條 本法人は特に開かれたる理事會に於て理事總數の四分の三以上の同意を得て之を解散することを得

第十八條 本法人の解散したる場合に於ては最終の理事は第十三條の規定を準用し左の標準に由り財産の歸屬權利者を指定すべし

一、本寄附行爲第三條に記載する如き基督敎主義の學校にして青年男女に基督敎主義の教育を施す爲め其財産を維持使用す可き一個若くは數個の法人に讓與し得ること

二 右の條件に相當するもの無きときは財産を賣却又は評價し其賣却代金又は其現物を最初本法人に寄附したる團體若くは個人又は其各繼續者に寄附の割合に應じ配分し得ること

第十九條 本寄附行爲は第二條第三條及第十七條を除の外特に開かれたる理事會に於て理事總體の三分の二の同意に依り主務官廳の許可を得て之を變更することを得

明治學院財產目錄

芝區白金今里町四十番地

一市街宅地

三百〇六坪

時價金一千五百四十圓也

芝區白金今里町四十一番地

一市街宅地

七千五百五十一坪

時價金三萬七千七百五十圓也

芝區白金今里町四十三番地

一市街宅地

一千二百九十七坪

時價金六千四百九十圓也

芝區白金今里町四十二番地

一林

三畝十步

時價金二百二十圓也

芝區白金今里町四十一番地

一 木造亞鉛葺三階（舊サンダム館）

建 坪

一 棟

百〇四坪七合九勺九才

九十坪九合六坪九才

二 階

九 坪

時價金五千圓也

同町同番地

一 木造ブリキ葺五階（舊ヘボン館）

建 坪

一 棟

百二十九坪五合五勺五才

二 階

百〇四坪五合四勺

三 階

百〇四坪五合四勺

五 階

百〇四坪五合四勺

五 階

四 坪

時價金六千圓也

擴張の計劃

同町同番地

一 木造ブリキ葺二階（舊ハリス館）

一 棟

建 坪

九十五坪四勺五才

二 階

七十四坪四勺五才

平 家

二十一坪

時價金二千圓也

同町同番地

一 煉瓦造瓦葺二階（現總務部）

一 棟

建 坪

七十一坪餘

二 階

同

時價金三千五百圓也

同町同番地

一 木造瓦葺二階（同舊總理邸）

一 棟

建 坪

五十坪

時價金一千五百圓也

明治學院設立代表者

井 深 梶 之 助

本年二月十八日附申請財團法人明治學院の件民法施行法第十九條に依り認可す

明治三十八年三月九日

文部大臣 久 保 田 讓

五 二十五年の回顧(寄稿) 都 留 仙 次

昨日の様に思はれる學院在學當時が既に四分一世紀以前の事となつた。學院の齡五十年に對して僕等の時代は正に中世だ。中堅とか、中樞と言へば甚だよくも聞えるが、中等とか、中途半端とか、中間などゝなると有難くもなし。

何にかぎらず中世史は餘り注目されず、又臆え悪い。事が錯雜して居る。所謂暗黒時代は何れの國でも、多くは中世紀にあると相場がきまつて居る。と言つて僕は學院の中世紀を暗黒時代と看做

すのではない。僕等自身にとりては愉快なホーム、またオアシスであつた。

一 罪跡 埋滅

頃は明治三十五年前後、十九世紀から二十世紀に入つたばかり——文學會で『此の我が十九世紀に於て』と言ふ口癖が多くの辯士の口から遠のかない頃、國家としては露國撃つべきやと云ふ大問題をひかへ、所謂七博士の献策、宣言などで大騒をして居り、學院としては徴兵猶豫とか専門學校高等學校に對する檢定を獲得しなければならぬ羽目で内外共に大變革の時機の様には思はれた。

今の學院を其頃の學院に思ひ合せて見ると大變な變化である。之は僕等にとつて嬉しくもあり、悲しくもある。多くの悲喜劇の古戦場の跡が判らなくなつた。多くの罪蹟を留めた一つ一つの物件が湮滅した。従つて青天白日、涼しい顔で五十年記念會にも顔出しが出来る輩も少くない。實際あの頃のムクの木とか、クルミの木とか、梅、栗、櫻、竹藪、杉林、イチゴ畑などがあつたら昔のバットボーイズの悪戯をよく證明が出来、いゝ年をした連中を今更の様に笑はせたり、赤面させたり、憤慨させたりする事も出来るのだ。彼の怪偉なヘボン館でも今に立つて居たら今度の五十年記念會へは大阪、神戸あたり在任の同窓生まで御祝ひかたぐい一言の祝詞を之に呈し、其の寛弘なる懐に若き生命を哺くんでくれた御禮の爲め遙々參列に来る者もあるに相違ない。

學院の周圍も大に變つた。未だに生きて居る者は例のサンフランの床屋と、昔と同じ足どりて散歩する山本權兵衛さん、寫眞屋の收芳館、ルビの爺（尤もルビは時代によりて變つて居る）。ルビの爺は當今質屋業者だ。彼を遂に質屋業にさせたのは其頃の學院のバッドボーイズが餅や、雜煮、ゆであづきの代に外套、時計、羽織などを置き彼を質屋たらざるを餘義なくしたのである。僕が洋行後學院教授となり妻帶してから或日の事妻が『今日御留守中質屋の肩書ある松坂屋と言ふ者が來訪し、先生が生徒の頃は太變御最負に預りました、今度黒須某を國會議員に御投票願ひます、と運動に參りましたが、あなたは生徒の時そんなに質屋に御用があつたのですか』と詰問を受けた。彼がルビであつた事や、自分はそれ程彼の爺とは親しくもない事を妻には改めて説明した。

二へボン館の怪

へボン館の怪談の意ではない。怪談もなくはないが其れよりもへボン館其物が前世紀の遺物——マンモースやケラトオサウラスを想像する様な尤大奇怪な印象を遺した事を言ひたい。へボン館の遠景は何とも云へぬ雄大さがあつた。殊に夜など各室のランプの灯を遠く麻布の永坂から真正面に見た姿は立派であつた。彼の建物の五階からは品川灣が手に取る様に見える、北の方には遙かに愛宕山、丸の内、及び靄の中にニコライ堂なども眺望せられた。へボン館は新入の者にとりて唯に外形

が怪異に見えなければかりでなく、其の構造、設備等異様なものに充たされて居た。

非常梯子、へボン先生は生徒をまだ人間迄進化しない猿族程度に看做したらしい。彼の非常梯子は先生が動物園の猿小屋の前で腹案を得たものであらう。原始的また氣拔であつた。朝の始業時など書物を風呂敷包にし首に、腰に縛り付けた幾人もの鼻たらし等が四ヶ所の垂直な側の梯子を行列して降りて来る處など——其時は別に可笑しくもなかつたが、今から想像して見ると別世界の感がある。今日ではあぶないと云ふ理由からでも彼んなものは總理が作り付けもせず、文部省が許しまし。中途から、吉田稻夫であつたか、垂直に、落ちて氣絶した事もあつた。新入の子供などこの梯子の昇降が出来る迄には可なり修業がいつた。然し一旦出來だすと得意になつて普通の階段は寧ろ輕蔑したものである。徳丸などは非常梯子の昇降は出來ず仕舞ではなかつたか。

離れベッド、ベッドはへボン館のもハリス館のも大體同じ様式であつたが、へボン館の方には所謂離れベッドなるものがあつた。東部二階十號室の離れベッドは何日の頃よりか幽霊ベッドと呼ばれ、ミスさんなど籤が當つたにも拘らず舍監に頼んで代はつてもらつた。西部十七號の離れベッドにはよく泥棒がはいつた。月夜の或る晩例の非常梯子を傳はり泥棒の大きな頭が窓に寫つたと云つて一晚中蒲團を被つたまゝ震へて眠れなかつたのはふだん強さうな事を云ふ林田であつた。然し離

れベッドの最も氣拔なのは何と言つても中央部の突出したモニトル部室及他の三室即ち十三、二十四、二十三、二十四の各號室のスタデイの一隅に設置せられた一人ベッドであつた。今日の縁臺や腰掛臺の尨大なのに疊を置き四本足に車を取り付けたものが押入の中にはまり込むと想像すればよからう。彼を占領することはヘボン館に於ける位人臣をきはめた四人に限られた。臥て見れば何んでもないのだが、つまらない事を恙やんだものだ。

其他 先祖代々の壁の樂書、地下室、五階、屋根裏、夜の便所行き、朝夜二回の點檢等書けば果もなす。

三 新制度及新建築

其頃學院には色々な意味で大きな新陳代謝が行はれた。それは中年又は壯年に達した學院には當然な事でもある。

新制度 普通部は中學校と同等以上のものとして指定せられ徴兵猶豫や高等學校への連絡や何等支障なき事となつた。次に高等部は専門學校として認可せられ普通部同様徴兵猶豫の特典を獲得したのである。向井君の級は唯一人となつて自然消滅し事實上赤松、匹田、下津、富尾四君の組が新制度による高等部第一回の卒業となり、僕等の組が第二回となつた理。不思議に僕等の上の組も

僕等の組も、其の次の組も四人づゝ卒業する事となつた。學科は國漢文の外は總て英語で教へられたが先づ大體分らないのが通例であつた。Psychology の時間など其の代表的なものでランヂス先生が林檎を嚙りながら教室に入り來り、嚙り残しはポケットに入れて Motive power と Cognitive power の講義を始める。生徒には Faculty とか Concept などよくは了解せられない。夫れでも先生自身大に興味を覺え、談佳境に入ると指先で鼻をくぢる、鉛筆の先で耳をほぢるなどの作業が行はれ、額の皺はいよゝ／＼多くなり又深くなる。舌を巻き或は舌端にて内側より右左の頬を交互につき出し、遂に白眼を盛に出す様になれば最早クライマックスを過ぎた兆である。制度は更新せられても學科教科書及び先生は舊來のまゝであつた様だ。

神學部が豫科二年本科三年と言ふ制度になつたのも僕等の級からであつた。ギリシヤ語やヘブライ語も必修科目となり、教授も餘程人員が揃つて來たが不幸にも其頃植村、柏井兩先生がやめることになつたので生徒の間に大變な動搖を來し一部分は退校して仕舞つた。

四 横歸り其他の思ひ出

横歸り 僕は洋行を企てたこと前後三回である。第一回はランヂス先生傷づき、植村、柏井兩先生が學院から分離した當時生意氣にも學院を見くびつて家郷に歸り直ちに洋行すべしと父に談判し

た。處が父は『一旦入學した以上其の學校を卒業する迄は動いてはならぬ、鋤に手をかけて後を顧みる様な意志薄弱な者は以後知らぬ勝手にせよ』ときつぱり斷られた。第二回は高等學部卒業の時僕は初め神學豫科に居たが速く洋行したいばかりに當時の高等科を修了する事にした。父も承諾、井深先生はストルデ博士に紹介状をも書いてくれた。同期生の古川と同行で學院生徒は僕等兩人を盛大に送別してくれた。僕等は意氣揚々と横濱の蓬萊屋に乗り込んだ迄はよかつたが、僕等は二人共翌日の眼の検査で不合格と宣告せられ泣くにも泣けぬ始末になつた。之より先き僕等が河本博士に眼を見てもらつた時僕の方は大丈夫、古川の方は危ないと言はれたもので、僕は安心して居た。ところが古川はジャバンタイムスの頭元氏から横濱の米國領事に宛てたる紹介状をもらひ、検査の朝早く領事に會つて大に了解を得て居つたので更めて領事館に行き、形ばかりの再検査をしてもらつて洋行が出来た。僕はヘボン館に逆戻りをし、舍生は僕の「横歸り大歡迎會」をしてくれた。學院の先生方も喜んでくれた。僕は舍監になり、神學本科を修め、而して第三回目の洋行に於て目的を果す事を得た。後になつて思へば父や學院の先生等の考の方がよかつた。

學生の會合、面白かつたのは毎週金曜夜の文學會であつた。一方に紳士クラブあれば、他の一方に幼年黨ありて大に辯論を戦はしたものである。此の兩派は亦運動の方面でもよく對立して居た。

運動ではベースボールが一番盛んであつた。學院のナインは都下諸學校中嶄然頭角を現はして居た遠足では三學部生徒が一處であつたから、實に愉快だつた。服装など百鬼夜行式であつた爲め或る年横須賀の軍艦見物に行つた際など、士官がこれでも學校の生徒かと怪しんだ程であつた。

毎朝の五層樓上の祈禱會は今思ひ出しても敬虔な氣に打たれる。霜の朝など少數ではあつたが皆な熱心に祈り最後の頌榮を歌ふ頃品川灣頭に太陽が昇り來る景色など一種莊嚴な思がしたものである。

地質學、鼠、大砲 翌日は Dana の Geology の試験があると云ふ晩であつた。益富が僕の室（十二號）に來て二人徹夜勉強の覺悟を決めた。處が夜中過になると益富はモト堪らなくなつたと見えて僕に後事を託し——翌朝大要を僕に話してくれと云つて横になつた。一、二時過ぎてから、天上の鼠群があはれ出し、遂に其のクライマックスに丁度益富の頭上で百雷のおつる様な響を立てた。益富は目を醒ましておびえた様にキョトンとして居る。そこで僕は、とつさに彼の鼠の音響が彼の夢にはまり込んだなと思つて。僕『大變だつたらう』益富『僕等は今何處に居るんだ』僕『へボン館の中央部三階だよ』益富『松島艦と權兵衛さんは何處に行つたか』僕『戦争があつたか』益富『うー、僕が見て居るとねー、松島の大砲に山本權兵衛さんが跨つて先に立ち、橋立殿島や其他の舟が

舳艫含んで進航し、敵の砲臺間近に来て權兵衛さんが「打テッ」と號令したんだ。さうすると全艦隊の砲門が一時に開けて、ドドド……ンと打ち出した。それが皆んな僕に命中したから、びつくりしたよ。まあよかつたねー君『僕』僕にも其の命中した時の響は聞えたよ』益富』そうか、君にも聞えたか、それでも君には當らないでよかつたね』思へば二十餘年前の事である。

六 腹這ひして見た蜃氣樓

賀川 豊彦

白金の第一年は、私には寂しい寂しい一年であつた。私は人よりも一年早く中學校を卒業して、明治學院に這入つたのは明治三十八年の四月であつた。トルストイに感化せられた無抵抗主義の青年は、その頃また異性に對する熱愛を感じ初めてゐた。徳島の宣教師から洗禮を受けて、その宣教師に可愛がられた關係で、英語は少し出來た方であつたのと、大のおませで學校の勉強が詰らなくて仕方が無く、毎日／＼哲學書を読んでゐた私は、随分生意氣だつたものだから、人に殴られたことは屢々であつた。然し私は、明治學院を天國の次に聖い處だと思つてゐたに拘らず、不良少年も居れば、かつばらひを専門にする者も居る様な始末で、私はヘボン館の同室のUといふ中等科三年

の不良少年から、刀でちどされた事は二度や二度ではなかつた。鶏泥棒の上手な丑や反基督精神で固つてゐた吉田信乃公（某大官の胤狀で、キリスト教の洗禮を受けてから、私と最も親しい友人の一人になつたが不幸にして彼は若くして死んでしまつた。生粹の江戸の子だつたものだから、みんなが信乃公信乃公と呼び捨てにした）などは、校庭で頗る勢力を持つてゐて、キリスト教の勢力は實に萎微として振はざる状態にあつた。それで私はどん／＼それ等の人達にぶつ／＼かつて行つた。私は小さいマルチン、ルーテルを氣取つて、あらゆる場所でそれ等の人達を罵つた。そして私は毆られた、そして私は泣いた。

二年目からは非常に愉快であつた。ヘボン館からハリス館に引越した。私は最初、今高松の教會の牧師をしてゐる高田銀造君と一緒の部屋にゐた。私より年も上だし、社界の事をいろ／＼知つてゐるので、私を弟の様に可愛がつて呉れた。隣の部屋に加藤一夫君が居た。その當時加藤君は筒袖の羽織を着て、中田重治氏の小川町の教會に繁々通ふてゐた。そして手を叩いてリヴィゲル唱歌を生懸命に歌つて居た。私達は二階に住んでゐたが、階下には今明治學院神學部の教授をしてゐる村田四郎君等が住んでゐた。村田君は大食俱樂部の會長としていつもこ／＼してゐた。その中私は亦部屋を變つたが、暫くの間今慶應大學の英文學の教授をしてゐる佐々木邦君の隣に居た。其處で

は一晩、島崎藤村先生や馬場孤蝶先生が來られて、吾々少數の者と座談會を開いて呉れたこともあった。その後、今明治學院の文學部の責任者である中山昌樹兄が佐々木邦君の居つた部屋に這入つて來た。中山と私はパリス館の二階から一緒に落ちたりなどして命拾ひしたことなどもあつた。若しもパリス館の傍に背の低い杉の木が無かつたならば、私が中山かのどちらかは、今頃地上には居なかつたであらう。

私は餘り學校の授業にも出ないで、ライブラリーから哲學の書物を借りて來て一生懸命に讀み續けた。その當時、今神戸大丸の支店長をして居られる富尾氏がライブラリアンであつたものだから自由に書棚の間に入れて貰つて、カントやヘーゲルの英譯を一生懸命に讀んだ。その中でも今猶忘れられないのは、十八の春讀んだバウンの「メタフィジックス」であつた。私はあの書物程私に感化を與へて呉れた物を知らない。

その後、米國カリフォルニアのロスアンゼルスへ行つた時に、南加州大學の塔にウエスレーと並べて、このバウン教授の塑像が立つてゐたのを見て、明治學院の昔を想ひ出して帽子を取つてお辭儀をしたことであつた。バウンの有神論、人格主義などはメタフィジックスに比べて遙かに書き振りが徹底してゐない様に思ふた。「人格主義」は「人格的宇宙觀として」の日本譯がある。バウンの

影響で私はロツチエを一生懸命に讀んだ。ロツチエの物で私は讀み通してゐないものは、ミクロコスモスだけであらうと思ふ。私は明治學院の後の一年程よく勉強したのは、プリンストンの二年間に持つた外、私の半生の中に他に持たなかつた。然し若かつただけに、プリンストンで讀んだよりか頭の中によく入つてゐる。ラッドの宗教哲學を讀み通したのも十八の時であつた。ヘブディングの宗教哲學、ケヤードの宗教哲學、フリントの歴史哲學、ヘーゲルの歴史哲學等を讀んだのはこの年であつた。私は毎朝四時から起きて、朝飯を食はないで午前十一時迄讀み通すことが常であつた。漢文の武市先生は實に良い人であつた。孟子を教へてくれた。然し書物で發表して居られる孟子言行録は實に立派なものであると思つたが、講義は出ても詰らなかつたので餘り出なかつた。そして宗教哲學と歴史哲學に力を注いだ。それと云ふのも十一歳の時に禪寺に行つて孟子の素讀を了つてゐたから、もう一度孟子を讀まされるのは随分苦しかつたからであつた。漢文の先生は教室に出なければ一時間に對して三點づゝマイナスにすると云はれた。學年末には私の漢文の點數はマイナス九點であつた。で私は漢文で落第したが、平均點數がよかつたので、お情で一等尻から及第さして貰つた。スイントンの英文學史をやらされた時も私はM教授から教室退去命令を喰つた。その日は朝飯を食はずに午前四時頃から、ラッドの宗教哲學を讀み耽つてゐたが、餘り教室に出ないと

先生に濟まないと思つて、顔を見せる爲めに教室へ出た。そしてスキントンの英文學史を持たないでラッドの宗教哲學を讀み續けた。

『賀川さん何を讀んでゐますか』

とM教授が訊かれた。それで私は書物を見せた。すると皆川教授は『英文學史を讀まないのなら出ていらつしやい』と教室の扉を開かれた。それで私は靜かに校庭に出て、ラッドの宗教哲學を讀み續けた。

私はいつでも自分の經驗から思ふことであるが、私の様な變態な者には今日の様な機械的な教授法は全く精精虐殺法であると思ふ。その前方に私はテイヌの英文學史やシュレーゲルの歴史哲學を讀んでゐたから、文學史が何を意味してゐるかをよく知つてゐた。それでも先生が本氣になつて英文學の本質を教へて呉れるなら、私も少し本氣になつたであらうが、毎日々々リーディングと譯讀の爲に出席するのであれば私は實に詰らないと思つた。その意味から考へて私は小原國芳氏などがやつて居られる成城學園のメソッド等は、私がいつも賛成したい教育法である。若し明治學院にあの當時あの様な立派な圖書館が無かつたならば、私は明治學院を早く棄てゝゐたかも知れない。實に私は一生を支配する程の智的満足を、明治學院の圖書室から獲得し得たのであつた。

あの當時私の組は六七人の極小さい組であつたが、私は實に贅澤な善い學校だと思つた。その日明治學院の高等學部も人數を増して今日では昔の様な自由はない様だが、せめては教育法なりとも昔の自由を残して貰ひたいものだと思ふ。私は明治學院を去つて後、神戸神學校に行つたのであつたが、明治學院で一緒に居つた友人は一生を貫いて私の最も親しい友人になつた。

其頃の白金は今よりも少し美しかつた。春には櫻が校門の傍に咲き亂れ、ハリス館の二階からは隣の大きな廣い庭が、自分の庭の様に見えた。校庭から石器時代の土器が出るので、雨降りの揚句はよくその土器を採し廻つた。ヘボン館の第五階はいつも我々の祈禱會の催される所であつた。其處から品川灣は一眸の下に收められた。何とも云へない眺めを恣にすることが出來た。時々校庭に蜃氣樓が立つので腹這ひしてよく逆倒に映る美しいミレーヂを眺めた。徳富蘆花の「自然と人生」の中に書いてある雜木林の美しさに誘惑せられて、目黒の方面に毎日必ず散歩に出掛けた。その頃の目黒はまだ野趣に溢れて居て何とも云へない程の美しさが残つてゐた。よく中山と二人で池上の本門寺邊り迄歩いたことがあつた。その當時神學豫科でキリスト傳を教授せられた松永文雄先生が目黒に住んで居られたから、私はよく其處へ通ふて行つた。そしていつも先生の住んで居られた藁小屋が美しいと思つて歸つて來た。然しもう今日ではあの邊りは全く大きな町になつて仕

舞つて、見る影もない有様になつた。そして明治學院も昔の様な詩的な處が無くなつた。昔の建築は随分堂々たるものであつたが、今はへボン館の火事やサンダムホールの火事や、校門の傍にあつたチャペルの無くなつた爲に、私の居つた頃の建物は今總理の居られる圖書館のあるホールだけになつて仕舞つた。

然し建築物等は考へように依つてどうでもよいものである。どうぞ希くば白金に神につける自由と敬虔が永遠に續く様に祈りたいものである。(一九二七、七、二二)

七 幼年黨のおもひで

三 谷 隆 正

私のところに「自治之星」第二卷第十號といふのが一冊秘藏されてある。半紙三十六七枚の回覽雜誌であつて、十數名の者が執筆して約二十篇の美文珍文を成し、各々思ふがまゝに書きなぐつたものである。凡て日本紙に毛筆を以つて誌してあるところ、どうしても大正昭和の産物ではない。巻尾に十月三十日と誌してあるが、明治何年の十月三十日か確とはわからない。然し恐らくは明治三十八年の秋ではないかと思ふ。表紙には菊の繪が畫いてあつて、幼年黨發行と銘打つてある。こ

の幼年黨といふのが明治三十七八年の頃白金の里にやんちやの名を恣にした結社の名であつて、自治之星は幼年黨の同人雜誌なのである。

幼年黨の綱領ともいふべきものは簡単な可愛らしいものであつた。曰く、少年は少年らしく無邪氣なるべし。曰く、白金の傳統を守りて自由自治なるべし。それで極力大人じみた娛樂を排斥し、鬼ごつこだの、眼かくしだの、たわいない遊戯を大に獎勵した。薄暮ベースボールの球が見えなくなる、幼年黨員大勢芝生の上に集まつて、「こをとろこつとろ」をやつてキャツ／＼と騒ぎ廻つては得意になつて居つたものである。つまり當時の學院に於ける最も子供つぼき子供連が、自ら任じ且特みてその子供つぼさを發揮し且誇示して、白金狹しと横行濶歩した次第なのである。その爲め迷惑を感じた人々もあつたかも知れぬが、同人一同は暢び放題に暢び／＼と愉快極まる交游を共にしたのであつた。おもへばなつかしさ限りなき幼年黨の昔である。わたくし達はほんたうに幸福であつた。

その頃この幼年黨の向を張つて、野球に庭球に何事に限らず相拮抗し、茶氣満々たる兄貴としてわれ／＼幼年黨員の敵手になつてくれたものが紳士俱樂部であつた。都留仙次君、佐々木邦君などが其中堅であつたと思ふ。日高善一君も有力なる俱樂部員であつたやうであるが、好漢惜むらくは

口ばかり強さうな事を言つて、バットやボールの實戦に當つては、てんで意氣地がないものであつた。元來紳士俱樂部は高等學部乃至神學部の親爺連から成るものであつて、概して我々に比べれば數年の年長者である。而も年長者であるにも拘らず、大抵の腕くらべに幼年黨に敗かされてゐた。故に紳士俱樂部は幼年黨の爲め親愛なる敵手ではあつた。然し不幸にして好敵手ではなかつた。紳士俱樂部員諸君！以つて奈何となす。

さて前に言つた「自治之星」第二卷第十號を抜いて讀んで見る。卷頭にあるのが「秋の別れ」といふ美文、關川重義君の作で字のうまい事黨第一であつた。その次にTM生の「初秋」といふのがあるが、このTM生は私の事ではないらしい。多分三澤鷹雄君の筆であらう。私も當時よく書いたが、ある時は快樂論をものしていさゝか物議をかました事さへあるが、どうも此第十號には私は書いてゐないらしい。吉田信乃公のものも載つて居ない。無名氏の「歸省日記一片」は土居憲郎君の作に相異ない。夏休み中北海道に歸省して、毎日川で泳いだり、野であばれたりして、楽しく暮したといふ事を、極めて卒直に無邪氣に、たど／＼しく簡短な筆致で綴つた文章である。多分この翌年の夏であつたらう、土居君はさうした楽しい夏休み中の嬉々たる游泳中に、あへなく河底にその元氣な肉體を沈めて終つた。その時土居君は多分十五六の少年であつたらう。丸々と肥つた色白の

短軀で、のんびりと無邪氣な元氣者であつた。もう二十年餘も前の事である。

此外にまだもうひとつ故人の筆になるものがある。HM生「希臘之啓學博士」とあるのがそれである。HM生といふのは大正十二年の大地震に横濱で震死した村岡齊君のことである。啓學博士といふのは何の事であるのか、ソフキストのことでもあるのか、文章を讀んでも終に分らない。村岡君はその赤味を帯びて褐色な豊頬の上に、鼻から笑くぼのあたりへかけて點々たるそばかすの持主であつた。その雀斑の具合があんずの表皮に似てゐるといふので、通稱をあんずと呼ばれてゐた。

HM生の筆になる一篇は此あんずについての傳奇物語である。もとはギリシヤのアテネの都にあつたひともの杏樹がどうかしたといふ戯文である。村岡君を親しく知る私にとつては、いかにも村岡君らしい香のこもる戯文である。過ぐる年同君の震死を知つた時、幼かりし頃の同君の此戯筆を御遺族に御送りしようかと考へた事もあつたが、ついそのまゝに機を逸して今日に到つた。文章に添へて同君の筆になるさし繪もついてゐる。人の顔を描いて其頬を赤く彩色して、ぼち／＼とそばかすを示して、あんずのあんずたる所を寫す事を忘れないである。村岡君といひ土居君といひ、揃ひも揃つて快活な元氣な、さうして愛すべき少年達であつたが。今や即ち亡しである。

かうやつて泌々と亡き人の幼かりし私の事など想ひ起しつゝ、「自治之星」の頁をくつて居る間に

私はひとつ素晴らしい文章を見つけ出した。筆者は信生とあるが、誰の雅號か分らない。吉田信乃公でない事はその筆跡が證明するし、文章のたちもちがふ。またこの文章が素晴らしいといふのは何も措辭がうまいとか、思想が卓抜であるとかいふ意味ではない。然しいかにも正直ありのまゝで簡單素朴野趣満々である。學院の創立五十年を記念するに當り、二十年前のヘボン館内に於ける寄宿舎生活がいかなるものであつたかを回想する事は、また學院五十年の歴史的回顧に於ける有意義なる一節でなければならぬ。さういふ回顧のうち、二十年前のヘボン館の高塔を想ひ浮べる時、塔の上から眺めた品海の月も思ひ出される。暗き夜を背景に燈あかさ窓の美しき隊列を造つてそゝり立つた建物の嚴かな姿も思ひ出される。朝な夕なな鐘の音、食堂のざわめき、運動場の活躍、室内の起居、廊下の往來、或ひは音、或ひは色、或ひは感觸、ありとあらゆる種類の想ひ出がとめどもない。さうした氣持でこの信生の文章を讀んで見ると、此文章は當時の寄宿舎生活の或る一面を寫して、すばらしく生彩鮮々たるものがある。題して「僕は毎日如何して居るか」といふ。文意を害ふやうな誤字誤訓を訂正するほか、讀み易いやうに句讀點を加へるに止めて、原文のまゝ筆者の無邪氣なる告白を左に再録しよう。下手な字で半紙二枚に毛筆もて書さつゝつたものである。二十年前にはこのやうなやんちや坊子でも、ちやんと毛筆と墨とで書いたのである。文中穴ぐらとある

のはへボン館地下室のこと、稻田君の室とあるのは舎内の喫茶室。

「點檢の鐘はちりん／＼、起きやうかな、も少し寝たいなア。室の人が「こら起きんか」「もう五分寝てから」「ナニ又いつもの如く五分か、馬鹿にしてやがらあ」。一人のやつが「こら今日は君の當番だぞ。早く起きてはいてくれ給へ」「も少し、も二分ばかりまつてくれたまへ」。頗る善い氣持で寝てると十五分の鐘。なにもう三分。此度は五分前の鐘。やあとはね起きて直ぐに洋服を着、着物をふとんの上へおつぼりだしておいて、面を洗つて室へ歸る。學校は始まる。今度は時間表を見る。算國禮歴、そら歴史の本がないぞ。ひきだしをあげて左になし右になし。よし穴ぐらに昨日わすれて來た。譯讀も穴ぐらにある。植物もあつた。それから靴をはいた。學校へ出て行く。算術だ雜誌帳わすれて來た。「あい、紙一枚くれないか」一枚もらつていたづら書をする。植物の時間になる。ねむいねむい。一ばん後に行つてこしかけて、先生近眼だから後にねむつて居る。今度は晝だな。靴のひもをほどいて、鐘のなるを待ちかねてゐて、鐘がなると一番先に食堂へ走りこみ、大聲でまかなひ。ちゆう／＼食つて終へば、本を穴ぐらにほうつて置いてキャッチボールをやる。鐘が鳴ると學校へ出て、終ると服をテニスネットのほうへひつかけておいて、夜食まで遊んでゐる。それからひとの手ぬぐひを借りて風呂へ行つて、室へ歸つて譯讀を見ようと思ふと又穴ぐら。穴ぐら

から取つて來て書いてる中に何か食ひたくなる。稻田君の室へ行つてパンをくれといふと、自修時間には賣らんといふ。なにどうか一つばかりくれ給へといつて一つ取つた。食ふ。また一つまた一つとう／＼あんばはん七つにカステラ三つと。そのそばにべらぼうに大きく、借金はちことわりと書いてある。十一錢つけておいてくれたまへ。室にかへる。寝たくなる、ねる。朝になると前の同じ服がない。テニスのぼうを見る。かゝつて居らん。小使室へ行く。無い。稻田君の室に行く。あつたいきなり着こんで學校へ出る。その前に舎監にとこたゝめといつておこられる。まるめて知らん面だ。考へれば今日は十月三十一日だ。借金六圓だ。こまつた。家からは小使五圓しか送つて來ん。一圓たらないといふわけだ。しかたない、色々ごまかして十七圓送つてもらふと、又ルビ(註目、しるこ屋のこと)にてんどんでなくなると又借金だ。實にのんき／＼。諸君僕の如き馬鹿な者にならぬ様、各々注意せん事を願ふ」

以上信生の手記する所である。讀者は恐らく讀過の間に一度ならず長閑な微笑を禁じ得なかつたであらう。私は前に、何も措辭の妙に於いて特にすぐれてゐるといふわけはないと斷つたが、然しまた或意味に於いては、信生の文章は措辭の妙を極めてゐるとも言はれ得る。親愛なる信生よ、此位ほめられたらひとつ名のつて出たまはぬか。さうして五十年記念の祝意をもこめて大におごり

たまはぬか。殊に我らそのかみの幼年黨員の爲めにおごりたまへ。

が然し、こゝにひとつ大方の讀者に對して、幼年黨の名譽の爲めに一言お斷りして置かなければならぬ事がある。それは幼年黨員といへども必ずしも常に信生の如くにづぼらではなかつたといふ事である。斯く申す小生といへども、これで中々善良な生徒であつた。然し凡ての幼年黨員が、暗くさへなければ、雨で運動場が使へないのでさへなければ、さうして學校があるのでさへなければ常に必ず信生と同じ様に運動場に出て勝手な遊びをやつてあばれて居つた。日が暮れるまでは運動場でくらすといふのは、幼年黨の黨則であつた。であるから當時日曜日といふと運動場で騒ぐ事を禁ぜられ、安息日を靜肅に聖守すべく命ぜられて居つたには、黨員一同大に弱つた次第であつた。然し幸な事には、當時は白金から目黒大崎にかけて、今日のやうな人家軒を列ぶる住宅區はまだなく、春はれんげ草咲きみだれ、秋は目黒川のほとりにすゝき穂に出て、森あり野あり流れあり、眺むるによく、ねころぶによく、馳驅するによく、少年をして心ゆくばかり美しき大自然と相親ましむるに適して居つた。故に幼年黨員は日曜の午後毎に目黒は祐天寺の森のあたりに出かけ、また時には遠く丸子の渡じまでも歩いた事であつた。その當時の目黒から玉川べりまでの漫歩が、いかに美しき野と森とをのみ見る漫歩であつたか。電車なく文化住宅なきその頃に、自働車に脅さるゝ

怖れ絶對になくして、あの邊を悠々と二列横隊ぐらゐでのさばり歩き得た私たちは、ほんたうに幸福であつたと思ふ。さういふ漫步が、また白金臺の自然に近くして浮世に遠き靜かな生活をれ自身が、へボン館の高塔から眺めた夕空の美しさが、どんなに美しい訓へを我ら少年の心に教へたことか。どんなに我らひとりぐらゐが、ちいさき詩人たるべく刺戟されたことか。時勢の要求とはいへ、なつかしい目黒界隈の美しかりし自然が、片つぱしから害はれて行くのを見る時、私は二重三重の意味で惜しく思はざるを得ない。秋の午後など漫步の後の空腹を充すべく、森かげの草の上に圓座をつくつて、そのまん中に町はづれで求めた焼芋の包をひろげた時、どんなにおいしい香りが少年の健康な胃神經を刺戟した事か。あの森もあの草原もいまはもう恐らくはあるまい。

かうして自然と親しみ、また野球とテニスとに親しみ、文學會や幼年黨討論會で幼稚な議論を懸念に相たゝかはし、「自治之星」に書き、而して又大に稻田君の室でアンパンを食ひ、又りんごやのちやぢが持つてくるりんごを食ひ、コンパをしては焼芋をぱくつき、餅菓子や第一公式の御馳走と考へつゝ暮したのが、幼年黨員の暮しである。づぼらをやつた所で、精々寝すぎたり、アンパンを好み過ぎたりした位のものである、日が暮れるまで戶外運動のしつづけであるから腹は減るのである。三度の食事だけでは足りないのである。信生若し健在ならば、自分の子供にアンパンを惜み給

よるれ。

最後に「自治之星」第二卷第十號からもひとつ載録する事を許していただき度い。それは卷末にある黨の會計報告である。原文左の如し。合計勘定に七錢の誤算ある所殊に御愛嬌である。

旗購入費

代金一圓四十錢(内二十錢負ける染の爲め)

旗購入に付寄附諸君連名

一金	十	錢	三	谷	君	一金	二十	錢	村	岡	君
一金	七	錢	關	川	君	一金	十七	錢	三	澤	君
一金	五	錢	鈴	木	君	一金	八	錢	石	本	君
一金	五	錢	鈴	木	君	一金	十七	錢	西	村	君
一金	十三	錢	井	深	君	一金	二十	錢	土	居	君
一金	五	錢	早	川	君	一金	十	錢	宮	田	君
一金	十	錢	峰	村	氏	一金	七	錢	渡	邊	君

計一圓六十二錢(内旗代を引く殘金二十二錢)

十月分會費 六十錢(殘金)

合計殘金 八十二錢也

以上

會計部

右のうち旗とあるのは、たしか紫地のメリンスに、何だつたかおぼえないが黨の記號を染めぬいたものであつた。黨旗まで造つたのであるから大したものである。その旗を何處へどうして終つたか、私は知らない。然しその旗の爲め、我々一同が當時の相場でアンバン十個乃至四十個分づゝを寄進したわけである。内二十錢負ける云々は意味不明。峯村だけ君でなしに氏になつてゐるのは、幼年黨員たるべく餘りに軀幹長大なりし彼に敬意を表したのかも知れない。たしか峯村は客員待遇であつたと思ふ。

白金の昔を回想してゐたら自然に幼年黨の事が想ひ出された。幼年黨の事を想ひ出して筆を馳せて居る間に、おのづと我田引水で幼年黨の提灯を持つやうになつて終つた。ついで的事にとら／＼旗まで持ち出して終つた。たとひお耳のいい方、眼に餘ると思召す方があらうとも、五十年の其祝ひに免じ、且つは同學のよしみに免じて、幼年黨時代の昔同様、御聽きのがし御見のがしのほどをお願ひ上げます。了

八 私の學院時代

郷司 慥爾

私は明治卅九年の一月學院普通學部の四年に編入試験をうけて入つた。入學試験の成績が悪く、それに前の學校(東山學院)でストライキをやつたといふので學校では警戒したさうであるが幸に先輩の都留益富矢島氏らがある間を斡旋してくれたのでやつと入れて貰つた。

學院に来て吾々九州の粗朴な官僚式生活に慣れたものゝ第一に驚いたのは學生が上下級を通じて對等であることであつた。吾々大先輩を普通部一二年のまだ嘴の黄色いのが窓の下から金切り聲で「矢島君！」などゝ呼ぶので、一時は大いに憤慨して、やつちまはうかと思つたがそこは傷持つ身のおつと我慢した。

蠻カラ黨 編入された四〇名を加へて五年は八〇名になつた。此頃からクラスが大きくなり出して學院の小クラス教育の特徴が追々失はれてきた。尤も高等部はまだ一クラス十名内外であつた。此の八〇名の中にハイカラ組とバンカラ組とが出来て私などは後の部類で、古洋服に兵隊靴でガタ／＼教場に入るの遅刻の時などは河西先生の眉がピリツとしたものだ。その同類が二十名にもな

つて、陸軍型の高い帽、細い折目正しいズボン、編上げ靴といふ當時のモダンボーイに挑戦して九州男兒の荒ぼい威赫をしてゐた。處がそのパンカラの私が高等部一年の時、頭髮を分けて黒のつめ襟で長崎に歸つたら、元の學校の小使さんが教會の祈禱會で「一人の青年が墮落しないやうに」と祈つたには參りました。

文學會 其頃私達の組には雄辯術の時間があつたが尾崎(安)君や久保田(常)君などがアントニーの演説を暗記して來て驚かしたものだ。Nといふ今裁判官になつてゐる男が松井先生の難句集の第一頁の「イフ・ユー・カム・アクロス・ア・ザ・ス……」を順番の來る毎に一ケ年間繰り返し通したのは確かに勇敢だつた。當時神學部にはまた随分變つたのが居た。「高帽子」「鬼」「雷」と綽名のついたのが居て別世界の人のやうに思はれた。高等學部の賀川君などは文學會で「カントが」とか「シェリングが」など、千高い聲で言つて少年達を驚かした。三谷隆正、吉田信乃公などは英語演説や英詩朗讀をやり、井深の健ちゃん「諸君！僕達は」と齒切れのよい聲で演説した。幼年黨といつて名前だけは一揆らしい「少年團」があつて富尾都留兩氏が代々團長格でこまつちやくれた少年達を澤山よくも集めて居た。

棒振り 先年ラシデス夫人を見送つた歸り横濱伊勢崎町の鮎大君の支那料理店によつた。鮎大君

が「ア、あなたはあの棒を振つた方でせう」と言つて歡待してくれた。私が棒振りと呼ばれたのは高等部の二年頃に藤村氏の校歌の譜が出来て、初めて音樂學校から幾尾といふ人が来て練習して呉れ、卒業式に合唱するやうになつたが、當日急に先生が来てくれぬところからシャニムニ私がその棒振り役を押しつけられたのであつた。ち蔭で私でも音樂だけは解るらしいとの評を得た。しかし五六百人の全校の學生を棒一本で指揮してうまく行つた時は流石に悪い氣はしなかつたね。その頃から學院にも合唱團らしいものが出来て時には他人にも聽いて貰へるやうなのが出来た。ミスバウランデスが一生懸命に練習してくれたものだ。

鐘かラツバか 高等部二年の頃私は雜誌部の委員に選ばれた。自らは發送係りと稱して一度も執筆投稿はしなかつた。部長が宮地先生、馬場西村(昇)兩君も委員でよく書いた。三月の頃であつたか、日露戰爭直後で軍國主義の氣風が盛んであつたから學院も鐘をやめてラツバにしようといふ議があるやと誰かを探り出して来て「鐘と白金精神とは不可分だ白金の丘には軍國主義を入れてはならぬ」など、激越な言辭が叫ばれそめた。當局に質して見ると明言はしないが、どうやら其方針らしい。もう此上はストライキなど、氣の早い連中は寄り寄り話した。私とてもラツバには賛成が出来ぬ。それとて連中と策動した譯ではないが、學院のため、平和のために當局の意を翻すに如かず

と考へた。そこで私は嘗て執つたことのない筆を走らせて「鐘かラツバか」と題し白金精神の死活問題として當局の反省を促さうとした。その原稿を知らぬ顔で先生に届けた。雜誌部委員の投稿は取捨選擇の圏外にあるとの内規上の権利が私の力強い頼みであつた。果して當局は困つて私を呼んで威赫歎願百方稿の撤回を迫つたが、私も喇叭を採用せずと明言せられぬ限り投稿の権利を主張すると應酬した。その文章は大體原文のまゝ「白金學報」に載つた。學年が變つて四月に皆が學院に歸つて來た時、白金の丘にはやはり鐘が鳴り渡つてゐるのでした。

リヴィヴルと渡邊善太氏 その頃神學部や高等學部にバツクストン氏の感化が及んで聲を震はせて祈つたり、髪を長々としたり、眉の上に皺をよせて深刻な顔をしてゐる人々があつた。沖野岩三郎加藤一夫山野虎市などがさうであつた。後にさういふ人々がユニテリアンや宿命論や虛無主義に移つて行つて結局基督教の本流から遠ざかつたのをなんだか意味深く感じられる。その熱のやゝ褪めかゝつた頃私達のクラスに赤の短衣角刈頭に救世軍の帽を被つた脊の高い男が入學した。獨逸協會を出てから暫く彷徨の後海老名氏のもとで洗禮をうけ、一度佛教に入り、また引返して今度は救世軍に投じ山室氏に認められて京橋の小隊で軍曹を勤めてゐたが、もうその時分にはホーリネスに傾いてゐた。此の男を渡邊善太といふ。中々の才人で語學は群を抜いて居り、その上雄辯で文學會

では中々鳴らした。井深、バラ、ワイコフ、イムブリー四教授の廿五年勤績祝賀記念文學會の機には司會者として英和兩語でてきばぎやつて來會者を驚かした。中村獅子雄君が「進化論と何とか」といふ英語演説をやつて大向をうならせたのも亦その時である。その渡邊善太氏が、もうその頃大分冷えてゐたリヴィゲルを煽つたので又もや燃え出した。然し私より上級の村田四郎瀬川四郎中山昌樹加藤一夫などは學究の方面に注意をむけてゐたから影響はなかつた。處が私の組のSは渡邊の感化で急激な回心があり、二人して私を攻めつけた。私は日本基督教會傳統的信仰に據つて、その運動を非難した。すると二人は私の後から「前に惡魔が走つてゐる」と云つたりした。そのうちに渡邊はとうとうホーリネスの聖書學院に去り、Sも神戸に行つた。數年の後のある夏渡邊は渡米してパークレーの神學校に學んでゐる頃、私も蘇獨瑞の學校を経ての歸途、渡邊夫婦の下宿を突然訪問した。昔のまゝのホーリネスではあるまいとは豫想してゐたが、彼れの自由主義にはまた一驚を失した。「君は僕達よりもズット自由になつたね信仰を失はぬやうにしたまへ」と言つて別れた。歸國後彼はホークネスの中田監督と分れ、基督教會の神學校で教へて居たが又轉じて同志社に行き、三年程して東京に舞戻り聖學院青山學院、東京女子大學で教へて居たが、大正十四年家財を悉皆賣拂つて細君を伴れて獨逸に行つた。どうなつて歸るだらう確かに興味はある。

信乃公の悲哀

以上のやうに、明治學院が再興の機に遭遇して日々に隆盛になつてゆく時に、表面には快活そのものゝやうな微笑をたゝえながらも、内心に寂しい心持ちを抱いて、彼れの言葉を以て云へば「荒れ果てたる」校庭をへボン館の窓から眺めてゐる男があつた。それは吉田信乃三郎氏である。

熊野幹事が十年の遺恨を清したやうな欣びを満面に湛へて「わが普通部は中學校としての凡ゆる特権を回收した」と講壇の上から並居る生徒に報告する時に、この「信乃公」だけは、皆の者と一緒に歡びえなかつた。「もう實力さへあればいゝのだ學院そのものが高等専門の學校へ諸君を送るだけの資格は確得した」と誇らかにいふ聲をきく時にも彼れは何となく悲しかつた。その不可思議な哀愁は彼れの述懐そのものに聞かう。

「荒れ果てたる今里よ、過ぎし昔をねざめの床に思ひ出だし諸氏に別れて後の白金を今更に思ひ見れば多情の人の子涙に咽び申候小生晚翠氏が左の句白金を歌ひしに非ずやと疑ひし事も幾度に御座候。

烟は沈み水咽ぶ

五城樓下の夕まぐれ

高きに登り佇めば

遠く飛雷の響きあり

心の空に吹き通ふ

風の恨に誘はれて

色こそ悼め夕雲の

嶺に歸るもなつかしや

友高樓のをばしまたに

別れの秋重き時

露荒涼の城あとに

懐古の思しげき時

聖者静けき窓の戸に

無家の空をあふぐ時

大空高く聲あけて

今はと叫ぶ暮の鐘

信乃公の悲哀

五層樓に佇み遠く飛雷の響き、近く瑞聖寺の鐘に夕雲の秩父の嶺に歸るもなつかしく藤村時代の學院も斯く變りしかと思へば永なへに變らぬ山の色に恨みを持ち申候。清新の氣溢れたる白金も何時かは消えて唯人の心に訪ひ來るは淋しくも荒れ果てたる今里の枯れたる人の思のみにて樂しき春の訪づるゝ事もなしと存じ候。此處白金に秋風吹けば何れ浮世に洩れず物質的精神に溺ちたる生命なき木の葉の舞ひ込んで生命の泉枯れ果てて露荒涼の其原に懐古の思ひ繁く過ぎし昔を今更に返す由も御座なく候へども、昔の偲ぶ草此雨に幼年黨復活の道を構じ同志と共に再び設立致したる次第にて（舊幼年黨創立時代を云ふ明治三十三年）當時十三歳の小生此の正月を以て十八歳の春を迎へ歲月の早きに驚き申候。大分大人らしく候共當年の貞ちゃん（横田貞次氏）同様朝夕は向鉢巻にて午後はベースボールにカーキシャツ白字のM、後ろ鉢巻にて暴れん坊の信乃には御座候。…何を云ふにも（當今の者どもは）文學會衰亡時代に入學致したる者に候へば小生等の如く文學會の感化を少しもうけず、却て之を厭ふ様なる次第にて何者がなす業か知らねど現在の明治學院に小生大不平を有し候。」

と明治三十八年二月一日の手記にある。無論この一文には彼れ一流の諧謔がないではないが全面に見える哀愁はどうしても否むわけには行かない。そしてもし彼れのこの哀愁をたゞ一片の低級無責任なセンチメンタリズムであると一笑に付してしまふものがあつたとすれば、それは餘りに同情と理解とに缺けた仕ぐさであると思ふ。

あの快男子の、江戸ツ子の信乃公が何をかうまで悲しんだのか。それは彼れの學院に對する憧憬が日一日と裏切られてゆくのをまざまざと見せつけられたからである。信乃公は明治三十年に熊野幹事の家に託せられた。當時の某大官華族の落胤でその當時知名の講談師松林伯知の子となつてゐた。伯知氏は全く實子の思ひを傾けて愛してゐた。熊野幹事もまた我子同然に可愛がつて岡見氏の頌榮小學校へ通はせ、後明治學院普通部へ入學させた。信乃公がヘボン館に移されたのはその頃からであらう。信乃公は頭腦は敏で、竹を割つたやうな氣質で、嫌味や拵さの寸毫もない生粹の江戸ツ子肌の男であつた。それでゐて眞善美に對する憧憬には可成り深いものがあつた。無論その眞善美とても神學者や哲學者のいふそれらではなく、信乃公一流の直觀からくるものであ

るが。彼れはその詩人的な憧れの眼で白金臺を見て來たが、之迄の數渺い學生達が互ひに陸み親しんでゐる様子、ワイコフ、ランヂス、井深、熊野其の他の凡ての諸教授が、一人一人の學生を大切に勞つてゐる様子、それにもまして學院の建物や記念樹に残つてゐる學院初代（藤村の學びし頃）の追憶や傳説、是等は朝夕信乃公の心情を豊かに培ふものであつた。

「明治の大詩人藤村時代の學院は如何なりしやとは小生がチャペルに或は散歩に或は約念樹に眼をとめし時の感慨に御座候」處が明治三十六年の頃から學院の様子は次第に一變してきた。

「秀麗なる白金は汚されて高等學校に行く土臺、他校にゆく一寸の足場となる。實際この白金を母として戀ひ慕ふものなきのみならず、卒業生の多くも左様と存じ候。卒業生の諸君が母校に冷淡なるは小生の心外に堪えざる次第に有之候」

信乃公は學院を眞實に愛してゐた。上記のやうな種々な道徳や連想や、目に見る師弟の情の美しさから愛してゐた。やがてそれらの幻影は破られて學院は官公立の諸學校と左程の徑庭もない姿に平凡化されてゆくのを見たが、彼れはやはり運命づけられたものやうに愛せざるをえなかつた。その愛が信乃公に哀愁の思ひを抱かせた。

二十二歳を一期に世を去つた薄命の信乃公、數寄の運命に生きながら、あらぬ巷ではなく、學院に成長して聖堂に額づいては祈りの聲をきき、聖句を耳にした信乃公、氏の抱いたその哀愁は多勢のものに眞である。學院を愛するの限り誰が學院の特徴の失はれてゆくのを歎ばう。學院の五十年記念の日は到來しな。信乃公去つて十二年、學院は長足の進歩を遂げた。そして多くの語らざる信乃公が哀愁を抱いてゐる。特權回收のために全力を竭された井深先生も、信乃公の云ふ「佐賀のあばれん坊主水齋先生も」河西先生も「鬚をやし寄宿舎で威張つて致方のなかつた富尾君」も「頭から叱りとばされるには閉口の熊野のおやち」も屹度天界でさうであるに違ひない。馬場も郷司も村田も都留も三谷も皆さうである、吾々は信乃公の哀愁を抱いてゐるのが本然の姿である、何となれば學院を愛すべく運命づけられてゐるから。

吉田信乃三郎氏逝く 明治四十二年九月十三日學院の名物男吉田信乃三郎氏は永眠した。この春性

來冒險好きの信乃三郎氏は越中島の水産講習所の練習船雲鷹丸に便乗して近海漁獵に出かけてゐた。それは彼れの胸の病氣を癒さうといふ心算であつたが、過激な労働はます／＼病症を募らせたのでやむなく宮城縣鹽釜で上陸、仙臺の病院で療養して居たが遂に前記の時日に年齢二十二で同病院に幽明境を異にしてしまつた。

十月一日幼年黨と故人の友人達が相集つてサンダム館講堂で追悼會が催された。(來會者八十名)

一 聖書朗讀祈禱

村田 四郎

一 開會の辭

馬場 久成

一 演 說

藤本保巳、村田四郎、八太舟三、瀨川四郎、三谷隆正、石本貫一、尾崎安二郎

關川重義、富尾先生、熊野幹事

一 遺稿朗讀

阿竹惣太郎

一 挨拶

巖父 松林 伯知

九 學院四教授勤續二十五年祝賀會

明治四十年三月二日神田青年會館で學院の職員學生は勿論、京濱在住の同窓や其の他教會關係、教

育界知名の諸氏を招いて盛大な祝賀會が催された。それは總理井深博士、教授ワイコフ博士、同イムプリー博士、同ジョン・シ・バラ氏の勤續二十五年以上を祝賀する爲めであつた。傳ふる所によると、此の日のこの四人の先生方は本當に子供の様な笑顔を見せて演壇に並び、それを眺める他の職員や生徒達も心から嬉しうであつた相である。熊野幹事が司會をし、デビス夫人がピアノを弾じ、稻垣牧師が祈禱をし、宮地謙吉氏が卒業生を代表して祝辭を述べ、理事會からは渡邊暢氏が選まれて謝辭を述べワイコフ博士の爲めには野矢丈夫氏、バラ氏の爲めには松村介石氏、イムプリー博士の爲めには服部章三氏が夫々祝辭を呈した。青山學院々長本多庸一氏は井深總理の爲めに職掌柄極めて氣のきいた祝辭を述べた。その大要は次の通りである。

「井深君と自分の立場とは甚だ似て居る。二十五年間の君の經營の跡は、全く之れ辛苦の歴史に外ならぬ。今日の盛典は正に一朝の事業にあらざるを信ずる。抑々宗教學校に校長たらんとするものは、逆風に帆船を遣らんとする如きで、帆を操つて千鳥掛に乗り切りながら、目的地に達する航程は極めて僅少である。順風を受けて理想に慕進する様な好日和は一日も望みえないと云つてよい。文部省は右にありミッシェンは左にあり前には社會があり後には教會がある。更に自分の身に接近しながら、面倒な挾打をするものは諸教授と學生とである。この辛苦艱難は實に言語に絶して經驗

した者でなければ想像も及ばない。諸君井深博士の頭髪が尙その時にあらずして斯くの如く如何に落剥せるかを見よ。之れ實に諸君の爲めにかくなつたのみである。」

之を聞いた會衆は目に涙して拍手した。それに對する井深總理の答辭は次のやうであつた。

「本多君の述べられた處は殆んど私の意中を穿つて遺憾はない。かつ私は自分の過去を語るを潔しとしな。些か將來に對する希望を述べよう。海外の同信の友より明治學院の受けた從來の恩顧は廣大である。之を思へば思ふ程學院の基本を速かに確立して、獨力の經營にし度いと思ふ。之れが私の旦夕の願望である。同時に今一つの宿願は、明治學院大學部を設置する事であるが、その實現には多大の資金と努力を要する。願くば卒業生及關係諸君は熱心なる私の冀望の實現の爲めに援助せられん事を。」

最後に其の時分新たに制定された島崎藤村氏作の校歌を合唱し、小川義綏氏の祝儀を以て式は閉じられた。

一〇 ワイコフ教授の永眠

渡邊勇助氏の筆によつて當日の狀況が眼に見るやうに誌されてゐるのでそのまゝ轉錄する。

「明治四十四年一月二十七日の朝インブリー先生の教授中であつた。突然使が來て先生が一寸室を出た。一言二言話したやうであつたが、また直ぐ室へ入つて來て『ドクターワイコフが非常にわるいさうだから』と云つてノートと本とを搔さらつて急いで出た。教室に残された吾々はアツケにとられて、

『どうしたんだらう』

『インブリー先生を呼びによこす位だから餘程重いに相違ない』

とストリブの廻りに集つて皆で噂を初めた。其の處へ東瀬さんがやつて來た。

『どうも人間といふものはわからんもんですな、ワイコフさんはもうだめださうです』

『エッ』と異口同音に驚きの聲を放つた。

『ほんの今朝までタイプライターをなにして居らしたさうですが……』と首を振り振り話し

た。

吾等は『實際わからんなあ……』と溜息をつくより他はなかつた。そして皆ストーブの燃え残りの石炭がトロ／＼と燃えたり消えたりするのをヂィツと見つめて限りなき驚きと悲しみに沈んだ。

僕は教室を去つた、誰も／＼逢ふ人毎に『ワイコフ先生が』と云ふ。さうして何れも嚴肅な顔をして居ない人はなかつた。グラウンドには三三五伍立つてワイコフ先生のことを話して居る。熊野先生が宅へ馳ける。井深先生も門の外へ走つて出られる。白金臺上の空氣は俄かに怪しくなつた。

取り込んでゐると思つたが自分も先生の御宅まで行つた。門を入つた。森としてゐる。戸を開くと徳丸さんが出て來た。『どうだ取込んでゐるだらう』と問ふと『うん今入らん方がいゝ』僕はそのまゝ歸つた。寄宿舍はワイコフ先生の話で持切りであつた。切迫した親睦會も中止となつた。

ワイコフ博士は此の日午前七時頃に心臟に故障を覺えられその後二時間午前九時五分遂に心臟は痲痺して永遠の國に入られた。

一月卅一日、學院講堂で博士の葬儀がいとも莊嚴に營まれたが滿堂博士を慕ふ教師學生達の嗚咽の聲に満たされた。井深總理は懇切な追悼演説を兼ねて博士の略傳を述べられたが、その前半は、本書の先志學校の處（第百卅二頁）に掲載されてゐるのでこゝにはその後半を掲げよう。

ワイヰ博士の先志學校が築地大學校と合同して東京一致英和學校となるや先生は其の家族を擧げて東京に移住し同校の教授として物理學及び化學等を教授したり。而して明治十九年に至り東京一致英和學校と東京一致神學校と相合して現在の明治學院を設立するや先生は尙ほ依然本學院の教授として最初には主として物理化學を教授し近くは英文學及び英語學を教授して本年に至ること二十年實に一日のごとし。先生が我が學院の爲に如何に勤勞せられたるか最近一週間に二十五時限づゝ教授したる一事によりても察することを得べし。實に先生は永眠の前日の午後まで例の如く授業せられたり。然るに廿七日の午前七時より俄かに發病九時を過ぐる五分心臟痲痺し爲に逝去せられたり。

先生に二男二女あり、長女ハリエツト嬢はヘル氏に嫁し、伊勢津市に在り、長男ゼコブ、ワイコフ氏は米國ミウヨルク州立銀行の役員たり、二男ウキル、ワイコフ氏は三年前病に罹りて歿し、二女ヘレナ嬢はバドク氏に嫁し今南清に在りて宣教に従事せり。

先生は享年六十一歳にして逝去せられたるが其半ば以上而もその最も重要なる三十年を我が日本國青年の教育の爲に費したり。然して過去三十有餘年の間に於て先生の薰陶を受け既にわが邦の文學界に又は教育界に又は美術界に又は政治界に於て知名の士となりたる人一にして足らず實に先生

の如きは獨り明治學院のみならず新日本の教育界に於ける一恩人と稱すべきなり。

先生終生の事業は實に基督教主義の教育なりき、然れども先生は繁劇なる教務に従事しながらも尙其他諸種の公共事業にも貢献したることを忘るべからず、例せば目黒慰廢園の如き又は基督教書類會社の如き又は基督教教育會の如き或は其の理事として又は會計として書記として最も親切にその事務を見て毫も之を厭ふの色なかりき。

若し夫れ先生の徳性に至りては今更に余の喋々するを要せず、その温厚篤實にして能く人を容るゝ雅量あり殊に日本人に深厚なる同情を有し終始その良友たりし如き又常に事務に忠實にして勤勞を厭はず、學院に出でゝは最下級の少年を相手にし諄々として教へて倦まず、老ひの將さに來らんとするを知らざりしが如き寔に是れ容易に得難き良教授精勤の事務家、日本人の良友たるのみならず實に模範的のキリスト教的紳士なりき』

式了へてのち先生の遺骸は大勢の學生教師に護られながら瑞聖寺の墓地に運ばれた。追隨の學生のうち誰一人肉身の父老の野邊おくりをするやうな悲しみを味はないものはなかつた。教室で生徒の騒ぐをり、鉛筆を持つて書物の表紙をコック／＼と叩いては鎮まるのを待たれる温良な姿、時々美しい鬚を指先で下から力強く押上げられる先生の癖、そんなことまでが今更のやうに新らしく懐か

しまれた。

柩もる花環のはなのほの白き蕊にしみじみ悲しみの湧く

石原玉吉

ヨルダンの水よな荒れそわが君の静けさみ足はこぼるゝ日に

山崎俊夫

もしわれら力のさはみちん墓にすがりて呼ばゝ答へますにや

同人

春の空そのごと青くなつかしき慈眼はとじぬあゝとこしへに

尾崎義兵

君が説きし神には行かてひたすらに君を慕へる子をゆるしませ

同人

遺骸は限りなく別れを惜しむ勞者や門下の深い悲しみのうちに瑞聖寺内ミッシン共同墓地に葬られた。

一一 思ひ出でゝ (宮地謙吉氏の悼文)

幼にして父母を亡ひ長じて屢々弟妹の死に遭ひ死てふ悲惨の運命に弄ばれた予も此の度先生の遠く逝き給ひし時程悲しき苦き經驗を強く深く嘗め盡したる事あらず。前後十五ヶ年教育の鴻恩を身

思ひ出でゝ

に餘る程享けたる予なれば……。

崇高なる人格、溫厚真率なる風貌、仰げば愈清し、今や先生逝きて秋霜の眉、春風の面復拜すべからず、人なくば教場と云はず、講堂と云ず泣けるだけ泣いて見たき心地ぞする。

先生逝ひて一種云はれぬ淋しき感が何處に居る時も……殊にチャペル壇上溫厚恭謙のあの姿が見えぬ時に……予の胸中を充塞す。爾來予や元氣頓みに衰へ身はうつ蟬の脱殻に異らず……前に教導なく後に指針なければ……。

先生の逝ける學院の一大損失たるを待たず。噫何の時かよくこの損失を補ひ得る……忠實老練の教師として、溫厚真率の老父としての彼れは遂に永久に又得能はざるべし。

石本先生逝き、マコウレト先生逝き、今又大切な此の先生を喪ふ、恩愛の情緒茲に亂れて學院の前途轉た杞憂を禁ずる能はざるもの多し。母校と舊友との間に變りなき相思の情濃かならんがために希はくはバラ先生永久に生きよ、ランドス先生永久に生きよ、逝きし先生の靈も亦希くは白金臺上公孫樹陰讚美歌の聲する我が母校を去る勿れ。

石川林四郎氏の追悼詩

In Memoriam M.N.Wyckoff, D.Sc.

When from the Eastern nations' ashes Gray
The New Japan did raise its Phoenix head,
Thy youth high-aimed by heavenly hand was led
To come and show our rising race the way,
The truth, and life that never knows decay.
And while thy busy days among us sped,
Fast turned each autumn curl to silver thread
That binds us each to this dear school for aye.
Who e'er hath paced these halls but found thee kind,
Or talked in Saxon tongue thou didst not lend?
This tribute, too, is what to thee I owe.
A sudden loss now calls thy worth to mind.
We first adore the Lord for such a friend,
Then mourn, and pray that still thy work may grow.

Renshiro Isikawa.

Jan. 29th, 1911.

ワイユフ博士の愛吟

The prayeth best, who loveth best,

All things both great and small;

For the dear God who loveth us,

He made and loveth all.

大小のものゝすべてを

いとよく慈しむ者こそいとよく祈るものなれ、

そは吾等を愛し給ふ尊き神は

總てを造りて慈しみ給へばなり。

Coleridge.

妙 工

こは神のみわざなりけりいつ見ても柳はみどり花はくれなゐ

對神忠實

事へまつる神だによしと見たまはじ、よその人目はさもあらばあれ

借 神

神とくもに住めばのどけし花に風月にむらくもかゝるうき世も

亡子の一週年に際して

ともすれば耳にもきこゑ目にも見ゆかたるそのこゑ笑めるそのかほ
わが袖はそゝろにぬれつさみだれの降りにし去年の今日を思へば
かなしとも惜しともいはじ語らじとおもへど落つるわが涙かな

奥野昌綱翁の歌

變 易 編

一 普通學部校舍建築

ハリス館を明治四十年に改築して五年級を其處に移して居たが、サングム館の方は日一日と學生が増えて到底收容しきれない所から、新校舍建築が焦眉の急務となつた。

井深氏の渡歐 明治四十三年三月七日の理事會で次の事が決つた。

來る五月初旬エディンバラに開催せらるべき宣敎大會に井深總理は出席さるゝに就いては、歸途米國を經由し學院の爲めに建築基金の募集を委托する事

井深總理は之を快く受諾されて其年の五月五日英國に向けて出發された。

内外に於ける募金運動 之より先、既に學院擴張のための募金運動が、内地の有志及び同窓生を對象として、井深、熊野、宮地三氏の手によつて開始されてゐた。そして大口寄附としては

一金壹千圓	中島久馬吉氏	一金壹千圓	葛西 重雄氏	一金壹千圓	北村 重昌氏
一金五百圓	渡邊 莊氏	一金五百圓	成毛金次郎氏	一金五百圓	西村庄太郎氏

普通學部校舍建築

一金貳百圓	松井安三郎氏	一金貳百圓	富安保太郎氏	一金貳百圓	松本 泰吉氏
一金壹百五拾圓	高島 長政氏	一金壹百圓	神原 守文氏	一金壹百圓	丹羽豊之助氏
一金壹百圓	和泉 彌六氏	一金壹百圓	兒島 碩風氏	一金壹百圓	岡本 敏行氏
一金壹百圓	金澤 鶴吉氏	一金壹百圓	植木 萬里氏	一金壹百圓	鮭延 信道氏
一金壹百圓	小城徳太郎氏	一金壹百圓	服部 俊一氏	一金壹百圓	村岡 平吉氏
一金壹百圓	大西源太郎氏	一金壹百圓	中田 傳藏氏	一金壹百圓	山崎 一氏

等が受諾されてゐた。前記の五月五日井深總理が鵬程についてからは熊野、宮地の兩氏が京濱の同窓は云ふに及ばず、大阪神戸方面の同窓までも歴訪されて専心に募金に勤めた。其結果、内地では前記大口を合して金壹萬〇三百九十七圓の金を募りえた。蓋し之は學院未曾有の成功した募金であつた。

海外での同運動は、専ら井深總理が之に當られた。總理はその歳の夏のエディンバラの會議を終了してから、米國に渡られた。そして兼て待設けてゐられたニューヨークのロバートスピニア氏の親切な紹介で同市のフィフス・アベニューの長老教會を始めとして、ブリック、ユニバーシテイ、プレイス、マデyson街等の諸長老教會、シカゴでは第四長老教會を始めとしてバルチモアのブラウンメモリアル教會其他ワシントン、フィラデルフィア、ゼルマンタウン、パツファロー等の主要なる諸教會で明治學院のため大いに訴へ、また個人の有志をも歴訪して左のやうな大口の寄附金を得られた。

一金 壹萬 弗

ウキルズ・デー・ゼームス氏

一金 九千 弗

エス・エイチ・セベレンス氏

一金 三千 弗

デー・ピオ・ガンブル氏

一金 壹千 弗

ジョン・エス・ケネディ氏

一金 壹千 弗

ジョン・エイチ・コンバルス氏

一金 五百 弗

グレイス・ドツヂ嬢

合 計 金二萬四千五百弗

之に上述の諸教會よりの寄附を合して大略參萬弗を集められた。内地の分一萬三百餘圓を合算して約七萬圓の金が學院擴張のために用意されたわけである。

設計及び建築

明治四十四年一月十九日の理事會で愈々右の金額を以て新普通學部校舍新築の議を

討議可決した。また設計委員ランヂス氏の意見によつて、敷地は建築委員の提出したランヂス教授館

とハリス館の間と定まつた。明治四十四年二月六日設計圖を六名の請負師に投票せしめたが、その結

果として、大倉組と竹田源次郎氏と濱田安之丞氏の三名の分をとつて、之を理事會で精細に調査審議

することゝなつた。この間にこの三請負師等は頻りに利權獲得のために競争したものである。翌三月

八日、建築は竹田組竹田源次郎氏に請負はしめることと定つた。その建築諸費目は左の通りである。

一金三萬三千七百五十圓

校舍、雨天體操場、使丁室

一金壹千五百圓

室内瓦斯暖房費

一金貳千三百圓

備品費

一金壹千圓

道路改造費

合計金三萬八千五百五十圓

この外に同時に幹事の住宅を別に建築することにした。その費目は次の通りである。

一金貳千五百五十圓

住宅新築費

一金五十圓

垣根道路修理費

合計金貳千貳百圓

再合計金四萬〇七百五十圓也

校舍は玄關より入つて直ぐ右は庶務室、左は幹事室、正面衝當り階段の裏は廣大な圖畫教室、左に廊下を折れて、左は教員室、廊下の衝當りは理化學材料室、校庭に面する部分は階段式理化學教室、階下玄關より右手の三室は教室、階上は中央部の校庭に面する大廣間は理事室として、理事會の時の

外は用ひざる事とし、圖書室の上は特別合併教室、その他の六室は皆教室であつた。雨天體操場とは現在別棟になつてゐる一年C、Dの教室のあるところで、元は之は打貫いて一室となり、床はコンクリートであつた。

幹事邸 現在電車通りとなつてゐる丹波町通り、この通は大正八年の頃までは細い片側に人家のある町で明治學院の側は高い土手の上に樺の大木が並んで居た。その樹々の間の地をならして幹事邸が建てられたものである。南向きの硝子戸は澤山入つた日向りの極めていゝ設計、前には芝生と築山があり、築山の彼方には温室代りのフレイムまで設けられてゐた。熊野幹事はこの邸で大正八年迄、もう可成りの年配の奥様と令嬢香遠留さんと、後には御養子吉二郎さんを加へ、御養子洋行の後は二人の御孫さんとを相手にして住んで居られた。

落成及び落成式 工事は思ひの外早く進捗してヘボン館の火災の後十月六日の火災善後策のための臨理事會で井深總理は左のやうに報告して居られる。「新築校舎の既に竣工せるは約束の期限より二ヶ月前に在り、而して頗る完全に出來上れり」そこで落成式をその年の十一月三日の天長節佳節の祝賀と同時に進ぶことになつた。準備委員として井深、ライシヤワル、イムブリ、熊野、ミラー氏等が擧げられた。當日は京濱間の同窓、教會、教育界の名士、父兄を招き盛大な献堂式を行ひ記念繪葉書を

別つて教師も學生も嬉々として一日を過した。

二 へボン館の焼失

へボン館ハリス館の焼失 明治四十四年九月二十一日の早朝、初秋の風が西南の方から稍荒れ氣味で吹いてゐた。神學部の小使東瀬の子供が日頃の早起きのまゝに運動場に出て見ると、奇怪な事には運動場の北側に聳え立つてゐるへボン館の中央部の階下から物凄い焔の舌が閃いてゐるのを見た。轟進に父のもとに駆けつけて、同館の入口に吊してゐる校鐘を亂打せしめた。校内に住んでゐられる井深總理、熊野幹事の驚いて駆けつけられた時は、寄宿の生徒達は刻一刻と濃厚を加へて來る火煙の中で右往左往頻りに避難につとめてゐた。折柄西南の風は益々烈しくなつた。生徒の一人鈴木迪彦氏は二本榎の第二消防署出張所に駆けつけて急を報じた。出張所では直ちに警鐘を亂打して附近の住民に警戒を與へると同時に備付けのポンプを馳らせた。そのうちに四方八方から潮のやうに人波が校内グラウンドに寄せて居た。消防夫は構内は勿論、白金郵便局その他の消火栓を抜いて極力防火につとめてゐるうち第二、第三消防署、及び消防本部からも蒸氣ポンプを以て應援に來た。然し何分にも宏

壯な四階の大屋である上に、各戸に於ても水道の使用量の最も多い時刻であつたがために、折角のポンプにも給する水がなく消火栓とても噴出漸く五六尺に達するに過ぎなかつたため、多數の消防夫も如何とも手の下しやうがなかつた。白日は東方に昇りながら、西南風に煽られた火煙は文字通り天に沖した。その勢を以て進めば、その當時峻成した熊野幹事の邸宅もやがて危険に類する様子であつたが、風が徐々に方向を轉じたため、祝融は東側に隣接した、小使東瀨の居宅を舐めただけで西北に轉じ、眞西に隣つてゐる炊事場を焼き始めた。築地大學校の建物に移轉改築したハリス館は廊下づたひに西側に並んで居る。なみ居る人々の不安はますます加はつた。果せる哉、火はハリス館に燃えつゝいた。この時學校管理者の苦心杞憂は極度に達した。それは同窓生有志の寄附金其の他海外の有志者も井深總理が歴訪して蒐集した金四萬圓を投じて新築した普通部新校舎とハリス館との間は僅かに十間にも足らぬ近距離にあつたからである。然るに神意と云はうか天祐と云はうか、その時までには東北に轉じてゐた風が俄かに方向を轉じて再び西南にかはつた、隨つて火舌は逆に煽られ出した。是れより先消防夫は新校舎の危くなるを認めて、苦心大いに努め手押ポンプ臺にて元のセベレンス館側の當時益田氏邸にあつた池及び其側の小川の水を利用して専ら新校舎の防禦に盡力したため、風向の變りたると、それらの人力とによつて遂に新校舎は災を免れえた、同時に發火後約二時間午前七時に全く鎮

火するに至つた。

發火の場所及び原因　發火の場所はヘボン館の表入口を入つて直ぐ左手にあつた應接室と舎監室との中間の天井である、最初出火を發見した生徒成瀬、冠、六角、鈴木の諸氏は明言してゐる。尙その當夜舎監大内太一郎氏は宿直當日でなかつたがため、舎監室には一人も宿直してはゐなかつた。それゆゑ出火の原因については全く不明である。ハリス館の焼失によつて神學部教授都留仙次氏は、熊野幹事の居られた階下に居住して居られた關係上、永年の留學によつて集められた書籍、エジプトを踏査して親しく舊約時代の史跡を訪れた記念の寫眞、其の他洋服什器等を灰燼にして了つた。また普通學部教員富尾氏はヘボン館舎監寢臺の押入れに尠からぬ書籍を藏して居られたが、之も残らず失はれた。因に、ヘボン館は明治、日本兩火災保險會社に一萬五千圓、ハリス館は同じく五千圓の保險に附して居た。災害の當夜不在なりし舎監大内太一郎氏は自責の感篤く學院當局に進退伺を提出して、責を負はんとしたが、總理井深氏は其の儀に及はずとして、これを却下せられた。その日附近の藤山家半田家から焚ゆ出しをして在舎生その他應援者を犒はれまた京濱の同窓生からは尠なからぬ金品の寄贈があつた。

三　へボン博士の永眠

へボン館を蔽つた火焰は消えたが、残る赤煉瓦の廣大な基礎に餘熱はまだ去らないうちに米國駐劄大使内田氏からわが外務省に一つの計が到來した。曰く「へボン博士九月二十一日朝死去せり」と。へボン館の焼失とへボン博士の永眠とはたゞに、その日を同じくするのみではない。太陽の位置こそかはれ、彼此人間の世界にとつては同じ午前五時であつた。思へば不思議な暗合である。兎もあれ神秘的なこの暗合は人々に敬虔を覺醒せしめずには措かなかつた。しかもへボン館出火の原因については永遠の疑問ではないか。こゝに博士の晩年の生活を略述するのは無意味ではなからう。

博士の晩年　へボン博士が三十三年間の忠實この上もない日本の奉仕生活を了へて日本の地を去られたのは明治二十五年十月二十二日であつた。その月の十五日に横濱の指路教會で同博士夫妻のため意味の深い送別會が催されたが、その折に博士の述べられた答辭が、當時指路教會の牧師であられた山本秀煌教授の手に藏せられてゐるので、その全文を掲げてまづ博士の風格を偲ぼう。

「わが兄弟、わが姉妹、あなた方が今日この送別會を設け給はりしを恭けなく思ひます。私は日本

へ参りました、日本の内に老年と成りました。私は主イエスキリストの僕でござりまして此の全世界はキリストの畑でござります。私はあなた方と同様に總て世界に在る所の信者と一所にキリストの畑で働くべきものでござります。私は此の國の中に——キリストの畑に働きました。今は昔し六十年前己の心をキリストの爲に捧げました時、外國に往て働くは善いと思ひ付きました。私は是より己の思の儘にせず、總て主人の命令に従ふつもりで此國へ参りました。私は元來醫者です、醫學を卒業しました後、二十一歳の時から六年の間はアメリカにて善い場所を尋ねて、——此處に一年彼處に一年所々に住みました。併しながら窃かに安心せぬ所がありました。素よりアメリカの國を好んで居りましたけれども、醫者が餘計すぎて居りました。私がアメリカに留まれば只多くの醫者たちと競ふて他人の害となると思ひました。それゆゑに私は醫者の無い國へ往くが善いと心の中に思ふて、この世界に醫者のない國も多くある。また獨りの神、眞の神、活ける神を知る所の國は少い。私は神を知らぬ國醫者のない國へ往くことは善いと思ひわが親の家を去り、親の國を去つて支那へ往きました。支那に五年程駐つて療治をなし、支那人を教へ、神の御子イエスキリストの救の道も教へました。しかし乍ら私の妻が病氣になりまして、モウ支那に駐ることが出来ませぬ。そこで米國に歸りました。

十三年の間は米國にとどまつて生活し病人を治療致しました。而して私の療治が段々と進歩して評

判が善く成りました。その時日本と云ふ往古より鎖されたる國が初めて開國を行ふやうになりました。私は支那に居る時も度々日本のことは思ひました。また豫ねて日本の評判を聞きましたが、キリスト教を嫌ひイエスの信者を殺すとの事でござりました。けれども此日本から醫者或ひはイエスキリストを愛する所の信者の出来ることを願ひましたから、私は早速此の國へ来る約束を致しました。私は三十三年以前の今月十八日横濱へ上り神奈川に居りました。三年の後横濱へ移りて三十年住ました。療治——たいていの病人を療治した事は十五年——幾萬の病人を助けたいと力を盡しましたけれども、私自身が病氣となりまして、能く働く事が出来ぬやうになつて困りました。——さうしてモウ此の時に日本に醫者が多くなり醫學校も東京に設けられ、矢張西洋の國から上手な醫者が參りました、日本人を助けますから私の療治は無駄と思ひまして、その代り別に日本人の益を爲さんがために聖書又字引を翻譯——友だちと共に聖書の翻譯や字引を拵へて今日まで日本人のために力を盡しました。

今は老年となつて覺えが悪しく耳が遠く目がかすみて役に立たぬものとなりました。又私の妻も病氣で此の國を去つて本國に歸るが善いと思ひ、而してもう數日の後立つて此處を去り本國へ參ります。大低私の働く時はもう終りました。本國へ歸つてあちらにも永く居る事は出来ませぬ。丁度聖書に書いてある通り「われは旅人我親達の如く宿れる者なり」私はたゞ旅人、斯れ人の生涯、あなた方も

皆旅人でございます。この世の中に永く住むことは出来ませぬ。神に依る旅人——神は我父、父に依る旅人——誠に面白い言葉でございます。その旅路に在る間は短く或は永く、私の旅路はちつと永くなりました。七十八年の間旅をして我父の國へ赴くのでございます。あなた方も私共と共に我父の家に集つて誠に相互ひに喜びませう。(是以下英語演説省略)

私は數日にしてお別れ致します。私はこの三十三年間此の國に駐つて日本の人を助けるに力を盡しました事を神に感謝します。嗚呼今私は本國に歸ります。私の仕事は終わりました。本國にて少しの間休みまして後天にある親たちの國へ参ります。」

ヘボン博士夫妻はこの聖者そのものゝやうな純真な言葉を殘して、富裕の身を以て來ながら今は貧しい老人となつて永遠に日本の地を離れられた。その後明治廿六年の五月まで博士夫妻はカリフォルニアのバサデナに止つて専ら靜養に努められた。その間に日本基督教會大會は博士の功勞を多として懇ろな感謝狀を送呈したが、之に對する博士の禮狀にはまた掬すべきの聖情豊かなものがある。その數節を紹介して見よう。

「小生が業務を廢して日本を去りしことを哀しみ且つ遺憾に存居候折柄かゝる感謝狀に接するは小生にとつて大いに慰藉と相成候
……小生は我等の主イエスキリストが先づ小生を選びて日本人の中に働くために御國へ遣はしたまひしこと、永く日本に留まる

ことを許したまひしこと、日本に於ける基督教的事業の結びたる果實を目撃することを許したまひし事などは小生の常に感謝罷在候事に御座候。……この感謝状は日本に在る友人並びに日本基督教會の懇切なる基督教的親愛の佳香として小生のあらんかぎり保存可仕候。

バサデナで著しく健康を恢復された博士夫妻はその年の五月東方に移られて、ニューヨーク市外のイーストオレンヂに隱退の居を定められた。こゝがその後二十年、明治四十四年九月二十一日の永眠の日まで居住されたところである。このイーストオレンヂの風致に就いては博士自らの言葉をもつて語らしめよう。「小生は毎日この美はしき市街を徘徊するを樂しみと致し居り候。當市は其の路幅ひろく兩傍には敷石を以て敷きつめ、並木を以て飾られたる美しき歩道あり、また市街の先端には山脈相連りその間を縫ふて美しき別莊花園等の點々と散在する状は拙き筆にては形容し難き風情にて有之候。この清閑の地に夫妻が悠々と自適して居られる間に、東洋の風雲は漸く亂れて、日清兩國間には戦端が開かれた。これに際しても博士は何時も日本を中心として事の成行きを靜觀せられたが、日本軍の攻撃力の有勢なるには流石に驚嘆せられた。またこの當時日本の基督教思想界では、オーソドックス派の神學者と自由神學者との間に未曾有の大論争行はれたが、博士は遠く北米東海岸の地にありながら福音新報その他の英邦文の雑誌を怠らず閲覽しては日本の基督教徒が論の如何にもあれ、基督の

神性と十字架の救ひの教義とを苟にも失はざらんことを懸念し、かつ祈つて居られた。「人もしわが主イエスキリストの神性を否定し、その瀆罪を信ぜざるに至らば是即ち基督教の根本眞理を離るゝことにて斯くなりては無神論者と差したる相違なき者と相成候。某氏が迷へるの甚しき終にユニテリアン主義となり、單に基督教の倫理を信ずるものにして基督の贖罪的犠牲に於ける信仰なきに至りしは誠に哀しむべきの至に御座候」

その後十年間東洋の戦雲は収まり、博士夫妻の身邊もまた閑静であつた。しかるに博士が九十歳の齡に入り、夫人が八十七歳に達した時、又もや日露兩國間には先年の戦ひには比べようもない大戦争が開始された。それと共に博士の永き奉仕の伴侶であつた夫人は老病のため二度と起ちえない病床に臥することになつた。一切を神に委ねた身とは云へ、博士の心勞は思ひ半に過ぎる。それでも「旅順港陥落」といふ日本のための吉報を聞かれた時には兩手を舉げて日本國萬歳を稱へたといふ。明治三十八年戦争も終りに近づいた頃、夫人は永眠された。その後博士は一人の黒人の使僕を相手にますます静寥な餘生を送られたが以下の井深博士のイーストオレンヂ訪問記は如實に當時の老聖を髣髴せしめる。「自分はヘボン博士が歸國せられてから三回イーストオレンヂの家を訪問して博士と相語るの機會があつた。その一回は日露戦争談判最中であつて、最後はつひ昨年(明治四十三年)の八月一日のこ

とである。ニウヨルク市を辭して歸朝する四日前に態々イーストオレンヂまで告別に出かけた。前以て何の打合せもせずに突然訪問したが博士は宅に居て大變喜んで迎へて呉れた。其時の博士の姿が今尙目前に見えるやうな心地がする。甚暑の時であつたが博士は日本に居つた時と同様にチャント黒地のモーニングコートに、同地のズボンを着て居つた。如何にも上品な老紳士の風采であつた。博士は一人で二階から降りて來たが、別に杖も使はずソロ／＼と降りて來た。突然であつたのでその瞬間には誰か分らぬやうであつたが、直ちに自分を見覺えて握手して客間に通し、色々の事を話された。横濱に居た昔日の事や、和英辭書編纂の事や、始めてマコ傳福音書の翻譯に着手した時の困難のことやら種々昔日の事を追想して物語られた。その話を聞くに舊い友人の名は大抵記憶して居つたが、後に知人となつた人々は悉く忘れたやうに見えた。容貌は四年前に見た時と大した變化はなかつたが、只記憶が悪くなつたのと耳が遠くなつたのと全體に老衰せられたことは明白であつた。それもその筈、博士は既に百に四を缺く高齒に達せられたのである。併し博士は別れに臨み『身體には何の痛みもない、歩行かうと思へばまだ一哩は歩ける』と云はれた。又云はるゝには『日本に在る友人等に私はまだ存命である。さうして貴君が私に會ふたと云ふことを告げて下さい。私は最早九十六歳に成つて何もすることが出來ぬ。併し幸福である。私共はより善き世界に於て皆々一緒になりませう。』是がへボ

ン博士の自分への告別の辭であり、又日本にある同博士の總ての友人への傳言であつた。

へボン博士の功績　茲にへボン博士の日本に於ける功績を概括して考へて見よう。先づ第一は安政六年我國に渡來以後明治五年迄の神奈川及び横濱に於ける西洋醫術の實施傳達である。第二はその醫療の傍ら丹精を凝して編輯出版されたる和英語林集成であるが之に附隨してへボン式ローマ字の發案を揚げねばならない。第三は明治六年から明治十二年に至る新譯聖書の翻譯並びに明治十二年から明治二十一年に至る舊約聖書の翻譯、即ち都合十六年間に亘る聖書邦譯に關する大事業である。然し之等有形の事業にもまして更に尊いものは氏の人格が自らに他人に與へる感化であつたが、之はこゝに詳述するの暇はない。

博士は按ふに最も典型的な清教徒であつた。該博な知識も備へ、如何なる社會にも處しうるだけの才幹をも藏しながら一意専念に靈魂の救ひの完成の道をいそまれた。地上の榮達や利得といふ考へは、恐らく博士の念頭には浮ばなかつたのであらう。門前市をなす程患者の群れる病院をも、一亘日本宣教を使命と感じた時には何の惜氣もなく他人に渡した。和英語林集成の版權を丸善商社に托して一萬圓を獲た時もその全額を明治學院寄宿舎の建築に寄贈した。本國より携へてきた金、日本に於ての醫療より得た金も少くはなかつたが、指路教會の建築に、その他の慈善事業に提供し盡して惜むと

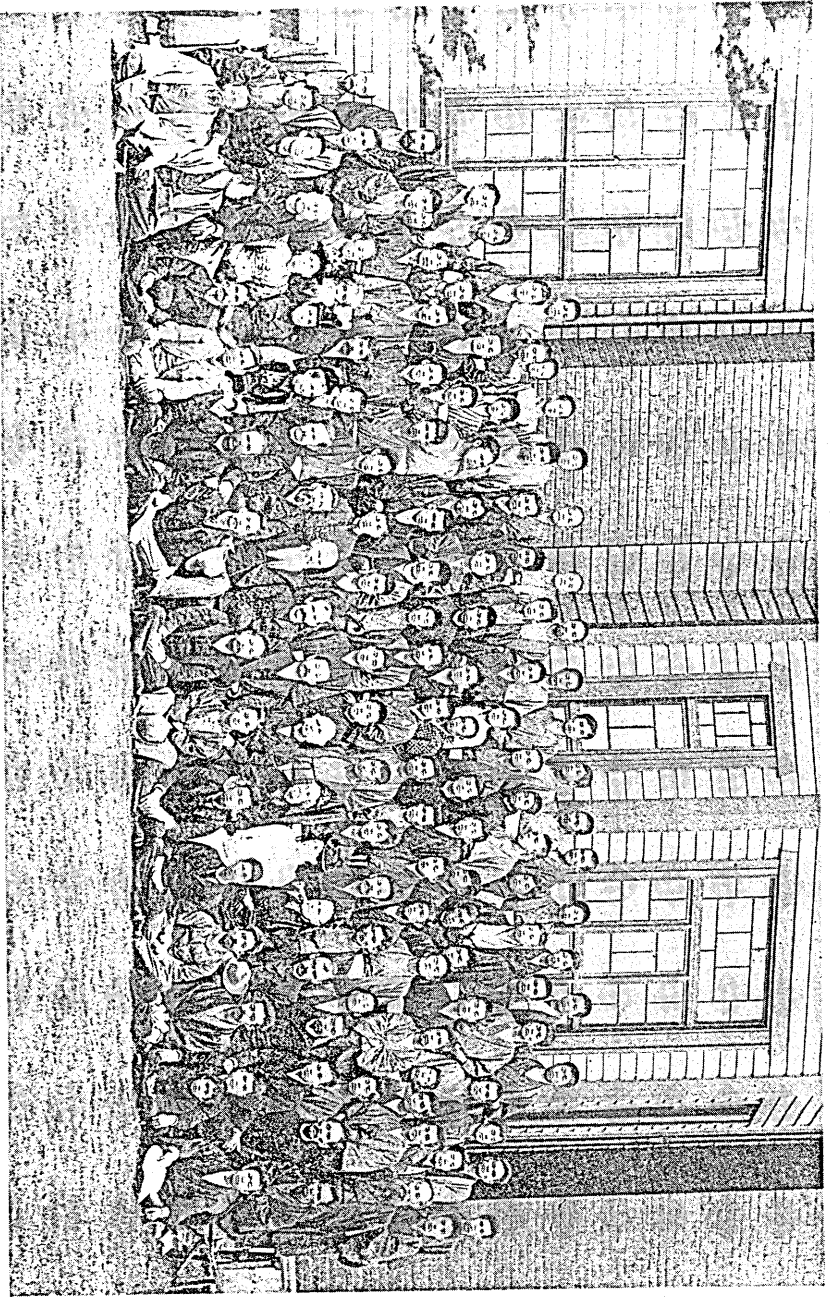
ころがなかつた。

博士はヴァベック氏のやうに才氣縦横で要路の大官達を前に廻して、その行路を指示するが如き能動的素質の士ではなかつた。飽くまでも柔和な遠慮勝ちな隠れて徳を積む君子であつた。容貌から見ても前者の闘士的で知能に輝けるに對して後者は鳩の如くまた小羊の如く高雅溫恭である。筆跡や文章から見ても前者は雄健活達であるに比し後者のそれらには入念遲疑のあとが隨所に見られる。また博士をブラウン氏に比べてもそこには明瞭な徑庭がある。蓋し博士にはブラウン氏程のユーモアはなかつたであらう。また青年の憧憬心を捕ふに氏程の氣轉も持合せてゐなかつたに相違ない。頭腦も牙えもブラウン氏には及ばなかつたのではあるまいか。然し只一つ博士にはヴァベック氏よりもブラウン氏よりも否當時の日本在住のどの宣教師よりも嶄然として卓越してゐるものがあつた。嘗に日本のみではなく、世界のどの宣教師に比べてもおそろく博士はその點に於てのみは滅多に人後に墜ちなからう。それは博士の隣人に對する愛であり、善きサマリア人としての心情である。その愛が博士を勵ませて五年と六ヶ月の刻苦精勵をせしめて「和英語林集成」を大成せしめ、前後十六年間の精勵を拂はせてあの舊新約兩書の翻譯を成就せしめたのではあるまいか。ヘボン博士の生涯は之を凝視すればする程「仕事に丹精せしむるものは愛の心である」とのヒルテイの言葉の眞なるを思はざるをえない。

明治の初年に品川八ツ山に非人小屋があつた。博士は時折人知れずその小屋を訪れて何くれと病人の世話をした相であるが、之を側で見て居た高橋某氏が、餘りに氣高い博士の其の態度に感激してその後自らの非人に對する態度を全然改めたといふ告白が最近の一雜誌に見えた。

明治卅八年時の 天皇陛下は博士の過去の功績を認めさせられて勳三等旭日章を授けられた。また永眠の數年前フライデルフイヤで萬國宣教師大會の開かれた節、博士の會場に入られるや全員一舉に起立して之に敬意を表したさうであるが、彼れの鶴髮童眼の面には凱旋の將軍に勝る天來の榮光が輝き出てゐたといふことである。

新へボン館の建設 へボン館とハリス館の焼失後從來の在舍生は當分今里町の男全家の長屋に移つて居たが、色々の點で不便があつた爲め、それを年の暮に解散して翌年の三學期からは各々の知人や親戚の家から通はせる事にした。けれ共、どうしても遠隔の府縣から遊學に来て居る生徒の爲め、今一つはへボン博士の記念の爲めに、寄宿舎の建設の必要を感じた。學院理事員會は四十五年の一月の會合で大體決定し、三月竹田組に約一萬圓の見當で一其の寄宿舎と二階建の食堂とコンクリートの湯槽、洗場のついた浴場とを建設させる事になつた。工事は八月の休暇中に終了して第二學期の初めから、普通部の學生を主として其處に收容する事となつた。最初の舍監は前のへボン館時代からの富尾



保羅にび並生學授教院學本の時當るせ集參に會別送の國歸の妻夫士博ンボへ年五十二清明
りな理總深非は左、人夫ンボへは右のそ士博ンボへは人老の携無髮白の右和央中、氏諸

氏であつた。その後中原剛三氏が舎監となり、三浦太郎、江見節男、上田兵吉氏等が歴任したものである。(新ヘボン館の坪数は百七十四坪食堂のそれは五十六坪である。)

四 窪地のセベレンス館

明治三十七年の頃から在學生の數は著しく増加して來た。無論學院が中等學校の資格を回收したが爲めである。サンダム館の教室は到底在學生を入れるに足りない所から、明治三十八年三月にはそれ迄神學部の學生寄宿舎として用ひて居たハリス館の二階を教室に直して、普通部五年級を二組其處に移した。従つて神學部の學生は當分天神坂下に家を賃借して假寓する事になつて居た。之が抑々セベレンス館建築の動機である。

明治四十年の春米國ニューヨークの基督教紳士で知名の實業家セベレンス氏が日本に觀光に來た。セベレンス氏は從來プレスビテリアン教會に屬して莫大な金を外國傳道の爲めや慈善事業のために投じた篤志家である。そこでイムブリー氏と井深氏とは帝國ホテルに同氏をたづねて神學生の寄宿舎建築のために相當の支出をして貰ふように懇ろに頼んだ。所が事は比較的易く運んで、セベレンス氏は

金八千圓を先づ提出する約束をされた。學院當局はそれを非常に喜んで建築設計を初めた。

建築 敷地は學院西北隅のハリス館の傍をずつと下に降りた現今の久原邸の池の傍で恐らく學院内で此地程幽邃なところはない。またそれだけ通風や乾燥の點で缺けたところがあつた。大倉土木組に命じて可成り完備した設備をなし、水道瓦斯萬端の工事をすませ、木造瓦葺二階建百廿三坪の立派な建築が出来上つた。經費は一萬二千九百六十九圓六十一錢、セベレンス氏の豫約を超過する事約五千圓であつた。この超過の事をセベレンス氏に報告し、その補填を願つた所、同氏は遂に一萬三千圓を提供して呉れる事となつた。落成したのは同年十月二十九日で其の日献堂式を行ふと共に天神坂下の臨時寄宿舎から神學部學生は移轉する事となつた。

在舎せる人々 その後大正八年迄、この建物を白金三光町へ移すまでの十一年間、このセベレンス館は可成大勢の神學生の生活するところであつたが、その間に随分種んな人々をこの館から出した。最初は純福音的な情熱の傳道者で一轉してニヒリステイックな社會思想家となつた加藤一夫氏日本隨一のダンテ研究者の現本學院高等部英文科々長中山昌樹氏、現宮崎市長大迫元繁今は故人の本學院神學部教授瀬川四郎氏、白金教會牧師郷司慥爾氏現神學部教授村田四郎氏高輪教會牧師山本喜藏氏武藏高等學校教授英義雄氏小樽教會牧師村岸清彦氏賀川豐彦氏の共軛の共で大阪四貫島セツトルメントで

労働者間の宣教に専念してゐる吉田源次郎氏、紀洲の新宮を根城にして大正八年以來終始一貫南紀の傳道に専念してゐる河村齋美氏、現に學院神學部の小壯教授である桑田秀延氏は等はみな窪地のセベレンス館時代の産である。

場所が窪地で、教授館の人々や運動場を通る人々から眺められないといふ好條件が多少手傳つたこともあらうが、随分思ひ切つた自由生活が發揮された、袴の襜のついたのや、羽織の折目の正しいのなどは一寸薬にしたくも見當らなかつた。現鎌倉教會牧師で神學部講師を兼ねた松尾造酒藏君は今ではたゞの一度だつてズボンの折目が無かつたり、頭髮が油干れてゐたり、頬鬚が延びたりしたさまは他人には見せない典型的の紳士であるが、窪地時代はどうして、「あの人は剃刀を有せず羽折を着て眠る男」と思はれるやうであつた。「寒くないから」といふ純性理的批判から、大寒中浴衣に袴をつけて井深先生の時間に罷り出た者もある。山本彌一郎君が毎日午後四時頃に「わがたまのひかりすくひぬしエスよ」の獨唱で名を賣つたのも此處であつた。天拆の傳道者渡邊重右衛門君も此處から社會へ送られた。此男は白金臺一流の憧れの多い氣分を持つた男であつた。プリンストンを卒業して間もなく彼地で死んだ藤澤貞雄氏も神學部本科の頃は此寄宿舎で海老名夫人の新女界の編輯をしながら勉強した。學生はみなよく騒いだ。大聲で議論もした怒鳴りもした歌ひもした。けれども毎朝の六時半と

毎夕の七時とには急に舍内全體が静まり返つて、調子の整つた讚美歌がきこえそめた。それは禮拜時間だからである。その時間に入ると、平素は向鉢巻で廊下を歩いて見たり、やんやと嘯し立てたりする男が胸の奥に秘めてゐる深い悩みを神に訴へる。友人の前に疑惑を提供する、一身の靈魂のため隣人のために、眞實な祈りをする。

傳道の使命を感じた青年が、田舎の四角四面の中學教育を終へて上京する。明治學院の神學部に入學を許されて窪地のセベレンス館へと来る。將來の牧師が學問をしてゐるところとして、どんなに壯嚴清肅なところかと思つてくる。ところがその想像はまづ、玄關にちびた下駄が亂雜にちらばつてゐるのに破られる。中には先鼻緒の切れた應急策に小石を打こんだのもある。中に入つて縣公立の學生のそれが軍隊的に整頓してゐるに反してこゝは何となく下宿屋にも非ず、寄宿舎らしくもなく合宿所然たるに少々失望する。ところが追々と朝夕の祈り會や學校當局で催す夏期傳道報告會や學生のコンファレンスに出て聽講したりする間に、その大聲放歌者や不恰好な兄貴然たる男が、新參者などには一寸想像も及ばない程の深い考へや、敬虔眞實な心や、神學は言ふに及ばず哲學や文學にも相當の理解と鑑賞眼を備へてゐる事が解る。渡邊重右衛門氏が始終言つた、特に新入生を迎へた時によく言つてゐた「セベレンス館は諸君の薄べらな紙張子の人生觀を一度悉皆ひつばいでしまつて、二度と破れるこ

とのない羊の皮で張り直すところだ」と。またセベレンス館を追想して思ひ出すのは

瀬川四郎氏 である。氏は東京一致神學校第一期卒業生瀬川淺氏の第四男で、藤本保己、馬場久成、村田四郎氏等と學院神學部に學び明治四十四年卒業、直ちにオーバン神學校に遊學し、最後にもう一年間教會史を專攻して大正四年九月、松永文雄が(大正三年六月に)去つて後暫く缺いてゐた教會歴史の教授として學院神學部に赴任された。文字通り小壯な教授で確か赴任當時は二十六歳であつた。本科や別科の上級生に氏より年上の學生が可成ゐた。氏は赴任後忽ち學生の人望をえた。それは氏の人格の何處かに、他人には追隨することの出来ない敬虔清籛なものが潜んでゐて、本人も氣が付かず、此方も豫期しない時に、ふつと現はれてくるからであつた。而も氏は寸毫も氣取ることをせず、學生と笑ひ轉げながら面白く談し合ふ。話は實に多方面で、音楽、運動、繪畫の素人批評は先づ適はしいとして、日本橋淺草方面の食ひ物の話から、上はニューヨークのメトロポリタン、下は淺草日本館に至るまでのオペラの話、活動俳優の話、更に佳境に入ると左團次、幸四郎、羽左衛門、菊五郎の臺詞や所作まで、よくもまあかう廣範圍に材料をえたものだと思ふ程であつた。所が話が苟にも事神、基督、教會、聖禮典の事などに入ると忽ち口をつぐんで了つて、容易に無責任なことを謂はないばかりではない、徒らにさうした聖名を弄する學生に對しては、「君今さういふ話はやめ給へ」と謂つたも

のだ。學生時代にも、青年一流の可成り切り込んだ話がお互ひに始まると始めは氏も黙つて聽いて居るが、暫くすると、つと立つて出て行つたと云ふ。氏の靈魂は將しく親御達の祈りと讚美のうちに育てられたもので、それが、普通の人々には一寸真似の出來ぬ性格を氏に授けたものであらう。村田四郎君は氏を評して「生粹の基督教者である」と云つたが蓋し適評であらう。

大正六年の秋、氏は神學部の學生を連れて榛名、妙義、淺間の諸山の秋色を訪ねて非常に喜んだ。越えて大正七年の春頃から少し發熱を憶えたり寢汗をかいたりして居たが、出來る丈けそれを事も無げに學生に見せて講義を續けて居た。併し緊張した講義が終ると、何となく息が切れて苦しさうなのは傍の學生にはあり／＼と感ぜられた。氏が教會史の講義をする時は、何れかと云へば冷靜な學者的といふよりは、むしろ熱の籠つた説教のやうであつた。それで一段と勢力を要したやうである。夏期休暇中に九州に行つて靜養され、九月には再び職に就かれたが、其時は自分では事も無げに裝ふて居たが體は餘程瘦せて見えた。十月に入つてから益々發熱はひどくなり、遂に學校には出られなくなつた。セペレンス館の學生達は隨分氏の病氣を苦にして、暇があると布圍を干してあげたり、部屋の掃除をしたり、手厚くした。殊に臺灣から來て居た郭馬西君などは殆んど獻身的に食事の世話や藥の調達や、痰壺の掃除までしてくれた。その歳の暮氏は品川停車場から九州別府の父の許に行かれた別府

て二ヶ月程靜養して、其の後滋賀縣近江八幡のボーリス靜養所に移つて専心治療されたが、到頭大正八年七月九日に其處で永眠された。遺骨は東京に齎されて、氏の神學生時代からの關係教會であつた日本橋兩國教會で、友人や門下が集つて嚴肅な涙の多い告別式を行つた。氏の兄弟は都合七人、順次に召されたものである。告別式の席上「今この四郎が召される事によつて天國の兄弟達の讚美歌合唱の聲は益々盛んになるやうに思ふ」と嚴父淺氏は述懐されたが、これを聞く者一人として袖をしぼらぬ者は無かつた。又この合唱といふ言葉について思ひ起すは學院の

グレゴリー・バンド である。大正三年の頃學院出身者で東京音樂學校の助教授をして居た大塚淳氏が、毎週一回金曜の午后來られて高等學部、神學部の學生達の聲樂を指導して居られた。其年の豫科入學生中に小林喜久七、染谷爲助、河村齋美、長澤政雄その他の諸氏が居たが、殊に以上の人々は仲々音樂に熱心であつた。上級生では桑田秀延、黒川時之輔、佐治茂、渡邊重右衛門氏らも之に加はつた。けれ共一段この音樂團に氣勢を添えたのはその翌年、同じく豫科に入學した生徒の中に、鳥居忠五郎、木岡英三郎の二氏が居た事である。その二人は今では専門の音樂家として世に出て居るが、明治學院の音樂の歴史に於て、この大正四五六七年の四ヶ年程隆勢になつた事は恐らくあるまい。大正五年の春五月にこの聲樂團をグレゴリー・バンドと名稱して其の第一回デモンストラーションとし

て大音樂會を催ほして。高折氏、船橋氏、花島秀子女史、長坂好子女史等の専門家を招いて、妙技を揮はせその間に學院のバンドの合唱や二部合唱や獨唱を挟んだが、仲々團員の技術も優れたもので、忽ち東京市内の各教會に有名になつた。それもその筈、バンドの人々は金曜日午後丈けの練習では到底満足が出来ず、毎週火曜日晩には目黒の大塚氏の宅まで練習に出掛けたものであつた。寄宿舎でも校庭でも教室でも團員が二三名集ると必ず合唱が始まつて、優美な音樂が白金の丘を壓して居た。方々の教會からは色々な傳道集會其他に應援のために、此のグレゴリオ・バンドは招かれたものであるが、追々とさういふ熟練家の卒業すると共に大正八年頃から寂れて行つて了つた。

セベレンス館の移轉

大正七年に瀬川教授がセベレンス館で患つて後、在舎生の健康診斷を行つたが、どうしたわけか随分不健康者の多い事が知れた。勿論前々から此の窪地は學生の宿舍として不適當であるとは誰しも感じて居た。そこで學院理事會ではオルトマンズ、都留の兩氏が移轉委員として様々の事を調査すると同時に、其の敷地約四百坪を隣接の邸の持主なる富豪久原房之助氏に賣渡さうといふ事になつた。理事の一人田川大吉郎氏はそれを引受けて専ら交渉を進めた。度が田川氏の交渉は極めて好都合に運んで、久原氏はその四百坪を一坪百圓の見當で四萬圓に大正七年の十月賣收してくれる事になつた。井深總理は其れを基金として土地を物色したが、聖心女學院の裏手の丘に約八百

四十坪の空地を發見して之を三萬八千三百五拾九圓で賣收し尙六拾參坪を三千六百圓で買ひ加へて大正七年の十一月から愈々移轉事業が始つた。從來の凹字形をL字形に改築して移し別に五千四百圓を投じて階上食堂階下賄部屋の一棟を建てた。大正八年四月工事成つてその間方々に散宿して居た神學部の豫科本科の學生は皆その高地の宿舍に歸ることゝなつた。移轉後の坪數は本館階下九十三坪、階上七十九坪二合五勺別館階上階下各二十八坪である。

五 高等學部の擴張——バプテストミッション合同

明治四十四年に普通部校舍が完成してサンダム館の普通學部の生徒が移されてから、可成大きかつた其の建物は殆んど空家の状態になつた。この時學院當局がそれを利用して、兼てからの宿願である大學部設立の實現を計らふとするのは蓋し當然である。それには二つの方法が考へられた。一つは學院自體が同窓と兩ミッションとを背景として、高等學部の大學に達する成長を續けるか、今一つは東京に存在する基督敎學校、即ち青山學院、聖學院、東京學院、立敎學院、それらの高等學部を綜合して先づ一つの完備した専門學校を設け、それをば大學に昇格せしむるかの何れかであつた。

部長制の制定 何れにせよ高等學部に一飛躍を來らせる爲めには、從來のやうに、一總理と一幹事に學院各部を總攬せしめて行くわけにはゆかぬ。總理の下に各學部々長を置き、各々の發達を考慮せねばならぬ事となつた。大正元年十一月二十六日の理事會で愈々これは實現せられ、井深博士は總理兼神學部々長となり、熊野雄七氏は普通學部兼高等學部々長となつた。

専任部長定まる 當時學院理事會の會計であつたリフオームドミツシヨン派遣のライク氏は大正二年三月二十八日の理事會で、高等學部々長に推され専ら同學部發展の爲めに盡力する事となつた。

イムブリー博士の盡力 同年四月二十六日イムブリー博士は明治學院理事會を代表して本國の兩ミツシヨンの傳道局に對して、詳細に高等學部擴張の必要と其の方法とに就いて説明して、兩ミツシヨンの援助を乞ふた、その書簡を抄譯して其の大體の經路と手段とを紹介する事にする。

「過去兩三年間日本に一つの基督教大學を建設せんと欲して、明治學院は東京市内に於ける諸基督教學校に對し、其の高等學部の經營事業を合同せしめたま旨を提唱し來り候

監督教會に就きて申せば現在の處その意向は無之かと思はれ候。強いて云へば同教會には獨自の計劃之有候て、今後單獨にて經營するものゝ如く存ぜられ候。メソヂスト教會は目下考慮中に有之候も、たゞ一つのバプテスタ教會は大いに積極的に有之、本月十日より既に一部分の授業を協力致し

居り候、未だ公式の合同には成らざれ共、バプテスタの東京學院はその高等學部に於て協力經營となり、明治學院は同派のグレセット氏テニイ氏千葉博士を明治學院の理事會の院外議員として招待申し候。

今少しく詳細に申せば七名の東京學院高等學部生は明治學院同學部に移され、上記の三名の教授の外三名の日本人教授も來り授業に参加致し居り候。此の共同經營によりて高等學部は大いに教授能力を今後増進致す可く候。其の結果は右の二つと相成るべく存じ候。

(一)神學豫科生の學力の増進

(二)今後文科として設置さるべき高等學部正科の課程を官立高等學校と同程度のもと昇進せしめうる事

従前明治學院教授にして其後十年間官立高等學校に俸職したる水蘆氏の明言する處に依れば、今や我が高等學部の教授能力は官立高等學校と全く同程度なりと申され候、兎も角本學院理事會はバプテストミツシヨンの極めて寛大なる合同に關する態度に感謝を表し居り候

之れと同時にバプテスト教會及び基督教會と神學部の共同經營に就ても考慮致し居り候、従つて本學院理事會に後者よりの委員を招待致し度く存じ居り候

經營の方法 經營の方法に關しては次の如く考へられ候

(一)先づ學生を多數收容するに就いては從來の課程にては事足るまじく大いに改革を要し候、專

門學部の課程に於ては實務科を置く必要有之可く候

(二)次は基督教々師養成のために神學豫科の課程を繼續致すべく候

(三)日本の中等諸學校に基督教々師を派遣する爲めに文科の課程を置き英語教師を養成致す可き

かとも存じ候

基督教大學の實現に關しては在日本各派のミッションは區々の意見を有し候て、一舉に第一流の大學を設立すべしと云ふものと、先づ高等専門學校の完備せるものを造りて漸次之を大學に昇格すべしと主張する者と有之候、小生共の目下の合同計劃は、その兩説の折衷に基くかと存じ候

經營費に關する請願 過去二年間明治學院同窓は新校舎建築の爲めに一萬數百圓の醸金を致し候又同窓生はヘボン館焼失のために多大の同情を寄せ其の再興の爲めにも相當の寄附を致し候。學院が今日迄に於て爲せし功績は兩傳道局も既に御承知の事と思はれ候、之以上補助金の増額を御願するは無理かと思はれ候が、本學院の受け居る額を他の東北學院、青山學院、關西學院等に比ぶれば遙かに少額なるを御承知に預り度く、以下數學を以て示し申し候。(數學は略)たゞ左の理由によ

つて小生共が他の諸教會と協力して高等學部の擴張を計るに對し、御同情御援助を賜り度く願上候
最近エデンバラに於て開かれたる萬國宣教繼續委員會議長たるジョン・アール・モット氏は基督
教々育の問題に關して最も熱心に主張し全員の考慮に訴へ申候。現在の基督教學校の改善は何もの
にも勝る焦眉の問題と存じ候、若しプレスビテリアン、リフォムド兩教會がモット氏の力説さるゝ
主題に考慮するとすれば、日本に於ける基督教々育こそ其の出發點と相成るべく存じ候、エデンバ
ラ會議は我々に覺醒を興へ候へば東京在住の我等は、この大問題に關し協力の實を上げんと存じ居
り候。バプテスト及び基督教會も聽て此の問題に就いては甚深の考慮を拂ふべく候間何卒我らにも
其の協調を全くせしめらるゝよう御援助賜り度く候

明治學院理事會代表者

井 深 梶 之 助

ウイリアム・イムブリー

デイ・シー・ライク

大正二年四月二十六日

合併せる高等學部 大正三年四月開講した高等學部は廣々となつたサンダム館であつたが、その一

高等學部の擴張

年級にはイムブリー氏の手紙にもある通り東京學院からの學生が七名加はつて居た。今のバプテスト神學校教授澤野良一氏、鎮西學院高等學部教授熊野氏、藤澤貞雄(故)諸氏が加はつて居た。教授としては前述のグレセツト、テニイ兩氏の外白人ではホルトム氏、フィシャ―氏、日本人では山口剛氏、佐々木梅次氏、坂田祐氏等が出張教授に來られた。テニイ氏の希臘語の教授は實に素晴らしい手腕で、學生の興味を切りに唆つて古典希臘語を一ケ年間で可成讀めるようにして呉れた。又國文學に於ける山口剛氏の該博な知識と自由な講義振りは随分學生の心を引着けた。殊に源氏の桐壺、帚木、未摘花夕顔などの優れた講義は學生を恍惚とさせたものである。現在の關東學院々長坂田祐氏は論理學心理學を講じ、ホルトム氏は天文學英文學をやつた。水蘆幾次郎氏は殆んど専任教授のやうに譯讀を擔當して、チャールスラムのエッセイオブエリア、エマスン論文集ヒーロー、アンド・ヒーローウオシツブ、ツワイネストールテールズなどを教へた。又其の時分派遣されたホフソムマー氏は社會學教育學マクネヤ氏は史學を擔當して居た。兎も角バプテスト教會との合同は從來の高等學部に非常な飛躍を與へて、授業時間は非常に緊張して創立當時の學院普通學部本科がこゝに復生したかの感があつた。

處が一つの蹉跌が第二學期に到來した。といふのはこの高等學部の本城たるサンダム館が其年(大正三年)十一月二十四日の午前に焼失したからである。サンダム館出火の顛末は別項に記する事とし

てこゝに其後の高等學部の經過を一通り述べて置く。出火後學生は普通學部の校舎内の二室とヘボン館中の一室とに移されて教育される事となつた。ヘボン館の一室は極めて狭い應接間であつたが其處で石原謙氏は二年及三年生の爲めに哲學史を講じた。石原謙氏（現東北帝國大學教授文學博士）の講義は非常によく準備されたもので、草稿を手にし乍ら一言一句も忽せにせず、學生はほんの四五人に過ぎなかつたが、權威のある立派な講義をされた。椅子に腰を下して洋野紙に細かく書かれた草稿を左手に持ち引締つたあの唇から一種響のある而かも澄んだ聲で、スピノーザ、デカルト、ブルジョアの邊りを講ぜられた姿は、今尙其席に列した者の眼にまぶさぶさと残つて居る。Sub specie aeternitatis「永遠の相の下に」といふスピノーザ哲學の根本義を語られる時などは、先生自らの顔さへ輝いて居た。石原教授に連關して想起されるのは大島廣氏（現九州帝大教授）と山谷省吾教授である。前者は色の白い眼の澄んだ見るからに秀才らしい少壯教授であつた。高等學部で生物學を講ずると共に、普通學部で動植物の講義もされた。非常に多藝多能で、繪をよくする外に、音樂にも堪能でチャペルの時などは始終タクトを取つて、學生の讚美歌を正確に指導されるし、樂手の居ない時には自らオルガンの彈奏さへもされた。黒い縞子のガウンを着て教室に來られ、原語で書いた草稿をかくしから出して高等學部で細胞の分裂、生殖細胞の機能などの講義を巧みに繪を描き乍らなさつたが、學生は思はず知

らず講義に釣り込まれた。山谷省吾氏は其の時分法學通論の講義を爲された。山梨縣と印した赤罝紙に講義の下書きをして來られて、學生の前で一枚一枚めぐり乍ら、重い口調でホツブスの國家論等を講ぜられた。丸い顔、丸い體、基督教徒らしい優し味が全身に漲つて居たが、まだ何處かに山梨縣理事官たる香が漂つて居たのは必ずしも赤罝紙の香のみでは無かつた。

かうした學院高等學部が若しも經營者の豫想通り潤澤な資金が興へられ、又同窓が本氣に後援したならば、漸次に發達して文科大學の基礎は定まつたであつたらうに、スピーア博士からの手紙は頗る悲觀的のものであつた。その内容を概括して云へば、何故に

(一)明治學院同窓生は先づ其の基金の大半を準備しないか

(二)何故に日本基督教會が明治學院の經營を引受けないか

(三)當傳道局には一つの學校の臨時の擴張の爲めに支出すべき豫算は持合せて居ないか

(四)然し若し日本に於て入用資金の大半以上を造りうるならば當方に於ても有志者をえて幾分の援

助はしうるであらう

と云ふのであつた。學院としては最近校舍建築の爲めに少からぬ金を同窓間に訴へたばかりであり先程又サンダム館の焼失によつて多大の損害を被つて居る矢先である。しかも日本基督教會に資金を

訴ふべき餘地は少しもない。全く米國のミツシヨンの援助によるより他に道は無かつた。そこで大學設立の案はその儘當分保留せざるをえなくなつた。

衰潮の再來 その中に好教授石原謙氏は波多野氏の後を追ふて早稻田に去り、大島氏は熊本の五高に去り、山口剛氏もテニイ氏もグレセット氏もホルトム氏も亦去らねばならぬ時期が到來した。それは次の手紙で明かである。次の手紙は明治學院教授會では出來る丈け東京學院との協調を繼續して行かふと協議を重ねて居る時、バプテスト教會教育部の委員長テニイ氏から協調繼續不可能の旨を申越したものである。

「高等學部の合併繼續に關する問題の懸案に相成り候機暫く拜眉をえざりしは残念に思はれ候。グレセット及びフイツシャ―兩氏より其の論議については詳細に承り候。特に兩氏は貴下が小生等の前途を如何にすべきかを早速御承知になるべき機に臨める事、従つて貴下御自身の財政上の計劃に就ても此の際一新さるべき必要に逼れる由を承り候

御承知の通りこの種の事柄に對する絶對權はポストンの理事局に有之候處本局よりの最近の通達によれば、今後貴校との協力は甚だ疑はしきものと相成り申候。基督敎大學實現の有望なる限り我がミツシヨンは協力進展の實を擧げうべく候へ共大學の實現不可能と相成り候へばこの協力の望み

も早や絶え申候、當傳道局としても又ミツシヨンとしても今後は一専門學校としての發展を望み居り候、従つて最近の日本信徒總會に於ては貴學院と高等學部の事業を共營する事に關しては遂に否決に終り申候。かゝる事情に候へば今週の教育委員の來訪の後ならでは確定は致さず候へ共事情以上の如く相違無之候へば、今學年限り(大正六年三月)小生共は貴學院との共同經營を止めざるをえざる由御承知下され度願上候

終りにのぞみ小生は過去三年間諸君と協勞し多大の御厚意に預りし事を感謝致し候。吾人の職務上の關係は如何にあれ、凡ては常住の神に最も近くあるべき特權を覺え候」

千九百十六年(大正五年)七月十一日

チャールス・ビー・テニイ

明治學院　イムブリー博士殿

東京學院職員生徒の去つた後の高等學部は茲に全く獨力で本學院在學生の完成のために一専門學校としての姿を完成せねばならないはめに至つた。

六 服部綾雄氏の永眠

大正三年四月一日北米サンフランシスコ市イムピアルホテルの第五十號室で服部綾雄が永眠された。氏はその前年の五月、國民黨から派遣されて、政友會からの派遣による江原素六氏とともに太平洋海岸の日本移民の土地法案上の利權を擁護し、傍ら移民の慰撫のために渡米された。この時井深博士も同船であつた。それは氏にとつて三度目の渡米であつた。上陸後東奔西走各地で加州要路の人々と質疑應酬したり、移民を集めて講演をしたり一寸も閑居する暇はなかつた。永眠の日も夜の五時頃から七時頃までは總領事官邸で沼野領事と談合しその後は日本人會書記長若林氏や東洋汽船の佐藤氏と逢つて午前一時頃ホテルの室に歸つたのであつたが、果して其後何時頃に天界に赴いたものであつたか宿の者が翌朝十時頃に扉を開いて見た時には次のやうな様子であつた。

「一見したるのみにては安らかに眠れる人とも思はれず、ホワイトシャツは側への椅子に、懷中時計は鏡臺の上、脱ぎたる靴はベッドの下にキチンと取揃へ、日本衣の寢巻を着け手布を手にしたるまゝ胸部にあて何の苦痛のあともなく大往生を遂げられてゐた」

服部綾雄氏は井深梶之助氏や石本三十郎氏と共に生粹の明治學院兒であつた。たゞ井深氏はブラウソ家塾系統である時他の二氏はヘボン家塾系統であるのみである。年齢は井深氏の方服部氏に七八歳年長であるが、明治十四年の頃から前者は東京一致神學校に於て後者は築地大學校に於て學院の前途のために劃策盡粹したことは同じである。また明治十九年以後は白金に本學院の基礎を置かうとして兩者は共々提携事に當られた。

明治二十一年氏は二十五歳にして學院を去られたが、その後の氏の身邊には實に波瀾重疊なるものがあつた。然し氏の豊富な才幹と氣高い品性と確乎とした信仰とはよくこれに打勝つて行つた。氏は學院の歴史に忘れることの出來ぬ人物であると共に學院の永遠の誇りであらねばならぬ。以下熊野雄七氏の筆になる略傳と逸話一二を掲載して置く。

「父は服部純氏、母は縫子、文久二年十二月二十一日駿河國沼津藩の城下に生る。家代々水野侯の要職に當れる一藩の名門たり、父純氏曾ては江川太郎左衛門氏の塾頭たりし事あり。君は其の長男にして一弟二妹あり。明治初年水野侯封を上總國市原郡菊間に移さるゝや、君が學家亦之に従ふ。父純氏豫てより君に醫を學ばしめんとする志あり、先づ漢學者渡邊孝氏の門に入りて漢學を修めしむ。明治五年君横濱に出で米人ヘボン博士の夫人に就き英學を修め、同時に基督教を聽き終に其の

信仰と決心とを告白して宣教師ルミス氏より洗禮を受けたり、是れ實に明治七八年の交にして、君が十三四歳の事なりとす。明治十一年、父純氏の逝くや、君僅に十七歳にして一家の責任者となり爾來自營の生涯に入りぬ。明治十三年、横濱に在りて學べる英和學校の東京築地に移り、螢雪の功空しからず、同十五年二十一歳を以て同校を卒業し、次で母校に聘せられて幹事となり、後神田淡路町に英和豫備校設立せらるゝに及んで、又其の主事となれり。明治十八年、松井千代子を娶る同十九年、明治學院設立せらるゝや、擧げられて幹事となる。同二十年、男純雄氏を擧ぐ。此より先き君外遊の志あり、機熟して同二十一年、北米合衆國に渡り、東方に出で、著名なるプリンストン神學校に入りて、専ら神學を修め、後カリフォルニア州桑港に移り、青年會主事となり、在留邦人の啓發に盡力するの傍ら、同地神學校に學び數年にして卒業せり。

明治二十五年、歸朝、按手禮を領して日本基督教會の教職につき、東京牛込教會の牧師となりしが、思ふ所あり、同志と謀り、東京商業銀行なるものを創立し、自ら其の頭取となり、劃策甚だ力めたりしも事多くは志と齟齬しければ、去つて其の立脚地を教育界に索めぬ。

明治二十七年、富山縣立中學校教諭を命ぜられ、居ること二年にして、其の校長に擧げらる。同三十年、岡山中學校長に轉任、熱心銳意育英に従事せり。明治三十五年、北米太平洋沿岸シャトル

市の巨商古屋政治郎氏、禮を厚ふして君を聘しければ、往いて其顧問となり、前後五年間、同氏事業の擴張を謀ると共に、同地方在留邦人の啓發に盡力し、一たびは擧げられて同市日本人會長となりしことあり。

明治四十年、歸朝するや時恰かも衆議員總選舉の事あり、君岡山市民の推す所となりて當選の榮を荷へり。間もなく政界の風波高く、憲政の前途實に憂ふべきものあり。於此乎、君犬養毅氏等を扶けて、國民黨の創立に與かり、爾來同黨々員として、又院内幹事として、斡旋最も努めたり。明治四十三年再び總選の事あるに當り、岡山市民中君に再起を促すものあり、君亦其の志なきにあらざりしも、知人某氏既に候補者たるを決せるを聞き、自らの立候補を斷念して知己人に對するの禮讓を全ふせり。爾來院外に在りて政客として一般政界の革新と國民黨々勢の擴張とを謀り、兼て教育演説に基督教説教に南船北馬席暖まるの暇なく甚だ多忙なる歲月を送れる間、岡山縣金川中學校長として、明治學院理事として、基督教青年會理事として、教育矯風の事業に盡力し、又大日本平和協會、廓清會、鐵道青年會、日米同志會、米友協會等にも關係して多少の貢獻をなせり。

大正三年、北米加州に於ける排日問題の起るや、國民黨は特に君を派遣して、太平洋沿岸にある同胞を慰問せしむ。五月二日横濱を發し征途につくや、偶々同郷の先輩にして同使命を帯びて、政

友會より遣はされたる江原氏同船しければ、渡米後も相呼應して加州問題の解決と同胞の慰藉とに盡力せり。斯くて其の使命略ぼ卒るや、東方諸州を巡歴し、更に南下して墨國に入り再び桑港に出て將に歸途に就かんとするに當り、偶々同地に開かれたる日本人大會は、決議を介して、君に在留邦人啓發運動に盡力せんことを懇請しければ、君其の意を諒とし之を快諾したりしが、恰も好し會々本邦より牧師綱島佳吉氏渡米しければ、相提携して加州沿岸同胞間に遊説盡瘁せり。斯くて在外一年歸心漸やく萌し亦禁じがたきものありしかば、同人間尙ほ君を強ひて沿岸同胞の啓發事業に従はしめんとするものありしも之を固辭し、將に行季を調べて歸途に就かんとするに當り、一夜突如病を發し突然桑港の客舎に逝けり。以下の逸話は故人の知己宮地氏の述べられしものである。

シヤトル市に於ける決死の廢娼運動 君が古屋商店に聘せられてシヤトル市に在る頃である。在留邦人は君の人格と威望とを尊重し君を日本人會長に選舉した。君は在留同胞の現状を視察し之が品位を高むるには一に彼等を誘惑する一大勢力を打破するに在ると信じ、一日演說會を開き、青年を隨落せしむる當市の一青樓を攻撃して完膚なからしめた。之が爲に青年の品行頗に改まりて見るべきもの甚だ多かつたが俠客を以て名高くあつた其の樓主は大に怒つて君を殺さねば止まぬと怒號して君に面會を申込んだ。古屋商會では之を聞いて大に君の爲に憂慮し必らずかゝる惡漢には面會し給ふなと勸

告して外出するを戒めた。君思へらく彼れ決して我を殺し得なからう。若し殺し得たならば予の死は在米同胞の品格を高むる犠牲となるのであつて決して徒死にはならない。何ぞ死を恐るべきであらうと竊かに出て、樓主の指定した某所に赴かれた。某は既に席に在つて君を待つてゐたが君の入り來るを見て突然ビストルを以て君を脅迫した。君悠然自ら兩腕を以つて胸を開いて「さあ予を殺せ」と大聲叱呼した。某は君の威光に恐れ其の人格に打たれて銃を投げ棄て、大に其の疎忽を謝したが爾來某は深く君の人格に感じて君の爲には敢て水火をも辭せざるに至つた。其後君は人に向つて「某は予の最も恐しき敵であつたが今は予の最も力ある補助者である」と語らるゝを常とされた。

救命 時は大正元年の二月最寒中の事である。服部氏は一日日暮れて後夜に乗じて令息純雄君と共に沼津千本松の海邊に散歩を試みた。然るに海岸より約一丁を隔てたる水面に何物か浮べるものがあつた服部氏は彼は人間だと云ふ、純雄君は人間ではない木片だと云つた。然し服部氏は自分はどうしても人間と思ふが故に汝は我が言を信じて海に飛込んで彼を救へと命じた。若し眞に人間ならば飛込む勇氣も出づべきであつたが、純雄君の目にはどうしても人間とは見えず且つ病氣に罹り居る際でもあり且又嚴寒中のことであつたから海に飛込む氣に成り兼ねたのは無理ならぬ事である。然し服部氏はどうしても彼は人間に相違ないからやく飛込んで救へと嚴命した。純雄君は衣を脱して海中に投

じ泳付て見れば果して一人の年若き女が氣絶したる儘水面に浮んで居るのであつた。同君は水練の達人なれば（服部綾雄氏自身は水練を知らず）直ちに之を引摺みて難なく海岸まで泳付いて其の一命を救つたさうである。

氏の人為の一端はこの二つの逸話にもよく現はれてゐるが、實に英雄的なところがある。事重要なりと見れば何時でも身命を堵さうといふ覺悟の仄見えるところ、之が服部氏の特徴であると共に凡ての偉人の共通性である。氏の親友稻澤謙一氏は始終云ふ「服部さんは何時でも死を覺悟して居る人でした」と。また氏は決して人の惡を語らなかつた計りではない、話が他人の誹謗に向ふ時には何時も聞かぬ振をして黙したとの事である。

物熟すれば自然の性を示す。
澄徹は之を葡萄に見る。
堅實は之を栗に見る。
天真露出して憚るところなきものはこれを柘榴に見る。

—藤村

七 サンダム館の焼失

出火 大正三年十一月二十四日、追々と秋が更けて校庭の大公孫樹の葉が殆んど散り盡して、朝はともすると霜の見える頃であつた。その日サンダム館二階の講堂に始めて火を入れた。いつもの通りに午前八時から各學部の授業が始まつて、第二時間目の禮拜をその暖められた講堂で三學部の生徒職員相集まつて濟ませ、再び各自の教室に戻つて第三時限の授業を初めたばかりである。其の日高等學部の二三の學生筆者はその一人が運動場に居て何の的もなくサンダム館の屋根を仰ぐと、煉瓦の煙突の傍の屋根から眞黒い煙が濛々と上つて居た。「火事だ」と告げて鐘を鳴らさせ大急ぎでそれら高等學部の學生が講堂にかけ上つて見ると、天井の西南側丁度ストロヴの鐵管煙突が煉瓦柱に入ると思はれる附近から南側にかけて燄が天井を並行になめて居た。急を知つた各學部の生徒は校庭になだれ出たが何分高所よりの出火であるため手の下しようもなかつた。

相當に古い建物であつたので、火は見る見る中に天井全體に擴がつて、最初に入つて行つた學生がヘボン、ブラウン、マコウレイ、ワイコフ氏などの肖像を取はづして下まで運び、二回目に神學部の

學生金子、間宮、八十川氏らが曾根教授と共に驅上つて、ライシャワル氏の斡旋で米國から到着したばかりの巨大なヘタルオルガンを漸くの事で届接した階段を引摺り下して、三回目に驅上つた時には最早火焰が濛々と講堂全體に漲つて居て、一脚のベンチさへ下す事は出来なかつた。それが忽ち三階に移り、二階の教室を嘗めて歴史的に重要な書類や、ミラー博士の家財道具を一杯保藏して居た一階の北側の部屋から、當時都留教授の舊約の教室となつて居た南側の教室まで、すつかり焔に埋まつてしまつた。その間約四十分もかゝつたであらうか。何分建築用材が立派であつた爲め、容易に焼き倒れず、窓ガラスが飴のやうに溶けて滴り、全館は一時焔の殿堂のやうに見えた。その燃え上つた最中であつたが、西南の風が稍、激しく吹いた爲め、火焰を神學部の校舎から井深總理邸の方へ吹きつけた。

神學部類焼 神學部の塔は焔を發して燃えそめ、見る見るうち中段から焼け落ちてしまつた。又本館の屋根からは煙のいふり出すが見え初めた。その下は一萬卷の書籍を藏した大切な圖書館である學生達は潮の様に書庫に推寄せて、凡ての窓から下の泥水の中へ雨の様に書物を投げ出した。大藏經の何百冊といふ木版本も、同じく木版の群書類従も、歴史的な聖書の翻譯書類も、マクスミューラーの印度研究書類も何もかもその災を免れなかつた。學院神學部の古い圖書の大部分が、何處かに泥の

汚點があつたり、表装の害はれたりして居るのは其の爲めである。然し幸に神學部の建物はそれ以上に延焼しなかつた。

總理邸災害　總理邸が神學部校舍よりも更にサンダム館に近いため危険に瀕すると思つたのは當然である。消防夫はその筒先を擧つて總理邸に向け、學生は邸内に躍り込んで諸道具を校庭に運び出した。忽ち總理邸は泥水に被はれ修羅場と化した。そのうち神學部の學生間宮氏は二階から投出されたトランクに打たれて昏倒した。しかし幸に同邸は燃え出さなかつた。やがてサンダム館の火焰も下火にならうとする頃、現在の笹尾氏の邸宅、當時のイムブリー博士邸の屋根から怪しい煙が立ち初めた。さてはと一同は同邸に向つて、屋根に梯子をかけ、瓦をめぐつて水を浴せたが、遂に大事には至らずにすんだ。

全體の火焰が鎮靜したのは十二時頃であつたらうか、兎も角白金臺は大變な騒ぎであつた。翌朝へボン館、セベレンス館の學生が眼醒めて橙赭色の屋根に水色の壁の美しいサンダム館の建物が消えて、ありさうにも思はれなかつた方形の大きな煉瓦の煙突だけが三本空中に聳えて、その下に眞黒くなつた柱の殘骸が累々と相重つてゐるのを見た時は、何とも云へぬ寂しさを感じた。

善後策　建物そのものゝ失はれた事は無論惜しいが、そのサンダム館の傍にあつた三本の最も古い

記念樹が、各々半身を黒焦とさせてしまつたのは如何にも傷ましく見えた。その中の一つ大公孫樹の延々と伸びたその梢はサンダム館の屋根よりも高かつたのであるが、逞ましいその枝をその後思ひ切つて刈り込んで、校庭の東南隅に移し植えたが、幸ひに生命が延ばつて、近頃は普通りとは云へないが、年々美しい緑と黄金の凋落とを見せてゐる。今一つの鬱蒼とした楠の大木は火傷を受けて二三年はだゞ半身のみを繁らせるばかりであつたが、そのまゝに生氣を回復して、今では往年のまゝの深い常緑を飾つて居る。最も酷く焼けた楨の大木は、出来るだけの手當をして其の後へボン館の玄關前に移植して翌春に幾分でも緑を吹くかと楽しんで居たが、遂にそのまゝ枯れてしまつた。今では一八八九年と鑿込んだ記念石ばかりが校庭の片隅に轉つて、在りし日を偲ばせて居るばかり。

火災後急に教室を失つた高等學部學生は、普通學部新校舎のうちに間借りをして授業を受け、集まるべき講堂のないまゝに各教室で毎日第二時限には擔任教師の指導のもとに禮拜をしたものである。因にサンダム館は一萬圓、神學部圖書は貳千圓の損害保険金を受領した。

不幸にも腦天を打つた間宮要君は當時神學部本科三年級に在學してゐたが災後伊豆大島の温泉で靜養したが健康本復せず、その後關西方面に出で實業界に入つてゐるとの事である。好漢惜しむべし、五十年を迎ふるに中り氏を憶ふ切である。

八 禮拜堂並びに高等學部校舎の建築

サンダム館の焼失は學院の宗教教育にとつて多大の打撃であつた。そはミロル氏記念の禮拜堂の破損以來全校生徒の唯一の集會場たるサンダム館の講堂が無くなつたからである。それで講堂の建築と高等學部の校舎建築は焦眉の急務となつた。

禮拜堂建築の計劃 理事會は何よりも先づ禮拜堂建築の計劃にとりかゝつた。高等學部はその當時前述の通り、バプテストミツシオンとを協力して經營してゐたため建築についても相互に尙幾多の相談の餘地が残されてゐたからである。それでまづ専門技師に囑して精細にミロル記念館を調査させ、その材料を用ひて他に原型のまゝの禮拜堂を建てるに就いて費用を見積らせた。處が材料を差引いて金參萬圓を要するとの事であつた。そこでこの金額をプレスビテリアンリフオーイムド兩ミツシオンに上申依頼して特別の臨時寄附を願つたが、兩ミツシオンの外國傳道部長なるスピーア、チャムパーレイン兩博士は現在のミツシオンの經濟状態に鑑みて臨時の支出は不可能であるが、それ以外の方法によつて學院の今回の損失を償ふためには可成的の努力は惜まないとの事であつた。學院理事會は議に

議を重ねた上で、ヴォーリス建築會社に依頼して出來うる限り經濟的な建築設計をなさせ、再度ミツシオンに交渉することゝなつた。イムブリ博士の筆になつたプレスビテリアン傳道局への上申書をその儘左に掲載する。

禮拜堂及びサンタム館建築に関するミツシオンへの

上申書 (イムブリー氏執筆)

チェンバレン氏と御協議の上の貴傳道局の決議並びに御手紙確かに拜受仕候。

現在の經濟状態に鑑み、明治學院の今回の冀願に貴局が應じかね候趣は充分諒解仕候。過去に於て貴局が本學院の爲に與へられし御援助に對して本學院理事會は滿腔の感謝を表し、且つ將來に對しても其御援助御繼續の程を切望仕候。特に貴局が本學院最近の火災に於る損失を認められ出來うる限りの善後策を講ぜらるゝ御好意を感謝仕候。今左に理事會の要求に基き左の事實を御報申上候。

前便を以てミロル氏夫妻の寄贈にかゝる禮拜堂の状態につき日本建築士の精細なる試験表を添えて申述候。其後ヴォーリス及びヴォーゲル合名會社に再度の調査を願ひ候。同社は御承知の通り、近江ミツシオンと知られし傳道事業をなすと同時に、専門的技術を以て建築事業に中るものに有之候。彼等の調査の結果は日本建築家の意見と符合致し候。彼等は何れも、現在の建物は之を先づ取壊しその材料は出來うる限り他の地域に樹つべき新建築の用材となすべしとの適確なる結論に至り申候。

サンタム館に關しては従前通りの規模は必要無之候へども、高等學部としての施設を要する外に、從來の通り、神學部の爲に二教室會計課の爲に一室を要し候。尤も後者の一室は高等學部の事務室として兼用のものと相成るべく候。

此の建築に就いてはバプテストミツシオンは借料として幾分の費用を分擔致すかと存じ候、また恐らくは「基督教會」も之に加

増致すべく候。この三者は高等學部に於て協力致し居り候。

以上の事情より二建築物を要するは焦眉の問題に御座候。理事會の依囑によりヴォーリス合名會社は以上の二建築に關し設計圖を提示申候。

(一)禮拜堂、前便に依り金三萬圓を要求申上候が、そは日本建築の見積りたる舊禮拜堂の材料を用ひて原型のまゝに再築する費用の概算に有之候。ヴォーリス氏等の設計は、舊材料を多大に用ひて、全然別様式にて、大いに理事會の意を迎へ、暖房装置を加へて一萬五千圓との事に有之候。

(二)新サンダム館 之また舊禮拜堂の材料を利用する算段に有之候。ヴォーリス氏は兩建築物は、サンダム館の地下室にボイラーを備へ、蒸氣にて暖房する様極力主張致し候。同地下室より約二百フィート隔りたる一階建の禮拜堂へは地下を通じて蒸氣を送りえらるゝ由に候。其サンダム館は調度暖房設備共にて金約一萬八千圓との事に有之候。

茲に此資金を如何にして得べきかとの實際問題に達著致し候。明治學院理事會は左記の方法を標じ申候。

一、サンダム館は金一萬圓の保險に附し、同額の金を受領致し候。新館を一萬八千圓と算すれば、そこに金八千圓の差額を生じ候。然るに近頃アメルマン氏よりの私信によればリフォード教會傳道局は進んでサンダム館の復舊のために援助し、特にサンダム女史は令兄の念を永續せしむべく必要な金額は寄附すべき心組みを有せらるゝ由を傳へ申候。就いては新サンダム館建築のために必要な金八千圓をリフォード教會に訴ふる事と相定め申候。

二、禮拜堂、明治學院理事會は、目下海軍の將校士卒の墓地となれる隣接の土地を購入し度き意向を從來永く抱き居候事は御承知と存じ候。之につき……兼てセベランス氏は井深氏に同土地購入のため金一萬五千圓の寄附をなすべき約束を致せし儀有之候。さりながら其後數回交渉を重ね候へども、海軍省に於て該地を拂下げすべきは頗る疑はしき事と相成り申候。且つ過般青島にて戦死せし將校の一人其の墓地に埋葬されたるは、何となく同省にて拂下げの意向の無きが如く思はれ候。

セベランス氏のこの特種なる條件を設けられしは單に井深氏が其意を洩して願ひたるが爲に有之候。若し當時一禮拜堂を必要とせしならば勿論同氏は喜んで其目的のために同額の寄附を申込まれし事と存じ候。右の事情より、今回本學院理事會はセベランス氏令息に對して、嚴父の約束の金を別の意味にて御寄贈御實行の程を依頼致す事に定め、また貫局に對し、氏の依頼を保証下さる様御依頼申す事と相成候。

尙 下はジェイムズ夫人が金一萬弗を井深氏との接渉の結果本學院の土地購入か改善費として爲さるゝを御承知と存じ候。將來の不慮の事件特に高等學部の施設に關し該類の金員は之を保管し置くは必要と存じ候へども、目下の場合、リフオームド教會はサングラム館の爲に八千圓の支出につき責任は負ふとは云へ、その金額も一時には支拂かね候間シエイムス夫人の金を暫時立替へて用ひたく存じ候。

學院の裨益のためこの兩建築は一日も早く實現仕り度存じ候。のみならずヴオーリス氏は二者を一時に建築せば便益經濟なるべきを主張仕候。何卒海底電信にて御返事をバラ氏まで賜り度願上候。

「チャペル」と御發信下され候はマジョンセベランス氏が兼て嚴父が土地購入の爲約束せられし金を禮拜堂建築のために廻さるゝものと承知致すべく、またバラ氏は同額の金を振出すべき權能を與へられ居り候。一九一四年九月二十四日附のリフオームト傳道局に對するチェンパレイン氏の手紙によれば傳道局の明治學院に對する關係に言及され居り、また貫下の御手紙にも同様のこと有之候へども之は追て御答へ申すべく候。勿々

一九一五年二月十六日

スピリア殿

ウイリアム イムブリー

大正四年の春から夏にかけて、井深總理とイムブリー博士とは八方に奔走して建築資金の調達に努

めた。同時に歐洲の戰雲はますます濃厚になりつゝあつたがために東洋の經濟狀態に日一日と變動を來して、建築用材ことに鐵材は殆んど破天荒の騰貴を來した。それでヴォーリス會社も當初の設計では到底引受けかねるといふ事になり、高等學部校舍に地下室を設けること、そこに暖房システムの設備をすること鐵管を禮拜堂まで接續することなどは全部撤回するの止むをえざるに至つた。それでも努力は遂に報はれて、夏のうちに地域の選定を濟ませ、九月の中旬から基礎工事が始つた。

工事 講堂は校庭の南方即ち現住の位置、高等學部は校庭の北方即ち現在の中學部化學館である。舊講堂が建設後數年を出でずして二回の地震の爲めに破壊した經驗上、新講堂の基礎工事は地下約一丈程掘下げて、そこに五尺ばかり拳大の石をたゞき込み、更にその上三尺ばかりの砂利混りのコンクリートを敷つめ、それを土臺として其上に舊講堂の石材を疊み、地上約六尺の上から煉瓦を積上げ、それにスレート葺の高い屋根を設らへ、南方の屋根に高塔を樹てたものである。建坪百十三坪六合。サンダム館は同じく基礎工事を嚴重にして地上約五尺の高さから赤煉瓦を以て積上げ、屋根はスレートを以て葺き、窓は鐵枠の鐵網入のガラス板を以て簾めた。建物七十五坪。

定礎式 この兩館の建設について忘れる事の出来ないのは、丁度基礎工事が終えて本建築にとり掛つた時分、大正四年秋未だ早い十月二十九日に恰かも申合せて居た様に北米プレスビテリアンボード

の外國傳道局主事ロバートスピア氏とダツチクフオームドボードの外國傳道局主事チェムバレン氏とが學院を訪ねて來た。學院ではそれを好機會として定礎式を行つた。スピア氏は講堂のため、チェムバレン氏はサンダム館の爲め、各々隅の首石を据える事になつた。スピア氏の据えた首石は、今でも講堂の北面記念樹の木蔭に、花崗岩に大正四年十月二十九日と掘られたまゝ残つて居る。その當時のスピア博士は氣品のある面長な顔附であり、何處かに青年らしい雰圍氣を漂はせてゐた。巨大な體格に鼠色のオーバコートを着たまゝ、その首石を据えたが後で一場の暗示深い演説をした「私は此の石を單にこのチャペルの建設のために据えるのではない、神の國建設といふ永遠の事業のために据えるのである」と結んだ。その言葉は何時迄も忘れられない。チェムバレン氏は極めて短い演説のうち兩手を天に上げ、熱心な祈を捧げてからその石を据えた。しかし不幸にして大正十二年九月の大震災の折、その校舎は甚大に破損した爲め殆んど全體の改築をしたので、折角のその首石は今は園藝部の片隅に轉つて居る。

落成 講堂は翌大正五年の三月に至つて愈々落成したので、同月二十七日丁度卒業式にその献堂式を兼ねる事とした。高等學部校舎は同年五月に至つて漸く落成したので、從來中學部の校舎や寄宿舎の一室で授業をして居つたのを其處に移す事になつた。左にイムブリー氏がセベランス氏に送つた手

紙を掲げてこの章を結ぶ。

この手紙と共に明治學院の新築の禮拜堂並びにその他の建築物の寫眞を送附申上候。

禮拜堂の容式は英國式禮拜堂と稱せらるゝものに有之候。御覽の通り石材と煉瓦にて建築されしものに候。此の石材は舊禮拜堂に用ひられしを利用し地上六尺計りの高さに積上げられ居り候。面積は大略奥行百尺幅五十尺、床には百〇四脚の腰懸けを備へ四百六十八名の生徒を收容すべく、内部の廊下には二階をしつらへそこに尙二十脚の腰懸けを並べられ候へば更に八十名乃至百名の生徒を入れ得べく候。堂内には兼て米國の教友より贈られたる一臺の精巧なるオルガン有之大いに重寶がられ候。建築の音響の具合も可成よろしく思はれ候。

御親父の御肖像は恙なく到着仕り、目下へボン博士その他明治學院の歴史に光榮ある名を残すべき數人の方々の肖像と共に理事室の壁に懸り居り候。送附申し候寫眞中にその理事室の位置を示したるもの有之候。

明治學院理事諸氏、諸教授並びに學生の名によりて、小生は御親父、アレン夫人並びに貴下の明治學院のために拂はれし御厚意に對し甚深の感謝を表し申候。

千九百十六年八月十五日

東京市にて

ウイリアム イムブリー

セベレンス殿

九 築地基本金の由來

京橋區明石町十七番地、即ちもと東京一致神學校の土地と建物とは神學部の移轉後も、米國プレスビテリアン リフオームト兩ミッション及びスコットランドの一致プレスビテリアン教會の各外國傳道局の共同財産となつてゐた。その校舎は移轉後普通の住家に改築して貸家として居たが、住家としては餘り好適でなかつたため、貸料は壹ケ年約五百圓以上は得られなかつた。

インブリー博士の動議 明治卅九年三月廿三日の理事會にイムブリー博士は次の動議を出した。

「築地十七番地の土地建物は三つの傳道局に交渉して明治學院に寄贈をうけては如何。もしスコットランドミッションが不同意なれば之を相當價額に譲り受けてもよろしからん」

理事會はイムブリー氏を理事會事務委員に擧げその交渉に當らしめることとした。

インブリー博士は米國の兩傳道局及びスコットランドの傳道局に交渉した。何れも寄贈賛成の旨を報じて來た。そこで讓與による所有權移轉登記の申請書を作つて兩國に送附したが所有者の名義變更や署名のことで幾回も遠隔の地を文書の交換をしたため非常に時を要し明治四十二年に至つて始めて明治學院理事會の所有に移つた。同年三月廿四日インブリー博士は足掛四年に亘るその經過を報告して理事會は之を受納ることゝなつた。

其の後大正六年六月卅日この築地の土地と建物とは長澤勇次郎といふ仲介業者の世話で聖路加病院長トイスラー氏に金四萬圓で賣渡された。之れが築地基金の基礎となつた。

膨 脹 篇

一 明治學院教會の設立と解散顛末

大正六年の春から學院幹部の念頭に一つの案が浮んだ。それは明治學院教會設立の問題である。之より先大正二年の頃學院では所屬の教師は全部基督者たる事といふ理想を着々と實現した。其の結果中學部の教師も大多數基督教徒に代つたが、尙一段宗教々育を徹底せしめるためには學院の諸教員が一堂に會し、かつ年來薰陶して來た學生に洗禮を授けて之を教會に連らしむる機關、即ち教會が必要であると思はれた。

大正六年十一月の理事會では其れが非公式に發表せられ諸理事の賛成があつた。七年の二月二十一日の理事會にはもう具體的な問題が公式に考へられて、

一 牧師招聘のこと

一 同牧師は學院教會牧會の傍中學部の聖書教授を擔當のこと

一 牧師候補者は新歸朝者大阪同志館神學校教授村田四郎氏たる事

と定つた。越えて三月村田氏は學院牧師として赴任した。その四月から學院大講堂で日曜禮拜が行はれ、井深總理の家族を始めとして熊野、宮地、水蘆諸氏の家族も漸次に高輪教會から轉會し、之に學院在住の西洋人並びにへボン館寄宿生を加へて會衆七八十人創立早々としては可成よい禮拜が行はれた。

中山昌樹氏の來任 村田氏が牧會一ヶ年で熊野部長が、大正八年三月中學部長を辭任せられることゝなつた。これが學院教會に打撃であつたのは勿論である。處が一つの好曙光もないではなかつた。といふのは當時京都吉田教會牧師で、篤學の士の中山昌樹氏が學院に赴任することゝなつたからである。同年五月の理事會で滿場一致の推薦によつて來る九月から村田四郎氏が熊野氏の後をうけて中學部長たる事となつた。従つて九月以後は中山昌樹氏が代つて學院牧師たる事となつた。

隆盛期 その後井深夫人、ビルク夫人、ダンロップ夫人、マコーズランド女史、ラインシャル夫人が中山夫人や村田夫人を援けて婦人會を起したり、特別傳道會を催したりして、漸次教會の體裁を備へて來た。處が越えて大正九年二月中學部には同盟休校の不詳事が起つて、その結果四月には村田氏

が學院を去ることになり、中山氏單獨で牧師と中學部の宗教々育を擔任することになった。然し學院教會は左程寂れもせず、同年十月に催された世界日曜學校大會の機などには學院日曜學校は鉛筆デーに参加したり、日比谷の大會に出席したりして相當に活動した。また中山夫人なども始終諸教授の夫人達と連絡をとつて教會の事業を助けられた。

衰潮、解散 處が大正十年三月頃から幾分寂れそめた。それは井深總理がその月に辭任せられて、次いで六月には白金三光町に越され、ダンロップ氏が伊勢の津に轉じ、マコウズランド女史が神戸に去り、驚山が日曜學校々長を辭した。そこで當初の理想、即ち教職員の教會に於ける統一も實行困難になり、學生の訓練とてもヘボン館在舍生と幾分の有志者の會合あるのみで大多數の生徒には左程の關聯がなくなつた。また従つて教會の財政も追々と窮乏することゝなつた。そこで震災の年、大正十二年二月の總會の席上、種々と協議の結果遂に解散と定つて學院教會は五年の歴史を残して止むことゝなつた。衰調の理由 按ふに學院教會がかやうな自然消滅の形に至るには大體三つの理由がある。

- 一、會員に社會的多種性の缺けたる事
- 二、會員に人間的多種性の缺けたる事
- 三、學院と學院教會との關係の明瞭ならざりしこと

教會は一つの社會相を備へて、そこに學者も軍人も會社員も學生も居り、また高位高官のものも何の名もない匹夫も居てそれらが皆神の前には等しき兄弟であると自覺しうる多様性がなければならぬ。學院教會には之がなかつた。教師と生徒、せいゝ教師の家族と生徒とである。之では單調であるのみではない、生徒が眞實の靈魂の自由を感じることが困難である。教會には、老、壯、青、少、幼の男女があつて、渾然とまた一社會相を呈して居る必要がある。誕生、結婚、新らしき誕生、また葬儀がなければならぬ。數年の教育を終へて轉じて行く學生は教會の大切な筋肉でこそあれ、その骨子ではなからう。學院教會にはその老幼男女の多様性と會員の定住性が缺けて居た。また其時までの學院教會は一面は學院のものゝ如く、一面は獨立せるものゝ如くその關係分明でなかつた。それは教會員の教會に對する責任感を曖昧にした惧れがある。學院當局も何れの點まで教會を扶持援助すべきか、不明であるため種々の點で了解の缺ける處があつた。かうした様々の原因が遂に學院教會を自然消滅に至らしめたものである。この氣勢の上らない教會を四年間も牧せられた中山昌樹氏の勞こそ今更回顧して多とすべきである。

二 學院創立四十年記念式

大正六年十一月三日、學院は丁度創立四十年に相當した。そこで全日を捧げて盛大な祝賀の催しをした。此の日天氣は晴朗で京濱間の基督教界、教育界の名士、同窓生の多くが學院にたて置めた。午前九時から開かれた記念式は大講堂で井深總理司會のもとに開かれたが順序は大體左の通りである。アンドリウス夫人の奏樂、學院高等學部教授ランデス氏の開會の祈禱、山本秀煌氏の聖書の朗讀、オルチン嬢の獨唱、勅語奉讀、君が代の合唱、井深總理の記念式の辭、熊野部長の感謝の祈禱、これについて祝辭が呈されたがそれは次の順序であつた。岡田文部大臣(代讀)、東京府知事井上友一氏、日本基督教會總務局代表として富士見町教會牧師植村正久氏、諸高等基督教學校代表として立教大學々長元田作之進氏、之に次いで十五年以上勤續の諸教授に記念品を理事長オルトマンヌ博士から贈呈して表彰感謝の意を現はした。その諸教授とは次の通りである。ジョン・シィ・バラ氏(三十七年間)井深總理(三十五年間)イムブリー博士(四十年間)ランデス教授(二十一年間)熊野部長(二十四年間)河西銀之助氏(十六年間)岡見正氏(十六年間)宮地謙吉氏(十五年間)その後プレスビテリアン、リフオーームド兩ミ

ツシヨンを代表してモリー氏とジエームス・バラ氏神學部及び高等普通兩學部を代表して石原保太郎松井安三郎の兩氏が祝辭をのべ、校歌合唱のうちにライシャル博士の祝辭を以て式は閉ぢられた。午後は運動場で記念陸上運動會を開いたが、校内の所々方々にはしるこ、おでん、すし等の賣店が設けられ、高等學部新校舎には美術展覽會、中學部校舎には古物展覽會が催されて、大いに來會者の興を添えた。また運動場の方では總委員長都留仙次氏の統御のもとに教員生徒全員擧つて、全部二十四種八十二回に渡る競技競走を演じた。長い秋の午後を生徒の父兄近隣の人々が運動場を黒山のやうに圍んで學院當局も全く豫想外の盛況を喜んだ。夜はまた芝の三緣亭に京濱の同窓八十餘名が集つて改めて祝賀の宴會があつたと傳へられる。

ジエームス・バラ氏 思へばこの日リフオームドミツシヨンを代表して大聲熱心に演説されたジエームス・バラ氏はあの時が吾々にその姿を現はした最後であつた。文久元年の秋、二十六歳の青年宣教師として日本に渡來し神奈川に上陸してのち實に五十七年間、博士は文字通り身も魂も捧げ盡して日本の傳道のために奉仕せられた。熱誠焔のやうな氏の説教は、新日本に基督教を移植するには實に屈強な力であつた。ことに明治五年の一月の初週祈禱會以後横濱海岸通の小會堂(今の海岸教會)に起つた信仰勃興と博士のそれに對する功績とは日本基督教會の永遠に忘れることの出來ぬものである。我國

基督教界の巨星であつた植村正久氏が悔改して洗禮をうけたのも押川方義氏、熊野雄七氏、吉田信好氏等が基督教徒となつたのも皆このバラ氏の熱誠に動かされて決心したものであつた。この外京濱間に於て、また伊豆半島の山間僻地に於て、博士に導かれて信仰の生涯に入つたものがどれ程多いか解らぬ。昭和の今日まで、御殿場、三島、柏久保等の老齡の信徒達は明治初年頃の博士の風格を感慨深く語り傳へてゐることによつても知られる。またこの明治五年の小會堂の信仰勃興が日本基督公會の組織される發端となり、それが長老會と併合して一致教會となり、現今の日本基督教會となつた経路より見れば、博士は明らかに吾々の教會の創設者の重要な一人であつたことは明らかである。

一本松の祈禱所 東神奈川の山手廣尾臺に一本松といふ小丘がある。古墳でその頂きからは東京灣を隔て、總房の山々から武藏相摸の平原が一眸のうちに見渡される。來朝直後の頃、バラ博士は朝な朝なこゝに登られては日本の救ひのために祈られたと傳へられてゐる。博士は、この四十年記念の日三十七年の勤績を表彰されたジョン・シート・バラ氏の令兄として、また學院の永年の理事員の一人として我教會の偉大な功勞者の一人として忘れられまじき一人である。

ジョン・シー・バラ教授 ジョン・バラ氏は前述の通りゼイムス・バラ氏の令弟で、明治六年頃横濱の高島學校の英語教師として來朝せられた。最初高島嘉右衛門氏が獨力で右の學校を設立した時宣教師

ゼイムス・バラ氏を英語教師に依頼したが、同氏は令弟ジョン・バラ氏を推薦して自分に代らしめた。其後高島學校は廢校と成つたがバラ氏は歸國せずに米國プレスビテリアンミツシヨンの人と成つて當時横濱三十九番にあつたへボン家塾の教師となつた。それが明治十三年に東京築地居留地六番に移轉し校舎を新築して築地大學となり氏は其校長と成つたが、それが恐らく同氏の全盛時代であらう。それから明治十九年に一致神學校と合同して明治學院が設立せられた時、同氏は普通部の教授と成つて英語數學天文等を教へ且會計を兼ねて學院の爲に盡力せられた。最後まで學院の構内に居住せられたが、晩年には教授を辭し主としてミツシヨンの會計事務を擔當せられた。

ジョン・バラ氏は明治初年に於る實際的英語の良教師の一人であつたに相違ない。而して教師としては随分嚴重であつたが、弟子等に對しては親切であつた。特に同氏の秘藏弟子とも云ふべきは石本三十郎、服部綾雄の二氏であつた。その他同氏の教育を受けて後日社會に顯はれた人は決して鮮少ではない。ジョン・バラ氏は獨り我が明治學院ばかりでは無い。日本の英語教育界の一恩人と云ふも過言でなからう。大正八年の暮から氏は赤血球減退症を病まれ、白髮赭顔の美しい氏の散歩姿は學院の構内から消えた。越えて大正九年十一月十五日、鎌倉の地に永い奉仕の生涯を終へて永眠された。

三 熊野雄七氏の晩年と永眠

勤續二十五年祝賀 大正七年五月十八日の午後學院の大講堂に在學生や教職員や高輪教會關係の人々やもう白髪と同窓や、齡を重ねた横濱共立女學校關係の婦人達がぎつしりと集つてゐた。それは明治二十六年四月以降本學院幹事として杉森此馬氏の後をうけて、學院萬端の事務を管理し、理事會の書記として重要な責務を盡し、後は専ら中學部長として子弟を善導した熊野雄七氏の勤續二十五年祝賀の日であつたからである。

學院に來られて後の先生は大切な御長男、また令嬢をも失はれた。残る一人の後繼の令嬢も病の犯すところとなつて隻足の御不自由な身となられた。けれどもさうした度重なる悲痛事が先生の靈魂を淨化したものか、さては天に召された御息や令嬢に對するの愛が學院に學ぶ青年達の上に注がれるやうになつたものか、兎も角學院に學んだ人々は何となく父老に對するやうな懐かしみを以てこの先生を追想しないものはなかつた。この日京濱間の古い同窓の外共立女學校や以前の臺町教會關係の人々まで集つたのは、やはりかうした先生の人格が引つけたものであつた。遂次行はれた式も只一片の

型の如くではなくて、何となく真心の流露したものであつた。

奏 樂

山下忠五郎氏

祝 辭

學生總代 山田總一郎

聖書朗讀

河西銀之助氏

卒業生總代 牧田彌太郎

祈 禱

山本秀煌氏

教員總代 水蘆幾次郎

音 樂

山下忠五郎氏

音 樂

グレゴリバンド

祝賀言主意

石川林四郎氏

イムブリー氏

會計報告

宮地謙吉氏

祝 辭

井深梶之助氏

紀念品贈呈

村井五郎氏

大村伯代理 田川誠作氏

校 歌

一 同

音 樂

小林喜久七氏

挨拶

熊野雄七氏

記念品として贈呈したのは、同窓間で醸金した金のうち貳百七拾數圓を投じて購つた時報の鐘音の入つた懐中金側時計であつた。殘餘の約七百圓の金は部長に贈る筈であつたが、部長の發意によつて其内參百圓を割いて 光線器械を購入され學院の理科室へ寄贈されることゝなつた。其夜は東京ステーションホテルの大食堂で紀念の晩餐會が催された。集るもの七十六名、主賓としては熊野部長の外令夫人、香遠留夫人(令嬢)が招致されて、老若の同窓生や教職員や舊い友人知己が取圍んだ。辭任 部長は此の祝賀式のあつた頃から、めつきり健康を落された。講堂で訓話の最中でも時折咳

をされて苦しうに胸を撫でられることがあつた。その爲か翌大正八年二月の理事會に「老類職に堪えず」との理由で辭表を提出された。その辭表は一旦特別委員に付託されて研究されることゝなつたがその特別委員はやがて次のやうに理事會に報告してゐる。

一、氏が齡を重ね健康勝れざる今日是最善の方法なりと思惟す。されど吾人また多くの遺憾なき能はず。過去二十有餘年の熊野氏の忠實献身的なる勞作を思へば今日の事は極めて遺憾なり。

二、學院の恩給規定によりて受くべき恩給を別にして生涯毎月金五拾圓を贈與する事。

是は理事會で可決され、その三月三十一日限り永年の幹事及び部長としての職を退かれることゝなつた。

同窓生募金運動に起つ 之を傳へ聽いた同窓會では早速幹事會や評議會を數次重ねて可成に廣汎に渉る募金をして、熊野雄七氏の隱退を慰勞する計劃をした。大正八年四月に全國的に頒布したその主意書の一部を摘録して見る。

一口に二十六年とは申しますが、先生の生涯のゼベストバートは定義通りに明治學院に於て費されました。その間には先生の御家族の上に困難が幾度となく來てはまた残りました。しかしさういふ艱難と苦痛とは先生の愛をます深く強くして學院に導かれた青年の上に集中せしめたのであります。さうして講壇の上で召されたいといふのが先生の唯一つの望みでありました。ところが突然「老齡事に堪へぬ」といふ理由を以て、先生はその唯一つの希望さへお棄てになりました。

學院をお退きになるのは先生にとつて現世に於ける安住と慰藉から離れることであります。學院に在職せられた間、先生は自己と御家族とについて餘りにお構ひなさらなかつた如く、この先も何一つ御自分に奉ずべき財産上のお支度がありません。かういふ場合に學院は學院として最高の敬意を表されたやうであります。私達はまた先生の友として弟子として爲し得る最上の献けものを致したいと思ひます。住宅、發起人會はその第一事業として住宅を、もし出來うるならば敷地をも併せて差上げることに決りました。只今のところ先生は學院の教師館にお住ひですが一日も早くそこをお立退きにならねばなりません。どうぞこの事をお含みの上私達の發起に御賛同下さいませ。

一 寄附金總額最低限度を金七千圓とす。

一 釀金の單位を一圓、五圓、十圓、五十圓、百圓、五百圓とす。

一 拂込期限を大正八年十二月末日とすること。

一 送附先は東京市外下澁谷一五一五河西銀之助、

發起人井深梶之助、和泉彌六、一色虎次、西村庄太郎氏外百七十九名、賛成員 岩永郷子、渡邊暢、松林伯知、島田三郎諸氏他二十六名

建築 一方に募金をする傍、水蘆幾次郎氏を建築委員長とし、河西、都留、園部の諸氏が百方奔走

して、相模灣を隔て、富士を眺める葉山堀の内五五〇番地に地所を朴して建築に着手した。そして八

月の十日頃に大體普請が出来上つた。

一 木造瓦葺平家建坪二十一坪、間敷五つ、附屬建物、物置、便所

その建築費は左の通りであつた。

一金參千九百四拾圓

本宅建築費

一金百七十六圓

門垣根井戸其の他

八月一日現在の募金高は合計四千九百五十五圓でその後の募金をも加へ一切の諸費を引いた約一千圓の金をその歳の暮に慰勞金として熊野雄七氏に贈呈した。

訣別 忘れもせぬ大正八年九月二十七日の丁度晝休みが終つて學生達が午後の課業のため校庭に列んだ時である、熊野前部長は中學部の玄關に立なれて最後の訣別の辭を述べられた。私は三十年近く此の白金の土地に住んで大勢の學生諸君に親しんで來た。私にとつて其れが自然の生活であつた。今日を限りに私共一家は葉山に越して行くが、何となく不自然な思ひに堪えない。どうか諸君は神を信じて眞面目な生涯を送る準備をこゝてしてもらひ度い。」と簡単な訣別の辭を述べて如何にも淋しさうに去られた。

永眠 大正十年の春から氏は腎臓に故障を來たして何處となく氣分が勝れず、其の上心臓にも故障があつて、遠路などは出來なくなつた。歳が變つてからは最早病床に就き切りであつたが、五月八日熊野氏は井深氏を電報で招かれて後事を託された。其の五月十日午後一時過ぎに極めて平和に御家族に看れながら永眠せられた。時に氏は七十歳遺骨は井深氏への遺言の通り十二日の日に學院講堂に運

ばれて、極めて尊嚴な葬儀を行ひ青山の墓地、父亨堂氏の墓石のもとに葬られた。

四 熊野與氏と熊野雄七氏

與包清氏 天保十一年二月肥前國大村藩の舊臣井石作左衛門橘英彦の三男橘雄三郎俗稱與氏が年齡二十歳で大村藩の客臣平四郎包隆の二女美屋の聳養子となつた。平家は大村の近邑福田の歴代の領主である所から、その聳養子の姓名を福田與包清とした。之が學院の永年の幹事熊野雄七氏の嚴父である。嘉永元年正月此の與氏は藩命をうけて江戸に出て昌平校及び安井息軒の塾に漢學を學び、居ると三年嘉永三年十二月歸國して、翌年六月藩の學校五教館の學頭を拜命した。その後慶應年間に至る迄多端な政變機のこととて或ひは江戸詰となり、或ひは長崎用掛となり、軍制改革掛となり、境奉行となり身邊實に多忙を極めた。慶應四年六月西京の中央政府から奥州征討のため大村の藩兵出動の旨が傳へられた。重臣福田與氏は藩主の命を奉じて即刻英汽船に乗じて鹿兒島に赴き汽船借用の件を島津家の執政伊集院氏、參政伊知地と數次交渉を重ねたが該藩も船舶缺乏の故を以て目的を果さず陸路急行歸藩して藩主と長崎奉行とに復命した。こゝにやむなく大村の兵士は帆船に乗じて奥州に出動す

ることゝなつた。

雄七包文氏 慶應四年(明治元年)六月十六日大村の藩兵を乗せた一帆船は長崎を發锚して東に向つた風運順調七月十一日船は江戸灣に投錨、翌日天朝錦章と大惣督府印章を賜はつて、愈々官軍の旗をかざして奥州征討に向ふ事ゝなつた。この大村の軍中に年齢十六の見るからに由緒ある青年武士が居た。それは平氏福田雄七包文氏であつた。七月二十五日船は奥州小名濱に到着、直ちに上陸して三春の城を陥れ、先發の土佐長州の軍と合して會津若松の牙城に攻めよせた。九月の中旬愈々その鶴ヶ城を觀望する小田山を占領して大砲を備へて砲撃を開始したが同月二十三日に到つて遂に落城松平容保公は官軍に城下の誓ひをなすに至つた。其日城中には切齒する井深梶之助氏、小田山には鯨波を揚げる福田雄七氏が居た。

廢藩置縣と福田家の改正 奥州は平定して大村の兵士はその歳の十一月皆國に歸つた。やがて大政は奉還され年號は改められ、列藩また續々藩藉を奉還するに至つた。福田氏の所領もまたその例に洩れなかつたがために明治五年廢藩置縣の際、福田家は改められて熊野家となつた。それはこの福田の領主たる平氏は凡そ八百年の昔、紀伊國熊野に一領土を有して居たが何時の頃よりか九州大村の客臣となつたからである。

雄七氏の修學とその後　これよりまへ、明治三年に雄七氏は藩から拔擢されて一瀬勇次郎外一名と共に留學生として東京に出る事となつた。外輪の飛脚船に乗つて横濱に來り、次いで東京の安井息軒氏の門に入つて漢學を學んだ。所が修學一年感ずる所あつて慶應義塾に移つて英學を初めたが、外國人に就く便宜上明治五年横濱に出てジェームス・バラ氏の門に入つた。其の時分横濱海岸教會ではバラ氏の下で目覺しい基督教信仰勃興の氣運が到來して居たが、熊野氏は或日バラ氏のサマリヤの女に關する熱誠な説教を聽くに及んで、死を決して洗禮を受けた。明治六年にバラ氏の下で英學生は山手二百十一番のブラウン塾に移つたが、氏も亦其處に移されて英學の外基督教神學の勉強を山本秀煌氏や井深梶之助氏等と共に修めた。明治八年の事であるが、一旦大村に歸られてそれ迄國に止つて居た嚴父與氏母堂及び令閨を伴はれて横濱に越して來られた。其の時十三歳の秀才な童子が熊野家に大村から伴はれて來たが、それは後の石本三十郎氏であつた。與氏は其後先志學校で漢學を教授された。

明治十年に井深、山本、植村、雨森氏等は東京築地に新しく設立された一致神學校の方へ移つたが氏はその少し前、明治九年から同十一年まで東京府の學事課に勤務された。その後山手二百十二番の共立女學校の幹事として基督教教育事業に専念することとなり、また井深、植村兩氏等と個人的な關係を續けて、互に呼應しては基督教の傳道に間接直接につとめて居た。明治十九年三校合併によつて

明治學院が生れ、最初の理事員會を組織した時には氏は選ばれて其の理事員の一人となつた。併し未だ共立女學校の幹事として居宅は横濱にあつたものである。學院が白金に移つて後、幹事服部綾雄氏が二十一年にして去り、杉森此馬氏が其後を享けて居たが、二十六年の三月に氏が去る事となつて井深氏は熊野雄七氏に懇請して學院の幹事職を繼いでもらふ事となつた。以下熊野氏の言葉によつて當時及びその後の氏の活動の消息を知らう。

その交渉に井深氏が態々横濱まで出むいて來られた。そして明治學院の事情を具さに物語られた末是非私に來て働いて貰ひたいと鄭重なる招聘の辭を述べられた。私は自分が専ら女子教育の衝に當つて居たのと、此の事が餘り突然であつたのとで、少からず躊躇をした。それに共立女學校の總理クロスビー氏や前校長ビヤソン氏や現校長ブルックハート氏等が此のことを耳にして、私の轉任は以ての外だと激怒したりしたので私は大いに去就に迷ふた。或友人の如きは當時私に忠告して、「一體君に幹事など、云ふ細い事務がつとまるものか、君は大様茫漠なる男だから女學校に居る方が適任だよ」など云ふて呉れたこともあつた。

けれども私は終に意を決して明治學院に來ることにした。それは井深氏とは明治五年以來親身の兄弟の如く友誼を結び雙方の家族も互に往來し血族も及ばぬ程親密の間柄であり其の事業の幾分なりと

も助け得るのは友人の道であると考へたからである。私がこの事を打明けてお談しすると井深氏は萬事を了解して、直接共立女學校當局者と談判を重ねられた結果、或る條件を附して圓滿なる手續のもとに上京して本學院に奉職することになつたのである。

奉職するからには、及ばず乍ら大いに成す處あらうと、少からぬ抱負をもつて來たのであるが、事多くは志と違ふもので、其の當時我が日本は歐化主義反動の時代とも云ふべき時で、明治十六年から二十年頃に亘つて西洋のものなら靴底の釘でも有難かつた時代のあとに、其のおそろしい反動が來て井上哲次郎博士其他有力なる人々は極力外人の設立にかゝる學校は國家に害ありとも益なしと云ふ様な意見を發表せられた所が、不思議にも其の意見が社會に多大の注意を惹起することになつた。そして社會の注意が其方に向けば向く程本學院の生徒は日毎に減少するばかりとなつた。ある時の如きは生徒が唯四十三人だけのこともあつた。今とは違つて物價の極めて安價な時ではあつたが、毎月の月謝の總収入が五十圓に足らなかつた位で、一人の教師の俸給にも足りない程であつた。

加之、他には文部省の認むる中學校が雨後の筍の如く簇出して、其の爲め、生徒は益々其の方に吸収されることになつて仕舞つたのである。そこで當局者も從來の課程を變更して中學程度とし稍面目を改めたが又々一大打撃を受けた。それは官公私立を問はず大中小學校に於て宗教々育及び儀式は課

外なりとも之を行ふことを得ずとの嚴格なる宣告をうけたのであつた。この宣告は我々基督教を基礎として立つて居る學校關係者の間には多大の問題を惹起して來たのである。我が學院内にも様々の説をたつるものが起つて、中には本學院を純然たる文部省令に依る中學校となさんとする考を抱くものもあつたが、井深總理始め、本學院當局者は斷乎として其議を排し舊來標榜する教育主義を充分斟酌考慮した結果、如何に社會の迫害を受けても、如何に孤城落日の衰態を來たすことあるも其の主義を賣るわけにはゆかないと提論せられ私も滿腔の賛同をなし、愈々我學院は斷然基督教主義をとつて動かぬことに決するに至つた。しかし其の結果は益々學校の衰微を來したので憂苦煩悶井深總理に諮り其責を負ふて職を辭さうとしたことは決して再三に止まらなかつたのである。

が、遂に忍耐は勝利を博さずには居られないものと見える。世は一陽來復の春を迎へて、宗教に對する要路者の偏見も次第にうすらぎ相當の了解も成し得る様になつたので、此の機を外びさず井深總理を主とし私も文部大臣以下普通學務局長などにも直接面會して數度の交渉を重ね、今や漸く他の中學校と殆ど同様なる總べての特權を附與せられて校運日に増し隆盛に赴き、幸ひに社會の信用を博することを得て、唯今は生徒も滿員の盛況を呈し、新入生を收容する餘地なき程になつた。

今にして回顧すれば悲喜交々至れる場合曲折重疊たる所を、覺東ない乍ら、終始一貫基督教主義を

立て通して來たところに云ひ難い愉快はあるが、資性頑鈍無能不才私の功その間擧ぐべきものなく寧ろ過失のみ多かつた」

一方又氏は非常に教會の事業を愛せられて横濱に於ては海岸教會の中堅として、東京に移つては臺町教會其の後身たる高輪教會の長老として、精神的に財政的に多大の貢獻をした。氏の人格は實に大人の面影があつて、其の家庭に或は財政的に、様々な悲惨事や困難が襲來しても、決して其れに屈託して居る様は見えなかつた。薄給の身ながら寄宿の學生を屢々招いて馳走をしたり、同僚を饗應したり、苦學生には學資を與へたり、實に寡慾恬淡、おしげなく他の幸福の爲めに與へた。又仲々嚴格に生徒を叱正したが、何處が氏の心根には情けが籠つて居た爲めか、不思議に叱られた者共こそ今日まで氏の徳を慕つて居る。或る學生の如きは禮拜堂の聖書をストロヅに投じたが爲めに、流石に氏の一喝の下に退校を命ぜられたが、其の後其の者の逆境に處したのを見て色々と援助を與へてゐた。今でも氏を生涯の恩人と感じて居ると折ある毎に告白して居る。

因に残された家族の夫人さく子、女香遠留子、婿吉次郎氏等は今みな健全で居られる。

五 「蒲公英と廢墟」その他

市川 一男

○ 蒲公英と廢墟

雨上りの和やかな陽に若草が萌え立つて蒲公英の花が星の様に簇り咲いてゐた。不思議にくすんだ赤煉瓦のもつ紫色の陰影、破れた窓の色硝子、塔をかすめるとぶ白雲、田舎の小學校を出たばかりの私はあの半ば毀れた舊講堂の裏の草原に寝ころんで、この異國的な氣分に心ゆく迄陶醉したのである。

○ 金さんの下宿

私の編入された一年のB組に金さんといふ朝鮮から來た二十五六の人がゐた。試験の時烏打帽子に折襟の背廣なんか着て來たので監督の先生かと思つてゐたが一年生だつたので驚いた。年をとつてゐることや朝鮮の人だといふ事などによる好奇心と金さんのもつ不思議な愛嬌で金さんはいつか級の人氣者になつてゐた。金さんは二本榎の西町邊に下宿してゐたが正午になると飯を食ひに歸つた。或日

「蒲公英と廢墟」その他(寄稿)

の午休みのこと私達數名の仲間が相談して午休みに金さんの下宿へ遊びに行かうといふことになつた皆でお金を出し合つて正門の前の團子屋でお團子を買つて金さんの下宿へ押しかけた。狭い部屋へ多勢どか／＼入り込んだので丁度食事中の金さんは大分面食つた様子だつたがそれでも愛想よくお膳の上のするめなど焼いて私達をもてなした。誰かゞ机の上の寫眞立の朝鮮婦人を「誰ですか」ときいたら「僕のカナイです」といつて人の良ささうに微笑した。その中に誰かに齒磨入れをおもちやにして部屋中齒磨だらけにして了つたが金さんは別に怒らなかつた。こんな風にさんざ遊んで一時近くに私達は金さんを真中にしてワイ／＼ふざけ乍ら學校へ歸つて來た。そして門へ入らうとする所でバツタリ生徒監の上田先生につかまつて了つた。大尉の軍服を着て丸腰の先生は例の負傷された食指を差し出し乍ら何とか恐ろしい聲で怒鳴られた。「外出するなど、けしからんこつちやへ來い」といふ様な事で今までハシヤイでた連中もすつかり悄氣て了つて神妙に先生の後について生徒監室へ引つぱり込まれた。先生の權幕が餘り激しいので一時はどうなる事かと心配したが結局「以後注意しろ」で放免された。然し金さんは晝飯に下宿へ歸ることを禁ぜられ辨當をもつて來る様にと申渡された。金さんはそれからよく天井や親子井など取寄せて正午に食つた。私達はそれを又面白がつてよく飯を食つてゐる金さんの机の所へ行つて種々な話を聞いたりした。

○雀とインク瓶

その頃大久保さんの店で食パンにジャムやバターをつけたのを賣つてゐたが私達は家から辨當を持つて來ずにそれを買つて食べた。それが又如何にも中學生らしく思はれて得意だつた。そしてそのパン屑をよく教室の窓から外へ捨てた。私の教室は中學部校舎の一階の北端で私はそのへボン館寄りの窓際に席があつた。宮地先生の英語の時間だつたがフト外を見ると窓の下にちらばつてゐる例のパン屑を雀が頻りに啄んでゐた。私は先生の眼を忍んで机の上のインク瓶を掴んでその雀に投げつけた。瓶は眞ッ直ぐにとんで雀の背中へあたつた。雀はころりと倒れて死んで了つた。瓶を投げた私自身も無論命申する杯とは思つてもゐなかつたのでこれを見ても一寸信ぜられない位だつた。近所の者が氣づいてワイ／＼騒ぎ出した。先生も講義をやめて「どうした？」と窓際へ來られた。私は是は困つた事になつたと思つたがどうしやうもないので立つて「雀にインク瓶をぶつつけたら死んで了ひました」と白状した。先生は温顔に微笑を浮べられたが別に叱りもされなかつた。私はそれでほつとしたがそれからの先生のお話なんか耳にも入らなかつた。パン屑と一緒に倒れてゐる雀が早くとりたくて、終業のベルを千秋の思ひで待ち焦れた。

○屋根裏のお洒落さん達

「蒲公英と廢墟」その他(奇稿)

私が五年になつたとき白金學報の編輯委員になつた。今門司にゐる熊岸君と仙臺にゐる鶴飼君とが相棒であつた。部長は三浦先生が洋行でやめられて石本先生であつた。私達は良い雑誌を作るには氣持のよい編輯室を要するといつたわけの方々物色し遂に中學部の三階の屋根裏に型ばかりの編輯室を作つた。そこは物置になつてゐるのでいろ／＼の物が雜然と置かれて晝でも鼠が跳梁してゐた。私達は東の採光窓の近くにテーブルや本箱を並べ三疊ばかりの小さい部屋をつくつた。そこは中學部の玄關の眞上で直ぐ下は教員室であつた。芝生をへだてた神學部の横からは遙かに品川沖の白帆を數へることも出來た。私達はそこへ納つて「偉人は屋根裏より生ず我が白金學報は屋根裏より生る」ナンテびらを貼つて得意になつてゐた。するとこゝに思ひもかけぬ事が起つて私達の安住の地を亂されることになつた。某といふクラス切つてのハイカラな男がどうかした拍子でこの編輯室を知つて始終遊びに来る様になつた。それも初めは休み時間に来るだけであつたが終には教室へ出ないで一日そこに入浸つてゐることもある様になり、自分のグループの連中を多勢ひつぱり込んでトランプを初めたりし出した。人の善い私達はこの侵入者に對してどうすることも出來なかつた。彼等は何れも非常なお洒落で高いカラーをし折目正しいズボンを穿いてゐた。そしてひまさへあればのみあげを刺つてゐた。私達が事務をとるべくもつて來たテーブルの上には鏡が立てられ安全剃刀と石鹼箱が載せられてあつ

た。低い天井を紫の煙が緩やかに這つてゐる様なこともあつた。

私達の建設した屋根裏の理想境はかうした思ひがけない事件でそれなりになつて了つたのである。

私が卒業する間際になつてある不祥な事件が突發した。眞に突發であつた。私達は事件の眞相も知らずに騒ぎ廻つた。私は今でも全くその事件の眞相を知らない。恐らく誰もほんとには知らないのだらう。私は今になつて當時の事を考へると言ひ知れぬ不愉快さを理由なしに覺える。金さんの下宿や雀にインク瓶を投げてゐた夢の様な生活にはこの不祥事を境にして全く私の前から姿を消して了つたのだ。それからずうつと夢のない生活を今まで否これから又ずうつと私は送らねばならぬ様だ。言ふ勿れ、それが人生だと。私はたゞしみくく昔の夢をなつかしみたい、蒲公英よ、金さんよ、不幸な雀よ、そして我が親愛なお洒落さん達よ。

六 膨張しゆく中學部

大正四年二月に從來普通學部と稱してゐたものが中學部と稱する様になつた頃から、學年を重ねる

につれて偉い勢で學生の數は加つて行つた。この入學志願者の激増の理由は、必ずしも明治學院の標榜する基督敎主義の教育が社會に認められたからではない。世界大戰の影響によつて我國の富の力が著しい進展を來したため、子弟に中等教育を授けることを殆んど中産階級の者の常套事と考へるに至つたためである。それゆゑ中學校といふ中學校には入學期に志願者が殺倒する有様となつた。然し、公立學校に比して私立學校は遺憾ながらその施設が劣つてゐるがために、前者にその殺倒率の多いのは當然である。けれども、明治學院の五十年史にとつてこの最近十ヶ年間に一年級入學志願者が收容力の二倍三倍に増加したことは刮目すべきである。今左にその増加率を數字を以て示さう。

	在學生數	入學志願者數	入學者數	教員數
大正六年	四七一	一五七	一二二	二四
大正七年	五四一	二〇五	一四九	二七
大正八年	五六六	二六二	一七二	二八
大正九年	六六五	三六五	一八一	三四
大正十年	六六五	四二一	一八〇	三一
大正十一年	七一三	五五〇	一七九	三一
大正十二年	七九五	三六一	一七五	三一
大正十三年	七八九	四三五	二〇五	三四

大正十四年	八一〇	三四二	二〇二	三三
大正十五年	八三一	三〇八	二一八	三四
昭和二年	八九九	四三三	二五一	三八

右の表中大正十二、三年度に於て二回連續の減數を見るのは勿論大震災の影響が然らしめたものである。それにも拘はらず七年以後昭和二年迄の増加人員を平均して見ると一年四一・五の割で昇つてゐる。もし此の割で人員が増加して行けば、一千名に達するのは焦眉の間である。

かやうに膨脹して行く時、自然の勢としてその管理上訓育上種々の困難が起る。その困難は延いて學院の人事上の問題に波瀾が生ぜしめないわけにはゆかなかつた。膨脹が波瀾を來らしめたのか、果、人事上の波瀾期に膨脹が臨んだのか、何れにしてもこの一期には學院五十年史上稀に見る頻繁重大な交迭が行はれた。

屋内體操場の建築 以上の學生の激増に備へるため、中學部では大正七年の十月の理事會へ既存の屋内體操場を教室に變更してそこに二教室を設け、新たに屋内體操場を設けることを提議した。その費用として約二萬圓を請求したが、詮議の上ゼームス基金二萬圓を之に當てることゝなつた。工事は竹田組が一萬八千九百圓で請負つた。木造一階建コンクリート張百十二坪、床は全部米國オレゴン松材で一本も表面より釘を用ひずに張つた。大正八年七月竣成し、八年の第二學期から使用するに至つ

た。今日の雨天體操場がそれである。

舊屋内體操場は八年四月から教室として用ひたが、仕切りの壁の不完全であつたために教室相互間の音響が洩れ非常に不便を感じた。九年に至つて從來の理科教室と、實驗材料室とを二教室に改造して、こゝに生徒を移し、前の二教室は材料室と理科教室とに改造して用ひるに至つた。

過渡期 大正七年、熊野部長が辭意を抱くやうになつた頃、實際問題としても學院中學部の校規はやゝ緩漫にすぎたやうに見えた。上田兵吉氏といふ老大尉が聲を勵まして毎朝毎晝校舎に入る全生徒に號令をかけても、生徒は右往左往不動の姿勢などは知らぬものゝやうであつた。正規の體操の時間とても、その行進も徒手體操も、傍で見えてゐる方が氣の毒に感ぜられる程緊張味が缺けてゐた。ことに困つたのは禮拜の時間に喧騒を極めたことである。制しても止めても小砂利を搔きまわすやうな、大勢の靴の音やさゞめきの音は絶えさうにもなかつた。

村田新部長 この校規のやゝ亂雜になつて教師の威の充分に至らなくなつた大正八年九月に新進氣鋭の當時まだ卅六歳の村田四郎氏が中學部長の要職に就いた。村田氏が緊縮策を構ずるのは當然である。また基督敎々育の徹底のためにも大いに劃策するところがあつた。村田氏は齋藤勝次郎氏上田兵吉氏、森徳太郎氏等と協力してまづ校庭の整列から改正するつもりで、朝と晝との二回の整列時は必

らず校庭に出て、列間を巡視し、また可成嚴格に叱正もした。教室でも騒々しく思はれる組には部長自ら出張してその管理監督の任に當つた。ことに禮拜堂では正面に立つて、殆んど喧騒を習慣化してゐる生徒を熱心に矯正した。その効果は一時見るべきものがあつて、校内一般の狀勢は餘程整頓して來た。大正八年十一月の理事會の記録には次のやうに誌されてゐる。

「村田氏が中學部長として就職して以來中學部の規律面目を一新したる事は蓋し什目の觀る所なるべし。同氏の如きは實に適所に適材を得たるものと謂ふべし」

反動 所がその歳の暮頃から生徒間に除々として反動的氣運が擡頭して來た。硝子窓や板戸が所々で碎れだし、大聲で嘔號する者も出て來た。然し村田氏は少しもそれに顧慮しなかつたばかりか或る二名の教師を他に轉勤せしめて専ら自分の主張を徹底せしめようとした。生徒間の反動は其の後益々激烈となつた。新部長は生徒の自由を無視するといふ聲が囂然と起つて來た。

同盟休校 遂に大正九年二月二十六日卒業生の判定會議の翌日、明治學院創立後會で無き中學部全校の同盟休校がその後三日間に涉つて行はれた。校庭を示威行列をする生徒の勢は凄まじいものであつた。學校當局も如何ともすべき道がなかつた。村田部長もあまりに事の重大化したのに途方に暮れまたこの未曾有の不祥事を惹起したことに引責して辭意を洩した。幾多の經緯はあつたがそれで事は

落着した。學年は越えて大正九年度となり、四月の中旬に村田四郎氏は遠く朝鮮大邱に去つた。

大正九年四月に村田氏が去つて暫く井深總理自身が中學部長を兼ねて居られたがその中五月の理事會が開催せられて、中學部長の去就と新任の議が慎重に計られた末、水蘆高等學部長が轉じて中學部長心得になる事となつた。

水蘆氏の就任 波瀾の多かつた中學部に水蘆氏が來られて學生の前に就任の挨拶をされたのは五月の初旬であつた。非常な覺悟を示されて水蘆といふ一個の男を無條件の儘諸君に提供する、決して私意私心を以て中學部を管理しようとは思はない、と満面に熱誠を表はして言明された。

河西教務主任の就任 同九年の夏休みが終つて第二學期の開始された時、明治卅五年來學院普通學部で數學を擔當して令名のあつた河西銀之助氏が水蘆部長の下で教務主任たる事になつた。庶務主任は以前よりの宮地謙吉氏、中山昌樹氏は高等學部で教鞭をとる傍ら、中學部でも上級の聖書を擔任し、鷺山第三郎氏は下級の生徒の聖書を教へる事になつた。

緊縮に着手す 可成り不規律に流れた學生の風規を改善する必要は誰しもに認められた。水蘆氏は生徒監として豫備の一少尉を招いて規律の嚴守を生徒に爲さしむる方法を講じた。校庭の整列はその嚴格な少尉の訓練の下に立所に緊縮した。所が大正十年の二月頃中村少尉は都合あつて學院を去り、

生徒監の責任者は中村氏の斡旋によつて大正九年の九月に學院に赴任した宗方龜雄氏の手に歸した。宗方龜雄氏は水蘆部長の命を奉じて切りに規律の嚴遵に努めた。先づ學生の遲刻を減せしめる爲めに毎朝毎朝丹念に遲刻者を調査しては放課後その罰として生徒監室の掃除をせしめたり、教師の命に背いて休憩時間に教室に居残つて居た者や、喧騒に失した者などは容赦なく廊下に立たせて禁足を命じたりした。その効果は實に著しいもので、従來は校舎に入る整列の時など殆んど教師の號令の有無を疑はれる程亂雜になつて居た行列が、ほんの笛一つで八百の全生徒が整然と行動の出来るやうになつた。又體操の時間なども頗る緊張して來て、今の高等學部前の校庭で教練を行ふ時などは道往く人々が屢々感心して眺めて居たものである。

生徒達も亦實に従順に嚴正な規律の下に忍従して居た。嚴寒の頃遲刻をしたが爲めに放課後手足を眞赤にして生徒監室の掃除をして居る様子は側目にも傷々しかつた。又時々は何なる不規律を行つた爲めか重い銃を下げて廊下に立たされて居る生徒もあつた。校規の縮正さるゝ爲めにはかうした犠牲も必要なものであらうと思はれた。しかし大正十年の頃から幾分規律が餘り嚴正すぎるといふ非難も無いではなかつた。その四月から生徒監の監督を多少和げる事も出来るかとの部長の所存から聖書の教師鷺山の座席を生徒監室に移しても見た。

禮拜堂の靜肅、しかし水蘆部長就任後見るべき改革は禮拜時間の面目が一新された事であらう。從來は殆んど喧騒、祈の聲も聖書朗讀の聲も聞きとれなかつたものが、生徒監の權威ある監督の下に隅から隅まで司會者の聲の響き渡るほど靜肅になつた。無論之は生徒が宗教的訓練を経てかう變つたといふのではない。嚴正な監督の下にさうあらしめられたのは事實であるが、それも一種の訓練と見做すが當然であらう。今一つは水蘆部長の功績として憶えらるべきは、理化學教室の定備である。之は大正十三年四月以向の事であるが、その三月まで高等學部の校舎として用ひられて居たものを利用して約一萬圓の費用を理事會に要求して、中等學校としては減多に引けを取らない程の完備した物理化學の兩教室、それに附隨する諸機械、準備室、電氣發動機、又圖書教室、博物標本室等を設備した事である。

反動 所が俄然十三年十月三十日に長い緊縮教育の反動が勃然として起つた。云はずもがな學院の第二回の同盟休校である。しかし強いて云へば當時は追々と學院の嚴正主義も緩和されて來て、生徒達も幾分その氣持に餘裕の出來た時であると云へる。學院の教育は宗教的ではない、須らく部長にその責任を問ふべしといふ旗色のもとに同日の朝から三年級以上の學生は休校して講堂に集つて結束を固めた。同日善後策について教員會議が開かれたが別に之といふ具體案も出なかつた。十月三日であ

つたが、父兄會を召集して部長から縷々と事ここに至つた經過を述べ、速かに子弟を登校させて貰ひ度いと願つた。が父兄中にも學院の教育方針に關して異論百出て容易に纏らなかつた。そのうち父兄會では委員を選んで學生と學校との間を極力融和する爲めに奔走したが、學生達は頑として動じようとしなかつた。毎日三年級以上の學生達も學校に來りはするが教室には入らず一同講堂に集つて禮拜を靜肅に行ふばかりであつた。十月四日以後の様子は左の田川氏の理事會に於ける報告演説によつて明かである。

十月四日(土)私は初めて學院に參りました、休校せる學生の約三分の一は(休校せる全部は四百名以上)此日も前日からの例の如く學生だけの禮拜を大講堂に行ひました。私もそれに列席しました、其空氣は嚴肅に充ちて居り、私は慰められ、安心しました。此日私は休校者の委員を招いて、その趣旨目的に就き一時間に亘つて聴き且つ希望する改革條件を提示せん事を求めました。

此日の午後中學部の教員會議があり、休校學生に對する方針を如何にすべきかを評議されました。私は詳かに諸氏の意見を承りたる後私の意見を述べ

- 一、此の會議を延期せられたし
 - 二、學生に對する方針は私の既に述べたる方針に依り私に一任せられたし
 - 三、其期間は長くとも三四日を超へなからう
- と約束し、其の同意を求めました、教職員諸氏の意見は私と相違した廉が多かつたに不拘會議は一人の異議者なく私に一任せられました。超へて六日(月)私は再び休校者の禮拜に臨みました。その前休校學生の委員より、改革意見を提せられました。私は之に對し
- 一、十三項中の第二、三項は之を除く、之は人の進退に關する事であるが、斯の如きは學生の喙を容るべき性質の問題でない、

諸氏は別に自ら考慮せらるべし、私は之を取上げない。

二、その餘の十一項の事は大體に於て同意である。今日迄の間に實行したく思ひながら遅れて居た事柄が多い。

三、諸氏は速かに出校せられたい、斯の如き問題のため學校を休むと云ふ法はないと諭し之に對し彼等の返答を求めました。

彼等は協議の後一切を私に一任する、明後八日(水)より出校すると決議しました。

斯くて休校學生は一人も残らず元の通り出校する事になりました。

この第二回の不祥事件は大正九年のその如く單純なものではなかつた。當局は云ふに及ばず學生達も非常に悩んだものである。前後十日間の授業を犠牲にしたのみではなく、親しかるべき教師と學生がその爲めにどれ程心持を害し氣疲れを感じたか知れない。中學部當局と學生との何れに落度があつたかといふ事はこゝでは述べべきではないが、將來の學院の爲めに呉々もかうした辛い悩みの起らない事を切望する。學生はそれ以前の二三年間の様にあれ程までに陰忍する必要は無からう。嚴格に失すると思へば卒直にその儀を當局に述べればよい、又當局は虚心坦懷に之を聞いて青年の潑刺たる氣性を決して鈍らすべきではない。

水蘆、河西兩氏の辭任 十三年の不祥事のあつた後の中學部は、前よりも餘程緩和された趣があつた。しかし十五年の六月二十八日になつて突如として水蘆部長は中學部を辭任する事となり、次いで八月の末には河西教務主任が學院を去ることゝなつた。それには同年の三月に起つた鷺山弟三郎の行

動に事實上關係があると思ふ。鷺山はその年の三月九日に學院中學部の教育上の方針の一面に一種の矛盾を感じた爲め、總理と中學部長に辭表を提出して學院を去つた。所が三月三十日の夜であつたが河西、水蘆兩氏の前に招かれて約三時間に亘つて文字通り聲涙共に下るの熱心を以て留任を勸告された。水蘆氏は「過去に於て確かに君の立場の苦しかつた事を認める、自分もそれに對しては多大の責任がある、今君に去られるのは私の晩年の傷が餘りに大きい、願くは留つて貰ひ度い、自分は早晚學院を去るの身であるから」と眞實に涙を以て語られた。鷺山の心の表面には幾多の動搖があり疑惑があつたが、心底には學院に對する陋固たる愛着心を懷いて居た。そこで如何なる誹謗があり苦難があらうとも若し總理が許されるならば止まらうと決心した。同年四月七日である。總理は鷺山の留任を認めた。その後約三ヶ月の後水蘆氏は幾多の責任を一身に引いて學院を去る事となり、河西氏が又之に續いて二十四年間の奉仕生活を後にして學院を去る事となつた。

衛藤幹太郎氏の來任 同年九月十日臨時教務主任として關西學院出身、其後暫く傳道に従事し、六年間米國に留學して歸朝後日本大學の講師をせられて居た衛藤幹太郎氏が就任して、田川總理が中學部長を兼ねて居られたが、昭和二年四月から衛藤氏は中學部長となり、教務主任としては新に門司獨立教會の牧師たりし村上治氏を聘する事となつた。

軍事教官派遣さる。かうした動搖の中に、大正十四年九月から、第一師團第一聯隊から軍事教官として現役陸軍大尉台田伍一氏が派遣された。この軍事教官の派遣問題に就いては、單に明治學院のみならず、一般教育界に於て、その是非に關して可成に問題になつてゐた。ことに基督教學校に於ては博愛人道主義と軍國主義と衝突するの愛ひなきかを惧れた。基督教學校の當事者は寄り寄りその採否について考へたものである。然し軍事教育を實施すれば、卒業生が徴兵に應じた場合現役服務の期間が四ヶ月短縮されるといふ大いなる特典は何れの學校に於ても多大に考慮すべき事であつた。耳ならず既に實施してゐる公立學校に於ける其の結果は良好なるものゝある事を知つた。そこで學院中學部に於ても大正十四年第一學期中に教官派遣を申請し、九月から台田大尉が赴任することゝなつた。台田大尉の人格は謹然卒直、寡言にして而も抱負計劃あり、軍人として典型的のものであつた。學院の當局は大いに安堵し學生もまた氏を敬慕した。體操教練上の規律のます／＼整頓した事は歴然たるもので、第一回査閲の機などには多大に査閲官の稱賛をうけて學院は面目を大いに施すところがあつた。昭和二年の夏台田大尉は拔擢されて、第一聯隊第一中隊長として歸隊し、後任として平田大尉が見え

た。

高等學部に於ける軍事教育問題 軍事教育の採否は文部、陸軍兩當局から自由を許されてゐたため

中學部では前述の通り採用したが、高等學部では當時の田川高等學部長の方寸から、その採否を學生議會の議決に委せることとした。可成に激しい賛否兩論の應酬があつたが至極反對派が多數で、軍事教育は當分採用しないこととした。

宮地謙吉氏と白金學報

中學部の稿を結ぶに當つてこゝに誌すべきことは宮地謙吉氏と白金學報のことである。氏は慶應二年に筑後國柳川に生れた。長じて郷里の柳川中學に學んだが成績頗る優良で明治十六年十八歳にして卒業直ちに同中學校の助教として數學と漢文とを教へた。修學の念竭み難く、明治十八年一月杉森此馬氏に伴はれて福岡に出てそこより汽船に乗じて上京、直ちに神田英和豫備校に入學した。同年九月築地十七番の一致英和學校に轉じ、苦學力行で、本科の課程を修めてゐたが、そのうち明治二十年三校合併の機白金に移された。その後も成績優良のために年額五十圓の獎學金をうけ、明治二十二年首尾よく卒業、その後一年間神學部に在學された。故あつて退學、二十三年山形縣鶴岡の莊内中學校に赴任、同校の風紀の靡亂せるを改革する運動に参加し二十五年辭職、同年大阪桃山英學校に移り、同校に於ても大いに校紀肅正の實をあげて監督より鄭重なる感謝狀をうけた。二十六年郷里柳川の藩主立花氏の經營する柳川中學校より禮を厚くして招かれ、赴任、二十九年まで勤務、其後下關梅崎女學院に俸職中、服部綾雄氏に招かれて富山中學校に至り、次いで福岡修猷館、岡山の養忠學校、同地山陽女學校等を歴任し、明治三十五年十二月、明治學院より水産幾次郎氏の金澤に轉任のあとに招かれて出京、學院を以て氏の全生涯を傾倒する場所とせられた。赴任後、氏は熊野雄七氏と協力して同窓會名簿の作製、成績彙帳の調製その他事務機關を完備して大いに普通學部の整頓に努力せられた。

白金學報の發行 同時に氏は同窓生と學院との聯絡統一を計るため一機關雜誌の必要を感じられた、明治三十六年の暮に白金學報第一卷の發行を見たのはその爲めである。その號の重なるにつれて編輯は追々と圓熟して、學院の狀況、卒業生の動靜は遺憾な

く地方在住の出身者にも知られるやうになつた。どれ程多くの同窓生が白金學報によつて慰められおし日を追憶したとか、宮地氏の白金學報編輯の功績は如何にも大きいものであつた。大正七年から同窓會と中學部雜誌部とは別の組織に置かれたがために、自然白金學報は廢刊となつてしまつたが、思へば惜しいことであつた。隱退、大正十四年三月四日氏は宿痾の再發のために職を休めて靜養されることゝなつたが、同年八月に至つて依願退職となり、尚澁谷の自邸で病を養つて居られる。同年同窓會では氏のために慰勞金約二千圓を募集して、そのうち一千六百圓は慰勞金として殘額を以て寢具を調製して送呈することゝした。

ランヂス教授の葬儀

大正十年九月九日雨のそぼふる日、學院の講堂で靜かな葬儀が営まれた。それはランヂス教授の野邊おくりのためであつた。氏の晩年は周圍から左程に重きを置かれなかつた。ことに白人間に於てはその存在さへも知られないものゝやうであつた。塵まみれの粗服をきて、何時も一抱への書物を置かれなかつた。ことに白人間に於てはその存在さへも知られないものゝやうであつた。塵まみれの密柑を衣袋から出しては歩きながら食べる振舞、之等はどうしても上品なアリストクランチな育ちの白人の諸教授には好かれず尊まれる要素ではなかつた。従つて氏の葬儀が一片の儀禮のやうに取行はれたことに無理はない。

然しながら此の寂しい野邊おくりに臨んで、人知れず自分の父老に死別するやうな哀愁と限りなき追憶とをもつてその棺をおくつたものもまた尠からず存した。而もそれらの人々とは學院を思ふ心の切なる同窓であつた。ランヂス教授は一切の才幹と心情と所有と家庭と健康までも傾倒して學院の青年を愛せられた。ありし年のクリスマスなどに教授の家庭に招かれて、あの夫妻の心からの勸待を受けたものの誰が、その時の心安さを忘れようか。他の家では兎もすれば感ぜられる遠慮と退け目とがあの家庭でだけは夢にも感ぜられなかつた。そののみではない、ラテン語でもギリシヤ語でも、フランス語でもドイツ語でも凡ゆる難問題の解決所はランヂス教授の家庭であつた。教授館の多いうちに學院好學の青年達がいあの家庭へののみ、さうした質問を持こんで行つたのはどういふ理由であつたか。あの家庭で教授夫妻からドイツ語の指導を受けたものは可成に多い。村田四郎、郷司健爾、渡

邊善太、中村獅子雄、八十川寛一、山本喜藏、松尾造酒藏、英義雄、山本彌太郎、まだこの外にも數名はあるであらう。そして是等の人々と教授夫妻との關係は傍目にも羨まれる程親しいものであつた。

誕生と修學 氏は一八五七年三月ベンシルヴァニア州で産れた。幼時から非常に天分があり特に數學の巧者であつた。州の師範學校を経て後五ヶ年公立のハイスクールの教師をしてゐたが一八八三年はプリンストン大學に入つて哲學を修得した。然し學才があると共に趣味が非常に多方面で心理學、數學、物理學、天文學、地質學、經濟學等殆んど大學の目星しい講座といふ講座には大低姿を見せて八方に探究の手を延ばした。

一八八六年、氏は大學で最も困難とされてゐる數學の獎學金をえて伯林大學に送られた。遊學一年、翌一八八七年再びプリンストンに歸來して同大學の神學校に入學して海外傳道の準備のために神學を研究した。この年プリンストン大學は氏にM・Aの稱號を授けた。

日本よりの招致 一八八八年(明治二十一年)日本から十四年振りで歸國したジョーン ウィリアム ナックス氏がニューヨークのプレスビテリアン傳道局に至つて、此際將來第一流の學者となるべき青年の神學者一名、哲學者一名を明治學院へ派遣され度いと願つた。傳道局は早速その由をプリンストン大學に傳へて二名の篤信な學徒の推薦を願つた。その時同大學は神學者としてはジョージ ピアソン氏、哲學者としてはヘンリー エム ランデス氏を推して來た。二氏は直ちに相具して日本に渡來し、共々明治學院に教鞭をとる事になつた。ピアソン氏は自分の使命の直接傳道にある事を悟つた爲めに、やがて學院を去つたが、ランデス氏は終始一貫白金の地で哲學、心理學、論理學、天文學、地質學等を教授する事になつた。明治三十六年一月十二日、ミラー氏紀念禮拜堂建築の機、屋根の棟より堂内に墜落して淺からぬ負傷をした。その後氏は興奮し易くなり、記憶力の旺盛なる割に講義は組織を缺いた。従つて凡ての講義が氏の素論たるローマ字論に至る如き珍現象もないてはなかつた。然し氏の心の純真さと門下に對する愛心は少しも逾らなかつた。

大正五年十二月に氏は在職滿三十年になる所から、出身者及び在學生が醵金して夫妻に記念品を贈呈したが、氏はその中の百圓を分つて中學部に鑛物學の標本を、高等學部にエマーソン全集其他の書物を寄贈された。大正八年の秋、氏は再び健康を失はれて米國に靜養に赴かれた。靜養一年、大正九年に再び日本に來られたが、依然として恢復せず、翌十年九月七日遂に輕井澤の別莊に於て永眠せられた。

ランヂス夫人　ランヂス教授と共に學院の忘れる事の出來ないのはミセス・ランヂスである。見るからに柔和聰明で、その聲は清く澄み初對面の人にも一種の懐しみを感ぜしめる婦人であつた。獨逸語の外佛蘭西語にも堪能で、後年高等學部で獨佛語を教へる傍ら聖心女學院にも教鞭をとつて居られた。學院の學生を遇する事は、全く實子を待つやうで、濕地に腰を下してゐる生徒にはよく、その不健康な理由をのべて起たしめたりした。

夫人は夫君の歿後依然として學院に止まり獨佛語を教授されて居つたが、追々老齡にもなり米國にある令息ジェームス氏が是非にとの呼び寄せに接して、大正十四年五月田島、都留、松尾、友野、郷司氏等に手厚く送られて永遠に日本の地を去られた。その當時夫人はよく *My heart is in Meiji Gakuin* と云はれたのは、恐らく純真な心のまゝであらう。大正十二年九月大震災の時、夫人は築地に居宅を、つて居た爲め、輕井澤でほんの夏着を残したまゝ、一切の衣類と思出の品々を失つて了つたのは傷まじさの極みであつた。

七 震災と其の後

大正十二年九月一日、聽て殆まるべき第二學期の準備の爲めに、神學部の都留仙次氏、高等學部の

中山昌樹氏、中學部の河西銀之助氏等が出勤して各々の事務をすまし、やがて歸らうとする午前十一時五十八分である。全關東に文字通り震天動地の大地震動が到来した。それは言はずもが大震災である。その第一震及び第二震によつて神學部二階の煉瓦の大煙突が屋内に倒れて、凄まじい音響と共に大卓子と多くの書架と天井と床板との一部分は粉碎された。又新築間もない高等學部校舎の煉瓦の壁は方々に大龜裂を生じて或る部分は上部の煉瓦壁が切れ目から外へ搖ぎ出して居る所もあつた。

出火 しかし其塵事に河西氏や都留氏や中山氏の頓着する筈は無かつた。何故といふと小使大久保が中學部校舎裏の化學室からの出火を報じて來たからである。右の三氏は早速驅けつけた。室内は白煙濛々である。黄燐の棒數本が瓶から轉げ出たので、忽ち燃燒しそめたのであつた。第一その側の戸棚を外す必要があるがそれは床板に釘づけてあつた。其内大工の佐藤と齋の白石とが馳けつけてやつと外して外に出した。燐と火を引いた床とは益々もえる、毒瓦斯は室にどん／＼満ちる一時はもう之までかと思はれた。聽て都留氏は窓を打破つて煙の排出に努める一方皆のものに砂利と土とを運ばせて火焰を被ふことにした。瓦斯が薄らいだので、活動はやゝ易くなつたどし／＼土砂を投げかけるうち流石の黄燐も鎮火して大事を未然に防ぎ了せたが此の四人の功績は實に大きかつた。若し中學部が燃え出したら學院とこの近隣とはどうなつたか知れない。鎮火後高輪警察からは鄭重に禮を云はれたさう

である。只不憫であつたのは手足に火傷をした小使大久保であつた。何しろ有毒な而かも燃焼性の強い可成り大きな黄燐の塊を空氣中で履んだり掴んだものであるから、表皮は云ふに及ばず筋肉までも一時は腐亂した。震災の五日目高等學部の學生と鷺山とが大久保を擔架にのせて傳染病研究所に連れて行つたが、鮮人の負傷者や下町方面の火傷者が、ほんの通路だけを殘して病院中の到る處に横はつて居たので、引返すより外はなく校醫稻田氏の治療の下に學院の玄關で大久保は療養した。一時は體が非常に衰へて隨分に案ぜられたが幸に回復してくれた。

救護班組織 震災四日目である、云はず語らずの中に學院に集つた都留、中山、桑田、鷺山石橋、其他高等學部の學生四五人で高輪警察署と協力して救護班なるものを組織した。先づメガホンを五六本造つてカードを二百枚程用意し、葉書も二百枚備へて隊を二隊に分け、日比谷と芝の兩公園に出掛けた。百五十萬人が住居を失つた當座であつたから兩公園は避難者で一杯であつた。子を尋ねる親、親を照ねる子、地方から萬難を冒して來て親戚や縁者を尋ねる人、それらの仲介をしようといふのが學院救護班の目的であつた。それにはカード式とメガホン式の二法を用ひた。先づメガホンで尋ね人はありませんかと吹くと、大勢の人達が尋ね人を申込んで來る。これをカードに記入して芝公園に廻したり日比谷公園の中で誰々は居ませんかと吹く。すると案外にも自分の名の呼ばれるのを聞いて

私ですと云つて来る。そして相求むる人々をうまく會せた時は其の當人よりも寧ろ此方の方が涙ぐましい思ひで喜んだものである。又露天の避難者を學院に案内して雨天體操場の中に泊らせて、高輪警察署よりの配給品で養ふ事もした。十日ばかりの後横濱へも知人の見舞がてら出掛けた。

學生の罹災状態 高等學部の教員にて火災にかゝりし者五、家屋倒壊せるもの一、同生徒にて火災にかゝりし者六三、倒壊せるもの一七、死亡せるもの二、中學部にて火災にかゝりし者一四二、家屋倒壊せるもの四八、死亡せるもの七、負傷せるもの一八、中には被服廠跡にて九死に一生を得て遁れたものもあつた。中學部では各級擔任者に死亡者負傷者の家庭を見舞はせ、また東京府から婦人矯風會を通して配給された品物を罹災學生の家庭に配給したり、同年度の學友會旅行費や雜誌部の費用を提供して罹災者の第二學期の校納金を支給したりした。

八 擴張實現の高等學部

以上の中學部の豫想外の大膨脹にもまして擴張發展したのは高等學部である。數字的にそれを誌すと左の通りである。

この數字を大正六年迄の寂しい状態に比べるならば、やはり隔世の發展を來したものと云はねばな

年次	商文	商師文	計	卒業生數	教員數
大正七年	一七	二〇	計 三九	九	一九
大正八年	三三	三九	計 六四	七	二一
大正九年	三三	三七	計 一〇六	六	二四
大正十年	三三	三〇	計 一二六	六	二八
大正十一年	二六	九	計 一五八	一八	二四
大正十二年	一四	一	計 一五	一	二六
大正十三年	一五	一	計 一七三	一	二六
大正十四年	一七	一	計 二二一	一	二六
大正十五年	一四	一	計 二二	一	二六
昭和二年	一五	一	計 二二	一	二六
昭和二年	一六	一	計 二二	一	二六
昭和二年	一七	一	計 二二	一	二六
昭和二年	一八	一	計 二二	一	二六
昭和二年	一九	一	計 二二	一	二六
昭和二年	二〇	一	計 二二	一	二六
昭和二年	二一	一	計 二二	一	二六
昭和二年	二二	一	計 二二	一	二六
昭和二年	二三	一	計 二二	一	二六
昭和二年	二四	一	計 二二	一	二六
昭和二年	二五	一	計 二二	一	二六
昭和二年	二六	一	計 二二	一	二六
昭和二年	二七	一	計 二二	一	二六
昭和二年	二八	一	計 二二	一	二六
昭和二年	二九	一	計 二二	一	二六
昭和二年	三〇	一	計 二二	一	二六
昭和二年	三一	一	計 二二	一	二六
昭和二年	三二	一	計 二二	一	二六
昭和二年	三三	一	計 二二	一	二六
昭和二年	三四	一	計 二二	一	二六
昭和二年	三五	一	計 二二	一	二六
昭和二年	三六	一	計 二二	一	二六
昭和二年	三七	一	計 二二	一	二六
昭和二年	三八	一	計 二二	一	二六
昭和二年	三九	一	計 二二	一	二六
昭和二年	四〇	一	計 二二	一	二六
昭和二年	四一	一	計 二二	一	二六
昭和二年	四二	一	計 二二	一	二六
昭和二年	四三	一	計 二二	一	二六
昭和二年	四四	一	計 二二	一	二六
昭和二年	四五	一	計 二二	一	二六
昭和二年	四六	一	計 二二	一	二六
昭和二年	四七	一	計 二二	一	二六
昭和二年	四八	一	計 二二	一	二六
昭和二年	四九	一	計 二二	一	二六
昭和二年	五〇	一	計 二二	一	二六
昭和二年	五一	一	計 二二	一	二六
昭和二年	五二	一	計 二二	一	二六
昭和二年	五三	一	計 二二	一	二六
昭和二年	五四	一	計 二二	一	二六
昭和二年	五五	一	計 二二	一	二六
昭和二年	五六	一	計 二二	一	二六
昭和二年	五七	一	計 二二	一	二六
昭和二年	五八	一	計 二二	一	二六
昭和二年	五九	一	計 二二	一	二六
昭和二年	六〇	一	計 二二	一	二六
昭和二年	六一	一	計 二二	一	二六
昭和二年	六二	一	計 二二	一	二六
昭和二年	六三	一	計 二二	一	二六
昭和二年	六四	一	計 二二	一	二六
昭和二年	六五	一	計 二二	一	二六
昭和二年	六六	一	計 二二	一	二六
昭和二年	六七	一	計 二二	一	二六
昭和二年	六八	一	計 二二	一	二六
昭和二年	六九	一	計 二二	一	二六
昭和二年	七〇	一	計 二二	一	二六
昭和二年	七一	一	計 二二	一	二六
昭和二年	七二	一	計 二二	一	二六
昭和二年	七三	一	計 二二	一	二六
昭和二年	七四	一	計 二二	一	二六
昭和二年	七五	一	計 二二	一	二六
昭和二年	七六	一	計 二二	一	二六
昭和二年	七七	一	計 二二	一	二六
昭和二年	七八	一	計 二二	一	二六
昭和二年	七九	一	計 二二	一	二六
昭和二年	八〇	一	計 二二	一	二六
昭和二年	八一	一	計 二二	一	二六
昭和二年	八二	一	計 二二	一	二六
昭和二年	八三	一	計 二二	一	二六
昭和二年	八四	一	計 二二	一	二六
昭和二年	八五	一	計 二二	一	二六
昭和二年	八六	一	計 二二	一	二六
昭和二年	八七	一	計 二二	一	二六
昭和二年	八八	一	計 二二	一	二六
昭和二年	八九	一	計 二二	一	二六
昭和二年	九〇	一	計 二二	一	二六
昭和二年	九一	一	計 二二	一	二六
昭和二年	九二	一	計 二二	一	二六
昭和二年	九三	一	計 二二	一	二六
昭和二年	九四	一	計 二二	一	二六
昭和二年	九五	一	計 二二	一	二六
昭和二年	九六	一	計 二二	一	二六
昭和二年	九七	一	計 二二	一	二六
昭和二年	九八	一	計 二二	一	二六
昭和二年	九九	一	計 二二	一	二六
昭和二年	一〇〇	一	計 二二	一	二六

らぬ。然しこの果實を産むまでには幾多の経過と努力の拂はれてゐることを知らねばならぬ。今左にその大略を誌して見よう。

擴張の計劃 チャンバレイン氏が首石を据えた高等學部の校舎が落成した大正五年の十二月、理事會では高等學部の大更新を計つて從來の修業年限三ヶ年の英語専門學校の制度を改めて、豫科一ヶ年、本科三ヶ年の文藝科及び商業科、英語師範科の三科を設置するを決議して、文部大臣に認可を出願した。處が翌大正六年七月に首尾よく認可された。そこで

第一回豫科生募集 大正七年四月、文藝、商業兩科の第一回豫科生を募集して文藝科に十七名、商業科に二十一名、師範科に二名の入學を許可した。新組織による教授陣容は左の通りである。

倫理	井深 棍之助	英語	エス・ピ・ク
英語	水 廬 幾次郎	論理學心理學	木 村 久一
英語	石川 林四郎	自然科學	平 瀬 信太郎
法律	星 島 二郎	簿記商業學	石 橋 近三
習字	岡 見 正	聖 書	村 田 四郎
珠算	川 村 貫治	商業作文	落 合 太郎
經濟學	嶺 岸 忠之助	理化學	百 瀬 計馬

師範科生は大部分文藝科の科目を兼修したことは勿論である。然しこの英語師範科の制度は大正十年に清水良之助、由布保の二氏、同十一年に八谷啓二郎氏を出したのみで廢制となつた。

學制の變更と部長の更迭 處が大正九年五月に至つて四ヶ年修業の三科を經營することは經費の夥多に失することゝ、今一つは一ヶ年にも速かに青年を實社會に送るの必要を認めて、豫科を廢して三ヶ年に短縮することに決定し、また文部當局の認可をえた。そこでその歳の七月に、本科二學年生は新制度の三學年生、一學年と豫科生とは二學年生、一學年生と改稱されるに至つた。之より先、大正八年十一月にライシヤル博士が高學部長の職を水蘆幾次郎氏に譲られることゝなつた。ところが大正十年四月に至つて水蘆氏は中學部長に轉勤されることになつたがため、神學部教授都留仙次氏が代つて高等學部長となられた。

都留、石橋、中山の諸氏の經綸 明治學院高等學部の基礎は大正十年四月都留氏が部長となられてから氏が同十四年三月に辭任されるまでに置かれたと云つてよからう。都留氏は大正八年四月に商業科主任として就任した小壯の新銳石橋近三氏及び同年から漸次に高等學部に出講しては學生の啓發に努力してゐた中山昌樹氏と協力して、同學部の陣容の完成に丹精を凝したが、そのうち最も顯著で學院として感謝すべきことは、堅實な基督教信者の學徒を選んで、専任教授に或ひは講師に招聘したこと

である。現在の高等學部教授會が何となく和氣靄然としてゐるのは蓋しこのためであらう。枝葉の問題で主張を異にするのはよい、たゞ基督教的人生觀に於てのみは、學院に職を奉ずるものは一致してゐなければならぬ。さういふ教授會の存在それが即ち基督教教育機關たるの所以である。大正十四年三月都留部長は神學部々長事務取扱として轉勤のため田川總理が高等學部長を兼務する事ゝなつた。

新校舎の設立 大正十二年九月一日の大震災によつて煉瓦の高等學部校舎は多大の龜裂を生じたので基礎工事と屋根との外は全部改築の必要があつた。その期間中高等學部の學生は神學部の校舎や寄宿舎の食堂に假教室を設けられてゐたが、學生は年々増加して、遂に改築の校舎を以てしても收容し切れなくなつた。處が好都合にも震災の配給品として一千石の米國産の建築材が東京府から配當された。また學院の東南兩側の土地を東京市に委讓した代價及び移轉費として金十萬七千圓を受領した。これを以て大正十三年の秋に起工し翌十五年五月に竣工、四本の大コラムが毅然として聳え、クリム色の恰好のよい校舎が正門を入つて直ぐ左側の高臺に樹つことになつた。五月三十日田川氏の總理就任式のあつた日、此の校舎の献業式が行はれ、井深ホールと命名された。總坪三百六十坪その工費は八萬五千圓調度のために此の外一萬三千圓を要した。

諸資格の認可と指定 大正十四年四月七日、高等學部商業科卒業生は商業學簿記の二科について中

等教員無試験檢定の取扱を受ける資格を認められ、また同年八月十九日には高等學部卒業生は大正七年文部省令第三號第二條第四號により高等學校、大學豫科と同等以上と指定せられ高等試験豫備試験を免除されることゝもなつた。

商業第一回支那見學旅行 大正十五年七月十日から石橋科長は商業科生徒二十名を率ゐて支那、滿洲、朝鮮の見學旅行に出られた。學院學生の旅行として未曾有の大旅行でありその意もまた深い。その容子は石橋主任の筆記によつて知ることゝする。

趣旨 將來實業界に雄飛せんとする人は原料豊饒て然も我國生産品の大消費地である隣邦支那の經濟狀態を知らねばならぬ。經濟狀態を充分に知悉するには實地踏査をするに如くはないと言ふのでこゝに第三學年生戒田欽二、渡邊寛一郎氏外二三の學生が發起で石橋商業科長を團長とする第一回支那旅行團が組織されこれに加入する者は翌年七月まで毎月七圓宛發起人に差出すことを條件として一般希望者を募ることにしたのは大正十五年六月中旬であつた。この計畫に参加した者石橋團長以下二十三名を數へこの海外旅行こそ明治學院有史以來最初の企であつた。

旅行の區別 旅行團を二班に別ち第一班は上海を中心として蘇州、杭州を見て上海から直ぐ連絡船で歸國するといふ道順で第二班は上海までは第一班と行動を共にし此處で第一班と袂れて更に青島、天津、北京、滿州を経て歸國するといふ可なり長い大旅行である。

この長途の旅行を無事になし遂げた者は第一班が九人で第二班が十一人。支障の爲に出發に際して三名の落伍者を出したことは實に遺憾であつた。

日程及費用 第一班は東京を出發して十日目に長崎着。日程十日間、費用一人當約一百圓。

第二班は同じく二十五日目に神戸着。日程二十五日間、費用二百三十圓。

同窓生の歡待

上海の同窓生諸氏には居所不明のため別に通知を出して置かなかつたが「明治學院學生上海見學に來たる」と言ふ大きな見出しの下に旅行の目的、日程、旅館等の記事が着いた翌朝の上海新聞に出たので早速訪ねて來られたのが中學部出身の知識九郎氏で東華紡績の木村氏が來年は是非上海支部を組織して第二回旅行團の來るのを歡迎すると言はれたのは共に嬉しかつた。青島では青島教會島村牧師父子の御親切で船の寄港中市内全部を自動車で御案内を受けて充分見物することが出來、天津では豫め學院から正金支店支配人池田三男也氏に通知が届いてゐたので同氏の斡旋で加藤洋行支配人堀川幾太郎氏、天津教會牧師清水久次郎氏、正文洋行主瀬底正敏の方々が御協議の上で旅舎の事から市中見物まで一切面倒を見て下さつた。それに城内一流のチャン料理亭で歡迎會まで開いていたといつて先輩の有難さをしみじみ感じたのは誠に深謝の外はない。こゝに改めて諸氏の方々に厚く御禮を申述べて置く次第である。

旅行の効果 「百聞は一見に如かず (seeing is believing)」の語にたがはず、楊子江沿岸一帯に楠比する紡績工場を目のあたりに見た者でなければ時々新聞の報道する罷業の状態は想像がつかない。又南京、杭州、天津、北京等の地理を知つてゐて初めて支那の時事問題が手にとる様に解り支那事情に對する研究心と理解とを愈々深め日支貿易政策上肝要な素地を礎くことの出來たのは誠にこの旅行の賜である。

將來の希望 この度の支那見學旅行は學生の爲めに趣旨通り裨益する所尠くなかつたので此計畫は我學院商業科の年中行事の一として毎年繼續して實行したいものである。それには充分の豫備智識を得ておく必要から支那事情研究會を組織して經濟、地理等に關する講演又は調査等を度々やつたならば尙一層この旅行をして意義あらしむる上に大きい効果を擧げることが出來ると確信して目下それが考案中である。(大正一五・一二)

科長制と新部長の來任 大正十五年四月、文藝科三ヶ年の修業年限は英文學科と改稱されて修業年限は四ヶ年に延長した。之は中等教員の無試験檢定資格をうるの準備である。同時に從來中山、石橋兩氏は兩科の主任と稱されてゐたのがこの時から科長と呼ばれるに至つた。昭和二年四月には、明治廿五年の卒業生であり長く歐米に留學後仙臺東北學院教授であつた哲學博士笹尾余太郎氏が迎へられて高等學部長に就任されることになつた。種々の點に於て幾十年の過去と隱忍を経たわが高等學部は前途に多大の光明を投げかけてゐる。

九 大正十年以後現在に至るまでの神學部（桑田氏筆）

大正十年から現在までと云へば約六年間であるが、この間神學部は色々な出來事に遭遇した。大震災、井深博士の部長及び教授辭任、山本教授及びオルトマンズ博士の教授辭任、ライシヤワル博士、桑田、村田、ステグマン四氏の教授就職、角筈への移轉等がその主要なるものである。

先づ大正十年度の神學部の諸教授は次の通りである。井深博士（部長、說教學、基督教倫理）、オルトマンズ博士（新約）、山本教授（教會歴史）、都留教授（書記、舊約）、ライシヤワル博士（神學、宗敎學）

川添講師（新約）

ライシヤワル氏の就任式 記録に止むべきこの學年中の出來事とは、恐らくライシヤワル博士の組織神學教授就職式であつたであらう。之は四月八日午後三時から神學部講堂に於て執行せられ、博士は「神學と教會の事業との關係」に就て講演せられた。ライシヤワル博士はイムブリー博士の後を承けて、プレスビテリアン・ミツシヨンからの教授として就職せられた譯であるが、學院には其の時まで高等學部々長として又神學部講師として關係して來られた事は周知の事實である。

松尾講師就任 今一つ今學年度の出來事として記憶すべきは、蘇國より歸朝せられた松尾造酒藏氏が九月から學院の圖書係として聘せられ、傍らその學期間一週二時間宛辯證學の臨時講演をせられるようになった事である。松尾氏は大正三年の神學部卒業生で盛岡、小樽に暫く傳道せられ、その後アウバーン神學校とエディンバラのニュー・カレヂに研究の後歸朝された。尙同氏はこの時以來今日まで神學部講師として盡力せられるに至つた。この學年度の卒業生は、阿部鞆音、牧野實枝治、大川正の三氏であつた。

大正十一年度（一一——一二）に於ては教授に多少の變化がある。即ち之まで缺員中であつた講師が次のやうに依頼せられ、郷司慥爾氏（明治四十五年の神學部卒業生）が本科一年の新約釋義、松尾

造酒藏氏が本科一年の神學結論と舊約結論、ハナフオード氏が讚美歌音樂及別科一年の新約釋義を受け持たれる事となり、オルトマンズ博士歸國中ステグマン氏が主としてその課業を擔當せられる事となつた。この外で今學年に於ける注意すべき事は尾島眞治氏「神道に就て」(四回)、佐波亘氏「牧師の生活」(四回)、北澤新次郎氏「現代の社會問題と基督敎」(六回)、森明氏「牧會傳道に就て」(三回)の特別講演と今一つは二月になつてから

井深總理病む 井深博士が病氣せられ暫く休校のやむなきに至つたと云ふ不幸な出來事である。この學年(大正十二年三月)の卒業生は、馬場慶一郎、菅日出男、唐牛正、小辻節三、佐藤良雄、高木四郎、宇津木保の七氏であつた。

大正十二年度(十二—十三)は井深部長の御病氣中に開始せられた。そして三月五日に開かれた學院理事會は、四月より九月まで同博士に靜養のため休暇を差し上げる事、そしてその間の部長の事務は教授會に於て執行する事を決議したので、博士御靜養中神學部教授會に於ては山本教授議長席につき、一般の實際的事務は主として書記なる都留教授が當られると事なつた。

教師の上にも多少の變化があつた。即ち郷司慥爾氏が辭せられ、ラマート氏が講師として入り、本科一年の新約釋義を擔當せられる事になり、米國より歸朝された桑田秀延氏が講師として神學の一部

及び井深博士の御病中基督敎倫理を受持たれる事となつたのがそれである

この年は到底忘れられぬ年である。即ち九月一日にかの關東の大震災火災が起つた。云ふまでもなく之は最近の日本に於ける最大の出来事であり、殊に東京、横濱の二大都市は殆んど全市が破壊されたものである。學院も無論その厄を免れ得なかつたが、他の多くの更に氣の毒なる諸學校に比して被害の少い方であつたであらう。我が神學部がそのために受けた損害は、主として建築物の破損で、校舍セレンス館共に相當の修繕を要する程度の被害を受けた。そして之らの修復又交通機關一般の秩序回復のため、九月十日開始の筈なりし第二學期の課業は十月八日まで延期せられた。しかしその後は大した支障もなく授業を續ける事が出来た。殊に二月以來病氣御静養中なりし井深博士がその後健康大に恢復せられこの第二學期よりは部長の事務並に授業に従事せられる事となり、又歸米中なりしオルトマンズ博士も着京、従前の如く授業を繼續せられる事となつたので凡てが元に歸つたように感ぜられた。

ウイルソン氏の講演 尙今學年には四月プリンストン神學校のウイルソン博士が「古代碑文と舊約歴史」といふ五回の講演を、翌十三年二月にシカゴ大學教授コールター博士が「科學者と宗教」なる特別講演をせられた。

本學年度の卒業生は北村勳、宮木喜久馬、村上潤次郎の三氏であつた。

井深部長山本教授辭任 大正十三年度（十三——十四）の神學部は一つの大なる變化を以て開始せられた。それは部長兼教授として神學部のため多年盡瘁し來れる井深博士が、老齡及病後の故を以て辭せられたことである。博士の神學部のために拂はれた忠實な勤勞と大なる功績とに就ては喋々を要しない。しかし博士は今後も名譽總理として名譽教授として關係せられ、更に講師として基督敎倫理及說敎學を擔當せられ實際的に神學部と關係せられる事となつた。又井深博士と共に山本教授も老齡の故を以て前學年限り教授を辭せられ、この四月から矢張り講師として日本基督敎史敎會政治を擔當せられる事となつた。そして此の大變化のため今學年からは神學部の事務は都留教授が部長事務取扱として執られる事となつた。そして教授會書記は先きの理事會に於て新しく神學教授として迎へられる事に決定した桑田秀延氏が當られる事になつた。

角筈へ移轉 この學年は眞に多事であつた。今一つの大なる變化は、神學部が今學年より市外淀橋町角筈百番地へ移轉した事である。移轉せし理由は白金の土地が他の學部擴張のため狹隘を告ぐるに至りし事と、當時頻りに問題にせられつゝあつた神學部と東京神學社との合併を容易ならしめるためと云ふのであつた。尤もこの四月移轉せし時にはこの合併の事は當分全く打ち切りと云ふような状態

になつてをり、この後者の理由は消滅してゐた譯である。角筈の土地はプレスビテリアン・ミツシヨンの所有するものであり、建築物も一部は同ミツシヨンのもので、神學部は之を借り受けた譯である。校舎ジムネージアム及日本建の寄宿舎は前任の東京女子大學から買ひ取つた。この土地と現在寄宿舎の一部及圖書室として使用せられつゝあるレバノン館は、最初フィラデルフィヤ・ウイメンズ・ボールドのものであり、保養院のため計畫されたものであつた。がそれは餘りに時期尙早で成功せず、その後プレスビテリアン・ミツシヨン・ボールドへ寄附せられ、ミス・ミリケンが住み、又一時は女子學院の高等部が使用し、その後宣教師タムソン氏が住み、大正七年四月から東京女子大學が此で開始せられ、十三年三月まで使用し、同大學が西荻窪へ移轉した後へ我が神學部が移つた譯である。グラウンドの一隅には角筈教會がある。昔は静寂な土地であつた相だが、現在では附近の水道淨水場、煙草專賣局工場、日本中學、精華女學校、青物市場等のため喧騒な地となつてゐる。

桑田氏就任式 も一つの注意すべき事柄は桑田秀延氏の神學教授就職式である。之は九月廿九日午後二時より角筈の講堂に於て執行され同氏の「基督教の絶對性」と題する講演があつた。同氏は大正七年の神學部卒業生でその後アウバーン神學校とハーヴァード大學神學院に於て研學された。擔當は系統神學である。桑田氏の就職式に引きつゞいて第三十八回の日本基督教會が我が神學部で開かれた

之は角筈への移轉を教會に紹介するよな心持ちであつた。

その他ライシヤワル博士の歸國中九月からウオルサー氏が同博士受持ちの一部を擔當せられた事、翌十四年三月の理事會で村田四郎氏が神學教授に迎へられる事に夫々決定した事、之までのミツシヨン貸費制がなくなつて兩ミツシヨンの厚意で神學部のスカラシツプ制度が出来た事等は、今學年に於ける注意すべき出來事であつた。又二月には東京神學社教授高倉徳太郎氏が「贖罪論に就て」講演せられた。

本年度（十四年三月）に於ける卒業生は、本科伊藤道夫、村中常信、別科長谷川仁、藤原藤男、前田大四郎、金相敦、姜澤模諸氏であつた。

大正十四年度（十四——十五）は新銳の村田教授を加へたのみで他には別段の變化なく開始せられた。

村田氏就任式 この學年に於ける注意すべき出來事は、村田教授の就職式である。氏の教會歴史擔當神學教授就職式は十月一日午後二時から角筈の講堂に於て執行せられ、同氏は「アタナシウスの受肉論」と題して講演せられた。村田氏は明治四十四年の神學部卒業生で暫く實際傳道に従事せられた後アウバーン神學校に於て研學せられ、歸朝後大阪神學院で教へ、その後學院中學部へ赴任牧師とし

て又後には部長として盡力せられ、更に實際傳道に投ぜられ大邱、熊本兩教會を牧せられ、この度神學部教授として再び學院に來られた譯である。

社會講座開設　その他この學年に於ては學生及一般のため社會講座が開かれ、原泰一氏（中央社會事業協會部長）、益富政助氏（啓成社教育部長）、田川總理、賀川豊彦氏が夫々數回に亘つて講演せられ又札幌教會牧師小野村林藏氏が「教會と傳道」と題して特別講演をせられた。同窓會のスカラシップが出来たのもこの學年である。

十五年三月に卒業せし學生は、林正雄、日下一、永橋卓介、小栗襄三、四方謙三郎、山下操六諸氏で、特別禮拜と聖餐式は今年を以て辭せられるオルトマンズ博士が司式せられた。

オルトマンズ博士辭任　大正十五年度（十五——十六）に又一つの變化がある。それは神學部のため聖書の教授として多年盡瘁せられたオルトマンズ博士が定年のため前學年末を以て辭職せられた事に關係してゐる。長い年月の間博士が神學部のため終始一貫力を盡された事は眞に感謝である。オルトマンズ博士の後はステグマン氏がリフオームド・ミッションからの新教授として受け繼がれる事となつた。かくて本學年もかうした教授上の變化を以て開始せられた。

ステグマン氏就任式　ステグマン氏の神學教授就職式は十六年一月八日午後二時より角筈の講堂に

於て執行せられ。同氏は「新約聖書解釋者としての教職」と題して就職の講演をせられた、擔當は新約聖書である。同氏は大分以前リフオームド・ミッシヨンの宣教師として來朝せられ、前に記したやうにオルトマンズ博士の留守中講師として神學部で教へられた事もあり、教授となる事が決せられて後ハートフオード神學校に於て特に新約を專攻して歸られたのであつた。

本年度の特別講演には大阪醫大助教授梶原三郎氏の「生物學より觀たる死」三回、米國ピッツバグ長老教會牧師カー博士の「教會の實際」があつた。

都留氏部長辭任村田氏常務委員長となる 大正十六年度（十六——十七）即ち現在の學年は教授の上には大した變化はなく、唯今年から高等學部長として就任せられた笹尾彗太郎博士が獨逸語の講師として加はられたのみである。が神學部の職員は去る三月都留教授が部長事務取扱を辭せられたため多少の變化を見るに至つた。最初理事會の意向で後任部長は教授會で選舉すると云ふ事になり、選舉の結果川添講師に多數の投票があつたけれども、同氏が固辭して受けざるため、仕方なく一時教授會より三名の常務委員を選んで部長の事務を執らしめる事となつた。選舉の結果村田、ライシヤワ、桑田三氏が委員となり、委員等互選により村田教授が委員長となり、實際上神學部一般の事務に當られる事となつた。

之らの事の外神學部には懇話會と稱する教授學生聯合の研究會が毎月一回開かれ、傳道團と稱する學生の傳道機關があり、夫々相當に活躍してゐる。又神學部と教會との關係を親密ならしめるため、隨時神學講演なるものを各地方の諸教會に於て催し、教會への奉仕及神學部に對する教會側の興味喚起に努力してゐる。この他神學部に關係した事柄として東京神學社との合併問題、震災後諸神學校協力の問題が此間に起り色々論議せられた。

以上はこの期間神學部に起つた事柄を極めて表面的に書いて來たのであるが、この六年間に送り出した卒業生の大部分は實際傳道に従事してゐる。そして一部のものは米國に留學して研究を續けつゝある。現在の神學部は教師十名學生六十名で、近來になく研究的熱心傳道的熱情共に旺んなやうに思はれる。神學部の將來に就てはこゝに云ふべき限りでないが、神のたへなる御指導により福音のため又日本基督教會のために何らか本質的に貢獻せん事を祈つてゐる。

一〇 井深總理の辭任

大正九年三月の同盟休校が漸く落着して水蘆氏が中學部長心得となり、前途の不安も一掃された時

井深總理の辭任

記

突如として井深總理は理事會の前に左の辭表を朗讀された。

辭 表

明治學院理事會議長貴下、私は多日熟考の結果明治學院總理の職を辭すべき時期の到來した事を自覺致しまして、茲に謹で貴下を經由して理事會に辭表を提出致します。理事會は可成速に可然後任を選定して私の辭任を聽許せられんことを願ひます。

顧みますれば明治學院最初の總理はヘボン博士でありましたが同博士は横濱に住居したので只偶に出勤するのみでありました。それで私は副總理として自然その代理を致しましたが、明治廿四年の秋遂に博士は老齡の故を以て辭職致され不肖私がその後任に擧げられて今日に及んだ次第でございます。夫れ故に私が總理の職に在ります事茲に殆んど全三十年でございます。

偕既往三十年間の事を回顧致しまして私は實に遺憾に思ふ事と感謝の念に堪へざる事とがあります。顧みますれば過去三十年は我が明治學院に取つて決して終始順境であつたとは申されません、時には晴天白日もありましたが、亦時には密雲天を蔽ひ光景暗澹たる時期もありました。乍然たとひ順境にもあれ逆境にもあれ其境遇に處して今一層能く明治學院の進歩發展の爲に努力して効果を收る事の出來なかつた事は私の深く遺憾とする所であります。乍然亦私は不肖ながら學院の爲に微力の最

善を盡した積でございます。そして此三十年間幸に大過なきを得たるは偏へに神の優渥なる恩寵の下に理事諸君の終始渝らざる御援助と同僚諸氏の誠實なる協力とに依る事と深く感謝いたします。翻つて前途を望みますれば明治學院の將來は頗る有望であると考へます。乍然現在及び將來に於て此好機會を逸せずして既に理事會に於て採用せられた所の擴張案を實施して能くその功を奏するに私は私よりも壯年氣鋭にして而も敏腕堪能の人物がその重任に當る必要があると確信致します。夫れ故に理事會は學院の不利益と成らざる限り可成速に私の總理の任を解除せられんことを願ひます。而して若し今後の事に就いて私の希望を述ぶることを許さるゝならば今後は主として神學部の爲に微力を盡さんことを願ひます。

終に臨み私は茲に議長貴下並に理事同僚諸君御一同に對して誠實なる敬意を表します。

大正九年五月五日

明治學院總理兼神學部長同教授

井 深 梶 之 助

明治學院理事會議長

神學博士 エー・オルトマンズ殿 貴下

井深總理の辭任

この鄭重な辭表は理事會でも頗る慎重な態度で受理したが何分三十年の功勞者の進退に關することであるから下記の特別の委員を設けて深甚の考慮を拂ふ事になつた。長尾半平、笹倉彌吉、松井安三郎、オルトマンズ、モーレイの諸氏。

大正九年十一月四日理事會の席上で特別委員長長尾半平氏は詳細の研究を報告されたが、結局左の條件を以て井深總理の辭表は理事會に受理せらるゝ事となつた。

井深博士の明治學院職理及び神學部長の辭表を受容れ之を來る大正十年三月三十一日より効力を生ぜしむ。但し神學部教授たる事は依然たり。右指定日後は總理エメリタスとなす。

同時に理事會は特別起草委員を擧げて長年の井深總理の勤勞に對する感謝狀を作製した。その全文は次の通りである。

井深博士の切なる希望にかゝる此の辭表を受容るゝに當り、同氏が學院の爲め致されたる長年の勤勞及び功績に對する我等の深き感佩並に學院關係者一同の胸裡にある同氏に對する情誼の醇厚なる事とを銘記せずんば措く能はず。井深博士は學院創立の當初五年間副總理たり而して引續き明治二十四年以降は總理として殆んど學院史を通じ、之が首腦たりき、然れば學院の成績今日ある所以のもの一つとして同氏の密接なる指導監督に係らざるものなし。今や同氏現職を去り主として廣く教

會の事業に奉仕せんとせらる、之れ今日まで日本基督教會牧師の大多數を教養せられたる氏自らの事業の繼續に外ならじ。蓋し同教會の建設並に經營に貢獻したるもの氏に若くものなし、假令井深博士近く總理職の激務を退くとは云へ、必ずや學院の福祉に對し同氏の篤き同情と援助とは斷へざるべく、又氏の心は長く學院につきながら將來の成功に與りて多大の必要なる貢獻あるべきを信ず。この文案が成つて後議長オルトマンズ氏は改めて井深博士を懇勸に議席に招待して決議の趣意との感謝状とを手渡した。井深博士又之に對して鄭重な挨拶をなされた。

次に翌年四月一日から缺員となる總理を銓衡するために投票によつて七名の委員が擧げられた。それは左の通りである。長尾半平氏、松井安三郎氏、田川大吉郎氏、井深梶之助氏、笹倉彌吉氏、モレイ氏、オルトマンズ氏。

オルトマンズ氏總理事務取扱となる 越えて大正十年三月三日その月を限つて辭任となられる井深總理の後任、又缺員となる神學部長、更に缺員中の中學部長の選舉が行はれた。開票の結果

總理事務取扱

オルトマンズ博士

神學部長

井深梶之助博士

中學部長

水蘆幾次郎氏

水蘆氏は從來高等學部長であつたが爲め、更に投票の結果

高等學部長

都 留 仙 次氏

と決定された。

新邸宅の建設 大正十年三月井深博士が愈々總理を辭任される事にと決定した時、理事會では一つの邸宅を左の條件で建設することとなつた。

一 築地基本金中金八千圓を利用すること。

一 その費用に對し年八分の割合を以て家賃を徴收すること。

そして、早速白金三光町三五四、五、六番地の敷地に建築にとりかゝつた。同年六月竣成、井深博士は明治卅四年以後住みなれた白金の邸宅からそこに移られた。

木造瓦葺二階建
階 上 下 三十五坪五合
階 上 二 十 坪

この新邸宅の二階からは舊火藥庫の森林を望んで眺望が中々美しい。

舊總理邸の取壊 明治卅四年に總理の住宅として建築寄附された總理邸は大正十四年の春取壊されて、その空地にテニスコートが作られるに至つた。

井深博士神學部長並びに教授辭任 大正十三年三月五日、丁度神學部が角筈の女子大學跡へ旬日のうちに移轉しようとしてゐる時である。井深博士は理事會に對して神學部々長並びに教授の職を辭任の旨申出でられた。理事會は之を受理して、早速博士の永年の功勞に對して感謝決議をした。次の通りである。

理事會は博士が特殊の奉仕に對し名譽教授とし毎年恩給基金より受くる金壹千圓以外に別に學院より年金壹千五百圓を支給すること。又感謝決議をなし議事録に録し其寫を同博士及び各ミツシヨン並に學院の關係せるミツシヨンの傳道局に送附せしむる事。

その感謝決議文とは左の通りである。

井深博士ニ送ル感謝決議文

神學博士井深梶之助氏ハ西曆千八百九十一年明治學院總理トナラレタルガ其以前ニ副總理タラレシコト已ニ五年西曆千九百二十一年三月ニ至リ總理ヲ辭セラル、迄能ク精勵セラレタリ、博士ハ當初ヨリ神學ヲ教授シ神學部長ノ位地ヲ兼掌セラレタルノミナラズ更ニ設立者トシテ政府ニ對シテモ學院ヲ代表セラレタリ、惟フニ博士の聲名ハ永ク學院ト共ニ不朽ナルベシ。西曆千九百二十四年三月博士ガ神學部長並ニ教授トシテノ辭表ヲ提出セラル、ヤ、理事會ハ之を受容スルト同時ニ現ニ名譽總理タル

ニ加フルニ名譽教授ノ稱號ヲ以テシ學院トノ干係ヲ持續セラレン事ヲ希望スルニ決シタリ。

蓋シ博士ハ崇高ナル品性ト該博ナル學識ヲ以テ多年變遷アリタル職務ノ間ニ忠誠ニシテ渝ル事ナク能ク才幹を發揮セラレ、學院ヲ愛スル家ノ如ク、ソノ愛情ト思想ヲ傾倒セラレ、且ツ日本基督敎青年會ニ日曜學校協會ニ對スル顯著ナル奉仕ニヨリ學院ニモ光彩ヲ添エラレ加之日本基督敎會ノ進步發展ニ對シテモ貢獻セラレタル所殊ニ尠シトセズ、理事會ハ之等ノ事蹟ヲ併セ錄シ以テ厚ク博士ノ功績ヲ讚ヘント欲スルモノナリ。

井深博士ノ明治學院ニ於ケルガ如ク、一ノ學園ノ創始ヨリ、發展ニ到ルマデ一身ヲ以テ終始セラレタル者ハ眞ニ無雙ナルベシ。理事會ハ博士ガ今回學院ノ責務ヲ離レラレタル後モ長壽ヲ全フシ學院ガ彌々盛ニ發展シ行ク將來ヲ樂マル、機會の久シカラン事ヲ切望ス

西曆千九百二十四年三月五日

明治學院理事會

明治十四年東京一致神學校に助教授として赴任されて以降四十三年間精勵不息學院のために奉仕せられた博士はこゝに齡正に古稀を以て教鞭を措かれることゝなつた。因に井深氏後任として神學部教授都留仙次氏が神學部長事務取扱となられた。

一一 土地讓渡の件

大正十年の讓渡 東京市は大正十年の一月から品川の大街道の庚申堂邊を起點として二本榎通りに出で西町郵便局の前を過ぎ學院の南側を過ぎ今里に於て緩かな彎曲を畫いて久原邸の前をよぎつて白金臺町に出る大道路を敷設する工事を始めた。それが學院の南側を約二間乃至三間の幅を以て犯すことになつた。その代り東京市は實に壯大な石垣を以て其街路に面した高臺の壁を築き上げてくれた。現在の南面西側に連つてゐる巨大な大谷石の此邊稀に見る立派な石垣はそれである。此の時讓渡した坪數並びに市より受けた代償金は左の通りである。

白金今里町四十二番地宅地百九十二坪一合八勺

此代價金一萬三千四百八十五圓七十二錢

移置並ニ工事費金四千三百三十六圓七十五錢

計金一萬七千八百二十二圓四十七錢

大正十三年の讓渡 その後東京市は市電車線目黒線の清正公前から五反田街道まで新線を敷設してそれが明治學院の丹波町側を通ることゝなつた。この爲に時の電氣局長長尾半平氏は約六百八十五坪

の譲渡を要求して來られた。之は學院の風致から云へば非常な損失である。それは熊野氏の頃建てた中學部長館の周圍の巨木を筏採し、大きな丹波町向きの正門から舊總理館裏の樹木を除かねばならぬからである。然し事やむをえず左の條件で譲ることゝなつた。

四十二番地ノ一 百四十九坪六合七勺

四十一番地ノ一 三百九十六坪三勺

四十番地 百三十九坪四合二勺

合計 六百八十五坪一合二勺

代價 金八萬三千二百四圓二十一錢

移轉及工費 金一萬六千三十七圓六錢

この市との受渡は大正十三年二月二十六日に行はれた。その後電車軌道敷設工事は漸次進捗して昭和貳年八月十日に開通式が行はれ、學院の東南角の停車場は二本榎明治學院前と呼ばれることになつた。またこの土地譲渡によつて生じた大略十萬圓の金は、大正十四年から始つた高等學部校舍建築に用ひられることゝなつた。

一一一 功勞多き二博士の隱退

イムブリー博士 大正十年三月を以て神學部教授イムブリー博士は名譽教授となられ、事實上學院の教職から隱退されることゝなつた。年齒正に七十五歳二ヶ月、此の世の生涯の全部は文字通り明治學院のために傾倒し盡されたものである。

學院の濫觴たる築地時代から幾十年を経て大正十年といふ歳を迎へるまで、隱然としてこの歴史を構成する幹根の一つは確かに此のイムブリー博士であつた。若しも注意深くこの歴史を眺めるならば、どれ程博士が學院發達のために貢献せられたか、會得さるべきであるが、後日のために列記して見るならば、

日本基督一致教會の組織(明治十年年)、東京一致神學校の創設並びに其經營(明治十年)三校合併當時の諸立案並びに諸規則の制定(明治十九、廿年)、學院憲法及び職制の制定、日本基督教會憲法信仰箇條の制定(明治廿三年)、學院衰潮期に於ける獻策並びに外國傳道局への諸交渉(明治廿七、八年)、學院擴張資金募集運動の應援(明治卅八年)、我國の宣戰布告に關する外國への諒解運動(明治卅七年)

ミッション補助金増加に關する數次の交渉(明治四十年——四十四年)、築地基金の設立(明治四十四年)、高等學部擴張に關するミッションへの説明書(大正五、六年)、學院と兩ミッションとの歴史的關係を論じて補助金の増額と確立とを訴ふる文(大正六年)。

此の外幾多の神學書、説教集、日本語研究に關する諸書等文書上の貢獻は枚舉に違がない。然し之等にも優つて偉大なのは氏の崇高靜謐な人格である。博士の薰陶をうけたものはその深い教養と聖者のやうなその聖潔とを讚美しないものは恐らくあるまい。博士は争はずして純理に立ち、而も確信と精緻な注意とを以て事を成就せらるゝ素性があつた。氏の着手し依托された事で何一つ結末のつかぬものはないと云つてよい。確かに博士は學院の主要なる幹根の一つであつた。

博士は千八百四十五年一月北米合衆國ニュージャージーに生れた。祖先は英國人で代々牧師であり博士はその十代目に相當してゐた。プリンストン大學及び神學校で最初は史學及びヘブライ語を研究し、後は新約に關する諸科を研鑽した。千八百七十年二十五歳にして卒業後五ケ年間、牧會に従事してゐたが、千八百七十六年(明治九年)プレスビテリアン外國傳道局よりの派遣によつて日本に渡來し、大いに公會及び長老會の合同運動に奔走するところがあつた。明治四十二年勳四等に叙せられ、餘生はますます靜幽な境に身を處されてゐたが前述の大正十年に名譽教授となられ、翌十一年の秋、

故國なる令息の許に歸られた。

オルトマンズ博士 大正十五年三月の神學部卒業生のための記念晚餐式を司られたことを最後としてオルトマンズ博士は學院神學部の永年の教授職を辭任隠せられることゝなつた。博士は井深總理辭任以後一ケ年間の總理事務取扱として學院最高の職權を握られたことのある功勞者である。博士の功績の重なるものは蘊蓄の豊富なヘブライ語ギリシヤ語並びに舊約聖書に關する知識を以てよく學生を指導せられたことに存するが、又一方學院の理事また理事長として經營に中られたことにもその貢獻は多い。博士は公正な議論と強い實行の意志とを有せられる。ダツチリフオームド ミツシヨンの代表者として、早くより日本にては勿論、米國に於ても尊まれて、明治三十三年東京に於て在東洋宣教師大會の催された時は博士は擧げられてその議長たるの榮を擔つた。イムブリー博士は決して日本語を用ひられなかつたが、博士の日本語は實に堂々たるもので、屢々青年會館や方々の教會で日本語の説教をされた。大正十一年植村正久氏が渡米の節は氏の演説を通譯されたと傳へられる。又博士は癩病人の救護事業に大いに盡力されて、永い歲月目黒の慰廢園に日曜毎に説教に出かけられた。隱退後は専らその方面の事業に當られることになつた。氏は千八百五十五年オランダに生れ、千八百七十三年北米に移住、千八百七十六年ホープ大學入學、同八十三年同大學卒業直ちにニューブランズウィック神

學校に入學千八百八十六年卒業、同日結婚、直ちに日本に向はれた。その後長崎東山學院々長として三ヶ年間勤務され明治二十二年よりは専ら九州の傳道事業に従事された。そのうち明治三十五年に至つて明治學院に招かれ、一意専念に神學部に於て育英事業に従事された。氏は同年ポープ大學から神學博士の稱號をえられた。

一三三 田川新總理の就任

井深博士が大正九年三月の理事會で辭表を朗讀された、その次の理事會、即ち大正九年五月に後任總理の詮衡委員が擧げられた。勿論慎重に慎重を重ねて後任者の選定に中るがためである。その詮衡委員とは次の人々であつた。

オルトマンズ博士、井深博士、長尾半平氏、笹倉彌吉氏、ライシヤワル博士

是等の人々は數次、會合して、討議攻究したが、第一候補者として擧げられたのは本學院の出身者で日本基督教會の頭目である、高知教會牧師多田素氏であつた。詮衡委員長オルトマンズ氏は同氏に正式に懲慝したが、多田氏は結局之に應じられなかつた。蓋し、氏は學院を念はないのではなく、高

知教會をより多く思はれるが故であらう。之は同教會の發達の經路に鑿みて當然のことであらう。そのうち大正十年三月となり、井深博士は愈々總理を辭されたため向ふ一ケ年間の總理事務取扱としてオルトマンズ博士が就任された。其後、詮衡委員の組織を幾分變じて、同窓會の代表者として和泉彌六氏が之に参加することゝなつた。そして構成された案とは、長尾半平氏を總理とし、その日常の實務を渡邊善太氏に當らしめやうとするものであつたが、之は其の後種々の異論が生じたため遂に不調に了つた。そのうち、應て大正十年度は暮れて、オルトマンズ博士の任は滿期終了となつた。そこで學院管理の實際上の責任は當時理事長たる田川大吉郎氏の双肩に懸つて來たのは當然である。また理事會でも正式に氏に依頼して、學院の常務理事會、其他の重要な會議には出席して管理上の實務を執掌して貰ふことゝなつた。理事長秘書として小林盛政氏が總務部に出仕されるやうになつたのはその翌年大正十二年四月であつた。

其後田川大吉郎氏は學院理事長として、實際は總理の職務に中つて居られたが、大正十一年には東京市へ第二次土地遺讓の事、大正十二年には大震災の突發とその善後策のこと、大正十三年には第二回の同盟休校事件、高等學部校舍建築問題などが起つて、その身邊多端なるものがあつた。そして此の間に既住三ヶ年間種々の困難や不調を経した後任總理詮衡委員は、理事長としての田川氏に、百尺竿

頭一步を進めて總理として、専ら學院のために盡力されんことを更めて依頼する運びに至つた。大正十三年十一月五日、丁度第二回の不詳事變のあつた直後の學院理事會の席上、總理詮衡委員長オルト・マンス博士は、同委員會が田川大吉郎氏を總理に推薦することに一致した旨を發表された。之に對し田川大吉郎氏は、それを受諾するに關して一身上何等支障なき旨を洩された。田川氏暫く席を外して理事多田素氏が議長席につかれたが、理事和泉彌六氏は起つて、同密會評議員會に於ても亦田川氏を總理に推薦の議を可決したと報告された。多田議長は直ちに、出席の理事に此の議の決を計つたが、滿場一致を以て田川大吉郎氏總理就任の件を可決した。越えて大正十四年五月二十一日、大講堂に於て、就任式が行はれ、その夜は同日献堂された井深ホールの一室で晚餐會が催された。

一四 創立五十年記念諸計劃

大正十五年五月新總理就任以後の學院各學部の變遷と新らしい計劃とを列記して見ると大略次の通りである。

一 中學部の部長教務主任の交迭

- 二 高等學部長の選定
- 三 神學部常務委員制の制定
- 四 創立五十年記念事業準備中央委員會の設立
- 五 擴張調査委員會の設立
- 六 校内傳道委員會の設立
- 七 記念式實行委員會の設立

である。このうち一、二、三はそれ／＼各學部の發達史のところて粗述したから、茲には四以下の諸項について簡略に述べる。之等は、皆新總理の方寸より出た創立五十年記念事業に關する企圖であつた。

中央委員會 之は大正十五年三月の理事會で選定されたもので、創立五十年記念事業に關する調査研究をなす責任主體であると共に、その中樞機關である。委員長は田川總理、委員は井深、オルトマンス、ライシヤツル諸博士、都留仙次、ハナフオード、ラモット、山本秀煌の諸氏である。第一回は
大正十五年五月二十六日に開かれ、記念式及び記念事業に關する大綱が協議せられた。その際田川總理は二つの事を提案且つ決議されたが、その一つは記念事業として明治學院五十年史を英邦兩文で編

述して發刊すること、今一つは學院の記念擴張に關する調査をなすといふことであつた。この歴史編述のうち英文の方はオルトマンズ博士が擔當することゝし、邦文の方は井深、山本の兩氏が委員として調査をなし、鷺山弟三郎氏が執筆の任に中ることゝなつた。また第二の擴張事項の調査については新たに委員が擧げられた。

擴張委員會の活動 その委員とは委員長は理事塚田福三氏、書記鷺山弟三郎氏、委員村田四郎氏、高橋幸太氏、小泉嘉章氏、河西銀之助氏、渡邊勇助氏であつた。この委員は第一回の會合を同年六月二日に催して以後同年八月十日迄十回の會合を重ねて熱心に協議研究の結果、應急擴張案と理想擴張案の二案を大體左の通りに纏めた。

中學部應急擴張案

- 一 中學部の生徒數を漸次に一千名に至らしむる事。一 へボン館を改築して四個の教室を設く。
- 一 禮拜堂を改修して約二百の生徒席を増設す。

高等學部應急擴張案

- 一 文商兩科は之を二學部に分割す。一 從來の文藝科は英文學部とし修業年限を四ヶ年と改む。
- 一 井深ホールを商業科専用校舎とし、英文學科は總務部の建物に移轉す。

神學部應急擴張案

一 實踐神學の講座に専任教授一名を招聘す。一 角筈の土地を神學部專屬財産としてミツシヨ
ンより遺讓されたし。一 圖書購入費を年額一千五百圓に増額したし。一 七ケ年勤續の教授は
一ケ年間海外に派遣研究せしめたし。

各學部に共通なる事項

一 各部教員養成のため優秀なる學生を内外の大學專門學校に就學せしむる基金を設けたし。
一 學院の宗教教育に關しては調査委員を擧げ其徹底を計られたし。

此の應急擴張資金は金拾五萬圓と計上された。この外理想案としての明治學院大學設立に關する調査
は次の通りである。

明治學院大學案

一 本學院に大學法文學部を置く

法學部（法律科、經濟科、商業科）

文學部（神學部、英文學部、社會學部、史學部）

專門學部（三乃至四ケ年、英文學科、商業科）

豫科(三ヶ年)

一 大學設立費概算 金百五拾萬圓

内譯 一金參拾萬圓 校舍建築費 一金六拾萬圓 政府供託金 一金拾五萬圓 圖書館費

一金四拾萬圓 基本金 一金五萬圓 設備費

スピア博士との會見 此調査の成立したるは八月の十日で、同月十六日プレスビテリアン外國傳道局幹事スピア博士が來朝されたのを好機として、此擴張委員會の議長塚田福三氏は委員村田四郎氏と總理田川大吉郎氏と共にスピア博士を帝國ホテルに訪問して、塚田氏は村田氏と共にスピア博士に大いに訴へる所があつた。

亦田川總理は擴張委員會の案とは別個に詳細を極めた擴張希望案を作製して、其後スピア博士に手交して學院の將來の發展のために大に訴へるところがあつた。スピア博士も擴張委員や總理に對しては可成りの好意を示して其意見を聴取されたものであつた。

其後塚田議長は昭和二年五月の定期理事會で新に趣意書を作り、大に學院擴張の必要を力説するところがあつたが、理事會では時期尙早と見たものか餘り良い反響を與へられなかつたのは遺憾であつた。

傳道委員會の活動 昭和二年四月に中央委員會の下に校内傳道委員會なるものが選定された。創立五十年記念の爲め學院の空氣をキリスト教化しようとするのが其の抱負である。其第一回委員會は同月十四日で委員とは笹尾、衛藤兩部長の外村上、中山、石橋、村田、鷺山、渡邊、齋藤(茂夫)の諸氏であつた。笹尾氏を議長として其後數回會議を重ねた結果、五月二十四日賀川豊彦氏を招いて學生に大舉傳道を催すこととした。

當日賀川氏は非常な緊張と熱誠とで、午前は高等學部及中學部の四五年の生徒のため、午後は中學部一二三年生のために大に福音を訴へて志道を迫つたが、氏の熱誠に動かされた學生四百四十七名の多數が記名して志道決心の意を表した。この第一回校内傳道會の催しは全く豫想外の成功を納めた。此日神學部本科の學生は一日の授業を休んで祈りと勤勞とを以て賀川氏を援けた。其日の如く校内の學生が協同一致して傳道に中つたことは、それ自からが美しい記念事業の一つであつた。其後白金教會で五名の中學部五年級の學生が郷司牧師から受洗したが、之は今回の一舉が彼等に決心の動機を與へたものであつた。

第二回大學傳道 傳道委員會は賀川氏の運動を以て終れりとせず、その年の十月の四日五日の兩日をあげて第二回大學傳道を催した。講師は川俣義一氏で同氏一流の熱誠と論述とを以て大いに訴へ

るところがあつたが、その効果も亦著るしいもので、兩學部を通じて百二十名の志道決心者があつた。要するに傳道委員會の働きとその功績は著しいもので、創立五十年の記念事業のうちの成功した企ての一つであつた。

記念式實行委員の選定 昭和二年十一月三日の創立五十年記念日の當日が刻々と差迫るについて、中央委員會ではその舉式に關する一切の事業を委託する委員を選定した。それは中央委員の一人、都留仙次氏を議長として、笹尾彥太郎、中山昌樹、石橋近三、村田四郎、衛藤幹太郎、村上治、渡邊勇助、ラマツト、ステグマンの諸氏より成るものであつた。九月十五日中央委員會の命をうけた都留氏は速刻に活動を開始して同日十九日第一回の會合を開き、記念式は昭和二年十一月四日の午前午後二回に舉げることとし、同時に校庭では運動會各競技會を催し、校内には美術展覽會、歴史展覽會を開き、其他文藝會、神學講演會、文藝講演會等を相次いで催すこととした。記念式の順序は左の通りである。

自明治十年
至昭和二年

明治學院創立五十年記念式順序 (一九二七)

昭和二年十一月四日午後二時より

奏

樂

一 開會の祈禱

二 聖書朗讀

三 讚美歌 (二三四)

四 勅讀捧讀

五 君が代 (二唱)

六 記念式辭

七 感謝祈禱

八 校歌

九 祝辭

總理 田川大吉郎氏

名譽總理 井深梶之助氏

文部大臣 水野鍊太郎閣下

東京府知事 平塚廣義閣下

東京市長 西久保弘道閣下

日本基督教會大會議長 山本秀煌氏

基督教學校代表 石坂正信氏

ライニンガ氏

十 獨唱

創立五十年紀念諸計劃

十一 祝

辭

プレスビテリアン、ミツシヨン代表

エ イ レ ス 氏

リフオームド、ミツシヨン代表

ビ ー ク 氏

米 國 大 使 マ ツ ク ヲ イ 閣 下

同窓會代表 一 色 虎 兒 氏

十二 頌

榮

十三 祝

禱

變

樂

結 論

「人間は自由意志と、豫定の運命とが相交錯する路を歩む」とフランスの有名な文明史家が云つたが、之は明治學院といふ一學府の五十年の歴史に照してもやはり眞實であると云はねばならぬ。明治十年に築地の一角に東京一致神學校が生れてから昭和二年の今日まで、學院は丁度、人の一生のやうな歩み方をした。「阻まれては開き、塞がつては通ずる之が人生である」と人は云ふが、學院の閱歴もまたそれではなかつたか。

明治十九年に東京一致神學校は東京一致英和學校と神田英和豫備校とを合併して東京府下白金村玉繩臺に、我國に於ける基督教々育事業といふ壯舉の根據地を定めた。それは、若々しい男が婚姻に身を固めて人生の門出をしたものに比喩へられる。鬱勃たる心に前途は華々しく觀望された。「本學院またよく其の意を躰し從來の方向を保守して愈々整備を求むるの努めを怠らざれば遂に歐米各國の諸大學と比肩して盛大を競ふに至るの日又決して期し難きにあらざるを信ず」と考へたのは無理はない。

然し事實は餘りに豫想と相違してゐて、白金に廣大な地域を占め、壯大な校舎寄宿舎を設備して以後は、何れかと云へば日一日と校庭は寂れてゆくばかりであつた。約十年の後、明治二十八、九、三十年の如きは思ふも傷ましい程、事實は期待に叛いてしまつて、人氣のない教室と宿舍と多くの有爲な教授は手を拱ゐて人を待つてゐると云ふやうな落莫の状態に陥つた。制度を一新して、明治三十一年に公立中學校の資格を確得してからは、稍小康を見創めたがそれは暴風の前の暫しの風の如きものであつた。といふのは明治三十二年八月に至つては、基督教學校には殆んど致命傷と思はるゝ文部省訓令第十二號が出で、學校としての特權の一切を一時放棄しなければならぬ境地に陥つたからである。しかし、明治二十七八年の反動期に於ける隱忍に反してこの度の壓迫に對しては能動的な戰鬪の態度を持せざるをえなかつた。それは獨り學院の存在の爲のみならず、日本に於ける宗教々育の自由のため私學の本領保護のために戰はねばならなかつたからである。本書憂難篇なる一篇はその消息の一端を傳へてゐる。

凡そ我が日本の基督教々育發達史を編まうとするものにとつて、この憂難期程特筆大書すべく、また興味のある期間はなからう。日本の文化史より見ても、恐らくこの期程深刻に且つ眞面目に國家單位の倫理思想と、世界單位の宗教思想とが鏑を削つて相争つた時代はない。然し之は我國の思想發達

史に照して當然鬪はるべき性質のものであり、又我國一般の國民思想の更に世界的見地に立たんがためには必然經なければならぬ階程であつた。林子平氏が「日本橋の水は唐、オランダに通ず」と誌して我國民に海外諸國の存在を知らせ、延ゐては海防の備をせよと絶叫した時、幕府はその版木を沒收して、氏を幽閉した事は寛政年間のこと、無理はないとしても、平田篤胤が尊王論の鋒銳しとの廉を以て郷里秋田に追はれたのは、明治維新から左程遠くもない天保十二年のことであつた。開港攘夷の兩論が囂しかつた時に、どれ程多くの當時の新思想家達が刃の露と消えたか、如何ばかり先見の明ある眞實な憂國の士が屠られたか、それは識者の記憶にまだ新らしいことである。明治維新が迎えられるがためにはさうした尊い犠牲が必要であつた。眞の進歩と發達のためには、どうしても恂教者の血が流されなければならぬ。憂難なくして發達はありえない。明治時代の一般國民の倫理思想が、單なる國家單位から世界單位に、即ち四海兄弟と云ふ意義を徹底して會得するやうになるがためには今一度の白兵戰が必要であつた。かうしたうちに世界單位を標榜するもの、第一線に立つてゐるのは萬有の父なる神と人類の兄弟性を信ずる基督教徒であり、その對偶をなすものは明治二十年頃迄の歐化主義の反動として起つた國粹論者であつたことは云ふまでもない。戦端は井上哲二郎氏の「宗教と教育との衝突」なる一書の刊行によつて開始せられ、文部省訓令第十二號の布告によつてその決戦期

に入つた。

明治學院はこの危急存亡の秋に、その第一線の而も陣頭に立つて雄々しく戦つた。日本に於ける他のあらゆる基督教學校を鞭撻し指導したものは正しくわが明治學院である。比屋根安定氏の「日本宗教史」に明治學院は此の戦に於て逸早く降参せるものゝ如く誌されてゐるが、之は實に由々しき錯誤と云はねばならぬ。戦争は勝利に歸した。特權は漸次に回收され、學院の校庭は再び賑はひそめた。訓令はもとの儘に存しながら日々講堂には禮拜が行はれ、聖書は正科として教へることを許された。現今講堂から響き出るあの全校學生の讚美歌の聲は、實に我が日本に於ける宗教々育の自由の表徴であると共に、實に全人類のためなる基督教的倫理思想が、封建の舊套を脱しかねた偏狹なる國家主義に勝利をえた鯨波であることを知らねばならぬ。興隆期は初めてザンダム館へボン館の兩館を充實せしめて過ぎ去つた。變易期に入つてからは、記念すべき右の二館の外ハリス館をも失ふといふ災害に又もや遭遇せざるをえなかつたが、之は木造建築には早晚來るべき運命であつたと思はねばならぬ。學院の齡から云へば三十代であるが、人の生涯に照してもこの期には種々と有爲轉變のあるものである。然し、施設上の損失は免れなかつたが、内容は依然として進展して行つた。卒業生の受洗率がどうの、宗教的訓練がどうのと非難の種はいくらでもあらう。然し、學院の存在は斷じて無意味ではな

い。この白金の一角に立つて教員學生一同で公式に禮拜を行ひ、正科として聖書を教授してゐるといふ事だけでも、世界に對する日本の一事實であり、効献であると確信して良し。

また、現時の學生は唯物的であると論難誹謗してはならない。學院自體が非宗教的に傾いた時にこそ學生は不満を抱き、不詳事を招いたのである。卒業生の誰があゝの宗教的なワイコフ氏や熊野氏を嫌ひえたか。彼らが宗教的であつたといふのは、決して彼らが聖句を誦んじたり、聲高く祈りをしたからといふのではない。物理の公式を教へる時に漢文を講ずる時に、英語の發音を指導する時に、運動場で何くれと語らう時に、兄弟愛が閃いて居り、イエスの謙遜が仄見えたことを云ふのである。明治學院はあゝした態度で青年を教育する所であるといふ深い理解と同情とで教職員が結束して居さへすればもうそれで存在の目的は達し、價值は發揮されたと云つてよい。學院の總理、部長及び其他の教職員たるものは擧つてその境地を目指して勇往邁進すべきである。

大正六年以後、即ち膨脹期に入つてからは學院は既に四十路を越した。四十、五十は働き盛りといふが、學院もまたその例に洩れない。中學部は目醒ましい學生の増員を來らせ、高等學部は施設を改めて、この一期に全く面目を一新してしまつた。緊張の色は至るところに見られる。紀念樹は永遠に若々しい緑を見せてゐるし、學院の鐘は、白金に移されて後三十年間、時を違へず響き渡つてゐる。

然し一方を顧ると、憂難、興隆の坂を越えて、學院をこゝまで脊負つて來られた、井深、イムブリー熊野、オルトマンズの諸氏は既に老境に入られた。その一人は最早永の眠についてゐるし八十一歳のイムブリー博士は遠く郷國に去つて、今は病の身であるといふ。古稀を越えた残る二人の面にも永年の軀の疲れがあり／＼と見られる。

明治學院五十年史の最後の頁を總務部の一室で茲まで書き來つて、ふと眼を轉ずると壁にかゝつてゐるヘボン博士の肖像が何時になく印象深く眼に映じた。小羊のやうに柔和恭謙なその面影、しかもその瞳は何か永遠的なものをじつと見つめてゐる。耳を澄すと窓外に虫の聲が繁く、雲なき冲天には中秋の月が冴えてゐる。瑞聖寺の境内のワイコフ、ランヂス、バラ、マクネアの諸先生、青山墓地のヴァベック、熊野兩先生の墓銘をも照してゐることであらう。思へば彼等はみな「永遠の愛のうちに生き、また動き、また存した」方々であつた。(一九二七、一〇、九)

“.....through the ages one increasing purpose runs.”

明治學院沿革史年表

(事件の下の數字は本書の頁數)

- 一八一〇(文化七) ○六月十六日サムエル ロビンス
ブラウン氏生る。(一五)
- 一八一五(文化一二) ○三月十三日ジエイムス カーテ
ス・ヘボン氏生る。(七六)
- 一八一八(文政元) ○英艦浦賀に來る。
- 一八三〇(天保元) ○一月二十三日ヴァベック氏オラン
ダ國ザイストに生る。(一〇六)
- 一八三八(天保九) ○十月ブラウン氏支那モリソン協會
より招かれて渡支す。(一七)
- 一八四一(天保二二) ○三月十五日ヘボン氏夫妻支那傳
道のため紐育出帆七月二十日シンガポールに着す。(七
九)
- 一八四五(弘化二) ○ヘボン博士米國に歸り、紐育にて
醫を開業す。(八三)
- 一八四七(弘化四) ○米艦浦賀に來る。○ブラウン氏支

年 表

- 那より歸米す。
- 一八四八(嘉永元) ○フランスに革命起りて共和國とな
る。
- 一八五〇(嘉永三) ○四月ワイコフ氏生る。(一一〇)
- 一八五二(嘉永五) ○ヴァベック氏アメリカに移住す。
- オランダ人米國の内情を奏上す。○二月熊野雄七氏
肥前大村に生る。
- 一八五三(嘉永六) ○米使ベルリ浦賀に來る。
- 一八五四(安政元) ○日章旗を我國々旗と定む。○ベル
リ再來す。○クリミヤ戰爭あり。○六月十日井深梶之
助氏會津若松に生る。(四二)
- 一八五五(安政二) ○十月十日江戸に大地震あり。
- 一八五六(安政三) ○ハリス日本公使として遣はさる。
- 一八五七(安政四) ○井伊直弼大老たり。○ハリス將軍
に謁す。○十二月植村正久氏上總に生る。

一八五八(安政五) ○幕府横濱、神奈川、函館、新潟、長崎の五港を開く。

一八五九(安政六) ○二月北米ダツチリフオームド教會

日本へ宣教師派遣を決議す。(一一二) ○十月十八日

ヘボン氏夫妻神奈川に上陸す。(八六) ○十一月三日

ブラウン氏シモンズ氏等神奈川に上陸す。(一四)

○十一月七日ヴァベック氏長崎に上陸す。(一一五)

○吉田松陰、橋本左内、頼三樹三郎氏等刑さる。

一八六〇(萬延元) ○三月井伊大老櫻田門外に水戸浪士

のために刺さる。○佐賀藩家老村田若狹氏、實弟綾部氏

をヴァベック氏の許に遣はして聖書の意を問はしむ。

(一一七)

一八六二(文久二) ○生麥にて白人三名刺さる。○品川

御殿山英國公使館焼かる。○ヘボン氏邸横濱海岸三十

九番地に新築され醫療を始む。(九九)

一八六三(文久三) ○ヘボン夫人、英學塾を自邸に開き

高橋是清、林董氏等男女の童子を集めて教ゆ。○長州

人米艦を赤間關に砲撃す。

一八六六(慶應二) ○五月村田若狹外二名ヴァベック氏

より受洗す。日本最初の新教信徒たり。(一一九) ○

幕府長州を再征す。

一八六七(慶應三) ○五月ヘボン氏和英語林集成を上海

にて上梓す。(九三)

一八六八(慶應四) ○正月鳥羽伏見の戦あり。(四〇)

○四月江戸城開城さる。(四一) ○八月會津の松平容

保公薩長軍を擁して戦ひ、九月落城す。井深梶之助氏

山川健二郎氏等一時補虜となる。(四六) ○熊野雄七

氏、片岡健吉氏等會津の若松城を砲撃す。○ブラウン

氏の邸宅焼失新約聖書翻譯の原稿を失ふ。○ブラウン

氏歸米す。

一八六九(明治二) ○明治天皇東京に遷らる。○ヴァベ

ック氏明治政府の顧問として長崎より招かる。

一八七〇(同三) ○四月井深梶之助、洋學修業のため

東京に出て千村五郎、沼間守一氏につきて學ぶ。

- 一八七二(同 四) ○井深氏横濱修文館の學僕となる。
 (四七) ○ヘボン塾の女生徒達ミス キダーに率ゐら
 れてフェリス女學校の濫觴を作るに至る。(一〇三)
 一八七二(同 五) ○ジョン シーバラ氏高島學校備と
 して渡來す。○東京横濱間に汽車始めて通ず。○一月
 横濱海岸教會にてジェイムス パラ氏を中心として基
 督教信仰の勃興を來す。日本基督公會生る。○服部綾
 雄氏へボン塾に入學す。○九月新約聖書翻譯委員會成
 立しブラウン、ヘボン、グリーン、奥野昌綱、松山高吉、
 氏等其の掌に中る。(一三一) ○ワイコフ氏福井藩の
 招聘に應じて渡來す。
- 一八七三(同 六) 横濱山手二百十一番ブラウン氏邸に
 ブラウン家塾開設、井深、植村、熊野、山本、押川の諸
 氏入塾す。(二七) ○十二月カラゾルス氏等築地に日
 本長老會を設立す。(七)
- 一八七四(同 七) ヴァアベック氏中央政府及び大學南校
 の教頭たる公職を退き、傳道に専念す。(一三三)

年 表

- 十月十八日第一長老教會築地に建てらる。(芝教會の
 前身なり)
- 一八七五(同 八) ○九月ジョンバラ氏へボン家塾の主
 任となる。○石本三十郎氏へボン塾に入學す。
- 一八七六(同九) イムブリー博士來朝す。
- 一八七七(同一〇) ○九月西南の役あり、西郷隆盛死す。
 ○九月東京一致神學校東京築地六番小會堂にて開始さ
 る。(五) ○十一月築地十七番の同校々舎落成之に移
 轉す。○十月日本基督公會と日本基督長老教會と合併
 し、日本基督一致教會となる。(八) ○ワイコフ氏歸
 米シラットガルス大學教授となる。
- 一八七八(同一一) 舊約聖書翻譯委員會東京に設立され
 翻譯の分擔を定む。(一二四) ○六月東京一致神學校
 第一回卒業生を出す。(井深、植村、瀬川)
- 一八七九(同一二) ○ヴァアベック氏歸米靜養す。○十一
 月三日横濱聖書翻譯委員會新約全書を終了す。
- 一八八〇(同一三) ○九月横濱へボン塾築地十七番の新

校舍に移轉し、築地大學校となる。(二〇六) 森本介石氏幹事、ジョン パラ氏校長たり。

一八八一(同一四) ブラウン博士北米ニューヘブン町にて永眠す。(三七) ○横濱山手四十九番地にリフォード ミツシヨン所屬の先志學校設立され、ワイコフ

氏校長たり。同年ワイコフ氏再渡來せり。(二二八)

○四月井深氏東京一致神學校助教となる。

一八八二(同一五) ○一月東京一致神學校に始めて教授會成る。イムブリー氏議長アメルマン氏書記たり。神學校豫科を設置し、小崎弘道氏を英學教師として招聘す。(一五九) ○六月服部綾雄石本三十郎氏第一回卒業生として築地大學校を出づ。

一八八三(同一六) ○九月横濱の先志學校築地大學校に合併し、ワイコフ氏、野矢丈夫、和田健三、正村正氏等を率ひて築地に移轉す。同時に築地大學校の名稱を東京一致英和學校と改む。(一三四、一三五)

一八八四(同一七) ○八月服部綾雄氏神田淡路町二丁目

四番地に英和豫備校を開設す。多田素氏、水蘆幾次郎氏等入學。(一四九) ○六月杉森此馬氏卒業す。

一八八五(同一八) ○中川愛咲馬場銚作二氏一致英和學校を卒業す。○一月宮地謙吉氏上京神田豫備校に入學。

一八八六(同一九) 東京一致神學校、東京一致英和學校神田豫備校合併の議起る。(一六五) ○四月二十九日新學院創立案制定さる。(一六九) ○六月二十一日新

學院名稱選定委員會を開き「明治學院」と定まる。(一七五) ○五月二十四日明治學院第一回理事會を築地一致神學校圖書室に開く。議長はデーダブリュー・ナツクス氏書記はワイコフ氏たり。(一七四) ○十月十二日東京市外白金村玉繩臺の敷地約一萬坪を買収す。(一七五)

一八八七(同一〇) ○一月十一日私立學院設置願を東京府に提出す。○一月二十二日學院設置の件認可さる。○二月よりサンダム館建築に起工す。(二〇二) ○六月へボン館建築に起工す。(二〇三) ○九月サンダム

館成り、一致英和學校、英和像備校移轉す。○四月植村正久氏神學部講師に選ばれる。へボン博士生理學、衛生學教授に擧げらる。

一八八八(同二一) ○三月二十二日服部綾雄幹事辭任、杉森氏その後任となる。(二二四) ○四月ハリス氏父子より三千弗寄附あり。○五月二十一日舊約聖書翻譯完成され、新築教會にて捧獻式を擧ぐ。(九六) ○十二月講堂建築の條付にてローセイ ミロル氏築地の土地邸宅を學院に寄贈さる。

一八八九(同二二) ○一月ヴァベック氏理事員會議長を辭し、アメルマン博士後任となる。○二月十一日憲法發布さる。○文部大臣森有禮刺殺さる。○九月築地大學校舎を白金に移轉しハリス館と稱し、築地十七番地の邦語神學部を白金に移す。○九月植村正久氏神學部教授となる。(二四九) ○十月學制の一部變更されへボン博士總理となり井深氏副總理となる。(二二四) ○十二月普通學部豫科を有樂町に移し明治英學校と稱

す。(二二二)

一八九〇(同二三) ○一月帝國議會開設さる。○一月明治學院の分校たる明治英學校開校さる。○三月十四日植村氏福音週報を發刊す。○六月神學部校舎竣成獻堂式を行ふ。○七月井深副總理北米ユニオン神學校に留學に赴く。○九月普通學部本科に五年級を加へ之を選科となす。○三月八日植村氏「日本評論」を發刊さる。

○九月從來の邦語神學部を明治學院神學部と改む。○九月明治英學校を麴町區中六番町に移轉す。○十月三十日教育勅語煥發さる。○一月新島襄氏逝く。○十二月アメルマン博士神學部長に選舉せらる。

一八九一(同二四) ○三月明治英學校を白金臺に移し豫科とす。○六月築地十七番地一致神學校趾に東京傳道學校を開設す。○六月多田素氏神學部を卒業す。○九月井深梶之助氏米國より歸朝す。○十月へボン博士學院總理を辭任し井深氏後任總理となる。○十一月六日新總理就任式を擧ぐ。(二二七) ○十二月明治學院憲

法及び職制々定さる。(二二八)

一八九二(同二五) ○二月理事員會は學院の基本金調達
の決議文を米國傳道局に送達す。○十月井上哲次郎氏
基督教の非國家的なるを論難す。○十一月基督教徒黨
然と井上氏の意見に應酬す。(二二八)

一八九三(同二六) ○二月熊野雄七氏學院幹事となる。

○八月石本三十郎氏留學。○四月井上哲次郎「教育と
宗教との衝突」なる小冊子を公刊し反基督教思想を天
下に布告す。○六月學院の學制再び改變して神學部を
四ヶ年制となす。○九月柏井園氏神學部講師となる。
○反基督教思想の流布のため追々と基督教學校衰微の
兆あり。

一八九四(同二七) ○一月普通學部本科豫科制を廢し高
等學部二ヶ年普通學部五ヶ年とす。○六月地震の爲め
神學部校舍破損したる爲二階を木造に改築す。○九月
日清の國交斷絶し、學院の學生著しく減少す。

一八九五(同二八) ○明治學院の衰潮其の極に達す。

○十一月二日石本三十郎氏北米プリンストンに客死
す。

一八九八(同三二) ○六月十六日中學校令に由る尋常中
學校の資格を得。○七月普通學部は徴兵猶豫の特典を
受く。

一八九九(同三三) ○八月二日文部省訓令第十二號發布
に依り以後中學部に於て宗教々育及其儀式を行ふを禁
止さる。○八月三日緊急理事員會を開き宗教々育續行
のため尋常中學校の資格返納の手續をなす。○同時に
基督教諸學校協力して文部當局に對し宗教々育の自由
のため對抗運動を始む。(一九一)

一九〇〇(同三三) ○七月普通學部に徴兵猶豫の特權を
回收す。○九月高等學部を三ヶ年に改め英文學科商業
科二科設置の計劃をなす。

一九〇一(同三四) ○九月南プレスビテリアン、ミツシ
ョン神學部の經營に加はり、フルトン氏教授として赴
任す。○神學部に別科を設く。

一九〇二(同三五) ○二月ローセイ、ミロル氏夫妻より寄附の土地建物を賣却せる資金を以て講堂建設の議を決す。○四月高等學部に徴兵猶豫の特典を受く。○長崎東山學院神學部を明治學院神學部に合併し其の生徒を收容す、オルトマンズ氏は明治學院神學部教授に選舉せらる。

一九〇三(同三六) ○二月禮拜堂の建築に着手す。○五月普通學部卒業生は高等專門學校入學の資格をうく。○一月廿八日高等學部及神學部は專門學校たるの認可を受く。(三〇一) ○十二月ランヂス氏新築中の講堂の屋根より轉落負傷す。○十二月日本基督教會の信仰簡條を明治學院の教義の標準とす。○此時分より學生漸次に増加す。

一九〇四(同三七) ○二月イムブリー氏日露開戦の理由を英京スペクテーター紙上に發表す。○三月植村、柏井兩氏退職さる。○三月イムブリー氏學院の前途の安定に付き米國傳道局に訴ふ。○九月松永文雄氏神學部

教授として就任す。

一九〇五(同三八) ○三月十五日ヘボン博士勳三等に叙せらる。○三月ミロル氏記念講堂地震の爲め破損す。○三月ハリス館の二階に普通部五年級を移す。○三月明治學院財團法人認可さる。○四月賀川豊彦氏入學。○三月四日井深總理巴里に於ける萬國基督教青年會同盟總會出席のため本多庸一氏と共に横濱を出帆す。歸途學院資金募集の爲め米國を巡遊さる。總理不在中熊野氏總理代理となりオルトマンズ博士神學部長、ワイコフ博士高等學部長を各代理せらる。

一九〇六(同三九) ○二月井深總理米國にて學院擴張の資金二萬五千弗を得て歸朝さる。○九月秦庄吉氏植村氏の後任として來住す。

一九〇七(同四〇) ○三月ウァベック氏東京市赤坂自邸にて永眠す。○三月ミロル氏の記念講堂を修繕す。

○三月二日井深、イムブリー、バラ、ワイコフ四教授勤續廿五年祝賀會を神田青年會館にて開催。○六月南

プレスビテリアン・ミツシオン、明治學院との協力を止む。○七月セベレンス氏の寄附金に依り神學部寄宿舎建築に着手す。○十月セベレンス館落成す。

一九〇九(同四二) ○二月イムブリー博士外交上の功績により勳四等に叙せらる。○三月講堂、強震の爲め修理の見込なき迄に破壊す。○三月築地十七番地の土地家屋は學院所屬の財産となる。○七月ジェームス、バラ氏物故夫人の記念獎學基金を寄贈さる。○九月學院の名物男吉田信乃三郎氏逝く。

一九一〇(同四三) ○三月七日井深總理エデンバラに於ける宣教師大會に参加の爲め出帆す。○六月熊野宮地兩氏學院擴張費募集の爲め關西各地の同窓を訪問す。○此年米國にて二萬四千五百弗内地にて一萬三百餘圓を募金す。(三七〇)

一九一一(同四四) ○一月二十七日ワイヨフ博士永眠す。○三月普通學部校舍の建築に着手す。○四月文部省令に依り普通學部は各高等學校へ優等卒業生無試験

入學の特典を得。○八月普通學部新校舎落成す。○九月二十一日へボン館ハリス館焼失す。○九月二十一日へボン博士米國にて永眠さる。○九月二十八日へボン博士追悼式を本學院に行ふ。○十一月三日新校舎獻堂式を行ふ。

一九一二(大正元) ○八月新へボン館を建築す。○十一月從來の幹事制を廢し三學部に部長を置く、井深總理神學部長を、熊野氏普通學部長兼高等學部長となる。

一九一三(同 一) ○三月ライク氏高等學部長に就任す。○四月廿六日イムブリー博士米國兩ミツシオンに高等學部擴張のため補助金増額の訴へをなす。○四月高等學部の經營に於て東京學院と合併實現の運びに至る。○五月三日井深總理瑞西ツウリヒに開かるゝ萬國學生基督教青年會總會に出席の爲め渡歐す。不在中能野氏總理代理となる。○十二月二十日ジェームス夫人一萬弗を寄附す。セベンス氏令息父君の遺志たる七千五百弗の寄附を承認す。

一九一四(大正三) ○四月一日服部綾雄氏北米桑港にて永眠す。○十月二十四日サンダム館焼失す。

一九一五(同 四) ○二月禮拜堂及びサンダム館建築に付きミツシヨンへ上申す。○二月普通學部を中學部と改稱す。○十月二十九日新築の講堂及び高等學部校舎の定礎式を舉行しスピーア、チャンバレン氏各々その首石を置く。○十一月十一日井深總理多年育英の功を以て勳五等瑞寶章を受領す。

一九一六(同 五) ○三月二十七日禮拜堂獻堂式を行ふ。○五月新サンダム館高等學部校舎落成す。○五月グレゴリー、バンド生る。○十二月九日ランダス教授勤続廿五年祝賀會舉行す。○十二月高等學部に文藝科英語師範科商業科の三科設置の議決す。

一九一七(同 六) ○二月ライシヤワー博士高等學部長に就任す。○三月學院憲法の改正行はる。○六月築地基金四萬圓成る。○十一月三日創立四十年記念式舉行す。

一九一八(同 七) ○三月村田四郎氏學院教會牧師兼中學部聖書教授として來任。○三月瀨川四郎氏神學部教授を辭任す。○四月新制度による文藝科英語師範科生を募集す。○四月學院教會設立さる。○五月熊野部長在職二十五年祝賀式を擧ぐ。

一九一九(同 八) ○三月三十日熊野中學部長辭任さる商業科第一回生徒の入學を許可す。○四月中山昌樹氏中學部聖書教授として來任す。○四月ホフソンマー氏臨時中學部長心得となる。○四月セベレンス館三光町に移轉さる。○七月中學部雨天體操場落成す。○七月瀨川四郎氏永眠す。○九月村田四郎氏中學部長となる。○九月熊野雄七氏相州葉山に退隱さる。○十一月イムブリー博士神學部教授を辭任され名譽教授とならる。○十一月ライシヤワル博士高等學部長を辭任し、イムブリー氏の後任として神學部教授に就任す。○水蘆幾次郎氏高等學部長に就任す。

一九二〇(同 九) 二月中學部に同盟休校起る。○四月

村田中學部長辭任す。○五月水蘆幾次郎氏中學部長心得となる。○七月高等學部豫科を廢し修業年限を三ヶ年に短縮す。

一九二一(大正一〇) ○學院南側の土地を東京市に讓渡す。○三月井深氏總理を辭任され、神學部長兼教授とならる。○三月水蘆氏高等學部長を辭任し、中學部長とならる。○都留氏高等學部長に就任す。○オルトマンス博士總理事務取扱として就任さる。○五月熊野雄七氏葉山にて永眠す。

一九二二(同一一) ○四月オルトマンス博士總理事務取扱を辭任され、田川大吉郎氏理事長として學院管理の任に中らる。

一九二三(同一二) ○二月明治學院教會を解散す。○三月井深神學部長病の犯すところとなり向ふ八ヶ月間靜養の事となる。○九月一日關東地方の大地震によりて神學部高等學部の校舍甚だしく破損す。○十月各學部第二學期の授業を開始す。

一九二四(同一三) ○二月學院東側の沿道の土地を東京市に讓渡す。○三月井深神學部長並びに山本神學部教授辭任さる。○四月都留仙次氏神學部長事務取扱を高等學部長と兼務す。○高等學部文藝科商業科に各主任を置き中山昌樹石橋近三の兩氏各々その主任となる。

○神學部を淀橋角筈の東京女子大學跡に移轉す。○三光町セベレンス館を高等學部專屬の寄宿舎とす。○十月三十日中學部に第二回同盟休校事件起る。○同月井深ホール(高等學部新校舍)の建築に着手す。

一九二五(同一四) ○二月理事長田川氏總理就任を認可さる。三月都留氏高等學部々長を辭任し、田川總理高等學部々長を兼務す。○四月村田四郎氏神學部教授として招聘す。○四月商業科卒業生は商業簿記の二科につき中等學校教員無試験定の資格をうく。○五月卅一日高等學部新校舍の獻堂式と田川總理の就任式を學ぐ。○八月商業科卒業生は高等試験豫備試験免除の特典をうく。○九月中學部に軍事教官の配屬あり臺田大尉赴

任す。

一九二六(大正一五) ○三月オルトマンズ博士神學部教授を辭任さる。○學院創立五十年記念事業準備中央委員會を組織す。○四月文藝科英語師範科を合併して修業年限を四ヶ年の英文學科と改む。○六月、水蘆中學部長辭任さる。○六月五十年記念擴張委員會を組織す。○七月商業科生徒支那見學旅行に出發す。○八月河西銀之助氏中學部教頭を辭任さる。

一九二七(昭和二) ○三月都留氏神學部長事務取扱を辭任さる。○三月衛藤幹太郎氏中學部々長と決定さる。○四月菅尾兼太郎氏高等學部長として來任さる。○四月五十年記念校内傳道委員會を組織す。○五月神學部の管理は委員制となし村田四郎氏委員長となる。○六月賀川豐彦氏を招き校内大學傳道をなし四百四十七名の志道決心者を擧ぐ。○八月田川總理、塚田理事等帝國ホテルにてスピーチ博士に面會し、學院擴張の儀を訴ふ。○十月川侯義一氏を招き第二回大學傳道をなし、

百二十名の志道決心者を擧ぐ。○十月都留氏創立五十年記念祝賀會執行委員長として活動さる。○十月二十三日鷲山氏明治學院五十年史の校正を終了す。○十一月四日創立五十年記念式を擧ぐ。

昭和二年十月三十日印刷
昭和二年十一月三日發行

不許
複製

著者

鷺山弟三郎

發行者

東京市芝區白金今里町
明治學院

印刷者

東京市外大森新井宿西沼六一三
村岡做三